何故か俺がモンハン入り　～勘弁してくださいorz～

2乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何故か俺がモンハン入り　～勘弁してくださいｏｒｚ～

【Ｎコード】
Ｎ５１０５Ｉ

【作者名】
２乗

【あらすじ】
じゃねぇ！！　畜生！！　こんなのモンハン

第0話・俺がモンハン入り　～えっ…モンハン？～（前書き）

この小説はスルメの成分が含まれています。

具体的に言うと、話数を重ねる毎に物語に面白みが…（殴

どうも皆さん！！

モンハン知らない自分が書くモンハン小説ですが、楽しんでいただけたら光栄です！！

あっ！！　ほんとに話数を重ねる毎に（射殺

第0話・俺がモンハン入り　～えっ…モンハン？～

どうやらこの世には、科学や理論ではどうにもならない『不測の事態』が待ち受けているらしい。それを証明するために、俗に言う『夢オチ』に持っていってしまえば、『全部夢だった』という不毛な結末を迎える事は間違いない。

だがしかし、俺は今、全力で『夢オチ』を願っている。別に現実が嫌になったとかじゃない。現実が嫌になったら、少し高めの位置からぴょーんで終わりだろ？

どうやら、そうじゃ済まないみたいなんだよ……。

「まぁまぁまぁ。よく考えようじゃないか俺。悪い夢でも見てるんだよな？」

そんな現実逃避の言葉を並べ立てて、俺は額の汗を拭った。見るからに、尋常じゃない汗だ。この凄まじい量の汗が、現在置かれている状況の可笑しさを物語る。その量といったら…人間絞っても、こんなに出ないんじゃないか？

「……」

俺は不意に空を見上げた。……前を見たくない。

そこに広がるのは青い空、燦燦と降り注ぐ太陽。既に俺は、人間の発汗の限界突破。勿論の事、暑いだけじゃない訳で…。

「…全く。ゲームじゃないんだからさ！」

誰に聞こえるように言うでもなく、取り敢えず冷静になる為に、

大声で言い放つ。そんなの言ってるような状況じゃないのは、明白すぎる事実だけど…。

よく考えろ俺。

確かにさっきまで、俺は自分の部屋の机に座って、P○Pでモンハンに勤しんでいた筈だったんだ。久しぶりに新しく作ったキャラで…。チートデータをダウソして…。いや…筈なんかじゃない。勤しんでたんだ。

そしてそれは…現在進行形で、あくまでも「勤しんでいる」。それが正しい表現だろう。

「……」

言葉にもならない。何だこの眼前に広がる狂気乱舞な現状は…。

とは言っても一応初見ではない。勿論の事、見覚えはある。ほんの数秒前、これは画面内のグラフィックとして、家庭用ゲーム機画面から俺の目に届いていたのだから。

でも…信じたくない。

どこまでも遠く、奥が霞む位に広い砂漠。砂竜が砂を掻き分けて泳いでいるのが、よく分かってしまう。

照りつける太陽は、黄色い砂を神々しく照らす。何とも神秘的だ。

肌で感じるその暑いを超越した気温は、『クーラードリンク』の必要性を証明するには十分だ。第一、砂漠初体験の俺にこれは酷過ぎる…。

「突っ込まなきゃいけないかなぁ…」

そんな中俺の目は、先刻から立ちはだかる、ゲームではなく現実の狩りの光景を映していた。しかし…それは嫌な死亡フラグしか予

感させない。
背丈に合わない太刀を、目の前の強敵にかざす銀髪の少女。視線は強く強く、目の前のモンスターに据えられている。その気迫は、目の前のお方に負けずとも劣らない。
しかし、そんだけ言っておいてなんだが、その少女は凄い頼り無さそうだ…。
対して、そんな少女を見下ろすのは、見るからにやばそうなあのお方。その荒々しい気性に一度はお世話になったであろう、皆大好きティガレ…。

「？」

雄弁に語っていた俺は、思わず目を細めた。遠くは目を細めないと、目が悪くてよく見えない…。どうやらお家に眼鏡を、忘れてきたようだ。
頑張って凝視…。よく見ると、あの少女がこっちを向いて慌てて何か叫んでいる。
よろしい。ならば読唇術だ。お兄さんが汲み取ってあげよう！！
…こういうのは、母音から内容を推測するらしい。あと口の開け方。
Ｌｅｔ‘ｓ　読唇術！！　勿論ふざけてなんかいないのよ？

ω

「！？」

ティガレックスにすっかり集中していたからか、いつの間にか砂漠の見晴らしの良い場所に鎮座する、人みたいな存在に気がついていなかった。というより、目の前にティガレックスが荒々しく身構える状態で、他に目なんてやっていられないのも事実。

「何…？」

いや、人だ。珍しくも砂漠に正座の少年。その不似合いすぎる状況に、何ともリアクションが取りにくい…。

しかし、目の前のティガレックスはまだ、その存在に気がついてない様子。その厳つい眼は、眉間にしわを寄せつつ此方を睨んでいる。

一言で整理すると、凄い形相。

「よく分からないけど、取り敢えず逃げてもらわないと！！」

当たり前の判断だ。このままでは彼は、轟龍の食事会に前菜として差し出されてしまう。知らない人だから構わないかもしれないけれど、少子高齢化社会の下で子供は大事！！

ティガレックスにも細心の注意を払いつつ、大声で叫んだ。その大声が自らにとって、大きな隙なのは言うまでも無いわけだが…。

「逃げろー！！」

そして言い終わって気がついた。

「あっ…」

ティガレックスが少年に気がついてしまった事に。

ω

「お？　また何か言ったなあの子」

何か言っているのは微かに分かる。しかし目が悪くて、口の動きが全く分からん。これじゃ読唇術も何もない。こりゃ一本取られたね！！　なーんて、言ってる暇は無いのだが…。

「……」

そんな中、しっかりと気がつく事が出来たのは、轟龍が此方に気がついた事。……これが狙いだったのか！？　少女だからといって、侮った俺の負けという事か！？　あのアマッ！！

「おぅ…。いかんいかん。」

そんな事を言っている暇は無い。気がつかれたという事は、向かってくる可能性が出来たという事。この場は暇を頂かねば。

「……？」

しかし、少女は何か慌ててらっしゃるようだ。それはよく伝わった。しかし、何が言いたいのか伝わらないのは、如何せん意味が無い。

「あん……？」

俺は更に目を細める。尚も少女は身振り手振りで何かを伝えようとしている。何だか、焦ってらっしゃる。焦りはいいから、何か分かりやすい事で示してくれ…。

「……」

少女の一向に理解不能な行動に、俺は発する言葉も無い。少女は

何だか、倍速映像のようにシャカシャカ動いてる。ちょっと不気味…。

「おっ！！」

ジェスチャーが入った。それも分かりやすいジェスチャー。しかし、はっきりとは見えない。

よく見ると何か俺の後ろを、指で指しているような…。ゴメンな。お兄さんやっぱり目が悪いから。

ω

「伝わらない！？　バカは厄介だって…本当みたいね」

私はがっくりとうな垂れる。当たり前のような事を言うようで悪いが、勿論そんな余裕は無い…。

「思わぬところで敵が増えちゃった…」

冷静になってもう一度顔を上げる。明らかに遠く…少年の後ろにカオスな光景が見える。私の『目が悪い』で済んだら楽な話なんだが、生憎目が良いのでそうもいかない。

しかし！！　何とかして、あそこに何故か鎮座するバカを退かさねば。

「おまっ！！　後ろだって！！」

私は取り敢えず、彼の後ろに向かって指を指してみる。『バカ！！　逃げろ！！』と意味をこめた上で。

「手遅れだけどね」

こっそり呟く。

ω

取り敢えず、少女の指す通りに後ろを振り向く俺。

多分その選択に正解にたどり着く答えは無い。

「グルルルルルル…」

「へ？」

はいはーい。こんにちは！！　ティガレックスさん…ってえぇぇぇぇぇ！

そこには地獄から来たご兄弟の片一方が、唸り声を上げて佇んでいらっしゃいやがりました。勿論、人生のベスト１０に入る勢いで大変です。驚きの白さ並です！！

「えっ！　ちょ！　待てっ！」

なるほど！　少女はあれを指差してたのか！　よく分かったぜ！

全くもって、手遅れだがな！！

まぁ、待てと言っても５０ｍ程度離れたところで、狂気に刈られている轟龍が、待っててくれる筈もない。轟龍は野生解放。獲物目掛けてまっしぐらと言わんばかりに突っ込んでくる。

その速さと言ったらない。当たり前だが全力で避ける。いや！

当たったら「痛い」とか言ってらんない。多分「い」の音が口から出る前に、口が血飛沫上げて、体が中を舞う！！

こんな世界で死んでられない。というより、今更だが何だココ！？

そんな事を考えつつ、俺は見つけた岩陰に飛び込む。狭い隙間だ。

少し角度を間違えれば、多分骨盤辺りが鈍い音を立てて、岩と岩の間に挟まって、下半身を轟龍に美味しくいただかれてしまう。

「まっ！　間に合えっ！」

全力で飛び込んだ結果、間一髪挟まれる事も無く岩陰に隠れる俺。万が一、挟まった時の対処法なんて考えていなかった。というより、そんなＢＡＤフラグは考えたくも無い…。

隠れたお陰か、俺を狙う事を諦めたティガレックスは、ターゲットを少女に移すと、雄叫びを上げ走り出した。

俺はどうやら、大変な死亡フラグを譲ってしまったらしい。

『譲る心』コレ大事。

ω

「っ！！」

いつの間にか鎮座していた少年は居なくなり、代わりといっては何だがティガレックスの片割れがすっ飛んできた！！

役に立たない少年は、どうやら逃げたようだ。どうせなら片一方の相手でもしてくれれば良かったのに。

第一、一匹でも防戦一方なのに、コレはなんて言う死亡フラグ！？

「あぁっ！！」

いつの間にか周りを囲まれる。……コレは不味い。二匹とも狩る者の目だ！！

「グルルルル…」

それが轟龍の威嚇なのか、腹の虫なのか…。どっちにしろ、この状況を脱するには一つしかない。

A，逃げる

「グルルルル…」

「…無理だね」

再び太刀を構えなおす。二匹一片に倒す…。言うには簡単だけどやるとなると…。

「うぅ…。眩暈が…」

頭上の太陽は、まるで嘲笑うかのように私と、私を囲む他二つの大きな影を照らした。

どうやら今日はついてない…。

ω

岩陰。一時的な休息。危険度が二倍になった少女が居るのは、きっと気のせいだ。うん。気のせい。

……俺の良心に１０００のダメージ。

「取り敢えず…ここは…何処だ？」

ティガレックスが居たのは、俺の目が悪い事を踏まえなくとも事実。しかし、あからさまにモンハンの世界だなんて答えは求めていない。それが事実だというのも認めたくない。

でも、やっぱりティガレックスは説明がつかないカオス。

「っと…。外は一体どうなってるんだ…？」

訳の分からない黙考から解き放たれるため、俺は外を覗く事にした。少女が気になったことも、序の理由に含めるとしよう。…いや、後者優先。

俺はソーッと顔を出す。気付かれないためにも物音を立てないことが原則だが、あの兄弟は多分鼻もいいからなぁ…。

そんな事を考えつつ外を見回す。案の定…言ってしまえば俺のせいで、少女は兄弟に絡まれ…囲まれていた。勿論、分かっていたけどね。

まぁ、そんな状況下。俺にだって罪悪感はある…事にする。少なくとも良心には大ダメージだ。……多分。

そして、『女の子を助ける』という、そういうシチュエーションはきっと神様が与えてくれた嬉しいフラグ！！　フラグを折るだけの人生とはおさらばさ！！

「助けに…」

そこまで口にした時点で、俺の足は止まる。いや、意図的に止めた。そしてよく考える。凄く考える。

Q．装備詳細

武器．来る時うっかり握ってしまったＴＡ○ＩＹＡスプレー缶（黒）

頭部．落ちてた生き物の頭骨（かなり大きい…）

時価

胴体．ユニ○ロのＴシャツ

９８０円

腕部．ＣＡ○ＩＯの腕時計
５０００円
腰部．安物ベルトとジーパン
２３００円
足部．バーゲンのスニーカー
１９８０円

Ａ．攻撃力＝不明　総防御力＝測定不能　総額＝１０２６０円＋時価

おれは岩の隙間からのぞく、澄み切った青空を仰いだ。そして呟く。

「…随分と役にたたねぇな俺」

もう勝てる気がしないのは明白だ。スプレー缶を装備して、Ｔシャツとジーパンでティガレックスなんて、勇者過ぎるにも程がある。
勇者とイカレも紙一重と言うか…。…誰だ？　今、『心配しなくてもオメェはイカレだよ』って慈愛に満ちた表情で言ったの？

取り敢えず、何か使える物があるか、周りを見回してみた。案の定何もない。

「…待てよ？」

ここで当初の予定から外れている事に気がつく。目的はティガレックスに勝つことじゃなくて、少女救出じゃなかったか？
え？　その前に絶対助けなきゃなんない？　この状況。少なくとも、この突拍子も無い状況で、俺は少女を助けなきゃいけない？

ってか、死んだらこの夢が覚めますか？

「……」

さっき擦った傷がドクドクと脈打っている。多分死んだら…死ぬ。

「とは言ってもなぁ…」

腕を組んでその場に座り込む俺。岩陰とはいえ、照りつける日差しはその温度を増しているように思えた。じわっ…と汗が滲むのが分かる。

「っ～～～～～～～！！！！！！」

声にならない葛藤がこみ上げてくる。決断力の無い、優柔不断な俺にはこのフラグは向いていないようだ。早速圧し折りそうだし…。

しかし、俺は少女を気遣う気持ちで、そぉ…っと覗いてみた。

１００ｍ程離れた所だろうか？　未だ少女は、２匹の轟竜と交戦中だ。遠くからはよく分からないが、砂が所々紅く染まっているのは、肉眼でも確認できる。

この状況…俺もそろそろ不味いと思う…。

「神様…安全なフラグはくれないんですね…」

神様はいつだって敵らしい。

ω

「うぐっ……！」

一頭のティガレックスがその巨体で突っ込んできた。慌てて太刀で防御に徹したお陰で、太ももに一閃。血の滲み出る傷が出来る。防御に徹していなかったかと思うと怖くなる。確実に足は持っていかれてた。

「取り敢えず…逃げなきゃ…」

しかし、今の傷のせいで右足には力が入りづらい…。その場で直立の姿勢を保つのがやっとだ。

ティガレックスはその冷徹な目で、私をにらめつけると、二匹の中で互いに何か合図したかに思えた。　何だか悪い予感がする…。

「っ！！」

次の瞬間、片一方のティガレックスが突っ込んできた。それを間一髪、ギリギリのところで交わす。

「っ！！　連携なんて卑怯だぞ！！」

別段、卑怯ではないのは百も承知だ。しかし、２体１という状況下は中々の酷な状況じゃないだろうか？

毎回思うのだが、戦隊物は５対１じゃないと悪役には勝てないのか？

「よっ…」

瞬間的にそんな事を考えた後、着地して態勢を立て直そうとした時、砂漠には耳を劈くような轟音が響き渡った。

ω

「グルォォォォォォォォォォ！！」

ティガレックスは少女の着地を見計らって雄叫びを上げた。態勢を十分に直せていない少女は、よろめきながら耳を塞いだ。その雄叫びは遠くに居る俺でも、耳が痛くなる壮絶な声量だった。

ティガレックスはオペラとか出ればいいよっ！！

「違う違う！！　いらない事は考えるな！！」

俺が目を話している間に、事は進んでいた。

少女の体制が後ろ向きに崩れる。まるでそのタイミングを見計らったかのように、もう一方のティガレックスが戻ってきて少女に突っ込む。見事な連携プレーだ。

って…感心してる場合ではない。

「危な…」

そう言おうが言うまいが、声が届かない事は明らかだ。位置的に遠すぎる。第一呟くような俺の『危ない』なんて、届く訳がない。

少女は突っ込んできたティガレックスに吹っ飛ばされ、血を振りまきながら砂に沈んだ。そして動かない少女に、尚ティガレックスは向かっている。

ω

「！？」

耳に届いた音は、その場の状況を不明にするには十分だった。その轟音に私はすぐさま耳を塞ぐ。態勢も直っていない。後ろに倒れこむ態勢だ。

でも、そんな心配は必要なかった。

「ごりゅっ！！」

あからさまな粉砕音を体が上げる。どうやら後ろから突っ込まれたらしい。

その衝撃と痛みは、堪える事の出来るものではない。何より体がそれを物語っていた。

「かはっ……！！」

口から、とてつも無い量の血がこみ上げる。それが口の外に出た時には、既に私は砂の上に横たわっていた。

「……」

痛みで意識が朦朧とする。そんな中、自らの瞳に映ったのは、砂に飛び散った血飛沫と…運良くティガレックスの目に刺さって折れた愛刀の亡骸・・・。

……そして走ってくる、正体不明のお節介。

ω

そのまま興味有り気に、横たわる少女に近づくティガレックス。

これは、明らかな死の予感。
ティガレックスの目がヤラシイ！！

「っ！」

その一連の出来事を見て、俺はつい感情的になって飛び出した。
しかし、気がついて我に帰ったときには遅かった。

「しっ！　しまった！」

ティガレックスは、即行俺の存在に気が付き、その図体からは考えられないような速さで俺を挟んだ。
よく見ると、片方のティガレックスは折れた太刀の刃が刺さり、片目をやられている。物言わぬ唯一の、　少女の功績と言ったところか。
やるじゃない！！　然程意味はないけどさ！！

「よし…。ココまで来ちゃったなら、よく考えろ俺…。勝つ方法じゃなくて死なない方法だ…。」

悪い夢なら覚めて貰いたいが、生憎先程ティガレックスの攻撃を避けた際に岩と喧嘩した傷は、明らかに痛む。絶賛流血中だ。

「帰りたい…」

その一言に尽きる…。
そんな中、俺は持っていたスプレー缶に目をやる。少々考えた上で脳裏に　『もしかしたら…行けるかも知れない』と、一筋の希望の光が見えた。

ただし、希望と絶望も紙一重。この時の俺は、まだ知らない。

「……」

息を整えて間合いを計る。気を抜いたら殺されるんじゃないかな…。

俺は「チラッ」と少女に目をやる。少女の背中からは血が流れ出ている。

明らかに安全な感じがしない。俺の顔からは、苦笑も浮かばない。

「集中…」

口に出したところで、集中なんて出来る筈も無い。第一、訳の分からない所に突然吹っ飛ばされて、ティガレックスと『こんにちは』なんて、洒落にもならない。ってか、そんなの洒落って言わないよね！！

その上、こっちの世界で一人を見殺し殺人未遂だ。馬路で洒落にならん。

ティガレックスは辺りを警戒しているのか、周りを見回したり、お互いを確認しあう動作が明らかに増えた。……寧ろティガレックスは戸惑っているようにも見える。

目の前にいる俺が、見慣れない格好をしているからだろうか？…。誰だ勘違いって言ったの？　言われなくても分かってるよ！！

可笑しな人には近づかないってのが、どこのご家庭でも教育でしょうよ！

落ち着け俺。まぁ、ポジティブに考えよう。何にせよ、奴らは中々突っ込んでこない。これはある意味、大きなチャンスだ。

「よし！」

掛け声一つ、俺は迷いなく隻眼のティガレックスに突っ込んだ。別に隻眼だから、俺でも殺れるなんて思っちゃいない。そういう策なのだ。

嬉しい事に、突然の不意打ちじみた攻撃は、ティガレックスの反応を大きく遅らせた。俺はＴＡＭＩ○Ａ製のスプレー缶を構える。轟竜に対しては、明らかに可笑しな光景だが気にしない。弱肉強食は大事ネ。

「いっけぇ！」

俺は勢いよく、狙いを定めて、もう片方の目を狙って噴射した。両目とも潰せば、戸惑うはず！

「あっ…」

噴射しない。かざしたスプレー缶は、『ぷしゅ』っと情けない音を立てるのみ。　それ以上何もしてくれない。折角のティガレックスの目を潰す計画が、照りつける太陽の下、馬鹿馬鹿しく散った。俺の命も散りそうだ…。

「ＴＡＭ○ＹＡァァァァァァァァ！！」

別にＴＡＭＩＹ○が悪い訳じゃない。悪いのは…いや。俺でもないと思うんだが…？

「えーと…。　そのー…」

取り敢えず叫び終わり、御兄弟に目を向ける。うわぁ…何か哀れみの目だ。　人生で初めてモンスターに、スゲェ居た堪れない顔をされてしまった…。

鬱だ…。でも死ねない…。

「まぁ、近くに半死半生の女の子が居るのに、死んでられないしなぁ…」

俺は死にかかっているんであろう少女に視線を移す。

一応はあんな見っとも無い姿で死にかけている少女でも、命の恩人だ。

…。分かってる。死にかけてるのは俺のせいだよ。

「グルル…」

何だかんだ言ってるうちに、ティガレックスさんは俺の格好なんて、どーでも良くなっちゃったみたいです。勿論。俺はどーでもよくないです。

緊急事態もいいところです。死亡フラグビンビンです。

そう言えば、敏感サラリーマンソーセージってあったよね…。

「死んだフリとか…効くかな？」

雄大な空を見上げて、俺は妄言を吐く。死んだフリなんて、熊にだって効かないのに…。

大きく開け放たれ、絵の具で塗ったかのように、斑の無い青に染め上げられた空。その青を引き立たせるかのように、白い入道雲が

居座る。

何とも不思議な世界だ。ずっと空を見上げていたら、あの青に引き込まれ…。

「グルオォォォォォォォォォォォォォ！！」

えぇ。地の文が長々としすぎました。どうやら兄弟の反感をかったようです。　切れやがりましたね。これだから最近のモンスターは…。

額に手を当てる俺。取り敢えず…何か策を考える暇なんて無かった。

「どうしようかなぁ…」

取り敢えずどうしようもないのは、分かりきった事実な訳だが、ココで状況を鵜呑みにしてしまうと人としてアウトだ。何でも『空気読めたら偉い』と思うなよ？

「……」

取り敢えず、よく分かったよ。これはヤバイ。

やば過ぎる。

ω

「ったく…。この馬鹿どもが…」

白衣に身を包んだ遠目先生っぽい女性は、砂の上に転がる少女と少年の半死半生の姿に、哀れみの目を向ける。

砂漠の鬱陶しい太陽の照りつける下、砂の中から突き出た岩の側面にはティガレックスが1頭。ミンチと言ってもいい位ぐちゃぐちゃな状態で、岩に張り付いている。もう1頭は逃がしてしまったようだ。

「手間がかかるねぇ…」

その女性は軽々と少女を持ち上げ、オトモに少年を背負わせると溜息を吐いて砂漠を後にした。

第０話・俺がモンハン入り　～えっ…モンハン？～（後書き）

前回の改訂版です。

大幅な仕様変更については、当時の俺が痛すぎたのが悪いです。

盛大に反省してますです。

今回、題の方も『第０話』にさせて頂きました。

また、ちょくちょく弄りますです。

取り合えず、以上！！

第1話・下僕生活始動！！　～下僕と書いて『オトモ』と読む～

「まぁ…あんた達が生きてる事が奇跡だよ」

何かの毛皮の上で寝かされた俺達は、医者っぽい姉ちゃんにタバコを咥えたまま、上から目線甚だしい形で言い放たれた。

相手が年上だから上から目線なのは、当たり前っちゃあ当たり前か。

「……」

俺は辺りを見回す。どうやらここは病院らしい。だが、病院独自の消毒液の匂いはしない。　代わりと言っては何だが…スゲェタバコ臭い…。

「んで？　雑魚か？　お前らは？」

相変わらず匂いの根源であるタバコを咥えたまんま、姉ちゃんは椅子に深く腰掛けて言った。言い過ぎだぜ医者…。するとその問いに対して、銀髪の少女は少々はにかんだ笑顔で「面目ない」と一言。

非常に納得いかないので、俺が付け加える。

「ちょ！！　ちょっと待って下さい！！」

「あ〝？」

何か凄い理不尽な形で、医者の姉ちゃんに凄まれてしまった。人の命を預かる医療関係者が、患者にする顔じゃないのは確か。瞬間的にビビったが、事実を明確にする事は大事な事！！　こんな所で

引いてらんないです。スゲェ怖いけど…。

「ティガレックスが2頭いたんですよ！！」

「あっ！！　言っちゃ…」

何故か弁解を少女に、泣きそうな顔で止められてしまった。時既に遅し…。　と言うより、何か悪い事言ったか？　少女は何を感じ取ったか、冷や汗が止まらない。

「フィル？」

「……」

医者であるかどうか、既に理解しがたい白衣の姉ちゃんは、凄い威圧感とオーラで少女の名前を呼んだ。　そしてその名前に、少女は反応して肩を落とし、震えている。　姉ちゃんは「へぇ…」と続ける。

「そーかそーか。ティガレックスかー」

「ゴメ……さい…」

少女はうな垂れたまま、小さく謝罪の言葉を漏らす。それを聞いてか聞かずか、姉ちゃんは傷を抉るように話を続ける。

「さぞ自信があったんだろーなー。相手は2頭のティガレックスだもんなー」

「ゴメンな…い…」

姉ちゃんは腕を組んで、少々嘲笑うような笑みを浮かべて言う。少女はさっきよりも多少声を大きくして、再び謝罪の言葉を漏らす。

医者の音声弾幕は止まない。レヴ〇剣弾幕よりもエグイ。交わし所がない。

「そりゃさぞかし、報酬も良い物が手に入ったんだろーなー？」

「ゴメンなさいって言ってるでしょ！！」

とうとう少女も限界に達したか、声を上げて抵抗した。少々遠慮気味だが、相手の虫の居所を悪くするには十分すぎる。

医者の姉ちゃんの顔は一瞬で修羅になった。

「あ゛？」

「本当にゴメンなさい…。」

一言だ。あの一言には、何か洗脳的な物がある…。第一オーラだ。姉ちゃんの後ろに、阿〇羅マンが見える…。いや、別に目が悪いとかじゃなくて…。

姉ちゃんの弾幕は、更に酷さを増す。

「ハンターランク1のくせに。馬鹿か？　馬鹿だろ？　馬鹿なんでしょ？　バカって厄介なのよ？　このバーカ」

「うぅ…」

酷い言い様だ。何もそこまで言わなくても…。俺は弁解に入ろうとして、口を開こうとした。…が、無理だった。

「弁解か？」

「！？」

姉ちゃんは此方を見て、ニヤッとするとそう聞いてきた。…読唇

術ではなく、読心術！？

「取り敢えず、アンタは暫くその手のクエストは禁止！！」

「はい…。」

俺から目をそらすと、少女に向かって口の悪い姉ちゃんはそう告げた。少女も反省したように、しゅんとしている。

そこで会話が終わればよかったのに…。弾幕の矛先は無惨にも、俺に向けられる。

「で…。　お前さん、何者だ？」

「はい！？」

突然のフリに俺の声は完全に裏返った。情けない位高い声だ。

姉ちゃんは、「いや…誰だって聞いてんだ」と、何か反応も機嫌もよろしくない。機嫌悪いのは、誰のせいかって…俺？

俺は取り敢えず分かり易さを追求した、名前紹介を駆使する。

「み…御崎零次です。み・さ・き・れ・い・じ」

「テメェ馬鹿にしてんのか？」

わー！！　何か死亡フラグ立っちゃったよ！！

そんな事も言ってられないので、俺は慌てて弁解する。勘弁してくれ。

ティガレックスでボロボロなのに、このままじゃ心身ともに崩壊する。多分、会話の時間と比例して、身が崩壊に向かう！！

「滅相もないです！！　あくまでも分かりやすさの追求です！！」

俺の背中に冷たいものが走る。正直、話の通じないティガレックスの方がよっぽどマシ。話か通じてしまうと余計怖いです。

一応そう弁解すると、医者の姉ちゃんは溜息一つ「まぁいい」と言って続けた。

「手を出せ」

言ってる意味がよく分からないけど、そう言って手を差し出されたので、姉ちゃんの手の上に手を乗せた。何か予想以上の力で握られる。引っ張っても抜けないくらいだ。姉ちゃんは、それを確認するとニタッと不敵に笑った。

…。次の瞬間妙な音がした。

「ブシュウ…」

「あっちゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

姉ちゃんは咥えてたタバコを離すと、俺の手の平で揉み消しやがった。激しく人道に反する行為に、俺は目を疑った。

おい医者！！　何考えてやがる！！

「あっ？　熱かった？」

「あっ？　熱かった？　じゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

立ち上がった俺は、フィルに笑顔で制止させられた。顔は笑っていたが、「めんどくさい事になるから…。お願いだから、流れに身を任せて。」と、顔が語っている。

あぁ。激しく同感だが、俺の身も案じてくれ。

「んで、熱いのはどうでもいい。御崎…零次だっけか？」
「どうでもいいって…。まぁ、そうですけど。」
俺は、一点だけ妙な色合いになった手を見ながら、恨めしそうに姉ちゃんをに視線を移す。姉ちゃんは、口に手を当てて何か考えた素振りをした後、一つの質問をぶつけてきた。
「…変わった名前だな。東の者か？」
「東？　東テ？」
要らぬ発言をした。お陰で空気がヤバい…。
姉ちゃんは半笑いという、大変気持ちの汲み取りやすい顔で一言告げる。
「取り敢えず、皆がそのネタが分かる前に全力で謝れ」
「ゴメンなさい！！」
……そうか。その手のネタは、俺以外にも迷惑か。
いや、それより俺の名前って変わっているのだろうか…？　自分の名前が変わっているなんて言われると、ちょっとショックだ。…悪〇君よりマシよ？
俺はチャレンジ精神で、差し支えないだろうと思われるネタで切り替えした。
「東の者？　幻想入りはしたいですけど、多分違います」
「げんそー？　よく分からんが、…そうだな。質問が悪かった。お前さん、一体何処からきた？」
どうやら伝わらなかったらしい。いや…伝わっても困る。しかし、東…

「死にたいのか？」
「滅相も無い！！」

伝わるらしい！！　その名前は伝わるらしい！！
取り敢えず、『何処からきたのか』という質問ならば簡単だ。

「えっと…日本？」

明確な答えだ。しかし、脳裏に浮かぶは聞きたくも無い、切り返しではないのだろうか…？
そんな事を思いつつ、何となく一人頷く俺。あくまでも、最悪の状況を案じた上での頷き。
すると、その最悪のエンディングを見るための、第一フラグの立役者とも言うべき、フィルに横から指で突付かれた。
分かってはいたが、やはり何だか不思議そうな顔をしている。

「それ何処？」
「私も知らんぞ？」

二人は打ち合わせでもしたかのように、テンポよく疑問系を疑問系で返した。問いかけだから、疑問系は当たり前だけどね。
分かってはいた。絶対ここモンハンの世界だもんね…。日本なんて分かんないよね。明確だと思われた答えが、まさかの不透明な答えだったんだね…。

何だよ…。

「おい」
「ふぇ！？」

またも突然の不意打ちに、俺の口からは情けない返事が。姉ちゃんは頭に手を当てて、かったるそうに言う。
かったるいなら解放してください…。

「まぁ、お前が何処から来ようとどうだっていい」
「おい」

突っ込まざるおえなかった。酷いよ！！　俺恥かいただけじゃない！！
しかし姉ちゃんは淡々と進める。なるほど。皆大好き、放置プレイですか。

「お前さん。何で砂漠のど真ん中で、訳分からん防具着て骨被って突っ立てたんだ？」

あー。名前は聞いても名前は呼ばない性質ですか。分かります。
取り敢えず、信じては貰えないだろうけど、いきさつを話す事にした。

「えーと…。俺はこの世界の住人じゃないです」
「ＯＫ。ならば死ね」
「待って！！」

話はじめから、何だか命の危険だ。姉ちゃんは、医療器具が入っていると思しき相当大きなトランクから、【羅刹】らしき黄金の薙刀を構えだした。

何そのパンドラボックス！？
駄目だコイツ…。早く何とかしないと！！

「あーディア先生！！　一応客人ですから！！」

脇で見ていたフィルが、慌てて止めに入る。『ディア』と、初めて名の出たきっと医者の姉ちゃんが渋々薙刀を下ろす。そして姉ちゃんが一言。

「冗談…冗談…」

目が冗談じゃない件について、詳しくお話よろしいですか医療関係者さん！？さっきのタバコの一件といい、何だこの医者…。

「それで？　何でまたこんな地方の村に？」

話を戻そうとフィルが気遣ってくれたんだろう。話を戻しやすくなった。
なった…が。

「俺が聞きたい」
「ＯＫ。ならば死ね」
「ちょ！！　デジャヴ！！」

何故か殺されそうになる俺。え？　先生…俺のこと嫌い？

「嫌いだ」
「！？」

さっきから心を読まれっぱなしだったが、ここに来て意思疎通が出来るようになってしまっている。いや。やはり、一方的に読まれているだけか…。

俺は取り敢えず、いちいち突っ込んでたらきりがないと判断して、淡々と話すことにした。

「えっと…P○Pっていうゲーム…いや娯楽に勤しんでいたら、突然ぶっ飛ばされたんです。本当に、俺だって信じられないんですよ！？」

「本人が信じられなくて、他人に信じろと？」

ディアは頬杖を付いて溜息を漏らした。確かにその通りだ。俺はフィルに助けを乞うように、目を合わせた。が、背けられてしまった。…この野郎。

仕方なく、俺は上辺だけで誰でも言える逃げ道を選ぶ事にした。

「と言っても、本当に説明の余地がないんですよ…」

ディアは「ふーん…」と一声漏らすと、新しい質問をぶつけてきた。

「まぁ、お前さんがその…何だ？　日本から来たとして、どうやって来たんだ？」

「何の前触れもなしに、気が付いたらこの『モンハンの世界』に居た感じです。」

「へー…。して、その『モンハン』って何だ？」

ディアは不思議そうな顔をして、俺に予想もしなかった疑問をぶつけてきた。

その質問には、俺も戸惑いを隠せない。もしかすると、この物語の題材が丸潰れだ。取り敢えず、色々な願いを込めて、質問に返答する。

「モンスターハンター……の世界では？」
「ないな」
「！？」

それを聞いた途端に、沢山の物が音を立てて崩れていく気がしてならなかった。大変だ。何か、全てが大変だ。

「では…ここは？」

俺は失せた願いを今一度奮い立たせ、せめてもの関連性を求めた。と言うよりも、ティガレックスが居た時点で、関連性の否定は無いだろうという確信もあった。
しかし、ディアは少し首を傾げたかと思うと、人の気も知らずに淡々と答える。

「……？　お前が自分の居た世界を現実世界だというように、私たちにとっての現実世界はこの世界だ。只それだけの話」

そのディアの返答が済むや否や、フィルが矢継ぎ早に声を張った。

「と言うより、モンスターハンターって何？」

フィルが、とんでもない事を聞く。俺が一番質問して欲しくなかった議題だと言っても、全く持って過言ではない。

俺は返答に困ったが、一応端的で明確に答えた。……つもり。

「奇怪な生物を狩るゲームです」
「お前、今私たちの世界に於ける理を、全否定するくらいの冒涜を

述べたぞ？」

横で傍聴していたディアは、目を細めて言う。　しかし、間違っちゃいないので、訂正もしない。

「そっちの世界では狩りとかしないんですか？」

「街中を武装して歩いていいのはタリ〇ンとか、アル〇イダ位の者よ？」

フィルは俺の答えに、幾つかの疑問符を用いて解釈。

俺は、そりゃタ〇バンとかアルカ〇ダなんて分かんないよね……とか何とか思いつつ。

そんな微妙な空気の中、ディアは咳払い一つ、話を切り出した。

「さて少年」

「…」

人称が変わった…。不味い。絶対来る。俺の平穏…いや既に平穏じゃないけど、今この微妙に平和な状況を潰す話題が！！

「ん？　何で無言で、そんな露骨に嫌な顔をする？」

「絶対何かあると、確信しているからです。」

そう言うとディアはニタッと笑って「その通り！」と、あからさまにネタ晴らしを済ませた。

駄目だコイツ…。もうどうにもならない…。

「少年。いい話には裏があるって聞いたことあるだろ？」

うわぁ…絶対ヤバイ内容だ。間違いない。何か俺の不思議なセンサーが、反応してるような気がしなくもない。不思議なセンサー？
言った俺も、なんか痛すぎてやだなぁ…。

取り敢えず、なるべく自然に…自然に…返答を…。

「聞いたことないです！！」

「あるだろ？」

「…あります。」

作り笑いで返した返答は、即行否定されてしまった。いや、本当に聞いた事がなくても、あの凄まれ方じゃ『あります』と答えるほかないと思う…。それでも聞いたことあるから、偽りの答えではあった訳だけども。

「なぁ少年。良かったな。こんな平和な村に舞い降りて」

「？　は…はぁ…。」

不思議な事を言う。舞い降りたなんて言われたのは初めてだ。俺降臨？　俺こーりん？　後者はロリコンと言ったところか…。

俺のはっきりしない返答も他所に、ディアは笑顔で続ける。相手は美人。そりゃもう。笑顔は聖母。

「知らない世界で出会った者と、とんでもなく早く打ち解けて。受けた傷も治してもらって。お前は幸せ者だな。」

「そ……そうですね」

『幸せですね』と、あくまでも自然に繋げようとしたが、そんな事お構い無しでマシンガンのようにディアの口から、言葉の槍が降り注ぐ。モンハンの槍じゃなくて、ロンギ〇スの槍。ちっこい初号機が投げるのが見える…。

「謝礼は？」
「へ？」
「保護休憩代。治療代。抱擁代。」
「いやいやいや！！　金！？　金取るんですか！？　ってかその前に抱擁代って何！？」
「後でフィルが、無い胸で抱きしめてくれる」
「ちょ！！　ありますって先生！！」

俺が突っ込む前に、フィルが半泣きで突っ込む。……その点については触れない。

しかし、何かスゲェ事言うぞこの医者！！　ちょ！！　誰か止めろ！！
何を言ってもこの女、どうしても俺を犯人にしたいらしい。

おい医者。医者辞めろよホント…。

「この際、詐欺でもぼったくりでもいい！！」
「あんまりだ先生！！」

最早人権無視！！　そもそもこの世界に、人権があるかは不明。

「さぁ！！　賽銭払って死ぬか、賽銭払わず死ぬか選べ！！」
「鬼巫女！？」
「冗談だ！！　金払うか、若しくは従うか！！　コーランか、貢納

か、剣か！！」
「待て待て！！　前者はもうどうしようもないとして、何故イスラム教を出す！？」
「イスラム教っぽい顔してるからな！！」
「どの片が！？」

俺の必死の弁解も虚しく、儚く散る。ディアは聞く耳もたず、薙刀を握る。今ならフルで歌える気がしなくも無い『人生オワタソング』！！

「ほら！　選べ小僧！」
「ちょ！！　人に向かって薙刀向けるな！！　脅迫反対！！」

ディアが俺の前に刃をちらつかせていると、院内に誰かが入ってきた。

「先生～。話はまとまりましたか？」

入ってきたのは貫禄ある厳ついご老人。ご老人はこの惨状を見て、目を顰めた。
怪我人を恍惚の表情で弄る医者。この現場を裁判にかけたら『勝訴』の二文字を掲げて裁判所前を疾走できてしまう位、鮮やかな惨状だ。

「先生？　一体何を？」
「マ…マスター！！　いや…ほら！！　…新手のトランシルヴァニア式リハビリ？」
「嘘つけ！！」

ディアのやっつけの理由付けに、俺もフィルも大声で反抗した。

それを聞いて、マスターと言われた老人は額に手を当てる。
「患者弄りも程ほどにして下さい。ディア殿」
「患…？　あぁ！！　…分かった」
さっきまで狂気乱舞していた自称医者は、渋い顔をして薙刀を納めた。おぉ！！　御老人は正義の味方か！！
「あっ…ありがとうございます」
「あぁ。すまなかったな零次君」
ん？　何で俺の事を知ってるんだ？　名前は言ってない筈だけど…。
「いちいちお前の気にすることじゃないさ」
ディアがタバコを出しながら、徐に口を開く。また勝手に人の心を読みやがって…。先生実は俺のこと…。
「嫌いだ」
「…」
嫌いらしい。攻略は程遠いか…。別に攻略しようと思わないが…。
ディアがタバコを一本咥えて、火をつけようとしたその時。
「先生？」
「…分かったよ」
ズイッと前に出たマスターに凄まれたディアは、タバコを胸ポケットに戻す。　院内禁煙らしい。じゃあ対面時のアレは何…。

「すまない。大変だったな零次君。フィルが迷惑をかけた」

…。よかった。話の通じる人で。俺は「あの…」と、なるべくここから解放して貰える手を切り出そうとした。

遅かった。激しく遅かった。

「少年。いい話には裏があるって聞いたことあるだろ？」

「またかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

マスターの口から出た言葉は、先程も聞いたデジャヴ。そんな言葉を、俺は求めていない！！

半分病みかけて唸っている俺に、フィルは申し訳なさそうに「実は…」と切り出した。この際もう何でもいいです。もう疲れました。

「私、ハンターになりたくて…」

「えーと。話が見えません」

フィルは涙目だ。え…？　俺のせい…？　勘弁して…。　僕、疲れたよ…。

するとマスターが、その話の概要を話し始めた。

「実はですな。近年、この辺りでもモンスターが増えてきて、被害者は出るわ、農作物は荒らされるわで大変な被害なんです。私が現役で活躍できるのもあと数年…。その先の村の未来が心配でして…」

「はぁ…」

村の現状を聞かされましても…。俺はそのまま、マスターのマシ

ンガントークに引きずり込まれていく。

マスターの目が、いつの間にか空ろだ。

「そこで、村の者から新たなハンターを輩出しようと考えまして…」

「へぇ。いいじゃないですか」

「ですが問題が…」

マスターは大きく溜息をついた。俺は何とか取り戻した生気で受け答えをする。

「どうかしたんですか？」

「それが、ハンターを育てるまではよかったんですが、『今時命を張ってハイリスク・ハイリターンのクエストなんかしたくない』という若者ばかりで…」

難儀な時代だ。どの世界の若者も駄目みたいだ。勿論、俺を含めた上での発言なので、異論は認めない。

「唯一『やるよ！』と言ってくれたのがフィルだったんです」

マスターは嬉しそうに言った。フィルも、「えへへ」と頭を掻きながらはにかんでいる。わぁ…勇者。

「そこで、オトモを渡そうとしたんですが…」

「何か問題でも？」

何か問題だらけの村だ。過疎っている村よりは、幾分マシかもし

れないが、ヘタレの多い村も難儀なもんだ。
マスターは空ろな目で一言口にした。
「フィル…酷い猫アレルギーで…」
「うわぁ…」
もう痛すぎるシチュエーションだ。そして、何かさっきまで凛々しかったマスターが凄い病んでいる。何歳か老けたように見えるのは、錯覚か否か。
「そこでです！！」
「はい！？」
若返りやがった。何か目がキラキラしてる。先程の死んだ魚のような目とは、打って変わって輝いている。逆に俺が死にたくなってきた。吸い取られてるんじゃないかな…生気。
「フィルのオトモをして頂けませんかぁ！！」
この親父、とんでもない事を言ってくれやがった。え？　何？　下僕？　殆ど下僕もいいところ？　俺に猫やれと？　ハンターじゃなくて？
「えー…」
あんな話を聞いた後だ。露骨に嫌とも言い難い。その一部始終を見ていたディアも、こう切り出した。
「頼むよ零次。村の事を守ると思って…な？」
「先生が戦ったらどうです？　薙刀もって。」

「今時命を張って、ハイリスク・ハイリターンのクエストなんかしたくない」
「お前か！　お前みたいな奴のせいか！？」
ディアは「冗談だ」と笑っていった。人称が『お前』になっていたことの突っ込みがないのは、俺の機嫌を損ねないためか？　そこまで切羽詰った状況と言う事か…。
そこにマスターが割って入る。
「先生はこんな感じだが、一応天才と呼ばれたハンターなんだぞ？」
「……」
『こんな感じ』と言われ、マスターを無言で睨むディアと、その信じがたい事実に打ちひしがれる俺と、空気が空気なので喋れないフィルとで、結局スルーと言う形になってしまった。
話を戻そう。
『オトモ』と言えば聞こえはいいが、あくまでアレは『下僕』。悪魔ネコともなれば、蹴り飛ばすだけで殺ってくれる優れもの。
人として…やだなぁ。
「零次…。お願いだよぉ…」
フィルが半泣きでくっついて来る。流石二次元。いやこの場合三次元。可愛いなぁ…。チクショー…。
俺は激しく調子に乗った。
「よし。やろう！！」

そこで、フィルの顔がパァっと明るくなる。あぁ…何か幸せ。奥の椅子に腰掛けてディアが不敵に笑ったのは、きっと気のせい。

「やってくれるか！！　有難う！！　有難う！！」

「あっ！！　ちょ！！　痛い痛い！！」

マスターが手を握って、上下にブンブン振る。その勢いと言ったら…危うく腕がもげるかと思っちまったぜ…。

「フィル！！　準備してきなさい！！」

フィルは嬉しそうに頷くと、一目散に走っていった。

それを見届けて、一応聞いてみる。

「俺、ハンターやっちゃ駄目なんですか？」

すると、待ってましたと言わんばかりに奥からズイっとディアが出てきて、耳元でささやいた。

「ハンターよりも、オトモの方が、高感度が上がるぜブラザー」

「！？」

な…なんて人だ…。そうか。そういうことか！！　先生！！　今俺は猛烈に感動している！！

「まっ！　しっかりな」

ディアはニカッと笑うと、奥の部屋に消えていった。いい人だったんだ…。俺は感傷に浸りながら、マスターにもう一つ聞くことに

した。

「マスター？　武器は？」

「あぁ！！　そうだったそうだった」

まさか素手じゃあるまい。要素としては面白いけど、個人的にやる分には絶対嫌だ。なにせ手が痛い。

「ほら。武器だ」

「…」

手渡されたのは、脇差程度の日本刀。え？　リーチとか考えてます？

「オトモにも、レヴェルがある。レヴェルに応じて、その都度武器を渡すから。最初はそれだ。」

あからさまに、『レヴェル』と言っているのが痛い。…というより、俺のレベルの考え方って何？

「二人でクエストに行って、倒した相手の数によって架空の経験値を渡す。倒した奴はしっかり覚えておけよ？」

「アバウトですね…」

「いいや。シンプルイズベストだ」

まぁ確かに分かりやすいと言えば、分かりやすい。自分の力量にあったレベルアップが期待できる。……と考える事にする。

「それで、レベル2に上がるにはどうすれば？」

そう聞くと、マスターはとんでもない事を言い出した。
「５００経験値。因みにイャンクック一体で２５経験値」
「待てや」
気の遠くなる話だ。ゲームだったら当たっても痛くない攻撃が、こっちじゃ命の関わる。イャンクックだって強敵だ。
「大丈夫！！　君なら出来る！！」
「根拠を教えてくれ」
「何となくだ！！」
わはー。そーなのかー。もう声も出ない。何とでもなれ…。
「零次君？」
「はい？」
マスターは問うように切り出した。
「フィルを、頼んだよ？」
マスターは凛々しい顔に戻った。その顔を見て何だか、大丈夫な気がしてきた。根拠？　もう要らない気がするわー。
「勿論です」
俺は笑って切り返した。

「さて少年」

何故か人称が変わる。そして改まれられた。不味い。

「ここは地方の村だ。入ってくるクエストも多少可笑しい」

「と…言いますと？」

嫌な予感しかしない。何だ？　可笑しいクエストって…。

「例えば…」

「例えば…？」

例をあげてマスターが話そうとした瞬間、フィルが戻ってきた。何かクエストぶら下げて…。うん…。嫌な予感がする。

「防具つけた序にクエスト貰ってきちゃった！　ねぇ！　行こう零次君！」

言葉にもならない俺。マスターは何故か満足そうに頷いてる。まぁ、これがマスターの理想だったんだろうけど。

「何を貰ってきたんだ？」

俺がそう聞くと、フィルは嬉しそうに見せびらかしてきた。えーと？

下位討伐クエスト

・ドスギアノス1体の討伐

内容

・近くの雪山で、家畜がぶっ殺されて困っている。　何とかしようにも、生憎バズーカしか持ってない。　バズーカでぬっ殺しても良いんだが、雑魚相手には勿体無くてな…。　ハンターさん！　何とかしてくれ！

「何とかなりますよね！？　ご自分で！！」
「バズーカじゃ心細いんじゃないかな？」
「どの辺が！？　スゲェ余裕そうよ依頼主！！」

一先ず一回目はドスギアノス。なーんだ。何の変哲もなく、意外と楽そうです。納得いかない内容はさておき…。

「よし！　初クエストだよ！　張り切っていこうね！　零次！」

フィルはとんでもなく嬉しそうにそう言う。幸せの意味を知った気がするのはきっと気のせい。

「じゃあマスター！　行ってくるよ。」
「おう！　気をつけてな！」

俺は勢いよく病院を飛び出すフィルを、追っかけるように病院を出た。すると、この病院の看板が目に入る。よく見ると、『診療所』と書いてある。

…同じようなモンだよね！

「ほらぁ！　遅いよ零次君！」

こうして、俺のオトモ（下僕）生活は幕を開けた。現代に帰るこ

となんてすっかり忘れて…。

ω

「大丈夫か？　あの零次っての」

ディアはコーヒーを飲みつつ、マスターに問い掛けた。マスターは微笑。

それ以上何も言おうとはしない。その対応もよそに、ディアは続ける。

「ホントの事言わなくていいのかよ？　一応は予言の野郎だろ？」

「やっぱりあの子なんですかね？」

「間違い無いだろうな」

「そうですか…」

マスターは深刻な顔をしてそう言った。ディアはただただ頷く。

「まだ１０年しか経っていないのに…」

「今回は、奴らの手が加わっていると考えて構わないだろう。」

その言葉にマスターは、「やはり…」と目を細めた。ディアは湯気の立つコーヒーに映る自分の顔を見て微笑。

「この世界を作った奴のプログラムは、本当によく出来てやがるよ」

「……」

「もう一度言うが、零次…って言ったアイツだろうな。良かったよ。うまく取り込めて。案外易い奴みたいだし、ココに慣れるのも早いだろう」

「前回は大変でしたからねぇ…」
「あぁ。確かにな。だが、カリスマ性なら零次よりアイツの方が上だったぜ？」
「あの御方の肩を随分持ちますね」
「英雄だからな」
「確かに…」
そう言うと二人して笑った。
お昼を回り、日は真上に昇り、あたかも自分が覇者でもあるかのように地上を照らす。日の光を受け、雪山は輝く。
「まぁ…笑ってもいられませんがね」
「だな」
「死ぬ用意は万全なんですけどね」
「生きる用意にしてくれよマスター」
「そうですね…。まぁ、まさかレイ様の予言が１０年で来るとは…」
「化け物の手が加わってんだ。仕方ないさ」
「そうですが…」
「まぁ、そう心配すんなマスター」
「？」
「この世界の理通りに来た勇者なら、やってくれるだろうさ」
「そうですね」

今。
１０年越しに物語の歯車が回りだす。

第1話・下僕生活始動！！　～下僕と書いて『オトモ』と読む～（後書き）

後通行が可能になりました。

意味が分からない方は、スルーを決め込んでくださいな→

第2話・【厄災】が為に…　～展開には布石が大事！！～

眼前に広がる、一面白銀の世界。雪ってのは、何か幻想的だ。俺の口から出していい、雪への感想ではないかもしれないけど。

まぁ、そんな白銀の世界を存分に堪能してた訳だ。

さっきまで。

「なぁフィル」

「どうしたの？　零次君？」

フィルは俺の方も向かないで、ただ一点を見つめて吐き捨てるように言った。それが妥当な言い方なのは、言うまでも無い状況だ。

「何で俺たち、全力で走ってんだ？」

問いかけずとも、分かるであろう質問をあえてぶつけた。何か喋らないと安心しない。

先刻から、後ろを壮絶な音を立てて、何かが追っかけて来る。俺たちは息を切らすことも忘れて、必死に走っている。

「えーと…」

俺の要らぬ質問にフィルは惚けたように、顎に手を当てる。勿論喋ってる暇なんてない。考える暇も無いはずだ。

するとフィルが一言。

「わかんないなー」
「この野郎…」

フィルは、「走らないと死ぬよぉ？」と引きつった顔で言う。まぁ、その通りだ。無理も無い。

後ろから轟音を鳴り響かせ、雄叫びを上げて走って来るのは、皆大好きティガレックス。前にもこんな光景があったかに思えるが、きっと気のせいだろう。

「ねぇ零次君」
「何？」

喋るくらい余裕なのか、余裕がないから喋るのか、フィルは前を向いたまま俺の名前をゆんだ。何にせよこの緊急事態に喋ってるなんていい度胸だ。

『お前もな！！』と言う、天の声は無視しよう。

フィルは俺の返答に、ニコッと笑うと言ってはならない一言を言い出した。

「前の傷口…開いてきちゃった…。おんぶ…」
「勘弁して！！」

俺は、やっぱり前を向いたまま叫んだ。しかし、前ばかり向いていられない。目線を落とすと、フィルのインナーはうっすらと血が滲んでいる。

何か最近、緊急事態によく見舞われます…。

「…。飛び乗れる？」
「右足痛い…」
この我がまま野郎！！　しかし、右足にも一閃入った古傷から、確かに血が滲んでいるのが確認できる。だからと言って、止まったら死ぬんですけど？　何か？
「左足だけで飛べ！！　絶対担いでやるから！！」
「絶対？」
「絶対！！」
何故、確認を取られたのか分からない…。そんなに不安？　俺じゃそんなに不安？　確かに駄目人間だと自覚は…
「いっくよー！！」
そう言って、前触れもなく飛んだフィル。考え事のせいで、まだ準備できていなかった俺。何とか態勢を作って、俺はそれを背中で受け止める。筈だった。
何だか最近、何もかも上手くいかないような気がするんだわ…。
「！？」
フィルを受け止るために、体重を足中心に移動させたその時だった。
俺の踏み込んだ場所に、ぽっかりと空くクレバス。肉眼ではその底を確認する事は出来ない。深い…。
「ってえええええええ！！」

何だかんだ考えているうちに、俺もフィルもその闇の中に、吸い込まれていった。

ω

「あいつ等ちゃんとやってるかな？」

小さな集会所の中、雪山を見ながらディアはコーヒー片手に呟いた。それを聞いたマスターが、フッと鼻で笑う。

集会所は、今日も2人しか居ない。

「先生？　随分と心配しますな」

ディアは「馬鹿言え…」と、照れ隠しでもするかのように、残っていたコーヒーを一気に飲み干す。当然、煎れたてだ。熱くない訳がない。

マスターは苦笑いで聞く。

「…。お水…要ります？」

（コクリ）

熱くて物も言えないのか、ディアは半泣きでマスターを睨みながら頷いた。

マスターは「はいはい」と笑いながら、水をくんでディアに差し出した。

「心配なんじゃない…。ちょっと気にかかるだけだ。」

ディアは霞む雪山に目をやって言った。マスターは入って来たクエストを確認しつつ、意地悪そうに笑う。

「それを『心配』って言うんですよ？　素直じゃないんですから…」

「う…うるさい」

ディアは雪山を見ながら、呟くように、なるべく聞こえないように言い放った。そして「なぁ…」とマスターに向き直った。

「この世界の理の上では、アイツが救世主みたいなもんだろ？」

「そうなりますね」

「大丈夫か？　あれで？」

ディアの質問に、マスターはティーカップを拭きながら少し唸った。

いつもより雪山が霞んでいるように見えたせいか、いつの間にか外は雨模様だ。ディアは、「あー雨だ…」と恨めしそうに言う。

「世界が選んだ人間ですから…」

外に気を取られていたディアは、「うん？」と気の抜けた返事を返す。しかし聞こえていた事は、聞こえていたようだ。　一口、水を口に含んで言う。

「あぁ。説得力に欠けるな。選んでるのがこんな世界じゃな」

ディアは、頬杖をついて言った。マスターは「むぅ…」と再び考

え込む。いや、考えていると言うよりも、何か言うのを躊躇っていると言うべきか。

「何だよ？　隠し事かい？」

ディアは不機嫌そうに言った。するとマスターは「いや…」と苦笑いで続ける。

「１０年前もこんな会話をしていたなぁ…と思いまして」

「レイ様と…か？」

「はい…」

その返答に、ディアは目を細めて笑った。マスターはティーカップを拭き終えると、受け皿と一緒に戸棚に戻した。そして、ディアとは反対方向を向いて一言。

「今回は笑ってもいられないようです」

ディアはそれを聞くや否や、唇を締めた。

「みたいだな」

マスターは「えぇ。」と深く頷いた。そんな感じの返答が帰ってくると、予測していたんだろう。そのマスターの反応に、ディアは気を使う訳でもなく、一言漏らす。

「まぁ、いいんじゃないかい？　何があっても、プログラムは揺るがない。また救世主が何とかしてくれるさ。」

「そう上手くいくとも限りませんよ？」

「ＢＡＤエンドばかりも、考えてられないだろ？」
「現実は厳しいんです」
「まぁ…な。しかし、何とかしてもらわなきゃ困るわけよ」
ディアはそう言って組んでいた足を崩すと、防具を軋ませて立ち上がった。
マスターは苦笑いを浮かべながら、リストを差し出す。
「さて、今日はどんなクエストがいいです？」
ディアは「勿論…」と、あるクエストを指定した。それを見てマスターが嬉しそうに微笑む。そして頷く。
「今日は生憎の雨だ。心配性に拍車が掛からないように、気をつけて。」
ディアは腕を高く突き上げて、村を出た。

ω

「痛…。」
ここは…。どうやら、クレバスにしっかり落ちたらしい。
落ちて空いた穴からは、曇天が顔を覗かせ、雨が降り注いでいる。
いつの間にか雨が降ってきたようだ。
俺は辺りを見回して、呼びかけるように言った。
「…フィル？」

よく周りを見回す。…？　フィルの姿が見えない。一体何処に行ったんだ？

「フィ…」

叫ぼうとした俺は、息を潜める…。闇の中から…何か…来る？

ドスドスと、その足で一歩一歩近づいてくる。足音の反響音からしても、相当な大きさだ。まさか…ティガレックス？

俺の顎を、一筋の汗が滴り落ちる。いや、もしかしたら滴ったのは雨かもしれない。

「…。」

腰に挿しておいた脇差を抜く。何も武器がないよりは、幾分心強い。あくまでも、素手よりはという意味で。脇差だって、モンスター相手には玩具だ。

（ドス…ドス…）

その足音は大きい。だが、ゆっくりとしっかりした足音だ。

もしかしてティガレックス…じゃない？

いやいや。油断は禁物……。俺は闇を睨みつけて、脇差を構えた。が、力が抜けた…。

「おーい？　零次君～。おきてる～？」

「……」

暗闇から姿を現したのは、大きなポポに乗ったフィル。俺の全身から、力が抜けていくのがよく分かった。ビビってた自分が憎い…。

フィルは、俺が構えていた脇差を見るや否や、ポポの前に立ちはだかった。そして、全力で言い放つ。

「た…食べちゃ！！　食べちゃ駄目だよ！！」

「食わねぇよ！！」

フィルは「だよねー」と言って、ポポを愛でている。ポポも心なしか、擦り寄っているように見える。一応相手はモンスターだが、こんな状況においては呉越同舟と言った所か。

俺は脇差を戻すと、大きく溜息をついた。

「どうするよ？」

「ん～？　どうしようか？」

フィルはポポにくっ付いたまま、困ったように笑った。どうやら、本当にどうしようもないみたいだ。

まぁ、傷口が開いてないのが幸いだ。雪がクッションになったらしい。あくまで、俺の傷口であって…。

そんな中、空腹で腹がなる。

「……」

俺はフィルの方に顔をやる。

「食べちゃ駄目…だよ？」

フィルが半泣きで、ポポに寄り添っている。ポポも心なしか震えているような気がしなくも無い。俺は「だから、食わんと言ってるだろ…」と、空ろな目でぼやいた。

話を変えさせるため、ここから出るため、俺はフィルに問い掛けた。

「そーいや、そのポポ…何処で見つけたんだ？」
「仲間を食べる気！？」
「その発想から離れろ！！」

あくまでも俺を悪者にしたいのか？　フィルは少し考えると無い胸を張って、「あっち」と暗闇の中でも一層暗い横穴を指差した。

「……」

横穴？　ここってクレバスじゃなくって？　あるぇ～？　最早嫌な予感以外に、何も感じない。

「怖いのぉ～？」

フィルが、ニターっと笑って顔を覗く。馬鹿にするなよ…。俺は怪訝そうな顔をして、フィルに質問した。

「そもそも、何しに行ってたんだ？」

フィルが自慢気に、「それはねー…」と言い出したときだった。

（ぐー…）

「！！！！！」
「はーん…。食べちゃ駄目…ねぇ」
穴の中だ。フィルの空腹音は、反響して大きくなって聞こえた。
俺は蔑むような目で、苦笑いを浮かべる。
その対応に、何故か当事者は逆ギレする。
「だっ！！　誰だってお腹は空くもんだよ！！」
「んで？　食料を探しに行ったところ、運良く食料があったと？」
フィルは黙ってしまった。拗ねたんじゃなくて、図星だったんだろう。
「まぁ…まずはここから出る事が大事だよ！！」
「…そうだな」
あからさまな話題の転換ではあったが、これ以上の空腹談義は、絶対に不毛な結果に終わるだろう。いつもならもう少し弄ってもいい訳だが…。俺はそのまま、流れに身を任せる事にした。
「とは言ってもね…」
そう言うと、フィルは腕を組んで考え込む。どうやらここから出る手立てを、思案していらっしゃるようだ。まぁ、到底いい案が出るとは思えない。
だって……フィルの頭だし。……ゴメン。言い過ぎた。
「そうだー！！」

（ズドドドドドド！！）

突然フィルが大声を上げたため、俺がさっきまで寝転んでたところに、頭上の穴から雪が降り注いできた。これには俺たちもビックリだ。

「配慮しような…声」

（コクン）

俺の忠告に、フィルは慌てて首を大きく縦に振った。そして、ぐるりと辺りを見回したかと思うと、俺に向かって手招きの動作を見せた。

…来いってか？　仕方なく俺は、フィルに近寄る。

「えっとね…。ここだけの話…」

「待て」

俺はフィルの口に手を当てて、話を遮った。　これにはフィルも驚く。

「何故、辺りを見回して、「ここだけの話…」と繋げようとした？誰か居ると思ってんのか？」

「ポーちゃん居るじゃん！！」

「ポーちゃん！？」

するとフィルは、ポポを指差して「ポーちゃん！！」とこれまた大声で言い張った。反論する間もなく、轟音が鳴り響く。

外は雨だ。雪は雨を吸収して、重さを増している。それが今の大

声で、一気になだれ落ちてきた。それも相当な量だ。

際限なく押し寄せる雪に、俺たちの居た空間は埋もれ、暗く長い横穴まで流される事になった。

ω

「うぅ…。クソッ…！！　調子に乗るんじゃなかった…」

そう愚痴を零すと、ディアは後ろを振り返った。

吹雪は収まり、少し視界の開けた雪山。雨が降っているのは、来る時から変わらない。気温は標高に比例して、グングン下がっていく。変わった事といえば、『ホットドリンク』の残数だろうか？

「たかが、ティガレックス一頭のクエストだろ…。何でこうも、見つからないのかねぇ…」

さっきから、何個かティガレックスらしき足跡は確認していた。そして、その足跡を今辿っている。その巨体によって、雪に強く押し付けられた足跡は、まだ先まで続いている。

「……」

ディアは足を止めた。見慣れないモンスターの足跡だ。

「……靴？」

よく見ると、明らかに靴。誰のかは、大体想像がつく。ディアは溜息を漏らした。

「あの馬鹿共…」

そう言ったときだった。遠くに、ポッカリ空いた穴が見える。

（何かもう…ヤダなぁ…）

答えなんて見えている。やっぱりクエスト序に、見に来て正解だ。あいつ等は、非常に愉快な事に巻き込まれているみたいだ。

取り敢えず、大きく口を開けた『穴』に近寄る。既に、クレバスの大きさではない。

「…？」

そこには、無数の足跡が雪の上を埋めていた。

１つはティガレックスだろう。見覚えのある足跡だ。

２つ、３つ。それは紛れもない靴。あいつ等のだろう。

４つ目は…大きくも小さくも無い、４つ同時に押し付けられた足跡。

ディアは、溜息混じりの愚痴を零した。

「厄介な事になったな…。もう目を覚ましたのか？」

ディアは山頂の方を見上げ、同時に睨みつけた。奴だ…。

「おいおいおい……。幾らなんでも早すぎるだろ」

ディアは雨の降る中、クエストも忘れ、山頂へと足早に急いだ。

「暗いな…」
「暗いね…」

横穴に押しやられてから、結構経ったと思う。交わされる会話は、さっきから何も変わってない。同じ会話の繰り返しだ。

何故動かないか…。俺は寧ろ、積極的に動こうとしている。だが…しかしだ。

「何も分からない状況で動くのは危険だよ！！」

フィルは閉じ込められているという意識が無いのか、単にビビってるのか、その一点張りだ。そろそろ『ホットドリンク』が少なくなってきたのは言うまでも無い。

「なぁ…フィル」
「うん？」

「動かないか？」
「うん」

この会話も何回やっただろう。全て、不毛な結果に終わっている。俺は、目の前で小さな明かりを与える蝋燭に目をやる。

「この蝋燭尽きたらどうするよ？」
「……」

反応が無い。蝋燭を近づけると、フィルは寝ている。……不味い！！

「起きろぉぉぉぉぉぉぉ！！」

……。俺の行動も不味かった。確かにフィルは「んー…」と言って起きたが、上の方で何か雪崩れてる音がする。

皮肉なもんだ。今更雪崩れようと、もう閉じ込められてるってのに…。

「あっ」

俺は突然一言漏らす。フィルは「どうしたの？」と首をかしげている。……と思う。暗闇なのでよくは見えない。あくまでも声で判断だ。

「ドスギアノス…」

「あっ」

あまりにも、要らないフラグが立ち上がりすぎたせいか、どうやら俺もフィルもすっかり忘れていた。フィルは「うー…」と小さく唸ると、スッと立ち上がる。

「仕方ない…」

「行こうか？」

俺はフィルに問い掛けた。するとフィルは、呟くように一言。

「バズーカさんに任せよう…」

「……」

言い出しっぺの突然のクエスト放棄だ。信じられん。確かにクエストとしては、激しく難易度の上がったクエストになったのは事実だが。……リタイア？

「行こうか？」

フィルは空ろな目で、首を縦に振った。俺は移動のため、蝋燭を持ち上げた。

その時だった。

「ブシュウ…」

「あっ？」

持ち上げた時の空気抵抗で、蝋燭の火は音を立てて儚く消えてしまった。これにはフィルもご立腹だ。

「ちょ！！　何で消した！？」

「不可抗力って奴だったり？」

フィルは「見えないじゃん！！」と、喚いている。つけ直そうにも、マッチは殆ど時化っていて使い物にならない。

そんな中、重たく、しっかりとした足音が洞窟内に響く。ポポが歩き出した。

「おっ！！　ポーちゃん！！　道案内してくれるの！？」

道案内…？　洞窟内は確かに真っ暗だが、さっきフィルが歩いてポポを見つけられる程度の、洞窟だ。一本道に違いない。

「まぁ！　一本道だけどねー」

やっぱりだ。俺は見失わないように……。見失わないけど、見失わないようについていく事にした。

ω

「やはりか…」

ディアは山頂にいた。山の頂きだ。晴れていたら、雪が光を反射し、見える景色はいささか幻想的であったことだろう。しかし、現実はいつも上手くいかない。

そこには、既に息絶えたと思われるティガレックス。周りには激しい血飛沫。ティガレックスの体には、大きな氷柱が数本、地面にその体を留めるかのように突き刺さっていた。

ディアはまるで仇を見るような眼で、射止めるような目で岩の上に佇む古龍を睨む。そして、一息入れると重い口をあけた。

「もう…お目覚めなんてな！！」

ディアの視線の矛先には、風を纏う鋼のように麗しい、だが威厳を持った龍の姿があった。

その龍がゆっくりと、口をあける。

「久しいな…。人間…」

独特の体に響く声で、龍は言葉を発した。その目は…凍てつく程

冷たい。

しばし、沈黙が流れる。さっきまで雨だった筈の天気は、いつの間にか荒々しい吹雪と化した。相手が見えない訳ではない。何か…仕組まれたような環境下の吹雪だ。

そんな中、ディアが不敵に笑った。それを見て、その龍は目を細める。

「何が可笑しい？　人間よ？」

ディアはそれを聞いて、もう一つ口元を緩める。

「あぁ？　何が可笑しいかって？　嬉しいのさ。仇が数年ぶりに、凍結状態から蘇ったのがね！！」

そう叫ぶディア。診療所での冷静さは無い。

「そうか…」

龍は目を細めたまま、そう呟いた。その目に、もう戦う意志はない。

「……？」

龍の意思、意図がよく分かっていないのか、ディアは黙って顔を顰めたままその場を動かない。その表情は、ある種の動揺とも取れた。

「私を殺せ…人間よ」

吹き荒む吹雪の中、鋼龍の瞳は小さく映る人間を捉えていた。

ω

「あるぇ〜？」
「……」

マスター…。一本道って…迷うものなのかなぁ？

フィルは、ポポの上にまたがって困ったように腕を組んでいる。
いや…。実際問題、非常に困っている。

「ねぇ、零次君？」
「うん？」

「ここ…何処かな？」
「知ってたら言ってる」

フィルは「だよねー」と苦笑いして、行く前にマスターが手渡した地図を確認する。唯一、見つけたこの場所が、光の差し込む所だったのが救いだ。

俺は、もと来た洞窟の方を振り返る。　相変わらず暗闇がポッカリ口をあけている感じだ。
そんな中、フィルは不思議な行動に出る。

「ポーちゃん？　どっち？」

そう言うとフィルはポポから降りて、地図をポポの前で広げる。

最終手段な事この上ない。しかも、あまりにも稚拙な最終手段だ。

最終手段『ポポに地図を見せて、教えてもらおう！！』

だがしかし。

（むしゃ…）

「……」

嫌な不協和音が耳に届く。生憎と言うか、良かった事にと言うか、俺は奴らとは逆の方向を向いている。……さて。何の音かな？

怖くて後ろを振り向けない俺に、フィルが小走りに近寄ってきた。目には涙を溜めている。

「……地図。食べちゃった…」

「お前がか？」

「違うよ！！」

フィルは涙を溜めたまま、「うー…」と唸ってポポを指差した。そこには表情から察する事は出来ないが、余程お腹が減っていたのだろう。ポポ……いや、ポーちゃんが地図を音を立てて堪能中だ。

印刷紙は不味いと思うんだわ…。この世界に印刷なる物が、あるかどうかは知らないけれども。

「あーぁ…」

そう一言俺が漏らすと、フィルは余計に涙を溢れさせた。……不味い。

「なっ！！　何とかなるって！！　気にすんな！！」

精一杯のフォローだった。なんて上辺だけ…。だが、単純な奴にはよく効いたようだ。

「そ…そうだね。火事場力で何とかするのが、大切なんだね！！」

反省させればよかったと、スゲェ後悔しています…。

そんな事もお構い無しに、フィルはポポに飛び乗った。ネーミングセンス０のフィルに名づけられてしまったポーちゃんは、再びゆっくりと歩き出す。

ポーちゃんにとって、俺たちは一体なんなんだろう？

「ほら！！　早く行くよ！！」

考える間もなく、『人に慣れきったポポ』と言う不思議な生物に乗った少女は俺を急かした。

ω

「自分が何言ってるか、理解した上での発言か？」

「勿論だ」

ディアは鋼龍であるクシャルダオラを前に、腕を組んで問い掛けた。戦う気がない相手と、戦うなんて愚行はしない。だが納得いかない。

「話が見えん。何故１０年前…」

そこまで言うと、クシャルダオラは「何も言うな…」とディアを制止させた。

「来るべき……厄災の年が来たのだ」

「……やっぱりな」

クシャルダオラはそう呟いたっきり、夕日で紅く染まった雪山を見据えた。今、その目には何が映っているのだろうか？　コイツは一体、何を知っているのだろうか？

「解せぬか？　人間？」

ディアは答えない。クシャルダオラは息を整えると、ディアの横まで歩み寄った。反射的に構える薙刀。クシャルダオラは動じない。

「何のつもりだ？」

何も答えず、クシャルダオラはディアの横まで行くと、足をたたんでその場に座った。そして、誰に言うでもなく、目線を夕陽で紅く輝く雪山に向けたまま、徐に口を開く。

「また…あの戦乱の時代が来る。私は、その為に封印を解かれた」

「そうだとは思ってた。老山の姫様の予言通りだ。」

「レイか？」

「あぁ」

頷くディア。クシャルダオラは、幻想的な景色を眺め寂しそうな顔をする。

「１０年前の比ではない。今度は、古龍種だけでは済まないだろう…」
「……そうか」
ディアは薙刀を戻し、クシャルダオラの横に座り込む。それを確認してか、クシャルダオラは一呼吸おいて語りだす。
「１０年前か……。まだ覚えているか？」
「当たり前だ」
ディアはホットドリンクをあけて、一気に飲み干した。その空き瓶を、自分の脇に置く。
「人間…あの時はまだ、幼さが残っていたな…」
「老けたって言いたいのかい？」
ディアは寒いのか、体育座りの姿勢をとって不機嫌そうに言った。クシャルダオラは表情を緩め、目を細めた。
「立派になった」
「どーも」
ディアは意地悪そうに笑っていった。別に皮肉なんて込めていない。不思議と、自然な笑いが出てきた。クシャルダオラは、安堵にも似た表情を見せる。
「奴は…髭の奴は元気か？」
「あん？　マスターか？　元気だぜ？」
『元気』と、その単語を聞いて、クシャルダオラは目を閉じて満

足げな顔をした。夕陽に照らされたその威厳ある顔は、とても１０年前の厄災を起こした者の一角とは思えないほど、慈悲に溢れていた。

「人間…」
「……あ？」

ディアは少し送れて返事をした。クシャルダオラはスッと立ち上がると、さっきとは打って変わったような、清清しい顔で同じ言葉を繰り返した。

「私を殺せ…」
「……」

ディアは絶景と思しき紅い雪山を見つめたまま、クシャルダオラと目を合わせない。何も言わない。
そんなディアを見て、クシャルダオラはディアの背中に向かって、感慨深そうに思いを馳せる。

「１０年前の敵よ。再びこの世に…厄災が降りる。私も再び、基軸の一角として駆り出されるだろう…。だから今ここで殺せ。情けは要らん。もう…戦いたくはない。」

ディアは誰にも見えないように拳を固く、固く握った。分かっている。１０年前の厄災は、再び引き起こしてはならないと。しかし、もうそれは止められない。

クシャルダオラ一匹の違いなんて、あまりない筈だ。ましてや目の前に居るのは、古き日に見た狂気の鋼龍ではない。

「殺しては…くれぬか？」
「……殺すなんて惜しい。良ければこっち側についてくれれば…」
そうディアが振り返って提案したところ、クシャルダオラは、「ならん」と強く言い放った。言い方の強さじゃない。言葉の重圧だ。
「なっ！！　何でだ！！」
「人間とモンスターは相容れん。」
「そんなの！！　ただの古い考え方だ…」
「私のような禁忌を犯した者に、再度の未来はない。」
「あれは事故…！！」
ディアは言いかけていた言葉を止め、そのまま俯いた。
「もう良い…」
クシャルダオラはそう、吐き捨てるように言った。
「……」
ディアは俯いて黙ったままだ。
夕陽は、いつの間にか傾きかけていた。紅かった雪山も、いつしか一部は闇に閉ざされてしまっている。紅と黒の交わりはぼやけ、グラデーション具合が何とも鮮やかだ。
「人間…。お主は、人間でよかったな」
「……お前も」

「言うな」
「……」
「全てを擲ってこのざまだ。己にかけられる言葉すら惜しい」
そういうと、一帯に突風が吹いた。目も開けられない。
目を開け、顔を上げた時には、既にクシャルダオラは、頂きから更に突き出た岩の上に佇んでいた。夜の闇の中、黒光りする体に黄色い目。何とも不気味だ。
「人間。ここで暫くの間待っている。覚悟が決まったら、いつでも殺しに来い。生半可な覚悟で来るな。私は自害よりも、あくまでお主という人間に殺される事を選んだのだ。」
暗闇の中、クシャルダオラは突然吹いた突風とともに、消えていった。
何も言わずに下山を選ぶディアの頭の中には、知る者も少ない『厄災』の二文字が確信と共に堂々と居座っていた。

ω

「ここ…何処？」
激しいデジャヴだ。道に迷うなんて言うあからさまなフラグに、こうも時間を裂かれるなんて思ってもなかった。一応空の見える所には出たが、不覚…。既に夕陽が傾いている。
「出られたは良いが、本当に何処だろうな…」
俺もフィルも、序と言っては悪いがポーちゃんも、雪山の上層辺

りに出たようだ。下層との温度が、こんなに違うのかと驚かされる。

「マフモフ着てくれば良かった…」

フィルがポーちゃんの毛皮に擦り寄りながら、皆がお世話になったであろう防具の名前を口にした。……アレは一応、ホットドリンクの要らない優れものだ。

「マフモフだろうとこれは絶対寒いって…」

俺は憤りを、愚痴とも取れる言葉に変えて口にする。そんな事を言ったって、寒いのは変わらない。当たり前だ。

「いいなぁ…ポーちゃんは温かくって…」

フィルはポーちゃんの目（？）を見つめて言う。しかし、ポーちゃんが何を考えているのか、俺には分からん。多分フィルも、分かってないだろうし。

そんな、平和とも取れる時だった。

（ぐちゅ…）

足に伝わる違和感。何か良からぬものを踏んでしまったみたいだ…。俺は慌てて足を退ける。そこには靴の大きさに、収まるほどに小さな紅い物体。

「これは…？」

俺は慌てて周りを見渡す。無事に穴を抜けた時は一面夕陽に染ま

っていたからか、気が付かなかったが、よく見ると無数の紅い物体が飛び散っている。

「……っ」

よく見ると血を纏った肉片だ。細切れも良い所と言わんばかりの裂き様。人間業じゃない…。

俺は辺りを見回す。散らばる肉片は、細かく千切られ過ぎていて、最早元々が何かさえ分からない。何だか、風が強くなってきたようだ。

「うぅぅ…寒い…」

フィルはポーちゃんの陰に隠れて、風を凌いでいる。確かにこれは、凍えそうだ。

「ほぅ……」

何処からか、深く響く声がした。冷風が一層強くなる。と言うより、厳しい音を立てて風の塊が降りてきた。

「村の……者か？」

風が解ける。その風の切れ目から、冷たい黒い目が見え隠れする。その光景に見とれていた、次の瞬間だった。

（ザシュ……）

俺の横を、肉眼でなんて到底確認しがたい風の刃が飛んでいく。そして、後ろで何かを抉った音が鳴る。まだ温かい鮮血が飛んでく

る。俺は恐る恐る、後ろを振り向いた。

息荒く、雪の上にその巨体を沈めるポポ。飛び散った血に染まり、目を丸くして、その場にへたり込むフィル。雪は銀世界を消し、その身を紅く染めた。

「ポー…ちゃん？」

表情は依然変わらぬまま、息も絶え絶えのポポに声をかけるフィル。突然起こった事で、状況が呑み込めていないみたいだ。

フィルはじわっと涙を浮かべ、一言かすれた声で言った。

「あの日と……同じだ……」

あの日…？　確かに聞こえた言葉。しかし、俺の目には既に鋼龍が漆黒の闇の中、その体を月明かりで輝かせ、威圧的に此方を見ている光景しか映ってはいない。

「これで、また一つ。償えたと思うべきか…」

クシャルダオラは睨むように、威嚇するように目を細め、そう言って身を翻す。俺は何も言い返せない。何か言えば…死ぬ。

「……ってよ」

クシャルダオラが足を止める。フィルは血にまみれたまま、仁王立ちの姿勢で、言い張った。俺はそれこそ驚いた。

「待ってよ！！」

振り向くクシャルダオラ。フィルはもう一度声を張った。
「何で！？　何でよ！？　何でなのよ！？　何でポーちゃんを！？」
「何故…かと？」
クシャルダオラが言葉を発したのにも驚いたが、フィルの度胸にも驚かされる。何だかんだ、俺は立ち尽くしたまま何もする事が出来ない。
「あなたもモンスターでしょ！！」
「……」
クシャルダオラは表情を変えず、絶えず此方を睨む。フィルも、その怒りの表情を変えない。視線はただ一点を、鋼龍を外さない。
「フィルよ…」
「！？」
クシャルダオラは、静かに彼女の名前を呼んだ。フィルは発せられた言葉に、戸惑いを隠し切れない様子だ。
疑問は只一つ。
「何で…？　私の名前を…？」
「愚問だな…。だが、お主はまだ知る必要は無い」
クシャルダオラはそう吐き捨てた。まるで関係も無い事であるかのごとく。しかしフィルは引き下がらず、クシャルダオラの目を見て言う。

「どういう事…？」
「……」

クシャルダオラは何も言わない。ただただ、悠然とした面持ちでフィルをその眼下に置く。

「答えないの…」
「……」
「そう…」

交わされる事の無い会話。しかしフィルは諦めず、再度鋼龍に食い下がる。

「何で？　何でポーちゃんを攻撃したの？」
「それもまた愚問なり…」

言葉を発したかと思えばこの様だ。俺は完璧に蚊帳の外ライフを満喫しているが、そんな事言ってられないような状況に置かれている事を、もっと感じるべきなんだろうか？

そんな中、問いに答えるようにクシャルダオラが口を開く。

「上の者が下の者を糧にする。自然界の弱肉強食の理だ。何の問題も無かろう？」
「っ！！　大有りだよ！！　ポーちゃんは友達なんだ！！」

溜息混じりに答えたクシャルダオラに対して、フィルは大声で叫んだ。

俺はその状況を横目で見ながら、もう息数の少ないポーちゃんに

近寄る。クシャルダオラは「解せん…」と一言。そのままゆっくりとフィルに近寄る。それを見て、俺は脇差を抜いて飛び出そうとした。

オトモ本能的に。

「零次君。大丈夫」

そう言ってフィルは、クシャルダオラに突っ込もうとした俺を制止させる。……。危ない…。また感情的になってしまった。

俺の突貫にもクシャルダオラは全く動じず、フィルに向かって歩みを進める。そして、フィルの前まで来ると打って変わって、柔らかい、重圧のない声で一つだけ質問を投げかけた。

「あえて問おう。名は？」

「…？　エリシア・フィルフォード」

そう言うと、クシャルダオラは目を閉じた。そして呟いた。「そうか…」と。

「やはり…英雄の…」

そう言いかけて、クシャルダオラは言葉を濁した。そして言い直す。

「見届けてやる事は出来ないだろうが、お主なら出来る」

「え？」

フィルの疑問符もよそに、クシャルダオラは月の光を浴びた羽で

高く高く、舞っていった。

「……」

俺もフィルも何も言わない。いや、少なくとも俺は何もいえない。こんな状況で、言葉を口にするのも嫌だ。

「帰ろう…」

「……」

そう言って、村の方面へと切り返すフィル。俺は動かない。

「零次君？」

フィルは、まだ目に少し涙を残したまま俺の方に振り返る。

俺はポポの息を確認し、ポポの下に手を入れ、その手に力を込める。フィルは呆気に取られているようだ。

「む…無理だよ！！」

何としても連れて帰ろうとする俺に、フィルは近寄って制止させようとしたんだろう。俺の腕をつかんだ。俺はそれを振り払う。

「絶対無理だよ！！　重すぎるよ！！」

フィルは尚も俺に抵抗する。

「友達なんだろ！？」

俺はフィルに背を向けたまま、そう言い放った。フィルは「…っ」と言葉にならない悔しさを噛み締める。

これは追い討ちか否か、俺はもう一つ大きく声を張った。

「目の前に居る主人の友が、まだ生きようと必死に頑張ってるのに、見捨てる訳にはいかない！！」

その言葉を、フィルはどう取っただろうか？　厚かましい？　嬉しい？　勝手にしろ？　選択肢なんて幾らでも出てくる。フィルは何も言わずその場を動かない。

俺はハッと顔を上げる。真っ暗だ。無常にも既に夜。気温は寒いなんてもんじゃない。触れて初めて、ポポの体温が下がっているのが分かった。

何も出来ない自分が腹立たしい。

「零次…」

フィルは徐に俺の名前を呼んだ。俺は目の前の対処に忙しくて、「うん？」と生返事しか返せない。フィルが、俺の背中に手を置いて頭をつける。

一言…。

「ありあとう…」

十分だった。俺の目から涙が込み上げる。感謝への感激だった。俺は危うく零れそうになった涙を指で拭いた。

「でも…どうすれば…」

そう言って、俺がポポの額に触れた瞬間だった。眩い光が、ポポを中心に雪山を照らす。目を開けていられない。その光は数秒光ったかと思うと、ポポの姿を消した。

「！？」

代わりと言っては何だが、そこには女の子が横たわっている。正直何が起こったか理解できていない。しかし、その少女には、肩から胸にかけて切り裂いたような傷が。

こんな時にシリアスブレイクで悪いけど、臓器モロ見え…。

「よっ…よく分からないけど！！　取り敢えず下山しよう！！」

そのフィルの言葉で俺は我に帰り、少女を担いで足早に下山するのだった。

第2話・【厄災】が為に…　～展開には布石が大事！！～（後書き）

変更前を読んでくれやがって下さった皆様は、色々変わってて申し訳ないです。

最初はボツボツ読み返していたんですが、嫌になって変えまくりました。

特に0話と1話。

後書きには何かしら【面白い事】が必要なんではないかとか思いますが、不器用なんでそういうことは出来ませんｏｒｚ

活動報告も、何かしら仕様変更してありますので

良かったらどうぞ

寧ろ活動報告のほうが、気合入れてあったりして…

「……」

集会所は不穏な空気に包まれる。誰も、その口から言葉を発しようとはしない。

しかし俺は、それが何かは悟ってやれない。俺は何も知らないから。

「そうか…」

マスターは小さく、今にも消えてしまいそうな声で了承の言葉を漏らした。先生も、「あぁ…」と腕を組みながら、誰とも目線をあわさずに受け答えをする。そして、それっきり会話が途切れる。再び空気は地に落ちる。

「あっ…あの…」

俺は今出す必要があるか分からない勇気を行使して、会話を切り出した。誰も表情は変えない。その視線と、気の矛先だけが一斉に俺に向けられた。

「それって…？」

何故に、こんなにも不穏な空気が漂っているのか。それは数時間前に遡る。

ω

「っ！！　何が殺せだ！！」

下山するディアは、そう言って怒りを落ちている石ころにぶつけた。蹴り飛ばされた石ころは、蹴った勢いに合わない緩やかな放物線を描き、湖に吸い込まれるようにして消える。

（ちゃぽん……）

小さく音を立てて、消える石ころ。湖は、石ころの侵入を咎めない。

そんな事をしても、わだかまりは消えない。分かっていてやっている自分が、なお腹立たしい。

「クソッ！！　仲間になってくれたっていいじゃないか！！」

どうしようもない、ぶつけ様もない怒りの衝動。ディアは風の音しか聞こえない、薄く積もった雪に覆われた山を振り返る。別に何が見えるわけではない。そこにあるのは、ただ悠然と聳え立つ白い山。

頂きには…。

「……」

ディアは考えるのを止める。そして自分に言い聞かせる。

（いいじゃないか。厄災の氷の一角が消えるのだから。寧ろこれは有利なんだ。）

何度言い聞かせようと…全くもって納得がいかない。己の心は、己に正直に出来ているようだ。

「……」

ディアは再び歩き出す。殺すのではなく、生かす選択肢を見つけるために。

雪の上に、確かな足跡を残しながら。

ω

「零次君！！　急いで！！　急いで！！」

「分かってるって！！」

フィルが先陣を切る形で、俺は傾斜のある雪道を、誰だかいまいち確信の持てない重症少女を担いで疾走していた。この少女が何者かなんて薄々感づいてはいるものの、それが果たして正しいかどうかなんて分かったもんじゃない。だから、確信が待てないに繋がる訳だが。

「零次君！！」

「あっ…悪い…」

考え事のせいで、どうも足取りが鈍っていたらしい。フィルは今まで以上に大きな手振りで手招きをし、俺を急かした。

夜も更けた雪山。月の光を白い雪が反射し、昼とはまた違った表情を見せる。しかし、今はその幻想的な光景を、感慨深げに見入ってる暇はない。俺は…

（ぷにっ…）

一難さってまた一難…。大変だ…。もう何か、足元は危険がいっ

ぱいだ…。　今更何を踏んだかなんてどうせデジャヴだろうから、俺は確認もせずに、上層より少し薄くなった雪を踏みしめながら走る。

あれ？　さっきまで、前を疾走してたフィルが居ない…？

「……」

俺の体から、冷や汗が噴出す。いや、この状況だったら、普通の汗も冷や汗に一発変換だけどね。

「零…次…君？」

心なしか、俺の名前を呼ぶ幻聴が聞こえなくもない。俺は重症の少女をおぶったまま、引きつった笑顔で後ろを振り向く。

そこには、雪からゆっくり体を起こすフィルの姿。顔が引きつりながらも、彼女は笑みを浮かべている。体を起こすと、フィルは太刀を取り出した。

「絶対ゆるさないっ！！　歯を食いしばれぇぇぇぇぇ！！」

「制裁なら、素手にしてくれぇぇぇぇ！！」

雪山に響く、少年と少女の声。照らす月光が見せた影は、必死に逃げる少年と、太刀を振り回す少女。

二人は勢いそのまま、雪山を駆け下りていった。

ω

「ご苦労様…」

集会所の椅子に腰掛けたまま、マスターはクエストから帰ってき

たハンターに、激励の言葉を投げかけた。

「あぁ…」

帰ってきたハンターは、空ろな目で激励に生返事をするとマスターの正面に腰掛ける。そして重い防具を徐に外す。

何かあったと気づいてか、マスターは気を使うように、何も言わずに席を立ち、カップを戸棚から取り出した。

「コーヒーでいいかい？」

「あぁ…」

帰ってきたディアは、机に突っ伏し、そのまま顔を上げようとはしない。マスターはカウンターでコーヒーを注ぎながら、困ったように顔を顰めた。

しばしの沈黙。集会所という空間には、その二人しかいない。お互いに喋る話題はあっても、その機会を見出せないでいるようだ。

「はいよ…」

ただ、ディアがコーヒーを頼んだ事だけが、救いと言ったところだろうか。話を切り出す、きっかけ程度の役には立つだろう。マスターは、ディアの前に湯気の昇るカップを置く。しかし、ディアからの反応はない。

「何かあったのか？」

話を切り出すマスター。その質問に、ディアは何も答えない。マスターは表情を変えず、自分でいれたコーヒーを音を立てて啜った。

外は、空が明るさを取り戻しつつある。

「……」

ディアは依然として、机に突っ伏したまま身動き一つしない。寝ているのではないかとも取れるような体勢だが、その拳は強く、強く握られたままだ。

「厄災の事…か？」

「……あぁ」

マスターの呟きに、ディアはただただ、小さく頷く仕草を取った。マスターはディアの方に顔を向けようとはせず、コーヒーに映る自分を眺め、一息つく。大きな反応も無く、突っ伏すディアを他所に、マスターは感慨深そうに尚も続ける。

「１０年前か…。まだ私は４０を回った所だったか」

「……」

ディアは何も言わず顔を上げ、固い表情を崩し、熱が伝わって温かくなったコーヒーカップに両手を添えた。

マスターは、昔を振り返るようにゆっくりとした口調で話し出す。彼の頭の中には、当時の記憶が走馬灯のように蘇っている事だろう。

「ディア先生は……」

「１４歳…。丁度フィル位だったかな」

マスターは「そうでしたっけ？」と、歯を見せて茶化すように笑った。ディアは「そうだ」と、淡々とした口調で切り返す。その対応に、マスターは苦笑い気味だ。

今度は、ディアが徐に口を開いた。

「あの日は確か、昨日みたいな雨の日だったかな？　本当に一瞬だった」
「それこそ、爆風が吹いたようなもんでしたね…」

互いの脳裏には、きっと惨劇の記憶が鮮明に残っている事だろう。消そうにも消し難い記憶。体験したものにしか分からない。

「あの時は、まさかモンスターから攻めて来るなんて、思ってもなかったからな…」
「古龍種の、街への襲撃は情報としてありましたけど、まさか村にまで来るなんて…。それも一斉に…」

一層険しくなる二人の表情。ディアは少し冷めてしまったコーヒーを、何も言わずに飲み干し、そのカップをゴトッと音を立てて机に置く。

「また…奴らが来る。今日確信に変わった。」

そのディアの一言を聞いて、マスターは少し俯いた。先程と比べて、表情が多少ではあるが曇っている。しかし、その表情は驚嘆ではない。差し詰め、分かっていたか。ディアはそれ以上、その事について何も言おうとはしない。きっと、その一言で通じるものがあるのだろう。

「やはり…。レイ様の予言は確か…ですか」

やっとマスターは、言葉を搾り出すように言った。ただその言葉には、表情には、先刻とは打って変わって少しの曇りもない。何だか楽しそうだ。

ディアも緩やかな笑みを浮かべる。
「おや？　先生？　随分笑顔ですね」
「あん？　お互い様だろう？」
ディアは歯を見せて笑って見せると、大きく伸びをした。そして、笑い混じりの溜息と愚痴を漏らす。
「まぁ、そんな悠長な事も言ってられないけどな」
「その通りですけどね」
マスターは苦笑いを残し、スッと立ち上がると集会所の奥に姿をくらませた。どうやら、こんな朝早くから何処かに行くらしい。マスターが奥へ入ったのを確認して、ディアは言わないでいた言葉を耐え切れず漏らした。
「さて…後はあの少年がどの程度、フィルの力を…」
ディアは口にした言葉を最後まで言い切らず、柔らかな光を受け、一層白く輝く雪山に目を凝らした。相変わらずの絶景だ…。
ディアはもう一回、大きく伸びをする。
「上手くやってくれよ…」
そう一言呟いて。

ω

「さて！　零次君。何で頬が赤いのかな？」
「オメェが殴ったからだよ！！」

まだ頭に怒りマークを据えつつ、フィルは馬鹿でも分かる質問を、当事者である筈の俺に投げかけた。簡単に話すと、踏んだから殴られた。まぁ、簡単に話すと…というより、難しく話し様が無いわけだが。

「ほら！　集会所が目前に迫ってきてるよ！　怪我人いるんだから、人間救急車代表は急いで！！」

「何！？　その訳の分からない代表！！」

フィルは自分の言った事に責任も持たず、俺の突っ込みも交わし、何事も無かったかのように集会所への一本道を、ただひたすらに走っていく。アレだ…。放置プレイは真面目に死にたくなるね…。

おっ……？　あるぇ～？　確かに急いでいた筈だ。雪山を全力で駆け下りて、野道を怪我人背負って走って…。

しかし何故か後方から、まるで俺に後光を与えるかのように、煌びやかな朝日が！！　いや…きっと気のせいだ。

「あー！　日が昇っちゃったよ！　ちょっと零次君！　はりあっぷ！」

「知りたくなかった事実を言うな！！　そして覚えたての英語を、露骨に使うな！！」

俺は急かされたせいで、最後の力を振り絞って走る。最後の力を使う場所を間違っているのは、明らかじゃなかろうか…。限界を感じた辺りで、脳裏にティガレックスが浮かぶ…。あからさまな死亡フラグの化身。

こっちの世界で、走りすぎでまさかの過労死は……嫌だなぁ。

「ほら！　着いたよ！」

とか何とか言ってるうちに、何事も無く着いてしまいました。…そうだね。何事も無いのがきっと一番だよね。

俺はフィルの後に続いて、集会所内に入った。本当に何事も無く。

ω

『厄災対策会議』そう名目を置いた、関係者以外入ることを許されない会議場で、今日は珍しく声がした。

「ふぇっふぇっふぇ…。今回の厄災は、態々モンスターにけし掛けてきたのかい？」

長い髭と、髪の無い頭が対照的な老人は、円卓に並べられた椅子の一つに座り、不敵に笑ってその場にいる全員を見回した。

何処かの施設だろうか？　薄暗い室内には、円卓状に並べられた机と椅子。言ってしまえば、会議に必要な最小限のものしか揃っていない。いや、きっとそれで十分なのだろう。

あからさまに含みを入れた質問に、誰からも何も反応が無いと悟るや否や、老人は表情を固くする。そして、口を開いた。

「当事者であろうと責任は無いのかえ？」

先程の老人は、一人の若い男を見て、何かを知っているような口ぶりで語りかける。話を振られた男は、老人の方向に顔も向けず、ただ一点を見つめながら一言、「何が言いたい？」と呟いた。

「あら？　随分と惚けるのね。東の武人さんは…」

若い男の呟きに、老人ではなく和服姿の女が口を挟んだ。そして

何事も無かったかのように、何も言っていないかのように、女は老人に視線を移す。

「北のお爺様も、他人をあまり苛めないようにね？」

「ふぇっふぇ…。ハルは他人想いじゃのう」

女の優しさとは到底言いがたい、寧ろ脅迫とも取れる忠告にも、老人はその表情を緩めて穏便に対応する。お互いの関係はよく分からないが、二人とも相当な腕利きだ。

「責任は連帯。俺は北の者に言われた事を、確実に遂行したに過ぎない…。」

老人と女の話の間を割るように、若い男は威厳ある、重い声で言い放った。その時間差の回答に、女は頭を抱える。

「固いわねぇ…。アドリブはその場を盛り上げる要素よ？　お爺様の言った通りの遂行じゃ面白くない事に気がつかないの？」

女の言動に、若い男は耳を貸す様子も無い。女は、「協調性がないわねぇ…」と溜息を漏らした。

そんな中、いかにも重量のありそうな部屋の重い扉が、軋む音とともに開く。そこに居たのは、両腕が包帯で巻き上げられ、針金で留めてある少年とも少女とも取れる子供。

老人はその姿を見て、目を見開き、歯を見せて笑う。女も薄っすらと笑みを浮かべる。若い男は動じず、目を瞑っている。

「ごっ！　ゴメンなさい！　遅れてしまって…」

その子は、慌てて深深と頭を下げる。それを見て老人は、「構わ

ぬ」と抑えきれない笑みを浮かべ一言。女も上機嫌に、その子に席の誘導をしている。

「あっ…。　まだ一人来していらっしゃらないのですね？」
「前回運悪く、厄災に巻き込まれた村のマスターでしょ？」
「運…悪くか？」
「あん？　何が言いたいの？　東の？」
「……」

包帯の子の一言から始まった会話は、いつの間にか脱線する。女に東の者と呼ばれた若い男は、それ以上の会話に望まない。
女は舌打ちすると、荒げた声を取り繕うかのように、そそくさと席に着く。『運悪く』とはどういう事だろうか。知る者はここの四人と言った所か。
再び、その澱んだ空気を一層させるが如く、重い扉が激しい軋みを上げて開く。その来場者を、４人はただただ見つめる。

「悪いな」

そう言って入ってきたのは、見覚えのある厳つい、貫禄ある武人。その者の来場を、咎めるものは居ない。しかし、歓迎するものも居ない。

「さて…全員集まったのう」
「じゃあ、早速今回の厄災についての検討会議をはじめようか」

老人と女はまるで人が変わったように、円滑に会議を進めていく。その一瞬の変貌に、最後の来客者がくるまで、老人と女と共に居たあとの二人は何も言わない。まるで、今までもそうであったかのように。

そんな違和感ある空気の中、違和感を一掃するかのように老人が話し始める。

「さて諸君。１０年前もここに座っておった者は、当然じゃが１０年ぶりだな。懐かしい序に、自己紹介といこうか。初めて会う者も居るじゃろうて…。ワシは北国・ヴェルドの長、スウェル・ガルダンじゃ。」

そう言ってガルダンは自己紹介を切り出し、徐に喋り上げ席に着くと、今度は和服の女が立ち上がる。少々顔が引きつっているように見えるのは、気のせいだろうか？

「えー…。自己紹介とか柄じゃないけど、仕方ないな…。流れって奴か。私は南国・ティタルの長、ハル・アスカ。とりあえず、仲良くいこうじゃない？」

そこまで言い終えると、ハルは「ふぅー…」と溜息を吐いた。後ろ向きな溜息ではなく、あくまで前向きな溜息だ。そして、そのまま「宜しく！」と達成感有り気に言い放った。空気も読まず…。

それを横目に、若い男がスッと立つ。

「東国・フォルスの長、ジン・ミサカイ。本名は御叉海陣だ」

本人は、決して自己紹介に気分が乗らない訳ではない。そういう性格なのだろう。短く、端的に自己紹介を済ますと、そのまま席に戻った。その態度に誰も突っ込む事はしない。そういう空気の中なのだ。…ハルを除いて。

ジンが座るのを待って、包帯の子が緊張した様子で立ち上がる。

「あっ…えーっと…。西国・シャンドの長、シルフィー・レイです。

一応女です。最年少ですけど頑張ります！」

レイは大きく息を吸うと、そう意気込んだ。その行動には、ガルダンもハルも笑みを零す。

「さて、それでは１０年前の厄災の中心地である、西国のフィリス村のギルドマスター。自己紹介と当時の事を、合わせてお願いできるかな？」

席から立ち上がったのは、見覚えのあるマスターだった。

ω

「ただいま戻りました―！！」

フィルは明け方には合わない壮絶な声を出し、集会所の戸を蹴り飛ばして入った。とは言っても、フィル程度の力で壊れるはずもなく、扉は軋む音のみを残して、大きく開け放たれた。

「おー。お帰り」

何故かディア先生が、突っ伏しながら酒を片手に歓迎してくれやがっている。日本語になってない事は、あくまで仕様だ。

その上、先生はスゲェ病んでらっしゃる。そりゃその歳でＧ級クエス…。

「死ね」

「一体アンタ何者だ！？」

ディア先生は机に突っ伏したまま、俺の名前と死ねを交互に呟い

てらっしゃる。何だこの、激励の言葉よりも先に出る言葉の暴力は？
俺はただ、御歳に合っていないクエストは命取りだと…。

「ホント死ね」
「……」

もう何も考えるのをやめようかな…と本当に思った。
そんな要らないやり取りが終わると、フィルは突っ伏している先生に向かって、有り余っているストレスをぶつけるかのように叫んだ。

「まぁ先生！　そんな事より怪我人なんだよ！」
「あ～？　毛蟹？」
「け！　が！　に！　ん！」

フィルはディア先生に近寄って、大声で訂正する。ディア先生は耳を押さえながら、「何だ…。毛蟹じゃないのか…」とかったるそうに渋々腰を上げた。
毛蟹だったら、持って帰って食いますって…。

「狭い心だなぁ…零次」
「だから人の心を読むのは、よして下さい！」

ディア先生は「いいから患者を寄越せ」と、俺を煙たがるようにして、投げやり感溢れんばかりの作り笑顔でそう言った。俺なんてどうでもいいみたい。やっぱり俺の事…。

「嫌いだって言ってるだろ！」
「はっきり言うなぁぁぁぁぁ！」

鬱だ…。死のう…。
俺は仕方なく…いや、取り敢えず患者を集会所に急遽設置されたベットに、重症の少女を寝かした。
その瞬間、ディアの顔つきが変わる。

「おい、フィル」
「はい？」

暖炉の前で体を温めていたフィルを、ディアは険しい顔つきで呼んだ。一方呼ばれたフィルは、反射的に泣きそうになる。嫌な反射だ。

「えっと…何か？」

苦笑と怯えの混ざった態度で、フィルはそそくさとディア先生に近づく。本人が思い当たる先生の怒りは、間違いなく大声だろう。しかし、先生はフィルの方に顔を向けず、患者の傷を見ながら言った。

「鋼龍に会ったのか？」
「鋼…？　あーっ！」

フィルは思い出したように手を叩き、「会いました！」と一言叫んだ。そして一連の出来事と、雪山の現状、謎の少女の出現等を一気に話した。
フィルが足早に話し終えると、ディア先生は頬杖をついて何か考え出した。

「あの馬鹿…」

そして徐に、そう一言漏らす。それは耳を澄ましていないと聞き取れそうにも無い、小さな声だった。

「ディア先生？　何か言いました？」

一応、何を言ったかは聞き取れていた俺だけれども、露骨に聞こえていたと主張する質問は、控えるべきだろう。

俺の質問に、ディア先生は「ん？」と、惚けたような、何も言っていないとでも言うような疑問の言葉を一つ返す程度に留まった。

「そんな事より、この患者。鋼龍がやったのか？」

「いや…今の所、患者＝ポポが成り立たないので、露骨にハイとも言えないのが現状ですね」

俺の返答に、先生は「そーだったな」と適当に返す。何と言うか…心ここにあらず？　他の事を考えていると言っても、何ら可笑しくない。

「まぁ、何にせよ運がいいよ。傷口からの出血が、寒さで少なかったからかね？　心配しなくても、命に問題は無いよ。何か傷も治っちゃってるし。」

ディア先生は患者を一通り診て、そう零す。それを聞いて、取り敢えず安堵の感情がこみ上げてきた。　フィルに至っては、へなへなと座り込んでしまった。

「取り敢えず、治りかけの傷の応急処置はした。何で治ってるかと、この少女が何者かはまだ分かんないけどね。起きたら何か聞くといいよ。」

先生はそう言うと、胸ポケットからタバコを取り出して咥えた。それを見るや否や、フィルが近くまで行き、口に咥えられたタバコを抜き取る。

「禁煙ですよ？　せんせっ♪」

フィルは妙に上機嫌だ。しかしタバコを取られた先生は、妙に不機嫌だ。あー…。何か先が見えてそうでやだなぁ…。

そんな二極化した集会所に、少し険しい顔のお方がご帰還なさった。

「マスター！　お帰りー！」

フィルはそのままの上機嫌で、帰ってきたマスターに近寄る。マスターは少し困ったように笑って、明るい出迎えを受ける。

その光景を改めてみると、マスターがデカイ…。いや、フィルが小さいんだろうか？　５０センチ程度差がある。

「先生…。」

出迎えの余韻もそこそこに、マスターは先生に険しい表情を見せる。先生は悟ったのだろうか、組んでいた足を下ろし、椅子に深く腰をかける。

「ほら、お前らも座れ」

先生は俺たちにも、座るように促した。これは…何か大変そうだ。

「厄災がゆっくりと始まったらしい」

全員がしっかり座ったのを確認すると、マスターは口を開く。
そして、一番最初の会話に繋がる訳だ。

「……」

集会所は不穏な空気に包まれる。誰も、その口から言葉を発しようとはしない。
しかし俺は、それが一体何を意味するものなのか、悟る事が出来ない。その件について、きっと俺は何も知らないから。

「そうか…」

先生は小さく、今にも消えてしまいそうな声で了承の言葉を漏らした。マスターも、「あぁ…」と腕を組みながら、誰とも目線をあわさずに受け答えをする。そして、それっきり会話が途切れる。再び空気は地に落ちる。

「あっ…あの…」

俺は今出す必要があるか分からない勇気を行使して、会話を切り出した。誰も表情は変えない。その視線と、気の矛先だけが一斉に俺に向けられた。

「それって…？」
「厄災の事か？」
「はい…」

ただ淡々と、先生は俺に言い放つ。しかし、名前だけ『厄災』と言われてもピンと来ないのは、当たり前といえば当たり前だろうか。

「厄災ってのは、モンスターによる人狩りだよ。簡単に言うと反乱？」

フィルが、口元だけをかすかに緩めてそう言った。フィルの言っている事が、よく分からない。そもそもモンスターハンターってのは…

「お前は何も知らないから、理論だけを並べられるんだ」

先生は俺の心を読んだか否か、俺を睨んで重圧のある口調でそう言った。その目は笑っていない。

『何も知らない』

確かに俺は何も知らない。でも…

「厄災ってのは、食い止められないんですか？」

食い止められたら、もう既に手を打っている。それが帰ってくる返答だとは、百も承知の上でだ。情報の増えない質問は無益だが、会話が繋がらない。

しかし、帰ってきた質問の答えは簡単かつ明快で、単純なものだった。

「主犯格のモンスターを狩る。以上だ」

「……」

そりゃそうだ。モンスター全員をしょっ引けば、それで終わりだ。

しかし、到底出来るようなものなんかじゃない。再び会話は無くなってしまった。
集会所の中。古くから置いてあるのだろうと思われる時計の、秒読みの音だけが、静かな集会所に小さく響く。

「そういえば…」
「どうした？　マスター？」

そんな静かな集会所で、突然何かを思い出したかのように、マスターは口を開いた。先生は依然として、誰にも顔を向ける事はない。ただ、疑問を投げかけるだけだ。

「実は、変な噂を耳にしてな。」
「変な噂？」

これには先生も、マスターに顔を向ける。マスターは「あぁ」と一言。

「実は四方国（しほうこく）で、草食モンスターが全て消えたらしくてな、厄災の為に肉食モンスターが全て蓄えに回したんじゃないか…ってな話だ」
「……」

先生は腕を組んで、何か考え出した。その間に疑問の解消に努めようと、俺は重い口を開く。

「四方国？」
「北・東・西・南の四つの国の総称だよ。因みにココは西国。」

フィルは、「どうだ」と言わんばかりの顔で説明を終える。しかし、俺の反応が無いと分かると、少し渋い顔をしてしゅん…として

しまった。
しかし、フィルはその落胆も嘘のように、元気に手をあげて自分の質問する。
「マスター。その噂いつ聞いたの？」
「…？　今朝だが？」
マスターは、その意味不明な活力あるフィルに、多少引き気味だ。そんなマスターを他所に、フィルは「もしかして…」と俺を見る。俺は何が「もしかして」なのかさえ、分かっていないもんだから少し戸惑う。
「何か、心当たりがあるのか？」
人称をつけない質問が、マスターから飛んできた。大方、俺たち二人に向けた質問だろう。心当たりが無いので、答えられない俺を尻目に、フィルが一言漏らした。
「そこの子…」
フィルが指差したのは、ベットで安らかな寝息を立てている少女。何となくピンと来たが、多少の矛盾点があるので、考えは保留だ。
しかし、フィルは強気に出た。
「あの子ポポだよ！」
集会所内に、その声が響く。時計の秒読みなんて、いつの間にか聞こえなくなってしまっていた。
しかし、それでは『彼女がポポである』という事と、『草食モンスター全ての消滅』とが、関係している事にはなっていない。

「間違いないか？」

考えてる俺なんてどうでもいいとでも言ったかように、先生は動揺した様子も無く、固い表情を崩さないまま、フィルに一言投げかけた。何を思ったか、フィルは自信満満に首を縦に振る。俺は開いた口が塞がらない。

「まぁ…怪我人だが、あの子を起こして問い質してみるか…」

そう言うと先生は徐に立ち上がり、ベットに駆け寄った。次の瞬間だった。

（ぱちーん）

頬を張った。それも結構な勢いで。俺たちは、それこそ驚嘆の色一色に染まる。集会所内の空気は、現在取り返しのつかない事になっている。、

「おい。起きろ」

無理やり、文字通りたたき起こされた少女は、半泣きでベットを降り、椅子に腰をかける。何か散々な子だなぁ…。

「んで？　アンタ誰？」

何故かディア先生は、恍惚の表情を浮かべて質疑に入る。

……絶対不味い。

「……」

少女は更に泣きそうになっている。見かねたか否か、フィルが質疑に入った。

「ポーちゃん？」

（……コクン）

少女は、少し躊躇った様子で頷いた。久しぶりに聞いたその名前は、少女自身もあまり好ましくないという事の表れなのだろうか？

しかし、何回聞いてもしっくり来ない名前だ。マスターもディア先生も何だか、どういう顔をして良いか分からないようだ。

「喋れる？」

（コクン）

それを確認した後、取り敢えず満場一致で、少女が安心するのを待つことになった。

そりゃ、見知らぬ土地でいきなり、頬を張られたらビックリするわな。

……見知らぬ土地で、いきなりティガレックスに吹っ飛ばされた俺って一体。

「大丈夫？」

「はい…」

一時中断から約１０分。随分と状況の呑み込みが早い子だ。しかし、俺には勝たせん。

「えっと…。ポポでした」

「あー。そう」

そうとしか言い様が無い。取り敢えず少女はポポだったわけだ。でも、自己紹介で名前紹介が過去形ってのは、中々の事態じゃなかろうか。

「何故人間になってしまったかの記憶は無いのですが、きっと其方の方に触れられた時かと…」

そう言って、少女が指差したのは俺だった。勘弁してくれ。

「間違いないかい？」

先生が念を押すように聞く。少女は「多分…」と曖昧な返事だ。しかし、その返事にフィルが付け足す。

「私はポーちゃんに触れてないし、触れてたのは零次君だけだったから、絶対そうだよ。」

「そうか…」

先生は俺とマスターを交互に見て、ニヤッと笑った。マスターも不敵な笑みを浮かべる…。絶対に…よからぬ事だ。

「草食モンスターの失踪については分かられるか？」

マスターは先生とは違って、優しく問いかける。これには少女も、心なしか答えやすそうだ。流石は高齢者パワー。

「私一人で多分草食の全てです。」

「……」

集会所は一気に静まった。少女は、一瞬にして変わった空気に当てられてうろたえている。正直、言ってる事が意味不明すぎて、理解に苦しむ。
だから！　俺の理解能力の乏しいせいじゃないってば！
「えー…。つまり、君一人で世界の草食モンスターって事？」
「単純な言い方をすると、そうなります。零次様のお力かと…」
零次様…。いや、何も言うまい。みんなの視線が痛いが、何も言うまい。
「ほぉ…」
先生は俺に向かって、半目でにやけながら一言、こう言った
「お前、肉食モンスターを一人に統合できるんじゃない？」
「厄災も、一発で解決だよ！」
先生とフィルは、二人揃って妄言を吐く。訂正しようかと思ったが、その必要は無かった。
「いえ…。草食は、基本的に個々に個性的な能力が無いので、私一人に統合出来たんだと思います。」
「ん？　となると？」
「大型系や、肉食系のモンスターは個人色が強いので、はっきり言いますと無理だと思います。」
少女の見解に、フィルは「なーんだ…」と、落胆の言葉を漏らす。正直ぶん殴りてぇ…。
そんな中、フォローかどうかは確かじゃないが、ある意味止めを刺

すような事を少女は一言で済ました。

「種類ごとに統合して人に変えれる能力なら、種類ごとにやれば良いんです。」

「え？　俺の能力限定されたの？」

何か妙に理不尽だ。取り敢えず、訳分からん。理解力の足りない事が証明されてしまった俺に、先生が付け足しに入る。

「つまり、お前はモンスターを人間に出来る訳だ。」

「簡単に言いますね…。」

「本人に似て、単純な能力でよかったよ」

非常に不本意な言われ方だ。しかし、もう自分でも理解が追いついていないので、何でもいい気がしてきた。

「取り敢えず、零次様が頑張ってくれれば、皆様の言う『モンスターの厄災』は止まります。」

「ん？　どういう事だ？」

「人間になったモンスターが、果たして私みたいに比較的友好的であるかどうか…」

「なるほど…」

一連の事を聞いて、先生は『うーん』と数秒唸ったかと思うと、ポンと肩を叩いた。

「よし。頑張れ零次。」

少女の説明を聞くや否や、先生は俺を指差しとんでもない事を言った。しかし、マスターもフィルも首を縦に振って納得気味だ。

待て待て待て！！　無理もいいところだ！！　一体何種類居る事か…！！

「無理って言うな居候。保護してやった分働け。」

先生は俺にそう一言、命令とも脅迫とも取れる言葉を言い放つと、さっきまでの緊張が嘘のように、マスターの持ってきた酒を嗜み始めた。

「労働と賃金が見合っていない！」

「それを決めるのはあくまで私だ」

俺の主張も木っ端微塵に砕け散る。この世界に来る事によって、既に地獄への片道切符を切ってしまっていたようだ。

「案ずるな少年」

ディア先生は、そう言って絶賛落胆中の俺に笑って見せた。そしてそのまま続ける。

「死んだら骨くらい拾ってやるから」

「せめて、生きてるうちに解決して！」

大変な言われ方をしたために、ついつい声を張り上げる。ディア先生は再び女神となって、俺に満面の笑みを浮かべて下さった。

…いや。悪魔だ。間違いなく悪魔の囁きだ。

「お前の力で、全てのモンスターを女の子にしてしまえば、クエストから帰ってくるたびにハーレムルートを攻略し放題だぞ？」

「アンタ一体何者なんだ！」

ディア先生は「勇者にはお似合いのG・Jフラグだ！」と、暗示をかけるかのように念を推す。
しかぁし！　騙される俺ではないわ！

「リオレウスやテオ・テスカトルは、完璧にゴツイお兄さんになりますって！」
「お前の性欲は、元の性別をも変える！」
「あんたの目に、俺はどのように映ってるんだ！」
「そんな感じ」
「考えを改めろぉ！」

ディア先生は俺にもう一度念を推す。ただ一言。俺だけに聞こえるように。
その時の心から嬉しそうな…いや。人を弄るのが、好きで好きでしょうがないような…あの顔は忘れないんだろうなぁ…。

「世界はお前が救うんだ」
「！？」

こうして俺のこの世界での生活は、本当の意味でやっと幕を開けたわけだ。

ω

後日談。

「ポーちゃん…じゃ駄目？」
「えっと…フィル様。もう少しお考え頂いてよろしいでしょうか？」

フィルの家。フィルと俺と少女は、一応アイルーキッチンとして使う筈の部屋で、少女の名前の思案に明け暮れていた。アイルーキッチンと言っても、アイルーは俺なので、言ってしまえば俺の部屋だ。

「ポッちゃん…とか」

「フィル様…」

厨房にたって早数日。料理にも慣れてはきたが、今日から食事が一人分増える。そして俺の部屋が狭くなる。まぁ両方とも、少女が原因。

そんな突然の来訪者。彼女に何を思ったか、ディアはメイド服を用意。……悪か無いけど、ちょっと狙いすぎじゃないか？　そんな不安がよぎる。誰に言うでもなく、作者に。

「ポポポーポ・ポー〇ポ？」

「……」

見てる限りでは、今日中に名前が決まりそうも無い。少女は頭を抱えて、苦笑気味に笑い、溜息をついている。言ってしまえば重傷だ。

「とは言ってもねぇ…」

「レパートリーの問題とか、超越してしまいましたね」

確かに。フィルのレパートリーの少なさは、常軌を逸している。第一、『ポ』を絶対に付けなくてはいけない訳ではない。あくまで彼女は一人で、草食モンスターの全てなのだ。

「……クウェル？」
「どこのジムですか？」

何故それが出たのか…と突っ込むと、絶対にややこしくなる事は保証済みだ。
名前の決まっていない少女は、少し疲れたように頭を抱える。

「…アルト」
「はい？」

何故か普通とは言いがたいが、マシな名前が陳列された。少女はポカーンと口が開いている。まぁ、無理も無いかとは思うが。

「アルトは？」
「えっ…」

そのまま、少女は俺に顔を向ける。勿論、俺が口出しする事は何も無いので、ただただ頷く。……あれ？　頷いちゃったぞ俺。

「今日から私は、アルトで良いんですね？」

案の定…というと響きに難があるが、アルトと名前のついた少女は嬉しそうにフィルに顔を向ける。
その表情にはフィルも満足げだ。

「宜しくね！　アルト！」
「はい！」

そんな温かな食卓になったところで、俺は出来た夕食を運ぶ。此方の食材は、癖があって少々慣れないと使いにくい。

「わぁー！　何かよく分かんない食べ物だー！」
「人間はこんな不思議なものを、食されるのですか？」

言い方は酷いが、此方の世界には『オムライス』は無いんだろうか？　俺の運んだ夕食は「不思議・よく分からない」で、片付けてしまわれそうになっている。

「オムライスってのなんだが…？」
「え……？」
「へぇ……」

二人とも反応がよろしくない上に、フィルに至っては顔を顰めている。

「見た目が……個性的だね」

フィルの一言だ。翌日からは、不本意だけどアルトが飯の担当になった。これが上手いのなんのって…。くっ…悔しくなんかないやい！

まぁ、そんなこんなで交わされた夕食談義だが、フィルの一言でちょっとアルトがいじけたのは言うまでもない。

「そう言えば、何でアルトにしたんだ？」

俺はフィルにその事について聞く。少しは気になるところだ。いきなりそんな名前が出てくるとは、到底思えない。

見た目はあれだが、意外と味が普通だったオムライスを口に含みながら、フィルは要らん事を口走った。……俺の質問も悪かったと、反省している。

「ディ○ガイアってので、適当に名前が決まるシステムで、適当にキャラ作ってたら出てきた。」

アルトは泣き出してしまった。

F

in……？

第3話・一家に一人、家庭用メイドさん　～狙いすぎが丁度良い　by ディア～

最近考えることがあります。

「あれ？　この調子で女の子増えていったら…」

俺の少ないキャラ設定の中で賄えそうに無いです／（＾o＾）＼

まぁ…その都度頑張りますが、この後【展開】どうしようかしら？

大体の物語の終わりは皆さん掴めていると思いますが、二番煎じをこれからもどうぞ。

よろしくお願いしますね＾＾

第４話・強制的鋼龍戦！！　～ディアの野望・始動編～

「零次様！　朝になりましたよ！」

朝、眩い日差しに照らされる中、叩き起こされるなんてよくある光景の一つだ。しかし何故だろう？　まだ目が覚めきってない俺にも、現在進行形で外に見える空が薄暗いのがよく分かる。

しかし、俺を起こすアルトは元気だ…。必要ないくらい元気だ…。

「もう少し…」

俺はアルトの呼びかけを、一言で一蹴。そのまま布団に潜り込む。

何と言っても、昨日は散々歩き回って走り回って…本当に一日でアレだけの内容を、こなしてしまったのか不思議な位だっていうのに、こんな朝っぱらから起きてられない。

しかし、少女は無情にも一つ、安眠阻害の最終警告を宣告する。

「ディア殿が、『起きない場合は私を呼べ。早朝バ〇ーカに、弾込めてぶっ放す位なら見舞ってやる』と嬉しそうに言っていましたが、いかがしましょう？」

「謹んで起床させて頂きます」

俺はサッと布団から出て、床に正座し土下座した。あくまでも土下座はノリというか何と言うか…そんな感じだったのだが、その光景に少女は「お止めになって下さい！」と慌てている。……いいなぁ。何にでも丁寧な子は…。

俺は大きく伸びをして立ち上がり、掛けてあった部屋着を着ると、アルトと共にキッチンに出向いた。しかし、肝心なヘッポコ主の姿が見えない。

「えーと…。アルトさん？」
「……」
最早アルトは無言の応答だ。その対応からも察する事が出来るが、まぁ…案の定というか、当たり前というか…。まだ半分夜だし…。
「起きないんですね…」
「……（コクン）」
アルトは少し眉を細めて、困ったように頷いた。俺は額に手を当てて、溜息一つ。
行き着いたキッチンは、使用者の性格を表すが如くきっちりと片付けられ、木目の美しいテーブルには、今朝作ったであろう朝食が、立ち上る湯気からその温かさを物語っている。
この村は西の国でも北寄りらしく、今日みたいな秋の朝は冷える事が多い。体を温める意味と、目覚ましの意味を込めて、温かい料理は温かいうちに食べたいのだが…。
「アル…」
「主よりも先に、従者が朝食に手を付けるなんて考えられません。」
この通りだ。何度言ってもこの通りだ。毎日のやり取りの一環なので、もう慣れたやり取りではあるが、何か固い気がしてならない。
仕方なく、俺はいつもとは違う新しい行動に出る。それなりにグッドなアイデアだ。
「あー…。じゃあ俺が起こしてく──」
『ガッ！！』

起こしに行こうとしたんです…。でも、「起こしてくる」と言う前に、俺の肩はアルトによって超人的なパワーで掴まれる。
え？　何このパワー？　サイ〇人？

「主、ましてや女性の寝室に侵入しようなんて、不届き千番です。」

その目は…狩る者の目だ。言ってしまえば、ティガレックス辺りの目だ…。俺は、「そ…そうですね」と苦笑いを浮かべて、そそくさと数歩下がる。
すると、アルトは肩から手を離し腕を組む。皆大好き説教の時間だ…。

「主の許可無しに、プライベートルームへの侵入はなりません」
「…朝飯が昼飯になりますよ？」

そんな説教も、俺は一言で回避に徹する。その言葉にアルトはピクッと反応するも、少し考えた後「それも運命」と、訳の分からん事を言って、朝食に異物が混入しないように、器を布で覆い始めた。
アルトは悪い奴じゃないんだろうけど、ちょっと取っ付き難いかな？　そんな事を考えつつ、俺はその作業を手伝う。

「あっ…！　そんな…、零次様の手を煩わせるような事は…」
「そう思ってくれるなら、主を起こしに行ってくれ」
「それとこれとは、話が別です」
「……上官命令だ」

そう俺が改まって言うと、アルトはハッと何かに気がついたようで、その場で考え込んでしまった。一応、序列的に上の俺の命令を聞くか、もしくは己の主の安眠を阻害するか。選択肢はその二択だ。
しかし、その考えにはすぐに答えが出たようだ。

「主の命が絶対です」
「だろうと思った」

分かりきっていた答えに、俺は溜息混じりに笑って見せた。別に笑う気は無かったが、その場で溜息のみを見せると、あくまで落胆としての受け取りになってしまうのではないかと思ったからだ。

俺って以外といいやつだよなぁ…。

「そういう考えを生む、下心さえなけりゃな」
「！？」

聞き覚えのある声がした。同時にあんまり関わりたくない声だ。俺は驚きを押さえて、満面の笑みで答える。

「貴女も、その性格が無ければ…」
『ズドォォォォォォォォォォン！！！！！』

俺が言い終わる前。そして何を言うかも分かってない時に、ディアはバズーカを俺の頭上向けてぶっ放した。当然、天井は砕け、木々の破片が雨のように頭上に降り注ぐ。

「痛い！！　痛い！！」
「おはよう諸君」

俺の悲鳴も他所に、ディアは何事も無かったかのように表情を清々しい顔に切り替えて言う。朝から手厚い御持て成しだ。今となって、朝食を覆った事には意味があったのだと感慨深く思う。

しかし、何事も無くない！！

「ちょ！！　どうしてくれるんですか！？」
「あ？　何がだ？」

俺の叫びも己の前で一蹴し、ディアは機嫌良さそうに、取り出したタバコに火をつける。どうやら、この人の前で遠まわしな言い方は通じないらしい。俺は風穴の開いた天井を指差す。するとディアは、視線を風穴に移し一言。

「あぁ…。秋の空は高くて澄んでて綺麗だ…」

このざまだ。分かりきった事と言えばそれまでなのだが、修復作業を任される方の身にもなって貰いたい。客人は俺の筈なのに、骨の折れる作業だ。

まぁ、彼女には何を言っても無駄だと分かっている。だからとっとと帰って貰うために、俺は用件を聞く。前例の無いバズーカを除けば、朝のやり取りとしてはもう慣れたもんだ。

「で…？　一体何の用ですか？」
「んあ？　あぁ！　そうだったな！」

ディアはポンっと手を打つ。

目的を忘れると言う事は、きっと些細な事なんだろう。…いや。そう信じたい。適度な、お使い程度の用件である事を切に願いたい…。

考え通りにいかないのが、『現実』な訳ですけど。

「ちょっと、雪山まで付き合ってくれ」
「やです」

俺の即答に、ディアは眉間にしわを寄せる。いつもの話だ。内容

を明白にしない用件は、明かせない程度不味いものだと相場が決まってやがる。ましてや目の前にいるのは、俺にとって人生最大の厄災…。

「アルト」
「はっ！！　はい！？」
「…何もそこまで驚かなくても」

ディアに呼ばれたアルトは、足を震わせながら恐る恐る「何でしょう？」と、問い直す。その問いにディアは一言、相手の返答なんてどうでもいいかのように言い放った。

「零次借りるよ」

そう言った次の瞬間には、俺の襟首は相当な力で掴まれ、体は宙に浮いていた。そして、そのまま窓からダイブ。きちんと着地したディアに対し、ダイブした瞬間に、ディアに手を話された俺は中々のスピードで宙を飛び、打撃音と共に地面に喧嘩を売る羽目になった。

「ほら！　ぼさっとすんな！」

ディアの妙に楽しそうな声が、今も頭をよぎっている。

ω

「マスター…。やっぱり…」

静かで小さな一室に、そのか細い声は響いた。
外はまだ暗さの残る夜明けだ。遠くに見える朝日が、漠然と室内の

人影を照らした。内一人は、見覚えのある老武人。その老武人が、声の主の内容の見えぬ質問に、あたかも全てを知っているような口ぶりで返答した。

「えぇ。あの会議…。ほぼ間違いないと見て良いでしょう」
「奴らはやっぱり、狙ってるんだね…
「……と言うよりは、完全に潰しに来たのでしょう」
「前回失敗に終わっちゃったから？」
「えぇ…。多分…」

両腕の包帯と、その包帯を留める大きな金属具が印象的な少女は、悲しそうにその瞳を潤ませる。少女の向かいに座っているマスターは困った顔をして、その少女の肩に手を伸ばし、置いた。

「でもレイ様。大丈夫です。予言の者がいます」
「優しいんだね…。マスターは」

レイ。そう呼ばれた少女は、そんな慰めの言葉に一つ生返事を返すも、顔をマスターに向けようとはしない。ただただ、俯くだけだ。ズボンには、時間と共に涙でシミが出来てきた。

「マスター…」

その俯いた状態のまま、レイは涙で震える声を振り絞って一言告げる。

「皆…死んじゃうよ…」
「……」

そのまま小さく咽びながら泣き続けるレイに、マスターはただ目

を細めるのみ。何も言わない。

「見えるんだよ…。再び来る…厄災には…ゴホッゴホッ！！」

「レイ様！！」

大きく咽るレイ。涙を溜めたその大きな瞳は、今にも光を失いそうなほど弱く、空ろだ。マスターは、その身に何が起こっているか知っている様子で、背中をさする。

途切れ途切れの文。内容を把握するには大事なところが抜けている。再び話し出そうとしたレイをマスターは止め、座っていた椅子からそのまま抱き上げると、ベットに寝かした。

「会議…無理…しちゃったかな…？」

「そんな…たった2時間で…」

レイは相手の顔を窺うように、上目遣いにそう言った。マスターはレイの言葉にただただ、心からの一言を漏らした。

「あれからもう１０年…。貴女はとっくに限界を超えている…」

「わぁ…もう１０年か。我ながらよく生きたよ…」

レイの精一杯の他人を案じる笑顔に、マスターは今にも溢れそうな涙を堪える。レイはそんなマスターの頬に、小さな、細い手を当てる。その手の温もりは、薄く儚い。

「ゴメンね…マスター…。１０年も…。」

「もうお喋りになられませぬ様」

レイの謝罪をマスターは払い除け、肩の辺りまで布団を掛ける。そのままレイは、何も喋らずに天井を見つめ続けている。

その瞳は一体何を見ているのか、誰も知らぬ未来か、あるいは人知れぬ過去か。ただ、その悲しみに満ちた瞳が映す結果は、どっちにしろ悲愴な結末だろう。
マスターはその表情を悟ったか否か、何とか元気付けようとする。

「レイ様。これは私の独り言です」
「？」

そう言いながらベットの脇から離れ、窓から外を見て話すマスターを、レイは目線で追っかける。何も言う事は無い。何たって、あくまでもマスターの独り言なのだから。
レイはマスターの気遣いを、目を細めて小さく笑った。無論、嘲笑ではない。マスターの素っ気無い態度が、良い意味でどうも憎らしかった。何と言うか、不器用で滑稽に見えた。

「レイ様と…」

昇って間もない朝日が照らす室内には、マスターの自慢話と、少女の声にはならない笑みで溢れていた。
ここは、西国・シャンドの中枢都市。都市中心に、轟々と聳え立つ城の一室。その場には、重い身分の隔たりは感じられない。ただ二人。ただ二人が『厄災』という、西国を全世界の敵に回す大きな戦乱の為、動き始めている。

ω

「くしゅん！！」

雪山に差し掛かり、部屋着で連れ出されてきてしまった事を、酷く後悔している。しかし、着替えてる余裕なんて、絶対になかった

のも紛れも無い事実だ。
完全に強制参加を余儀なくされたクエスト。俺のくしゃみに気がついた暴君が、不思議な事を口走る。
「おう？　そんな格好で飛び出してくるから…」
「誰のせいですか！！」
俺の精一杯の反論をディアは鼻で笑い、再び進行方向であろう方に向き直り、そのまま吐き捨てるかのように一言。
「お前」
「……」
強制参加させられたクエストの遂行より、目の前にいる暴君の討伐の方が大事ではないのだろうか？　どうやら、俺の中で既に厄災は始まってしまっているようだ。
まずは、目の前を我が物顔で歩くゾ〇を何とかしなければ…。
「誰がゾ〇マだって？」
「！？」
ニッコリと満面の笑みで振り返ってくれたディアに、俺はかける言葉も無い。顔は確かに笑っているようにも見えなくないが……、間違いない。あまり機嫌が宜しくない。
しかし、ディアは俺の予想を遥かに上回った行動に出た。
「……はぁ」
「？」
突然笑顔を崩し、一つ溜息をつくと雪を鳴らして歩き始める。何

のお咎めも無しだ。……それはそれで、嫌な予感しかしないわけだが。

「えーっと…？」

ディアは俺の間を置いた投げかけ式の疑問に、心なしかちょっと振り向いて、まるで無視するかのように、何も言わずに歩みも止めない。

絶対におかしい。それだけが俺の思考を占拠した。

「零次」

「はぃ！？」

突然の呼びかけに、俺は不意を突かれて素っ頓狂な声を上げる。その反応には、ディアも半目で軽蔑でもするような視線を俺に送る。

「……」

「……」

何も言わず、胸に前で腕を組み、ただ俺の目に立ち尽くすディア。無論その空気に当てられているのか、俺は何故か喋りだす勇気が出ない。

ディアは「あーっ！！」と頭を掻きながら一言絶叫すると、俺の両肩に両手を振り下ろす。トンでもない負荷が掛かったのは、言うまでもない。

「零次！！」

「！？」

声が出ず、ただその気迫に押し込められる。ディアはそのままの

空気で1コマ置くと、たった二言だけ口にした。

「先に謝っとく。悪い。死ぬな」

「へ？」

何を言われたのかいまいち分かっていない俺に対し、ディアはそれ以上何も言わず、深くなった雪を再び鳴らしながら歩き始める。

俺が、これは絶対に只事ではないと悟った瞬間だった。

ω

「おはよー……って！！」

「あぁ…。フィル様…。おはようございます…」

フィルは大きく空に向かって開け放たれた天井と、その下に散らばった残骸。その結果、疲労感に苛まれる事になったアルトを見て、こっちはこっちで只事ではなかった事を悟った。

「一体何があったの？」

テーブルで頭を抱えているアルトの横に座り、なるべく刺激しないように尋ねる。しかし、一方のアルトは「ゴメンなさい…ゴメンなさい…」と、朝から相当な病み具合だ。

聞かなくても、見なくても大体分かる。何があったかは、何となく把握できる。こんな事するのはあの人しかいない…と思う。

「ディア先生？」

「……」

この村の、リーサルウエポン的なお方の名を口に出す。しかし、最

早頷こうともしないアルト。まぁ、無言から察する事は出来る。今までの推量が、確信に変わった瞬間だ。
しかし、よくも朝から無断で人の家を破壊してくれる。断ったからって、ＯＫする訳でもないのは明白な事実だが。

「よし！」

取り敢えず一言。何も意味はない。強いて言えば話題を切り出す方法が見出せないから。そんな主人の一言に、アルトはその無気力な眼差しを向ける。

「ご飯にしようか」
「……はい！」

アルトは今までの死んだような目が嘘のように、輝かしい目を向ける。よっぽどお腹が減ってたのかな…？

「んでさ」
「？」

話題を切り出そうと試みたが、アルトの口いっぱいに食料が詰め込まれているのを見て、一旦間を置く。あのまま喋ったとして、返答が返って来た時は、間違いなく口からマシンガンがぶっ放される事になっていたろうに。
アルトが口の中の物を呑み込んだ事を確認して、足りない人の事について触れる。地の文も入り込めないくらいの、マシンガントークで。

「下僕は？」
「げっ…零次様ですか？」

「あぁ。そんなの」
「そんなのって…」

「あと、アレに『様』とか付けなくて構わないよ？」
「扱いが日に日に雑になっていってますよ！？」

「構わん。第一、私が全てだし」
「日に日にフィル様のキャラがとんでもない事に…」

「まぁ、型に嵌らないのが私の精神論？」
「型がぐちゃぐちゃで、取り返しつかなくなったんですね…」

「中々酷い事言うね…」
「あぁ！！　泣かないで下さい！！」

「いや…。泣いてないけどさ」
「あっ！！　そうですか」

「取り敢えず、固いのは抜きよ。零次に新たな呼び名を！！」
「えっ…。ではなんとお呼びすれば…」

「零次」
「滅相もない！！」

「えー…。じゃあ、何か当り障り無い敬称でもどうぞ」
「……さん？」

「零次さん？　普通すぎだね。読者が反応に困る」
「読者！？」

「いや…何でも無いのよ？」
「はぁ…。では何と呼びましょう…」

「ほら！！　何かこう…ケミカルなやつ？」
「なんですか！？　その不思議なニュアンスは！？」

「ほら！！　アルたん固いから」
「アルたん！？」

「アルトって何かこう…ね？」
「貴女が付けたんじゃないですか！！」

「いや。そうじゃなくてだな…。そう！！　友好関係を深めるためにも『あだ名』は大事！！」
「と…言いますと？」

「零次にも、あだ名の対応を！！」
「むっ！！　無茶ですよぉ！！」

「無理が通れば、通りが引っ込む！！」
「無理と無茶は違います！！」

「大差の無いものは一緒！！」
「大きく溝が出来るぐらいの、差が生じますって！！」

「ごちゃごちゃ言うと、生肉抉って焼くよ！？」
「理不尽すぎます！！」

「ほら！！　何かとって付けたような対応しかしてくれない、零次

との交友の為にも！！」
「とって付けたって…。うーん…。でもあだ名って、そんなポンポン出てくるようなモンじゃないですよ？」
「簡単だよ！！　下僕だのオトモだの異人だの…」
「取り敢えず『あだ名』と『中傷』の区別をしましょう」
「大丈夫！！　ドMには十分すぎる幸せ」
「ドM！？」
「零次の新設定。『ドM』」
「勘弁してあげてください！！」
「時期に分かる…」
「まずはそうならないように、具体的な措置を取ってください！！」
「でも、オトモの性格『ドM』って…。役に立たないとか言うレベル、軽く超越してるよね」
「正直、モンスターとしても関わりたくないですね」
「よし！！　命名『ドM』」
「嫌ですよ！！　呼ばれるほうはドM設定があるから良いかも知れませんけど、呼ぶ方の身にもなって下さい！！」
「ドSになれば良い！！」
「ドM問題が解決してません！！」
「ドMのオトモに、ドSのコックさん。……私ハンター辞めようかな」
「フィル様！？」

アルトに驚かれて我に帰る。

（あれ？　そーいや、私も『様』付けられちゃってるよね？）

ここで一つ。この場の勢いに任せて、マシンガントーク2回目。

「おぅ！！　そうだ！！　ドMの前に、私のあだ名考えてよ」

「フィル様の…ですか？」

「不服？」

「いえ！！　そんなことないです」

「よーし！！　ドンと来―い。」

「えっと…」

「ほらほら！！　何でもいいよ！！」

「フィル様？　本名の方は？」

「ん？　エリシア・フィルフォード」

「あぁー。だからフィルなんですね。」

「エリシアって、まーべらすの某ゲームと被るじゃない？」

「！？」

「第一、あれ最後は『マナ・マテ〇アル』の連発で、何とか倒せる位っしょ？　途中回復とかビームとか雷とか…。初プレイ時には、鬼畜過ぎて泣いたわー。それこそ『アンタがコンティニュー出来ないのさ！！』位の勢い。あっ…ネタバレ？」

「フィル様！？」

「……あー！！　ゴメンゴメン。独り言」
「独り言！？」
「よし！！　気を取り直して、ドンと来ーい」
「偶に貴女が分かりません…。」
「まぁ…私にも分からん」
「自分の事なのに！？」
「謎多き乙女なのだ！！」
「その横暴さはディア様譲りですか…」
「……ぐすっ」
「あぁ！！　泣かないで下さいよぉ！！」
「……ウソウサ ω」
「……」
「ゴメンね！！　そうだよね！！　外界のネタだもんね！！」
「いいんです…。分からなくて当然なんです…。人間一週間目ですから…」
「中々壮大なカミングアウトだよねそれ！！」
「えっと…本題に戻しますけど、さっきあだ名を出すのは簡単って自ら言ってたんなら、ご自分で詮索なさっては？」
「いや…。自作あだ名は痛すぎるでしょ…」
「じゃあ……。エリマキトk…！！」

「何でそんなネーミングが出てきたかは置いといたとしても、取り敢えず主人として今の言動は見逃せないわ」
「ゴホッ…ゴホッ！！　首締め…ゴホッ！！」
「あー…。もう、フィル様でいいよ」
「！？」
「飽きちゃったし」
「横暴だ…」

こうして賑やかな朝は過ぎていく。本当の本題は、零次の居所だったにもかかわらず…。
その頃……。

ω

「ディア先生……」
「どした？」

どうしたもこうしたもない。秋も深まる季節。Tシャツで俺は極寒の雪山を、現在進行形で、目的も見えず登山中。
どう見たって登山に相応しくない格好だってのに。

「お前…。上着くらい着て来いよ…。」
「誰のせいで、着れなか…」
「お前」
「ですよねー」

毎回こんなんだ。もう既に登山も困難だ。正直、目的が見えないと『山を上る』という単純作業は苦でしかない。

何たって……寒い！！

「先生…」
「あん？」
「何しに雪山に？」
「言わない」

もう一度言おう。毎回こんなんだ。そして、目的を聞くことが困難だ。しかし、今回は一言余計な言葉が多かった。

「目的言ったら、お前絶対逃げるし」
「！？」

とんでもなく余計な一言だ。大変だ。とっても大変だ。文面じゃ分からないだろうけど、俺今凄い形相よ？
驚嘆一色に染まった俺を、『今更』の二文字を胸に、見下したような形でディアが言葉を吐き捨てる。

「私がお前を連れてくるクエストに、お前の利点があるわけ無いだろう？」
「分かってるけど！！　分かってるけど聞きたくなかった！！」

ディアは気が乗らないのか、俺の喚きに耳も傾けず、放置プレイと言う形をとってズンズン前に進む。
そんなディアを恨めしそうな目で睨みつつ、俺は心からの一言を漏らす。

「えっと…引き返したりしないので、上着を下さい。」
「上着…？」
「何ですか！？　その露骨な疑問符は！？」

「あぁ～。上着か？」
「上着です！！」
「支給品に上着は無い！！　我慢！！」
「！？」

そう言い張ると、ディアはまたズンズンと進んでいく。目的も見えてこない。ただただその眼前に見えてくるのは、白銀の衣が掛かる山の頂き。
そんな景色に見入っていた時だ。

「よし」

頂上一歩手前の洞窟。その入り口で何故かディアは一人で納得の一言を呟き、俺の方にくるりと向き直る。そしてその口から告げられたのは、願っても無い死亡フラグ。

「クシャルダオラをお前の力で人にしよう」
「は？」

ディアは親指をグッと立てる。言われている事の意味が、よく分からない俺。簡単かつ、明確な言い回しであることに間違いは無いが、何故か耳が、体が、その一言を壮絶なくらい拒絶する。
ディアはニッコリ微笑んで、そのまま立てた親指を下向きに変える。

「拒否権を与えるつもりなんて無いが、拒否したら肉片になるぞ？」
「っ！！」

既に声にもならない。しかし、そんな俺を他所に手を引いて洞窟内を駆け、地獄へと誘う医療関係者。えーと……何処のギ〇ですか？

「一つ言っておく」
「はい？」
洞窟内で足も止めず駆けながら、ディアは一つ忠告をくれた。それが忠告と言えるかどうか、いまいち分からなかった事は秘密。
「絶対に仲間に引き入れてくれ」
「へ！？」
そのまま俺の手を離し、洞窟内を光の差し込む方向へと駆けていくディア。それを追う俺。身を切るような寒さに、死にそうになったのは言うまでも無い。
そのまま俺は、大きく口を開けた洞窟の出口を飛び出した。

ω

「でさぁ」
「はい？」
洗い終えた朝食の食器を、元に戻しているアルトに向かって、フィルはソファに寝そべりながら一言。
「零次は？」
アルトは宙に目を泳がせ、引きつった顔でその問いに応対する。
「そう言えばそんなやり取りさっきもしてましたね…」
「デジャヴってやつね」
「もう本題以外答えませんからね」

アルトはそう言うと、せっせと食器を棚にしまっていく。フィルはそれに対して『分かってるよー』と生返事を一つ。本当に分かっているのかどうかは……疑問だ。

「んで、何処行ったの？」
「ディア先生に連れられて、ちょっと雪山まで……だったかと？」
「曖昧だね」
「急でしたから」

困ったような笑顔で対応するアルトに、フィルは溜息一つ。そして、何かを思い立ったように勢いをつけて、ソファから飛び起きる。

「アルたん。終わったらちょっと手伝ってよ」
「……」

「何！？　その露骨に嫌な顔！？」
「いえ…。別に…。そんな…」

「いや！！　あからさま過ぎるよ！！　隠し切れてないよ！！」
「えっ…。う…嬉しいな…ハハ」

「何！？　一体何が不満！？」
「あからさまな面倒フラグが…」

「酷い！！」
「いえ…。忘れてください…」

「そこまで言われて、即行頭から記憶を消去できないよ！！」
「殴りましょうか？」

「いいよ！！　殴ってくれなくて！！」
「ご自分で？」
「痛い！！　それは色々な意味で痛いよ！！」
「あぁ…。取り敢えず…用件は？」
「う～…。言いにくいけど取り敢えず外だから」
「……」
「だから！！　露骨に嫌な顔しないでよ！！」
「えっ…。狩りですか…？　私雑魚とか言うレベルを通り越して雑魚ですよ？」
「それ、一周回って結局雑魚だよね！？」
「……ぐすっ」
「あぁ！！　もう！！　泣かないの！！」
「で…内容を明らかにした要件は？」
「重労働」
「国に帰ります」
「いや！！　一言に凝縮した結果だって！！」
「もうちょっとソフトに言うと？」
「……労働？」
「取り敢えず……死のうかな？」
「何！？　働いたら負けだと思ってたりするの！？」

「いえ…。あれはネタでしかないと思いたいです」
「知ってるんだ！！」
「多少…」
「取り敢えずお願い！！」
「……」
「了承だね！！」
「何処でそう思ったんです！？」
そう言うとフィルは防具をつけ、手早くポーチに道具を入れて準備する。アルトは大体、主が何をするか分かっていたが、何故自分が連れて行かれるのか理解しがたい…。
「一番ソフトに言うと、『登山』！！」
「やっぱり！！」
「……やっぱり？」
「ディア先生と零次様の所でしょう！？」
「……てへっ」
「『てへっ』じゃなくてですね！！」
「取り敢えずレッツゴー！！」
「うぁ！！　ちょ！！　ちょっとフィル様！？」
フィルは、そのままアルトの手を引っ張って駆け出した。

第４話・強制的鋼龍戦！！　～ディアの野望・始動編～（後書き）

結局のところ三部作。

個人的には「二部でよかったかな？」とか思ったりしますが、内容展開を見ると「別にいいかな？」とかとか思ってたり。

実は話はその都度思ったことを、インスピレーションだけで書いているので、案外構成が甘いです。

これは編集後のコメントなんで、ネタバレするのは不味いかもしれませんが、７話鋭意執筆中です。

その７話の後、何しようかすら決まってませんし、７話も大まかに１つ題材をおいただけで、これといった何かがあるわけでもありません。

だからよく情景描写とか使うんですね。

文字数が足りないから／（＾ｏ＾）＼ナンテコッタイ

第5話・強制的鋼龍戦？！！　～ディアの野望、遂行編～

「ディア先生！？」
「……」

洞窟を抜けた。走ってたから、それも勢いよく。そう。飛び出したんだ。勢いよく。そして、今に至る。

「ちょ！！　何で出口で止まってるんですか！！」
「……」

俺はディアを、勢いよく後ろから蹴飛ばした。しかし、そのまま何も言わず、スッと立ち上がるディア。ユラリと何だかオーラが見えなくもない気が……。間違いなくフラグですね。ＢＡＤ・ＥＮＤの。

「取り敢えず……おぼえてろ零次」
「……」

執行期間に延長オプションが付きました♪　案外早めに物語が終焉を迎えてしまいそうです。主人公惨殺のＥＮＤで……。

「……人間」
「おぅ。元気そうで何よりだよ。鋼龍。」

雪山の頂上。その場所だけ光が差し込んでいる。そこに佇む黒光りの龍。間違いなくクシャルダオラだ。
黒光りって表現は、魔物の称号を持つ『Ｇ』と被ってしまうが気にしない。あれはスリッパで倒せるが、こっちはそうもいかないか

らな。
クシャルダオラはゆっくりと重圧のある風貌で、俺たちを見下ろす。
「連れ……か？」
「あぁ。頼りになる奴でね。今日の為の要なんだよ。」
どうやら俺の話らしい。……嫌な要だ。近づく事さえままならないかもしれないって言うのに、人にする為にボディタッチなんて…。真面目に死ねます。
「私を殺す……要か？」
「さぁ？　どうだろうね？」
はぐらかしたような言い様に、クシャルダオラはどう思ったか知らないが、急に天候が荒れてきたのを見ると……。え？　ご立腹？
そして、推測は確信に変わる。
「私が言ったこと……よもや忘れている訳ではあるまい？」
「あん？　あれか？　殺すならどうのこうのってやつか？　残念だが私がいつ、お前の言ったことに従ってやるなんて言った？」
その瞬間、ゴォッと鋭い音と共に強い風が吹いた。新手の威嚇と言う事か？　俺は寒さか怯えか…足が震えてきた。
「どうせそのような事であろうと思ってはいたが、その無防備な人間が噂の能力者か？」
「へぇ…。話の回るのが早いねぇ…。一体何処からの情報だい？」
「知りたいか？」

露骨に分かりやすい古龍の挑発を、ディアは『フッ』と鼻で笑ってみせる。そしてそのまま、悠然と佇む古龍を睨むように見上げ、吼える。

「お前を噂通りの状態にしてから、ゆっくり話は聞いてやるよ！！」

再び鋭い風が吹いた。例えじゃない。本当に刃の風が吹いた。その風は、まるで俺達の居る場所を避けて、あえて縫うように地面を裂き、走った。

挑発じゃない。脅しを交えた最終警告だ。次は当てる。そういう事だろう。

しかし、ディアは引き下がらない。

「上から、遠距離攻撃で高みの見物かい？　自信があるなら降りてきな」

言ってしまえば易い挑発だ。クシャルダオラは表情一つ変えず、何を言うでもなく、攻撃もしない。

一体何なんだ？　そして俺は何やってんだ！？

「人間。一つ聞こう。何故そこまで私にこだわる」

「あん？」

クシャルダオラの突然の質問に、ディアは喧嘩腰になる。佇む古龍はそれ以上何も言わず、ただ此方をジッと見つめている。

ディアは興を削がれたように『はぁ…』と溜息を吐き、考えて言ったのかさえ分からない一言を言い放つ。

「何となくだ」

クシャルダオラは、その答えに目を細める。しかし、怒りじゃ無さそうだ。でも了承でもない。ディアはそう言ったっきり、それ以上の言葉を並べようとはしない。

「何となくか…。明確な答えがない。ならば私は然程必要でもないだろう？」

「あん？　よく分からん事を言うな。」

「……？」

よく分からん事に対して、よく分からん事を言われた古龍は、今度は疑問の形で目を細める。俺も、ディアが何を考えているか分からないが、所詮蚊帳の外の俺には関係ないだろう。

俺一人が、凄い勢いで会話からはみ出ている。

「『何となく』ってのは頭で考えた上での答えじゃない。あくまで感覚的な答えだ。私の感覚が、お前を必要としている。頭で考えたとって付けた答えなんて、ただただ言葉で着飾らせただけのリップサービスに過ぎない。」

「ほぅ…」

ディアの言動に、クシャルダオラは一言了承の言葉を漏らした。そして、そのまま大きな羽を羽ばたかせて降りてくる。

もしかすると、今回は怪我をしなくて済むんじゃないか？

「人間」

「何だ？」

「御主の野性的な感覚が、私を欲しているのか？」

「エロい言い回しだが、別段間違っちゃいないよ」

距離をおいて雪の上に降り立った鋼龍は、その口を開く。今まで

の警戒心の強かった口調とは打って変わった、何だか楽しそうな口調だ。
しかし、明らかに先程よりも増した殺気。その殺意に満ちた目が、俺たちを捉える。

「人間。御主の考え方、気に入ったぞ」
「そりゃどーも」

一定の距離を保ったまま、蚊帳の外な俺をほって置いて、話を進める二人。俺はそのまま数歩後ろに下がる。

「しかし、その者の能力で人なる姿になるのは、古龍としてのプライドの問題。どうしてもと言うのなら…」
「言わなくて十分だっ！！」

クシャルダオラが言い終わる前に、ディアは背中の太刀を抜き、踏み込んだ左足を軸に一気に詰め寄った。先手必勝というには十分な……不意打ちだ。

「甘いわ！！」

しかし、クシャルダオラは大きく羽を羽ばたかせ、凄まじい風圧と共に宙に身を逃がす。残された風圧は新しく積もった粉雪を巻き上げ、一瞬で１m先も見えないような世界を作り上げてしまった。

「零次！！」
「はい！！」

ディアの呼ぶ声に大きく返事をする。しかし、不味かったようだ。

「声を出すな！！　気配を消せ！！　いいって言うまで何処かに隠れてろ！！」
「はいぃ！？」

それ以上の声は返ってこない。俺は言われるがままに何とか岩壁まで辿り着き、洞窟の脇に身を潜めた。きっと優しさだと思いたい…。

「違う！！」
「……」

違うらしい。手を出すなって事だろう。言われなくても、寒過ぎて手も足も出ません。……と言うより、凍死しない俺を誉めて！！

「人間。随分悠長じゃないか？」
「はん！！　生憎、お前如きに殺られる気は更々ないんでな！！」

鋼龍の挑発的な言動に、盛大に大見得を切るディアの声がしなくもない。見えないから分からないけど、ゾー〇ならきっと大丈夫だろう。それよりも今は……駄目だ。眠くなってきた。
人間、眠ると寒さを忘れられるらしい。……。

ω

「仲間を逃がしてやるとは…中々の思いやりじゃないか？　人間」
「逃がす？　馬鹿言いうな。ゴミが転がってると戦いにくいんだよ！！」

お互い再び一定の距離を置く。舞い上がっていた雪はいつしか消えている。と言うより、雪がなくなり山肌が姿を表しているところ

さえ見える。
クシャルダオラはそれを見た後、ディアに視線を移して一言。
「この為の『椿』か？」
「そう思ってくれても構わないぜ？」
「？」
クシャルダオラもディアも、何も言わずに相手の出方を窺っているようだ。ディアは空を見上げると、『ニィ』っと不敵に笑った。クシャルダオラはそれがどうも引っかかるようだ。
「人間。空気を温めて雨でも降らそうと思っているなら、それは無茶だぞ？」
「そんなの馬鹿しか考えないよ。」
「ならば何がしたい？」
「どういう意味だい？」
「先程から絶対に当たらぬであろう角度からも、太刀を振り下ろしたりしているではないか」
「あれ？　ばれてた？」
「気でも狂ったか？」
「寝言は寝てから言いな！！」
そう言うとディアは太刀を構える。不敵に笑いなら。
「何が可笑しい？」
「零次が持ってきた漫画って奴に、剣術の類の物があってよ。少し真似してみてもいいかな……と思ってな。」

「遊びなら死ぬぞ？」
「遊び？　それはこっちの台詞だぜ？　とっとと本気出せよ厄災の一角」

「死ぬぞ？」
「お前がな！！」

そう言ってディアは刀を構えなおす。某漫画を読んでる奴なら分かるネタで…。

ω

「どーん！！」
「ぐぶほぉぁ！！」

何故か腹部に強烈な激震が走る。その痛みで俺は一発で目が覚める。今朝の早朝バズーカよりもエグイ…。何だか不思議と腹部に違和感と痛みを残して、俺は勢いよく立ち上がった。
すると、こっちはこっちでまたまた大変だ。

「おはよー！！」
「！？」
「来ちゃった♪」

目の前にいたのは主であるフィルと、何だか乗らない表情で『オンスロート』を構えているアルト。……もしかして、それで殴った？そんな事より、何故ここに二人が居るかが問題だ。大方アルトの制止も聞かず、フィルは半ば無理やりアルトを連れて走ってきたんだろう。いや…大方じゃなく、それ以外の理由が無いと断言する。

洞窟の外では只今非常事態。それを知ってか知らずか、フィルは嬉しそうにポーチを漁っている。

「はい！！　防寒着！！」

「！！」

まさかの幸運だ。あまりの嬉しさに声も出ない。早速、防寒着に袖を通す。流石は毛皮で出来た防寒着。温かさが違う。

「おー。嬉しそうだね零次君」

「そりゃ、今一番欲しい代物だったからな！！　助かったぜ」

「じゃあ、序にこれも」

「っ！？　何だこれ！？」

「おにぎり！！」

「……！！！！！」

「ん？　どうしたの？」

「遠慮する！！」

「どうして！？　朝食べてないでしょ！？」

「匂いと見た目が酷い！！」

「あー。大丈夫だよ。『モンスターの体液』が掛かっただけ♪」

「その時点で大丈夫じゃない！！」

俺はそう言って後方に向かって思い切り投げ捨てた。フィルは『あーっ！！』と大きな声を出して、その行方を追おうとする。

追ったら最後だ。だから止める。

「勿体無い！！」
「お前食えるのかよ！！」
「無理に決まってるでしょ！！」
「矛盾に気づけ！！」
「御二方、声の音量が過ぎます」
アルトに『オンスロート』を再び構えられ、生唾を飲み引き下がる俺たち。確かに、悠長に口喧嘩なんてしていられない。外はやっぱり緊急事態だ。
「助けに行こう！！」
そう切り出すフィル。しかし俺はそれを止めに入る。
「駄目だって！！」
「何で！？」
「良いって言うまでココに居ろって言われてんだ！！」
「零次だけでしょ！！」
「二人とも！！」
間を割って、鉄の塊を振り下ろすアルト。鎚によって、地面が激しい地鳴りを起こす。これは不味い…。外にも絶対に影響が出てる…。
「あっ！！　アルト！！」

また大声を出しそうになった俺に、アルトは憎悪とも取れる睨みをきかせる。その眼に俺は何も言えなくなる。どうやらフィルも同じらしい。
それを確認してか、アルトは鎚を鈍い音を立てて地面に置いた。そして一言。

「これはあの方達の問題です」

アルトの視線の先を見つめてみる。洞窟からでは少し遠いが、刀を構えるディアと、対峙する鋼龍が雪が晴れた事によって、しっかりと見えるようになっていた。しかし…突っ込むところがある。

「……○突？」

ω

「人間…。随分と洒落た構えじゃないか」
「だろ？　刀は斬る為じゃなく、突く為でもあると教えてもらったんだ」

ディアは○藤の『牙○』の構えをとる。剣を左手に持ち替え、重心を後方に置き、剣を顔の高さで水平に持ち、その切っ先を相手に向け、先端に手を添える。完璧な模倣だ。

「その為の『椿』か？」
「あぁ。返しがついてる太刀は、刺さったら中々抜けないぜ？」

ディアはニィっと笑う。悪魔だ…。悪魔がいるぞ…。
だが鋼龍は表情一つ変えない。見下しているのだろうか？

「しかし…その構えでどう出る？　突きなら先刻のように突っ込むしか無いだろう？　突っ込めば先程の二の舞だぞ？」
「……」
ディアは何も言わない。確かにクシャルダオラの言う通りだ。迂闊に突っ込めば、『龍風圧』に押し戻される。
必要なのは、一瞬の隙。
「隙探しか？」
「……」
「来ないなら此方から・……」
（ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！）
「！？」
互いに体がよろめくほどの地鳴り。お陰と言ってはなんだが、鋼龍に隙が生じた。しかし、自らにも隙が生じてしまった。
ディアは顔を歪める。正直悔しい。
「惜しかったな」
「っ……！！」
「来ぬなら此方から行くぞ？　遊びはこの辺までにしよう」
そう言って鋼龍は後ろ向きに飛び、大きく距離を取った。明らかな太刀の攻撃範囲外だ。この距離じゃ何も届かない。

「一撃だ」
「はっ！！　〇ターナル・フォ〇ス・ブ〇ザードでも使うのかい？」
「訳の分からん事を言うと死ぬぞ？」

カパッと口を開く鋼龍。その開けられた口に風が集まってくる。これにはディアも顔を顰めたが、それと同時にもう一つの考えが浮かぶ。

（今がチャンスじゃないか？）

キィィィン…という大気の震える音が大きくなる。ディアは意を決して飛び込んだ。
しかし鋼龍の目は、約束された勝利の喜びに掌握されたものとなっていた。

「無謀だ…人間」
「人間人間って！！　覚えときな鋼龍！！　私の名はディア！！ディア・ローライトだ！！」

突っ込んだ瞬間、クシャルダオラの口から解き放たれたかのように放射される螺旋状のブレス。……と言うよりレーザー。
しかし、ディアは迷い無く突っ込む。それも笑って。

「やっぱりな！！」
「！？」
「どうせ竜巻みたいなのが飛んでくると思ってたんだよ！！」
「何だと！？」
「台風と同じだ！！　台風の目は穏やかなんだよ！！」

そう言うと中心に向かって飛び込むディア。一片の曇りないその

瞳には、此方も勝利の喜びが溢れていた。

「……甘い」

「！？」

（キィィィィィ……）

「これは台風ではない…。二発撃てば、目は補えるのだ」

真っ直ぐに中心へと飛び込んだディアに、真ん中を突っ切る形の二発目のレーザーは避けきれない。安全だと思っていた螺旋の中心は、大きな罠だった。

「くっそぉぉぉぉぉ！！」

ディアは突き上げた『椿』を、そのまま切っ先を向けて鋼龍の口へと投げ飛ばす。しかし、宙では腕の力しか加わらないために、『椿』は動力を失いそのまま落下。

「終わりだ」

そのまま、エネルギー充填の最終段階に入る鋼龍。あんな物を正面から受ければ、木っ端微塵もいいところだ。しかし、飛び込んだディアに避ける場所は無い。

その時、一発の弾薬発射音が雪山に轟いた。

「終わり？　それはどうかな！！」

「！？」

甲高い声と共に、クシャルダオラの眼前に迫る滅龍弾。それを避ける為に、クシャルダオラは溜めていた風をねじ込めて飛び上がる。それを確認した上で、フィルはボウガンをしまい先生に駆け寄る。

俺は太刀を借りて、アルトと共に参戦。防具はひ弱な防寒儀で我慢…。

「大丈夫！？　先生！？」

「フィル！？　アンタ何でここに！！」

「詳しくは後で！！　始終見てて、危なくなったら加勢しようと思ってたけど、無茶しすぎだよ先生！！」

「……悪い」

そんな二人の会話を他所に、鋼龍はその翼を大きく羽ばたかせ降りてくる。第2ラウンドの始まりだ。

「一気に…増えたな」

クシャルダオラは、そう呟いて目を細める。俺とアルトは、それに対して多少喧嘩腰に入る。

「此方としても、あなたを調子に乗せる気はありません」

「同感」

次の瞬間、その場の空気が一気に変わる。鋼龍も本気になったわけだ。流石に4人相手はきついんだろうか？

「私を欲するなら、掛かって来い人間！！」

鋼龍は雪山が震えるくらいの声量で、今一度雄叫びを上げた。

ω

「へぇ…。もう予言の子が…」

お昼を回っただろうか？　ここに着た時に比べて、日はだいぶ昇ったようだ。

マスターが一通り話し終えた時、レイは一言。

「ねぇマスター」

「はい？」

帰りの私宅に勤しんでいたマスターは、分厚いコートを着ながら徐にレイに振り返る。するとレイはニッコリ笑って告げる。

「その子…。次来る時連れて来てくれないかな？」

「へっ？」

ついつい素っ頓狂な声を上げる。自分から何か起こそうとするような性格ではないことを、マスターは承知の上でだ。

「零次君だよ」

「彼をですか？」

「うん♪」

零次という名前を出した途端に、レイの顔は笑顔で一杯になる。普段あまり見ることの出来ない顔に、マスターは何と無しに戸惑ってしまう。

「本当にですか？」

「本当に」

「零次君を？」

「もしかしたら、代わりに今回の厄災の終幕を担ってくれるかもし

れないし…」
「彼に託すんですか！？」
「会ってみてから……かな？」

レイは覚束無い足取りで窓まで歩くと、その窓から城の傘下に広がる街を見下ろす。まだ出来てまもないのか、どこか小奇麗だ。

「あの３人は絶対仕掛けてくるよ」

窓の外を見たまま、レイはマスターにそう言った。

「レイ様…奴等の正体は本当に…」
「うん…。間違いないと思っても構わない」

マスターは大きく溜息を吐いた。そんなマスターを見かねてか、レイは一言励ましにも似た言葉を送る。

「大丈夫！！　いざとなったら私が出るよ！！」
「レイ様…」

マスターはその頼もしい言葉に、喜びと不安の二つを滲ませた表情を見せる。そんなマスターに、レイは少し不満そうだ。

「ねぇマスター」
「……」
「マスター？」
「えっ…。どうかされましたか？」
「ううん…。何でもない」
「？」

ゆっくりと流れる雲を眺めながら、レイは悲しそうに目を細めた。

ω

「ちっ…！！　小癪な！！」

「それが本気か！？　鋼龍の名が泣くなぁ！！」

俺たちが加勢した途端、凄い勢いで元気になるディア。……心細いならそう言えばよかったのに。

「図に乗るな人間！！」

「ほらほらほら！！　当たんねーぞ？」

何だか、俺たちは援護はするものの、空気的に蚊帳の外だ。形勢が有利に成れば成る程本気になるゾ〇マ…。最早、手がつけられる状況じゃないのは確かだ。

「絶対に殺す！！」

「威勢がいいねぇ！！　出来るもんならやってみろってんだぁ！！」

今更ながらに思う。敵がディアでなくて良かったと…。あんなの相手にしてたら、命よりも先に理性が崩壊する。

断言する。あれは戦うと言うよりも、おちょくると言う表現が正しい。

「っ！！」

「声も出ないほど余裕が無いのか！？　本気出せよ本気！！」

俺もアルトも、攻撃を加えられる範囲で攻撃は加えるが、ほぼディアの独壇場だ。フィルだけが、援護射撃の為に猛烈に頑張ってい

る。
そんな中、鋼龍は疲れたのか、攻撃の手を休めてしまった。それを悪魔は見逃さない。
「疲れたか？　困るねぇ…。つまんないねぇ…。」
「ゼェ…ゼェ…」
何だ？　この不思議すぎる光景は？　隙だらけの鋼龍の前で、太刀を持った女性が腕組んで見下ろしている。相手のプライドとか、もうズタズタだろうに…。
「貴様…」
「はーん…。そろそろ限界か？　年なのか何なのか知らないけど、幾ら鋼龍でも年月には勝てないか？」
その前に、貴女に勝てる気がしないと言いたいのは、俺だけだろうか？　アルトもフィルも頭を抱えている。その位の光景だ。……酷い。
「ゼェ……ゼェ……」
「お前はあの日からこの１０年、何もせずにいたんだろう？」
「ゼェ……ゼェ……」
「悪いが私はお前を殺すためだけに、１０年生きてきたと言っても過言じゃない。」
ディアの顔から表情が消える。次の瞬間には壮絶な重圧。その場を言葉に出来ない重みが襲う。俺の頬を、一筋の汗が流れ落ちるのが分かった。
「でも…面白い事考えたんだ」

「……？」
「全て終わったら話してやる。私も気がそんなに長くなくてね。宿敵が目の前に居たんじゃ、殺意が抑えられないんだわ。悪いけど決めるよ？」

するとディアは距離も十分に取らず、話に花を咲かせていたそのままの場所、とてつもない近距離から、構えもなしに太刀を握る。その目は先程とは比べ物にならない程、笑みが消え、声が重い。言い方に御幣があるかもしれないが、まだ見ぬディアがいよいよ本性を表した。
……まさか。

「牙〇って零～参まで形があるらしいんだわ。そん中でも、これ一番強そうだし見舞ってやる。」
「……？」

大きく、深く息をする鋼龍にディアはそう告げると……いや。一瞬だった。
間合いの無い状態から、上半身のバネのみを使って繰り出す突き。その威力は、想像を遥かに凌駕する。一体そんな力が、ディアの華奢な体の何処にあるというのか…。
激しく血飛沫が舞う。自らも、その血飛沫を盛大に浴びた。ディアは自分の目の前で力無く倒れる鋼龍に向かって、悪びれる様子も無く、表向きの世辞を見舞う。

「零式牙〇…。悪いな…。老いぼれには、交わす暇も無い一瞬で。」
「ガッ…」

恍惚の表情、満足感に満ちた目。その腕から繰り出された突きは、鋼龍の左眼を抉り、挙句後頭部を貫通した。

ディアは突き刺さった刀を、力任せに引き抜く。それと同時に、血とドロッとしたものが流れ出る。

「零次」

「はい！！」

正直、俺の頭を占拠しているのは、ディアに対する恐怖でしかない。さっきまでは頭を抱えて、まだ見られるような状況だったが今は違う。俺を呼ぶのは、情け容赦ない悪魔。

「呼ばれたら来い」

「はっ…はい！！」

ディアは、顔を此方へは向けない。ただ横目で、ディアは俺を睨むようにして呼ぶ。つい立尽くしてしまっていたが、一歩間違えれば絶対に殺されていただろう。慌てて俺は、ディアと鋼龍に駆け寄った。

今現在のこの場の空気は、普段は感じられないような殺気に満ち溢れている。

「零次。　取り敢えずお前の出番だ」

「えっ？」

「『え？』じゃ無くて、人化しろよ」

「クシャルダオラをですか？」

「……それ以外にあるか？」

ディアは深く溜息を吐いて、その場にへたり込む。一気に緊張の糸が切れたように、いつものだらしない彼女に戻ってしまった。

「はよせぇ…」

「あっ…はい！！」

ディアのだるそうなその一言に、俺は無意識のうちに声の調子があがる。

「…なんだよ零次。嬉しそうに…」

「いやぁー。べっつにー？」

嬉しい事は嬉しい。あんな張り詰めた空気に中で、鋼龍どうのこうのなんてやってられない。正直、間違えた時のリスクを考えると、『死』では済まない気がしてならない…。

「でも先生？」

「あん？　何だフィル？」

遠くで見守っていたフィルとアルトが、小走りで駆け寄ってくる。俺は一心不乱に鋼龍にボディタッチだ。

「今ここで人にしちゃって、目の方はどうするの？」

「目？」

「怪我だよ。怪我」

「……」

「先生？」

聞き耳立てて聞いていた俺は、ディアの声がストップした事に気がついて、恐る恐る後ろを振り向く。願う事はただ一つ。怒ってませんように…。

しかし、ディアは寧ろ得意げになる。

「怪我がどうかしたか？」

「え…。いや…。治さなきゃ、人にした時大変だよ？」
「大丈夫！！　気にするな」
「先生…案外人でなしだね…」

鋼龍の体をペタペタ触っていた俺は、フィルの要らん言葉を聞いて、再び恐る恐る振り返る。
考える事はただ一つ。フィルよ…。先生が先生であることに、何故気がつかない！！

「もう一度呼んでみろ」
「へ？」
「私は何だ？」
「……ゾー〇」
「……」

俺の背筋が凍りつく。フィルはきっとゾ〇マが何か分かっていない…。俺は三度目の正直、後ろを振り向く。しかし、時既に遅し。

「零次」
「……」
「後でちょっと話しような」
「……」
「な？」
「……はい」

大人のお話し合いの約束を、脅し込みの無理やりで締結。勿論、話し合う訳無い。ハイパー拷問タイムへの、招待状だ。
ディアはくるっとフィルに向き直ると、何も言わずにフィルをじっと見つめる。正直…百合フラグに見えなくも無い。

「何フラグだって？　零次？」
「滅相も無い！！　用件があるなら、死ぬ以外でご用件を！！」

ディアが分かりやすい作り笑顔の対応を俺に向けた為、本日の話し合いには俺の人権が含まれない事が決定した…。
ディアは再度フィルに顔を向ける。そろそろ溜息が混じってきた。

「そろそろ気がつかないかね？　フィル？」
「何が気がつくの？」
「……」

気がついていない。あくまでもそうだと信じたい。忘れてるんじゃなくって、気がついていないだけだと…。
早く気がついてくれフィル…。今はただそれを願い続ける…。

「フィル」
「？」
「私の事を普通に呼んでみろ」
「えっ…ディア先生」
「違和感は？」
「ないよ？」
「そっか…」

一気にディアの周りの空気だけが地に落ちた。まだからかっているのだったら、ディアの鉄拳制裁で終焉だろうけど、素で気づいていないとなると話は別だ。

「おい…零次」
「……はい？」

とばっちりが来ない事を願うばかりの俺に、ディアは近づいてくる。……もしかして、俺終了のお知らせ？

「どうだ？　鋼龍の方は？」

「へ？」

「『へ？』じゃなくって、お前の力とやらで人になるんだろ？」

「……確かな根拠は無いですけどね」

「私も見た事無いから信じがたいが、一つやってみてくれよ。」

「それが…。何回触ってもなってくれないんですよ…」

「ガセか？」

「あんなに頼ってた人の能力を、今一瞬で払い除けましたよね！！」

「いや…百聞は一見にしかないからさ」

「現実的ですね…」

「この世界で、お前は一番非現実的な野郎だと思ってるつもりだが・・・」

そんな会話を嗜みつつ、取り敢えず手当たり次第に触る。……一歩間違えれば、今の発言は色々エロい…。

解決法も見つからないまま、いつの間にか夕方だ。もとより吹雪もいいところだったので、いつが昼だったかさえ分からないが…。

「アルト」

「！？」

「……ぐすっ」

「わわわ！！　泣かないで下さいディア様！！」

ディアがアルトの名前を呼ぶたびに、アルトがビビるのも何だか慣れてしまった。当の本人達だけが、傷ついているのは気にしない。
だが、傷ついているのがディアなら大丈夫だろう。だってディア先生は『鉄の女』だからさ！！

「ほぉ…」
「……」

調子に乗ってきた時は、何も言わないと心に決めた俺。
俺を人睨みすると、ディアは話に戻る。

「んで。アルト」
「はい？」
「お前さんが人になった時って…憶えてないか…」
「はい…。あんまり…」
「ん？　多少は憶えてるのか？」
「あっ！！　はい！！　顔に手が触れたぐらいでしょうか…」
「だとよ零次」

最終的に回ってきた答えは、『取り敢えずフェイスタッチ』というあやふや過ぎて、いまいち解決策としては乏しいもの。
しかし、ディアは何故かそれをごり押しする。早く人にしろと、言わんばかりに。

「ほら！！　早くしろ！！」
「……えっ？」

「……何だ？　問題か？」
「楽しそうですね…」

「あ？　あぁ。ちょっとな」
「詳細キボンヌ」
「キボンヌって…。懐かしいもん持ってきたな」
「『ちゃんねらー』でしたから」
「あえてか？」
「あえてです」
「まぁいい…。じゃあ人化にレッツトライ！！」
「よしきたー！！　……って上手く交わしたつもりですか？」
「おぅ…。案外上手く交わしたつもりだったんだが…」
「で？　実際の詳細は？」
「聞きたいか？」
「はい」
「異論は認めんぞ？」
「内容によります」
「……」
「ほら。人にするのは俺ですから」
「むぅ……。まぁいい。簡単に言えば、コイツをうちで引き取る。」
「へ？」
「この鋼龍は人にしたら、うちで引き取る」
「診療所でですか？」

「あぁ。下僕同然に働いてもらう」
「！？」
「朝から晩までつきっきり」
「！？」
「取り敢えず面倒事は押し付ける」
「！？」
「勿論コイツは泊り込みで」
「もぅ……。……安らかに眠ってもらいましょう？」
「おい！！」
「だって、それじゃまるで生き地獄！！」
「まるで！？　違うぞ零時！！　完全な生き地獄だ！！」
「アンタ最低だな！！」

そんな言い争いの間にフィルが割ってはいる。取り敢えず言い争いが治まった現場に、フィルが重要な一言を漏らした。

「先生！！　早くしないと鋼龍死んじゃうよ！？」
「そうだった！！　零次！！」
「えー…」
「今日の大人の話し合いは棄却！！」
「ＹＥＳ・ＢＯＳＳ！！」

気合を入れて、取り敢えず鋼龍の頭の方に回り込んで、恐る恐る頭頂部に手を付ける。別に触るのが怖いんじゃない。目の前に横た

わる鋼龍の頭は、凄い血みどろなのだ…。
しかし…。

「……あれ？」
「何も起こんないね？」

何も起こってくれない。ディアは、俺を汚い物でも見るかのような目で見てくる。

「零次…。アルトは何処から盗ってきた？」
「ちょ！！　なんて酷い言いよう！？」

何だか皆の目が冷たい！！　俺はそれを払拭するかのように、取り敢えず顔をペタペタ触り始める。
まだ乾いていない血の、粘着音が乾いた雪山の空気に溶ける。俺が必死な証拠にしておくのも悪くない。……激しく不快な音に間違いは無いが。

「くそっ！！　何で！！」

そう言って手を雪の上についた時だった。

（パァァァァァァァァァァァァァ！！！！）

眩いばかりの光が、その場に居た全員の視界を占拠した。かすかに目を開けて、その様子を確認する。
先程手をついたところから、鋼龍の周りを取り囲むかのように、雪をつたって陣が形成されている。そこには不思議な文字。案の定読めない…。
そのまま光は消えていった。

「っ…！！」
「なっ！！　一体何だってんだ！！」
「皆さん大丈夫ですか！？」
「平気だよー…」

取り敢えず此方側は、全員の無事が確認される。問題は…山積みだった。

「えーっと…。零次…。これは…」
「零次…。お前…」
「零次様…」
「……」

全員から、何だか居た堪れない声が聞こえる。間違えちゃいない筈なんだ。前回同様、勝手に人になるという珍状況だし…。
しかし、皆さんはやっぱり浮かない顔。

「なぁ零次？」

ディアが肩に手を乗せて、さっきよりも格段に余所余所しく喋りかける。まるで変な奴を説得するかのように…。

「故意か？」
「……」
「故意なのか？」
「故意だと思うんですか？」
「……さぁ？」
「きっと、こういう能力なんだと思います」
「難儀…ではないけど…なぁ…」

「もう…多分レウスもテオも…」
「女の子か？」
「はい…」

目の前に広がる状況というのは、血に水溜りに倒れる少女という…何とも言い難いフラグ。
俺も確信できるかもしれない。自らの能力が何なのか…。
それにしても…ハーレム好きだね…お前も。

「よし！！」

不思議すぎる空気を断ち切るためか否か、ディアが機転を利かせて一声上げる。ディアはそのまま少女を担いで、俺たちに一言。

「降りるぞ」

取り敢えず俺は、半分放心状態の中、雪道を鳴らして集会所へと戻るのであった。フィルもアルトも、何だか不思議な距離感がある…。
久しぶりに雪山から降りるような気がしてならない。その点では、土の大地が踏めるので嬉しいのだが、何だか大切なものを失った気がするんですよ…。

ω

「アスカ様…。やはりあの子…」
「間違いないね」

雪山の頂上。天高く向かって突き出た岩の陰で、誰も知らない話し合いが始まる。

「獣醒…」
「正式名称なんて必要ないさ。メンドクサイからね」
二人が見据える先には、走る四人の影が見える。それをただただ、目で追っていく。
「レイが我々の進入に、気づいているようですが？」
「あの子？　あの子なら心配要らないよ。」
「老山の化身ですよ？」
「あっちはただの老山…。敵じゃないさ」
そう言うとアスカはニコッと笑う。しかし、その笑いの奥には凄まじい殺気が見えた。彼女は一体…。
アスカは暫くその様子を目で追いつづけて、ある程度見えなくなると連れに声をかける。
「帰るよ」
「もうですか？」
「あくまで偵察だって言ったでしょ？」
「今仕留めておいた方が…」
「戦争は個人競技じゃないの」
「はぁ…？」
「その前に宣戦布告しなきゃ。あくまで四方国だけの内乱で抑えなきゃね」
ハルは陽気に鼻歌を歌いながら、零次達とは逆の方向から雪山を

下る。夕陽を見て、不敵に笑いながら。

第5話・強制的鋼龍戦？！！　～ディアの野望、遂行編～（後書き）

またか？

はい。またです。

クシャルも無事取り込んで、モンハンの世界観を激しく【ぶち壊し中】です。

そういうことじゃない？

えっ？　擬人化？　女の子になる事は譲れませんよ？

ムサイ男ばっかの小説を書く気なんて、更更無いですからねっ！！

という訳で、実質後編に続きます

第6話・強制的鋼龍戦？！！　～ディアの野望、完遂編～

「おぅ！！　皆お帰り」
「マスター…。帰ってたのか…」

ディアはマスターの顔を見て少し驚いたものの、直に真剣な顔つきになる。マスターもそれを察したのか、そそくさと拭いていた自慢のカップを戸棚にしまい、布巾で手を拭き激励の言葉をかける。

「お疲れのようですね」
「まぁな…」
「術式道具とベッドでいいですか？」
「あぁ。頼む」

マスターは了解すると、奥の部屋からベッドと処置の道具を運び出す。その二人だけが、帰って来て尚慌しさに追われていた。
集会所には暖かい空気が充満している。寒かった外から帰ってきた分には、有り難い位の暖か味だ。
急いでオペの準備をするディアとマスターを横目に、俺は椅子に深く腰掛けた。久しぶりに落ち着けた感じがある…。

「零次」
「ん？」

目の前に座ったフィルは、何だか不満そうだ。酷く不満そうだ。噛み付いてこんばかりの不満顔だ。
理由が分からない。何で不満なのか分からない。暖かいのに…。

「随分な能力おめでとう」

「お…おぅ」

気持ちの篭っていない露骨な言いまわしに、俺は少し戸惑う。俺の能力分には、俺に悪意は無いからほって置いて欲しいんだが、どうやら目の前のお嬢さんはそうもいかないらしい…。

「何で女の子なの？」
「単刀直入だな」
「ホントに刺すよ？」
「何で！？」
「そんな頭桃色思考だから、皆女の子になっちゃうんでしょ！！
このドM！！」
「！！」

意味が分からん。えっ？　いつから俺はドM？　何があったかは知らないが、架空設定は止めてもらいたい。俺と読者が混乱する。

「第一…」
「ちょっと待て」
「何よ…？」
「何が不満だ…」
「何って…」

まずは、この問いの真意を知ろうじゃないか諸君。フィルが何が不満なのかは知らないが、俺にだって悪意は無い。
しかし、現実は無常だ…。

「鈍感…」
「！？」

アルトが徐に口を開いて言った言葉。誰に向けたか聞かなくても分かる。目が明らかに俺を睨んでいる。
鈍感？　えっ？　何が？
「馬鹿め…」
「！？」
その声は後ろからだ。呆れたような目で俺を見るディア。目を離していても、縫合中の手が止まらないのは流石と言った所か…。
……馬鹿？　ますます意味が分からなくなってきた…。
「零次殿…」
「……」
挙句、マスターは頭に手をやって『やれやれ』とでも言いたいような顔をする。間違いなく呆れられている！！
俺に暖かいのは部屋の空気だけという…カオス。
「一体なんだって言うんだ―！！」
俺は取り敢えず叫ぶ。皆して俺を苛めて…。何だかアットホームだと思っていたモンハンの世界は、然程アットホームでもないらしい。
そんなこんなで皆して騒がしくなってきた中、聞き覚えの無い大人びた声が耳に届いた。
「うぅ…。喧しいぞ人間…。頭に響くではないか…」
俺は驚いて声の方向を向く。そこにはベッドに座る一人の少女。
茶色と黒が混じったようなハネ気味の髪に、左眼には大きな眼帯。

ツリ目で少し大人びた容姿。って言うか…服を着ろ。

「おちおち寝てもいられれん…」

「おいおい…。幾らなんでも驚異的すぎるだろ？　その回復力…」

「賢者だからな」

「あぁ…。その話は追々…」

「そうか。悪かった」

何だか良く分からない話の後、鋼龍の少女は再びため息をついた。

「ハァ…。人間か。懐かしいな」

「まぁ、そういうなって。ようこそ我が村へ」

鋼龍であろう少女は苦笑混じりに愚痴を漏らす。……まだ気がついてないのかな？　いや、永遠に気づかなくてもいい…。

「まぁ…いい。しかし…」

「あん？　どうした？」

「何故私は女になっているのだ？」

その瞬間、皆して俺の方を見る。あからさま過ぎる犯人扱いに、俺もびっくりだよ！！　皆して俺の方を見るせいで、鋼龍の少女も気がついたらしい。

勿論、犯人に。

「人間…噂の力とはこれか？」

「……」

「随分と我欲に秀でた能力だな」

「……」

「別に今更何になろうと一向に構わんが…」

「良かった…」
「反省しろ変態」
「！！」

面と向かって女の子に変態と言われると、とんでもなく傷つく…。俺はそのまま周りの顔色を見ることも出来ず、ただただ机に突っ伏した。

周りに敵しかいない…。

「本当にアイツに託していいのか？」
「まぁ、緊急事態には、その辺にあるもの使わないともたないからね」
「難儀だな人間」
「おいおい。人間なんて呼び方は無くないか？」
「？」

ディアは笑ってそう言った。しかし少女は何の事かさっぱりと言った感じの様子だ。ディアは取り敢えず椅子に腰掛けて、少女を指指して物申す。

「お前も立派な人間だ」
「……それもそうか」

そのディアの言葉に、一瞬少女はうろたえたが、表情を緩めると温かい笑顔で運命を受け入れる。

俺は一発で皆の蚊帳の外だ。皆の敵という立ち位置も嫌だが、蚊帳の外と言う立ち位置も嫌だなぁ…。

結局俺を蚊帳の外にしたまま、ディアが話を進める。

「私は…」

「ディアだろ？」

自分の名前を名乗ろうとしたディアに、少女は微笑んで答えた。それにはディアも嬉しそうだ。マスターもフィルもアルトも、それに続いて会話の中だ。

取り敢えず突っ伏す事にした俺。そして、そのまま寝てしまうのだった。

ω

「それにしても、随分馴染みの早い奴等だな。さっきまで私は敵だったのだぞ？」

少女は注がれたコーヒーを一口含んで言う。コーヒーが口に合わないことは無かったようだ。それを見てマスターが密かにホッとする。

「昨日の敵は今日の友だ」

ディアが嬉しそうに言う。しかし、あの笑顔はマスターと少女以外が知る『下僕計画』への笑いでもある。フィルとアルトは露骨に笑えない…。

「アイツ寝たのか？」

少女は零次を指差して言う。ディアは頬杖をついて「多分な…」と口元を微かに緩める。嘲笑ではない事は確かだ。

「アイツは…零次は、お前さんが思っているほど悪い奴じゃないよ」

「？」

「ここにいる全員が、何だかんだ言ってアイツが嫌いじゃないんだ」
「どういうことだ？」
少女は理解しかねるようだ。さっきまであんなに弄られていたのに、嫌いじゃない…。少女は首をかしげる。
「じきに分かってくるさ。あいつが中々見所のある奴だって」
「へぇ…」
一言そう漏らすと周りを一回り見回す。フィルもアルトもマスターも、皆誇らしそうに頷く。少女には不思議に思えた。
そんな中、フィルがひょいっと手をあげる。
「貴女の名前を考えなくっちゃ！！」
「そうですね！！」
フィルとアルトがノリノリで手をあげるが、ディアは誰が見ても分かる位の嫌な顔をした。そして、心から拒否するような一言を零す。
「……え」
「先生！！　名前ですよ！！　名前！！」
「そうですよ！！　名無しではいられませんからね」
しかし、そんな嫌な顔も何のその、二人は縁談でも薦めるかのようにぐいぐい話題を持ち上げる。当の少女は何が何だか分かっていない様子だ。
「心配するな」

そんな二人をディアは一蹴する。上げたテンションのやり場が無い二人は、キョトンとした顔で硬直。少女は困惑。俺は爆睡。

「もう決まってる」
「決まってる？」
「何だ？　不満か？」
「いや…全然」

二人はうな垂れると、いそいそと席に戻った。本気で名前を考えるとは思えない…。ディアの頭の中を、その思考だけが占拠する。
くだらない名前を元より聞く気は無い。

「今日からお前さんはクシャナだ」
「クシャナ…？」
「女物の防具から取った名前だが、分かり易くて中々だと思うぞ？」
「クシャナ…ね」

クシャナ、もとい鋼龍の少女は噛み締めるように己についた名前を復唱する。この分だと、別段気に食わない名前でもないのだろう。何だか少し誇らしげだ。
気に食わない…とは違うかもしれないが、フィルとアルトは少し苦い顔をする。勿論、蚊帳の外だと言う理由で。

「さて…もう大分暗くなってきたな」
「どうです先生？　今夜一杯？」
「おぉ！！　気が利くねマスター！！」

ディアは酒瓶を持ってカウンターに座る。いつものようにマスターと楽しく談義だ。フィルとアルトもジュースでそれに参加する。
こうして夜は更けていく。新たな仲間も加わって、新しく色々と

スタートだ。

ω

「零次…でいいか？」
「……」
「寝たフリはもういい」

マスターとディアが酔いつぶれ爆睡。その横で、フィルとアルトがカウンターに突っ伏して就寝。そんな中、クシャナが声をかけてきた。
どうやら全部ばれていたようだ。

「……ばれてたか？」
「少なくとも私にはな」

クシャナは呆れたように笑って見せた。俺は酒臭い集会所を、換気しようと窓を開け放つ。思った通り、外の空気は流石夜とでも言わんばかりに冷たかった。

「何故、寝たフリなんかしていたのだ？」
「何故…って言われてもだな」

これといった理由が見当たらない。多分その場においては最良の選択だったのだと思う。

「何となくか？」
「あぁ。それが良いや」

俺は窓の外を眺めながら言う。涼しいというよりは、身を切るよ

うな寒さというべきだった。俺はささっと換気を済まし、皆が起きないようにゆっくり窓を閉める。

「お主…」
「？」

クシャナが目を細めて、半ば睨むようにして俺を見据える。そして徐にカウンターの方を振り返り、俺とカウンターを目で行ったり来たり。
ハァ…と溜息を吐いた。

「鈍感だな…」
「おいおい…。本気で言ってるのか？」
「……やはりか」
「へっ？」
「カマかけて正解みたいだな。知ってるんだろ？　慕ってくれてるの」
「……」
「何だ？　何か困る事でもあるのか？」

何故か詰め寄ってくるクシャナ。取り敢えず俺は座卓に腰をかける。そして、クシャナはその横に座る。

「俺は余所者だからな」
「それは関係有るか？」
「いつかはこの世界から出て行かなくちゃ」
「別れを辛くさせないための、余所余所しい演技か？」
「そんなのとこかな？」
「手遅れだがな」
「俺もそう思う」

「お前はいつの間にか、皆からの信頼が出来ている。もう良くないか？」
「随分知った口を聞くね」
「まぁな」

クシャナは小さく笑って席を立つ。そして板張りの床の上で、くるっとこちらを向く。そして一言。

「気に入ったぞ。零次」
「へ？」
「お主の心遣い。気に入った」
「あぁ…。どーも」
「悟られぬようにするも良し。だが、いつまでもその調子だと襤褸が出るぞ？」
「……」

クシャナは今までに無いくらいの、はしゃいだ笑顔で俺に笑いかけた。何だか鋼龍の状態でいた時と比べると、まるで別の人格なのではないかと思う位、純粋で陽気だ。
彼女はそう言うと、外へと出て行った。毛布でも取りに行ったのだろう。そう思っておく事にする。

「ふぅ……」

俺は窓越しに輝く月を見上げる。俺以外の全員が寝静まったであろう集会所。気がつけば知らない土地に投げ出されて、気がつけば俺の周りには怪しい俺をすんなり受け入れてくれた仲間がいて、気がつけばそんな優しい皆に本音を見せない俺がいて…。

いつの間にか増えた仲間は、いつの間にか俺を信頼してくれていて…。
そして、またいつの間にか仲間が増えて、いつの間にかもっと賑やかになって…。
いつの間にか『厄災』が来て、団結して、結束して、立ち向かって…。
いつの間にかそれさえも乗り越えて、いつの間にか別れが来て…。
挙句、いつの間にか全て忘れてしまうのだろうか…。

「お主次第ではないか？」
「！？」

考え事をしていて気がつかなかったか、あるいは気配を消していたか、クシャナは俺の横に立っていた。

「お主のやり方に口出す気は無い。しかし、お主が決めた選択は、この世界を揺るがす事になるかも知れん。」
「……俺が？」
「うむ」

クシャナの言葉には重圧があった。しかし、内容とは裏腹にクシャナは聖母のように優しく笑った。その笑顔が、妙に懐かしく思えて仕方なかった。何故だろうか？　俺はこいつを知っている気がする…。

「零次」
「ん？」
「明日、ちょっと付き合ってくれぬか？」
「内容による」

「随分ひねくれた言い回しだな」
「今まで散々な目に遭ってるから…」
「大変そうだな」
「全くだ」

そう言うとお互い苦笑した。クシャナとは何だか喋りやすかった。やっぱり、知ってるような気がしてならないのも含めて。

「おっ、つい本題を忘れそうだった」
「あっ悪いな」
「いや、構わん。本題だが、シャンドまで用があってな」
「えっ…モンスターだったら、モンスターの格好で行くつもりだったのか？」
「いや…。それは無いだろう…。俗に言う急用って奴だ」

クシャナの言い方は、何かを隠しているようにも取れた。しかし、俺はあえて突っ込まなかった。それよりも、大都市に行ける喜びが勝っていた。

「分かった。付き合うよ」
「おぉ！！　感謝するぞ！！」

クシャナはまるで子供のようにはしゃぐ。俺はコイツが一体何を考えているのかは分からないが、悪い事ではないだろうと信じる事にした。
麗しく輝く月光の傘下で、俺はまた騒がしい一日を送るための約束を結ぶ。今回の約束が、とんでもない事の幕開けになるとも知らず…。

3

「はぁ……」

クシャナと零次の会話から何時間経ったろうか？　カウンターに突っ伏していたフィルは、自分の飲んでいたジュースグラスに映る自分の顔を見て、大きく溜息を吐いた。

別にあくびではない。まだ眠い。何故なら、昨夜は一睡もしていない。

ただただ、息を潜めて一人浮かない顔で……。

「クシャナ…知ってたんだろうね。私が起きてるの…」

誰に向けた言葉でもない。他の皆は酒の力を借りて、今も安眠の真っ只中だ。

「ずるいよ…」

ギュっとコップを握り、その手に力を込める。フィルの力では到底割れない。分かってる。そんな事は分かっているけど、何かに気持ちを発散させないとやっていけない。

そんな中、標的はオトモに変わる。

「零次…。私のオトモでしょ…」

勿論、オトモとしてだけではなく…。

まだ薄っすらと明るい外。中途半端な明るさゆえに、小鳥の囀りも、村の人の声も聞こえない。

孤独…。何も言わずにいると、不意に涙が零れそうになる。

「零次のバカ…」
悔しさと寂しさと不安を込めて、オトモを罵った。

第6話・強制的鋼龍戦？！！　～ディアの野望、完遂編～（後書き）

鋼龍編、何とか終焉。

上手くまとめられたなんて思っちゃいませんが、やろうと思えば幾らでも長くなれることを知りました…。

何か喋ることも無くて悪いですが、7話の布石でも…。

次話では、世界の理の話に入っていきます。

また一人増えるかもしれません。

ってか、少し面倒なことになると思います。

いまいち世界観が掴めない場合には、取り合えず何か感想欄にコメントしてくれれば、幾らでも修正しますです。

ではでは…。

第7話　対立と少女と厄災と・尺取編　～新しい事を、何かしらやってみること

何故だろう？　こっちに来て早2週間。こんなにも清々しい朝日をこの身で迎えたのは、何だかんだ言いつつも初めてのように感じる。

それもその筈。こっちに来てからというもの、連日に及ぶ死亡フラグに追いかけ回されるばかりのクエストで、朝日をまじまじと見てる暇なんて無かったのだから。

「やっぱりいいなぁ…。こんなにも、朝が素晴らしく感じられる日があるなんて…」

自分の事なのに未だに客観的な物言いなのは、この状況を飲み込めていないからである訳だが、今日はこの平穏をぶち壊す之と言った用事もない。

有るとすれば…。

「おぉ零次。起きてたか？」

「あぁ。まぁな」

こうやって態々、良い笑顔で迎えにきてくれたクシャナと、西国で一番の大都会である『シャンド』に行く予定くらいだろうか？何とも現実世界では立ち上がりそうも無いフラグに、多少気分も踊る。

「残念だが、そのフラグは今すぐ圧し折らせてもらうぞ？」

「！？」

「んあ？　どうかしたか？」

「いや…。成る程な…と思って」

「心配しなくても、こういう段取りだ」
「……」

聞きなれた声に、取り敢えず反射的に声の主から間合いを取る。そこにはタバコを蒸かしながら、いつもアイルーを連れたお婆さんのいる石に腰をかけるディア。
俺が取った行動に、ディアは少し不満気な表情を見せる。

「……おい」
「……何ですか？」

それ以上の言葉が口から発せられる事は無く、ディアはただただ手招きをする。……間違いない。俺の全てが、あの行動の先に見えるものを悟っている。
間違い無く、タバコを手で揉み消される…。

「取り敢えず来い」
「……」

渋々、その手招きに応じて先生に寄る俺。何の心配も要らない。先は見えている。何故なら、ディアが凄い嬉しそうな顔をしているから。
勿論！！　今日の俺は一味違う！！

「何でしょう？」

ある程度近くまで寄ると、案の定と言っても過言ではない言葉が、俺の耳へと飛び込んできた。

「手ぇ出せ」

当の本人はすっごい嬉しそう。そりゃ、今からディアにとっては楽しい弄りの時間なのだから。
その表情を打ち破るが如く、俺はとある物を持って、手を差し出した。
次の瞬間には、ディアの表情が曇る。

「……あ？　零次…何だこれ？」
「何だこれ？　じゃ無くて、灰皿ですよ」

俺は灰皿をディアに差し出した。勿論、集会所のテーブルの上にあったアルミ製の物を、勝手に拝借したまでだ。
ディアは何も言わずにそれを受け取る。何だか今日は、いつものディアの勢いが無い。目が凄い眠そうだ。
……なんて考えて、油断した俺が馬鹿だった。

『パカーン！！』
「いったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ディアは目に生気を戻したかと思うと、渡した灰皿を縦にして、俺の頭に振り下ろした。俺はあまりの痛さに、地面をのた打ち回る。
ディアの、あの嬉しそうな顔が何ともフラッシュバックしそうで怖い…。

「ちょ！！　ディア！！」
「気にするなクシャナ。峰打ちだ」
「いやいやいやいや！！　灰皿に峰打ち無いから！！」

のた打ち回る俺と、当の本人の横暴止めるクシャナ他所に、ディアは「あぁ…。どうやってタバコ消そうかなぁ…」と、訳分からん

事を口走る。
よく見ろ！！　俺が渡したものを！！　そして分かれ！！　灰皿の使い方を！！
「黙れ零次。踏まれたいのか？」
「喋ってない！！　喋ってないですって！！」
「何がお好みだ？　お前の好みに合わせて、マスターがやってくれるぞ？」
「それは身体的ダメージよりも、精神的に大きなダメージがっ！！」
そこまで言ったところで、問答無用でうつ伏せの俺の上にヒールが飛んできた。
「ほらほら…黙れ。踏んでやるから…。あれか？　黒タイツか？　黒タイツ着用が良いのか？」
「ちょ！！　……おまっ！！　やめっ…！！」
「やめろディア！！」
クシャナの仲介により、何とかディアを制止させる。
何だろう？　ディアのテンションが理解不能の境地に…。
「ハァ…。どうしようタバコ…」
「……」
間違いないデジャヴ…。ここに反論すれば…踏まれる。
俺が何も言わない事を悟ってか、ディアはターゲットを俺からクシャナに移した。
クシャナ…。ゴメン…。俺は仲介できそうにないや…。
「クシャナ…。ちょっとこっち」

「……」
「どうした？」
「嫌な予感しかしないのは気のせいか？」
「気のせいだ」

一応何かあるのは確信した上で、クシャナは渋々ディアの下へ。しかし、仲介に入るとか入らないとか、そんな問題はそれこそ一瞬で一蹴された。

「正座」
「えっ？」
「せ・い・ざ」
「えっ…？　でもっ…」
「せ・い・ざ」
「……」

明らかな脅迫交じりの現場を、この目で目撃。何故かディアの前で正座させられるクシャナ。新手の公開処刑ですね。分かります。

「前屈み」
「……」
「ま…」
「分かった分かった！！」

診療所で二人の間に、何かしら密約が交わされたらしい。きっとディアの前にいるのは、新しい玩具……。

「ショータイムの為に…」
「えっ！？　何をするっ！？　ディア！？」
「気にするな。　只の拘束具だぞ？」

「『只の』の意味が分からない！！　あっ！！　いつの間に付けた！？」
「いっつ、しょーたーいむ！！」
「ディア！？」

ディアは理解不能なテンションのまま、突っ切るみたいだ。一体何をしようというのだろうか？　先が見えないフラグほど怖いものは……

『ブシュウ…』
「○×◆△●□～～～～～～！！！！！」
「！？」

地の文も途中で投げ、取り敢えず俺は、元から悪い目を更に疑った。
ディアは咥えていたタバコを手に持ち替えると、火が点いているそのままクシャナの胸の谷間に突貫！！

クシャナは言葉にならない悲鳴をあげて、その場に蹲る。ディアは恍惚の表情。俺はその光景を見て呆然。

「あっ……ぁん。うぁ…ぅ……っ…」
「ほら零次。助けたれ」
「おい医療関係者！！　随分無茶苦茶言うなぁ！！」

喘ぐクシャナと俺を交互に見て、ディアはニヤッと笑い、俺の次の行動を窺う。目の前に突き出された究極の選択。
正直、色々間違ってる作者を恨む。

究極の選択
A．よしっ！！　助けるために、手をクシャナの胸に（以下省略
B．全力でディアをぶっ飛ばせば、何とかなる気がする！！
C．ワタシ何モシナイネ！！　様子見守ル事大事ネ！！

「C……しか無い気がする」
「Bの選択肢を選んでくれても構わないぞ？」
「露骨過ぎる死亡フラグなんか踏んでる場合じゃない！！」
「意気地なし…」
「そう言う問題じゃねぇ！！」

何故か、盛大に『B』を勧めるディア。間違いなく、俺の鉄拳がかわされた後に、俺は刺身にされて皿に盛られてしまう…。
尾頭付きは目出度いらしい。……いや。如何なものか？

「Aなんてどうだ？」
「！？」
「零次！！　正当な理由上のセクハラなら、きっと大丈夫だぞ！！」
「大丈夫じゃねぇし！！」

『A』　の選択肢は夢があって良いけど、この後の好感度に壊滅的な問題が生じる可能性がある…。

「あっ…。いい忘れてたわ零次」
「へっ？」
「あのタバコの火、テオの火だから中々消えないぞ？」
「なっ！？」
「ほれほれ。早く助けるよろし」

図ったな！！　ディア！！　なんて野郎だ…。これで『C』の選択肢が、消えてしまったじゃないか！！　『B』か？　『B』なのか！？　いやいやいや！！　露骨過ぎる！！先の展開が見え見えすぎる！！　デゼルトコーンで殴っても、あの人死にそうに無いよ！！

「ふむ。ハンマー位なら片手で受け止めてやろう」

何かスゲェ事口走ってるし！！　奴ならやりかねねぇ！！　『B』却下！！　『B』は却下だ！！

そんな処理落ちの中、俺の考えに舞い降りたヒント。

「零次？　火なら水で消えるけど？」

「なっ！！　成る程！！　先生！！　その発想は無かったわ！！早速水を…」

「この朝の寒い中、女の子に水かける狼藉者はいないよなぁ…」

「……」

「なぁ？　いないよなぁ？　零次？」

「……もっ！！　勿論ですよ！！」

「だよなぁ？」

鬼だ！！　鬼がいるぞ！！　俺の目の前に、医者の皮を被った鬼がいるぞ！！

大体の選択肢が闇に葬り去られる中、『A』だけが残っている。エロゲでも何でも、好感度が然程上がっていない状態での、スキンシップは言語道断！！

しかし、悪魔は待たない。

「さてさて。ほら零次。早くしないと。クシャナが気を失っちゃったぞ？」

「なっ！？」

「私の注射で」
「オマエェェェ！！」

だんだん飽きてきたのか、ディアは棒読み一歩手前くらいのリアクションを、俺にくれやがった。こっちの世界で生きることの難しさを、今知った気がする。

「あっ」
「ん？　どうした零次？」

そんな俺に一筋の光が見えた。……が、それはセクハラとか言う以前の問題。

「服を脱がせる…」
「……ほう？」

ディアは悪魔のように口角を大きく上げる。大きなフラグを踏んだ事に気がついた時には、既に手遅れだったことは言うまでもない。

「ＯＫ　それでいこう」
「……」

ディアの口からは、欲望に満ち溢れた一言。俺は朝から何をやっているのだろう？　本気で分からなくなってきた。
駄目だな…。夏の日差しが俺を狂わせるんだ…。秋だけど…。

「あっ。どうでもいい事だが、服燃えてきたぞ？」
「おぅい！！」

この際迷っている暇なんか無い！！　何より人の命が最優先され

るのが、現場なんだ！！　俺はそう勝手な認識を頭の中に抱いて、クシャナの服に手をかけ上に持ち上げる。
少年誌では解禁してはいけないものが、既に公衆の場であらわになっている件については、もう気にしない事にしよう。本人の意思はあくまでも無視したと仮定した上で。
その前に公衆といっても、俺とディアしか回りにいない。

「だぁぁぁぁぁ！！！！」

掛け声一つ。俺は服を一気に脱がす。しかし、とんでもない事に気がついた。

「なぁ零次。分かっていてあえて言わなかったが、服を脱がそうと脱がさないでおこうと、胸に手を突っ込まなきゃいけない状況は変わらないからな？　じゃないとタバコとれねぇし」
「！！」
「取り敢えず、お前のやった事は中々の重罪だぞ？　セクハラじゃ済まないと思う」
「！！」
「取り敢えず火傷は必至だろうけど、タバコ取り出してやれよ」
「！！」
「おいおい…。今更躊躇うなよ、変態」
「！！」

朝から状況の呑み込めない珍騒動が勃発。朝を楽しんでいた、あのささやかな時間は何処へやら…。　ＨｅｌｐＭｅＥＲＩＮＮＮＮ！！

「取り敢えず腕を高く振り上げても、蓬莱のお医者様は来ないと断言する」

「ってか、医者！！　何とかしろよ！！」
「これはお前が何とかするからこそ、面白いんだろ？」
「面白くなーい！！」

俺の反論も虚しく、時間だけが刻一刻と過ぎ去っていく。これは不味い。

「男だろ！？」
「男だからやるとかやらないとか…」
「死ぬぞ？」
「うおおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

その一言に決心して、胸に手を突っ込んだ。クシャナが少しビクッとしたのは、多分気のせい。うん！！　気のせい！！　絶対気のせい！！
しかし、現実というのはとても厳しい。そして、神様というのはどうやらかなり意地の悪い奴のようだ…。

「おっはよー！！」
「おはようございます」

家から出てくるフィルとアルト。二人とも余所行きの格好で、中々華のある服装だ。
……勿論。今は服装の事なんて誉めても取り返しがつかないくらい、死亡フラグのお釣りがきてしまう。フィルもアルトも言葉を失う。
彼女たちの眼前に広がる光景といえば、笑いを必至に堪えるディアの前で、クシャナの胸の谷間に手を突っ込んでる俺。
自らの目で見ている為、勿論の事画像補正はしていない。やってはいけない乳●解禁！！

「……」
「……」

フィルはワナワナした、何とも言い難い表情で俺を見る。アルトは何となくではあるが、ディアが関わっている事に気がついているようだ。
取り敢えず俺は慌てて、タバコと一緒に手を引き抜く。時既に遅し。

「れいじいいいいいいいい！！」
「違うんだってばぁぁぁぁぁ！！」

拳を握って俺に飛び掛るフィル。その拳は間違いなく顔面狙いっ！！
そんな俺たちを他所に、アルトはディアに話し掛ける。アルトから話し掛けるなんて珍しい話なので、ディアも少し驚いているようだ。

「先生？」
「気がついてたりするか？」

『おっ？』と一言漏らすと、ディアは堪えきれずに笑い出した。それを見て、アルトの不透明な疑惑が確信に変わったのは言うまでも無い。

「やっぱり先生の仕業ですか？」
「日に日に勘が鋭くなってきてるな」
「野生の勘かも知れませんけどね」

アルトは誤魔化そうとするディアに苦笑いで対応。ディアも半分喧嘩になりかけているフィルと俺を見て苦笑い。
そして溜息混じりに一言。
「取り敢えず、今から『シャンド』に行くのにこの修羅場は不味いな」
「御自分で作られたんですよね？」
アルトに痛いところを突かれて、ついつい愛想笑いが零れる。アルトはメイド服のフリルを揺らし部屋に戻ろうとする。
その後姿に、自分を取り繕うためか否か、ディアは声を掛けた。
「まぁ、そう言うなって。お陰で朝から気分がいい！！」
「ハァ…。取り敢えずクシャナさんの服を持ってきますから、弁解は頼みましたよ？」
アルトは振り返ってそう言うと、部屋の中に消えていった。
「あぁ。任せとけ」
見えない後姿に、ディアは小さくガッツポーズを送ると、喧嘩の中に入って仲裁。これまでの流れを一通り説明した。
こうして俺の一日は、解ききれていない誤解と、外部傷害という形で幕を開けるのだった。
まだシャンドにも着いていないというのに、何と言う倦怠感…。死ねる…。
「取り敢えず、朝飯食ったら出発するか」
ディアの提案で、中に入る事にした。誰か外に置き去りにしてい

る件については、金輪際それ以上触れるものはいない。

ω

「全く…。とんでもない朝にしてくれたな…。零次よ」

キッチンのあまり大きいとは言えないテーブルを、皆で囲んだ中でクシャナが全てを聞いて、俺に呆れた口調で言う。

フィルとアルトは頭を抱えて『ハァ…』と深い溜息を漏らす。ディアに至っては「全くだ」と、自己責任の全否定。

すかさずクシャナが口を挟む。

「ディアが全般的に悪いのは、ご理解頂けて？」

「あぁ…。悪い…」

クシャナに笑顔で詰め寄られ、ついつい謝罪の言葉を口にするディア。勿論の事だが、クシャナは笑ってはいても、とても怒っていらっしゃる訳だ。

「全裸で外に放置なんて、女の子にする事かな？　零次？」

「……」

「かな？」

「違うと思います…」

「だよね？」

誘導尋問だが、そんな事言ったら間違いなく鉄拳制裁だ。今のクシャナにはそういう権利が与えられているのだから。

「で？　ディア？」

「なっ…。何だよ…？」

「これ灰皿って言うんだが？」
「んなこた分かって…」
『パカーン！！』
「っぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

キッチンに響くあの金属特有の高く濁った音。クシャナが半笑いでディアの頭に『縦一閃』！！　これには傍観者も驚嘆の一色に染められる。

「灰皿はタバコを捻り消すものだ！！　叩くもんじゃない！！」
「テメェ…」

自分も同じ行いをしているのと、相手に火傷を負わせているのとで、ここ一番でいつもの横暴が使えないディア。
『我慢』って素敵な言葉だと思うんですよ？

「はい。零次」
「？」

突然話を振られたと同時に、手渡された紙切れ。勿論、唐突な話の振りにもビックリしたが、何より渡された紙切れの内容に俺は驚いた。

「えっ！？　何これ！？」
「取り敢えず、今日シャンドに着いたら、指定したその場所に一人で来い。」

クシャナは真面目な顔でそう言う。そしてそのまま「黙って持っていろ」と一言。その威圧に圧されてか、興味はあるんだろうけど、その紙切れを誰も覗こうとはしない。

俺は取り敢えず、その紙切れを一枚ポケットに押し込んだ。
「この件については以上で終わり！！　二人とも反省するんだな」
クシャナは背もたれに寄りかかると、俺とディアを交互に見てそう言った。ディアは渋々「分かった…」と子供のように拗ねてしまった。俺は取り敢えず「あぁ…」と上辺だけの了承。
するとタイミングよくアルトが朝食を持ってくる。……よく見ると少し温くなっている。話が終わるまで、朝食を出すのを待っていたようだ。何とも律儀というか…。何というか…。
ある程度朝食が並び、取り敢えず皆で手をつけ始めたとき、クシャナが口を開いた。
「それにしても零次。そんなに胸が揉みたかったのか？」
「ぶっ！！」
危うく俺の口から散弾銃が飛びそうになる。そこはぐっと堪えた上で、俺は口の中の物を無くして反論に徹する。
「今回は不可抗力だって！！」
「へぇ…。そうなのか？　ディア？」
「んあ？　いいや。故意に揉んだんだぞ？」
ディアはフォーク片手に、雄弁にそのノリに参加する。ディアがそう言う事言うのが一番影響力があるって分かってんのかなぁ！！
するとその言葉に対して、クシャナはニヤッと笑って便乗する。
「あっ。やっぱりか？」
「ちょ！！　先生！！　言いがかりはよして！！」

二人は意地悪そうに笑って、皿に盛られた料理に手を伸ばす。ここで話が終われば平和的解決と言えよう。
そうはいかないのが、何度も言うが『現実』！！

「ちょっと零次！！　故意だったの！！」
「フィルが何で怒るんだよ！？　あっ！！　フォーク投げんな！！」

俺の横を擦れ擦れで通過するフォーク。そのまま木の壁に『ビィィィィン…』と鈍い音を立てて突き刺さる。
フィルはご立腹だ。相当ご立腹だ！！　何でか分かんないけど！！

「零次様…。不潔です」
「この件に乗っちゃうんだ！！　アルトまで！！」

まさかのアルト乱入！！　キッチンに味方の姿が見えなくなった瞬間だった。

「全く…。これだから不純の塊は…。」
「先生にだけは、言われたくないなぁ！！」
「会って間もないクシャナを襲うだなんて…。」
「切れますよ先生！！」
「うわっ！！　今流行りのキレる子供！！　現代社会の闇を垣間見たね！！」
「ウゼェ…！！」

からかわれていると分かっていても、凄い頭に来るのはカルシウム不足じゃ説明がつかないと思う。目の前にいるゾー〇を討伐しなければ！！

「あーぁ…。零次に襲われちゃった…。」

「そこ！！　ふざけない！！」
「責任とって貰わなきゃ…」
そう言うと詰め寄ってくるクシャナ。しかし、現実はそんなに甘くない。
「ばかぁぁぁぁぁぁ！！」
「！？」
次の瞬間、中に浮く俺の体。よく見る時間は無いけれど、よく見るとフィルが横からボディーにタックル。俺に抱きついたまま、窓の方に吸い込まれる。
俺の見える世界はスローで、驚嘆で目が真ん丸の皆が見える…。
『ガッシャァァァァン！！』
盛大に割れる窓ガラスと、昔に学校でよく聞いたガラスの粉砕音。俺は背中で窓ガラスを突き破り、そのまま外に放り出される。
勿論、俺にしがみ付いたままのフィルも、共に落下。このまま2M位下の地面に落ちれば、ガラスで大惨事。
どうする事も出来ないのは、取り敢えず受け止めなければいけない事実！！
「うあぁぁぁぁ！！」
俺の悲鳴が木霊する。フィルは目をつぶっているばかり。
そういや落下するときは、時間が長く感じるらしい。その通りだと、断言しよう。
「あの馬鹿っ！！　任せたクシャナ！！」

「あぁ！！　行け突風！！」

ディアの要請を受け、クシャナの手から巻き起こる突風に、俺とフィルの体は大きく軌道を変え吹き飛ばされる。
その直後に、ディアは小さく言葉を漏らした。

「あっ…。ヤベェ…。考えてなかった…」
「ディア！？」

突風。直訳すれば突然吹く強い風。案の定というか、勿論というか…。ガラスも凄い勢いで飛んでくるんだなぁ…。
『ドンッ』という鈍い音を立てて、俺は背中から地面に着地。『ズザザザザァァァァ！！』と突風のせいで地面を高速スライド！！　痛いとかいうレベルを余裕で超越。

「くぁ亜ｗセｄｒｆｔｇｙふじこｌ０ｐ！！」

ついに記号でさえ表せない、意味不明の言語が口から出てくる。まぁ、摩擦熱とスライドのコンボは、言葉にすらならない痛みだ。
俺の擦った跡に沿って、ガラスがナイフのように地面に突き刺さる。そんなガラスの恐怖に、摩擦の痛みが勝利。恐怖感は何も感じない…。

「……」

やっと止まった体。背中がとんでもない状況になっていると思う…。村から一歩も出ていないのに、今日もこんな感じに纏まってしまうんだろうか？

「お～い？　大丈夫か～？」

遠くでディアの声が聞こえる。手をあげる事も出来ずに、俺はそのまま気を失ってしまった。

『シャンド』が遠のいていく……。

第7話　対立と少女と厄災と・尺取編　～新しい事を、何かしらやってみること

ゴメンナサイ。

いや…何か沢山の無理が重なりに重なりまくったんです…。

展開が進むどころか、朝が始まって朝飯までしか進んでない上に

主人公怪我して、目的地に次の話で到着するかどうかさえ危い…。

友人は、大まかな話しくらい作れって言うんですけど、

そういう何かに沿ってやるのって苦手みたいで…。

ぼちぼち更新もスピード上げます。

一話一ヶ月なんて、今回だけだと思いたい…。

P．S

あぁ…。

あれかな？

もっと下のネタが満載でも良かったかな？

せめてあんまり入り込まないようにしようと努力したつもり…。

後日訂正しますんで…。

第8話　対立と少女と厄災と・真相編？　～必然と言う名の運命～

「全く…。この異常な回復力…。お前はなんて言うサ〇ヤ人だ？」
「誉めてもらってるんですかね？」
「どーだか」
診療所の丸椅子に腰を掛けて、胴を包帯で巻き上げられた俺は、取り敢えずディアの皮肉を笑顔で受け取る事にした。
あの後で気を失った俺は、クシャナに担がれ診療所に直行。ディアの神の手によって見事復活を遂げた訳だ。
「ホントに、もう歩けるのか？」
「えっ？　余裕ですよ？」
「一体どんな体の構造してるんだよ…」
ディアは苦虫を噛み潰したような顔をして、頭に手を当て唸り始める。回りも随分驚いているが、何より一番驚いているのは俺だ。
何だ俺？　何だ俺？
そんな医学的に人間否定されたような状態の中、ディアは頬に手を当て、ニヤッと顔を崩して嘲笑うかのように俺をからかい始める。
「まぁ…何だ？　お前、いい具合に不幸体質だな。表彰物だぞ？」
「こんなの俺も初体験ですよ…。防具に『不幸』でも付いてるんですかね？」
そのからかいに、少し真面目な顔でそう言い返した俺を、ディアは不思議そうに見つめる。俺…何か気に障ることを言ったかしら？
「何だ？　防具に『不幸』って？　曰(いわく)かなんか付いてんのか？」
「へっ？　付属効果…」
「あん？　何のＲＰＧだ？」
この瞬間、『モンスターハンター』という世界観から、この世界に於(お)ける防具の効果が崩れていったのがよく分かった。
何も言わない俺を見かねてか、ディアはそのまま続ける。
「また『もんはん』とか言うゲーム上の設定か？　いい加減勘弁し

てくれ。」
頭痛そうに話すディアに、一応として俺は補足を入れておく。
「でも、この世界に存在するモンスターが、そっくりそのまま出てくるんですよ！？」
「偶然だろ？」
俺の精一杯の説明も虚しく、ディアの前では『偶然』の二文字で一蹴されてしまった。納得いかないのは山々だが、それも口出しできないようになる。
「じゃあお前。全身甲冑（かっちゅう）着てグン〇ニル持ったら何か付属効果付くのかよ？」
「例えがおかしい！！」
俺の一喝でディアは溜息を漏らし、じゃあ…と言って『例えその2』を寄越してきた。
……ハイテンションで雄弁に意味不明なことを言うゾー〇に、最初っから普通の例えを寄越して欲しかったとは、口が裂けても言えない。
難儀な会話フラグだ…。
「じゃあお前。上下ユ〇クロのスウェットで、付属効果が付いてくんのか？」
「えっ…デジャヴ？　いや…ってかスウェット？」
「付かないだろ？　ってか、服着ても普通は切れ味とか上がんないだろ？」
「まぁ…」
「お前の考えるこっちの世界も、至って普通なんだ。」
「普通…？」
「何だよ？」
「いや！！　何でもないです！！」
ディアの眉が、ちょっと吊り気味になったのに気が付くや否や、俺は慌てて肯定的な、保守的な位置に就く。
誰だって、自分の身は大切なんですっ！！

ディアは一通り言い終えると、コーヒーを一口、口に含んで一息ついた。俺も腕を伸ばし、一時的な休息に入る。
外は太陽が真上まで昇り、秋を感じさせない何ともポカポカとした陽気だ。……別にそんな事が言いたい訳じゃない。『シャンド』に行く筈なのに、もう昼真っ盛りだ。
「もう真昼だ…」
クシャナが小さく呟いた。此方からは眼帯の方の眼しか見えないから、表情は定かではないが、きっといい顔はしていないだろう。シャンドへの旅路を、遠足気分で楽しみにしていたみたいだ。
何と言っても、シャンドまで半日かかるこの距離。正直ありえない…。勿論、さっき聞いて知った事だ。元から知ってたら、快く『行く』なんて言ってないかも知れない。
「また明日行けるって。なっ？」
クシャナを元気付ける為、せめてもの応急処置のような言葉をかける。それがどれだけ効果を見せるかは分からないが、何も声を掛けないよりかは、幾分マシなのではないかとも思う。
しかし、俺の発想は甘さの極みだった。
「あん？　何言ってんだ零次？」
俺の後ろから、宜しくないフラグへの招待状が、来ている気がしなくも無い。否！！　間違いなく、これは不味い…。
「どうかなされましたかね？　ディア殿？」
「ちっ……」
「舌打ち！？」
「あーぁ。あからさまな敬語。きめぇきめぇ…」
「そこまで言います！？」
ディアは取り敢えず椅子に腰を掛けなおし、俺とは故意に視線を合わさないようにしながら、吐き捨てるように言った。……何という逆高待遇。
「シャンドにすぐ出発するぞ。マスターが向こうで待ってる」
「えー…」

「露骨に嫌な顔するな」
「顔見てないのに！？」
「見なくても分かる程度の能力」
「激しく不必要な能力ですね！！」
「合コンとか使えなくも無い」
「するんですか！？」
「残念だが生まれてこの方、男に困った事が無いんでなっ！！」
「うーわ…。殺してぇ…」
ディアの本当か嘘か分からない発言に、俺の右手が光って唸りそうになるのを抑えつつ、俺は脱線した話を戻す。
「んで、絶対に今日行かなきゃ駄目なんですか？」
「あぁ。緊急を要する用でな」
「厄災関連ですか？」
「そんなとこだ。まぁ、強いて言えばお前に関係する事だな」
「俺ですか？」
「他に誰がいるんだよ…」
俺の返答に、盛大に溜息を漏らすディア。取り敢えず、呆れられた事は間違いない。
そんな中、さっきまで死んだ魚のような目をしていたクシャナが、息を吹き返した事については触れないようにしよう。
少し空気が落ち着いたところで、俺は最終確認を取る。
「えっと…。行きます？」
「準備出来次第だな」
ディアは残っていたコーヒーを流し込み、大きく伸びをしてそう言った。傷口が痛んできたとか言ったら、シャンドに行くのが明日になったり…。
「しないな」
「ですよねー」
俺の思考を読み取って、ディアが淡々とそう告げた。こんなやり取りになるだろうと分かってはいたけど、やってみなきゃ分からな

いと言う精神論も…。
「ないな」
「……」
無いみたいです。ディアの前では全てが無に帰すと言う事でしょうか？　困るとか言うレベル超越です。ゾー〇とか言ってられないです。
ラプ〇ーンが妥当な線かと？
「勿論、完全体に決まってるぞ？」
「否定して下さい！！」
ディアが満更冗談でも無さげな言い方をした為、俺は背筋に冷たいものが走った。否、常時走ってる！！　これがマヒャ〇デスかっ！？
そんな御ふざけムードの中、診療所の扉を申し訳無さそうに開けて、メイドさんが入ってくる。話を変える為にはナイスなタイミング。
空気の読める人は違うね！！
「ディア先生…」
「おう？　どうしたアルト？」
最近、ディアの事を怖がらなくなったアルト。しかし、まだどこかぎこちない。そんなアルトに、ディアは精一杯の優しさで声をかける。
周りの見解は、『先生…。相当無理してるなぁ…』と。
「実は…」
「フィルか？」
「あっ…。はい…」
アルトの言いたい事を察してか、言い終わる前に問題の人名を出す。そういや、姿が見えない。
ここに居る全員の、彼女に対しての予想が、大体的中するのは言うまでもない。
「フィル様…。お部屋から出てこないんです…。声は何度もお掛け

したのですが…」
アルトは申し訳無さそうにそう言った。ディアは『うーん』と少し唸って考えたかと思うと、……まぁ、これも大方の予想通りの見解を示す。
「ほら。言って来い零次」
「……」
ほら来た。どうせそんな事だろうとは思っていたが、これはこれで大変だ。フラグの三文字で済ませられたら、どれだけ楽な事だろうか？
「まぁ、零次。よくある慰めのフラグだ。きちんとクイックセーブして行ってこいよ？　ＧＯＯＤなシチュエーションの為にも！！」
「人事だと思って…！！」
「人事だからな」
ディアは歯を見せて笑って、俺を送り出す。何か…ずるい。
しかし、俺の感情とは他所に、ディアは更にからかいの言葉を投げかけてくる。ラプソ〇ンには敵わないから、何も言わないけどだな…。
「零次！！　ミスった後のロードは早めにな！！　適当にセーブされちまう前にも！！」
「さっきからエロゲみたいに言って！！　俺の身にもなって下さい！！」
「色んな意味で、フラグが立てば逝ってよし！！」
「本気にしますよ！？」
そう言った瞬間、悶絶してるクシャナが居たのもきっと気のせい。俺には何も見えてはいなかった筈！！
俺は大きな溜息を引き連れて、診療所を後にした。

ω

「レイ様？　入りますよ？」

扉の向こうから、貫禄ある声が聞こえた。大きく、大人でも開けるのに苦労しそうな扉の先に、その部屋はある。
ここは西国『シャンド』。その城の中の部屋にいた少女は、その声を聞くや否や、扉の方に小走りで近寄る。
「あっマスター？　元気してた？」
「へっ？　あぁ！！　元気ですとも！！」
レイはやって来たマスターに抱きついて、嬉しそうにそう言った。いつもとは違うレイのテンションを、マスターは少し不思議に思いつつも、その答えはすぐに見えた。
至って簡単な話だ。
「今日さ！！　皆くるんだよね！？」
「えぇ。その手筈ですよ？」
「わぁ…。楽しみだなぁ…」
そういう事だ。今日はマスターの管轄する村の皆。つまり零次達がやって来る日だ。
その少女は、彼らに会うのをとても楽しみにしている。
そんな様子を見て、マスターの顔にも僅かに笑みが零れる。何時しかぶりだろうか？　レイのあんな表情を見たのは…。
「レイ様？」
「うん？」
溢れんばかりの笑顔を向けるレイに、マスターは少し照れたような顔になったが、直に話を本題へと持っていく。
「全てをお話になられるのですか？」
「……うん」
マスターの真剣な表情に、レイは少しポカンとして受け答えを交わした。すこし頼り無い肯定のようにも聞こえたが、マスターにはその肯定で十分みたいだ。
「もし彼が、今回の話を聞いて否定的になったら…？」
「大丈夫だよマスター」
マスターが最後まで言い終えるのも待たずに、レイはくるりと窓

の方を向いて呟くように言った。さっきとは違い、その言葉は言い表せないような自信に満ち溢れている。
「成る程…」
マスターはそれ以上は何も言わずに、少し含んだような笑いを浮かべて、ただただ一言だけそう言った。
そのマスターの一言を受け取ったレイは、何も言わずに大きなガラス張りの窓と近づいていく。そこから見えるのは、シャンドの目新しい町並み。
その瞬間、空気は一変する。
「ねぇマスター？」
「……はい？」
レイが窓の外を見ながら、マスターへと呼びかける。マスターは少し遅れてその呼びかけに応答した。
太陽が真上に昇り、秋とは思えない温かさがシャンドを包み込む。その太陽がレイを照らし、影を作り出す。その影は、人の形を成さない。
「今回で、『厄災』も何もかも全て終わらせよう…」
「……」
マスターは何も言わずに黙ったままだ。レイはそれを気にとめる様子も無く、自分を正面から照らす太陽を少し鬱陶しそうに遮り、そのまま話を続ける。
「１０年前に奇跡をくれた彼は、見ず知らずの私たちみたいな出来損ないの為に、命を燃やして戦った…」
「……」
マスターは拳を小さく、強く握り締めた。それは紛れもない後悔の表れ。
レイは、包帯で巻き上げられた両手で自分を抱くように、体を窄（すぼ）めその場にしゃがみ込んだ。
「もう…誰も失いたくない…。もしも綺麗事にしか聞こえないなら、それでも良い…。」

「……」
マスターは、しゃがみ込んだレイに近づく事が出来ない。何がそうさせるのか分からないが、動けないような場の状況なのだ。
「分かってる…。感じてる…。各国が西国の民を許してない…」
「……」
何の言葉も掛けられず、マスターは途方に暮れて立ち尽くすばかりだ。しかし、レイはマスターが言うであろう言葉が分かるのか、何の差支えも無く話を進める。
「ねぇ…マスター？」
「……はい？」
搾り出すようにして、マスターはやっとの思いで口を開いた。レイはスッと立ち上がり、マスターの方に横顔を向け、視線を落としたままに、今にも消えてしまいそうな声で一言。
「正し……かったのかな？」
「……何がです？」
マスターの頭に幾つかの選択肢が浮かび上がる。しかし、どれも良い物とは到底言えない代物ばかりだった。
レイは、薄っすらと開けていた眼をゆっくりと閉じると、小さな声で言った。
「私たちモンスターが、人間を望んだ事は…」
「……」
その部屋には、既に元の少女の明るい面影も無く、マスターの貫禄もない。
そこに居るのは、小さなか弱い老山龍と、時代を終えたラージャン。
「フィル…？」

ω

「……」
木製の薄い板に、無理やり埋め込んだような窓が印象的な扉の前で、俺は主である少女の名前を申し訳無さそうに呼んだ。
中からはゴソゴソと小さな物音はするものの、声が返って来ることは無い。
「入るよ〜？」
「……」
応答無しだ。いつもなら、拒否を表すような単語が返ってくる所。だから部屋には一度も入った事が無い。
「本当に入るよ〜？」
「……」
俺はあえて最終確認を取る。何となく、入った瞬間に何か飛んでくる気がしなくも無いが、そこはフラグの立て師とも名高い俺！！
根拠は無いけど、ココまでは良フラグだと思う。
『がちゃっ……キィ……』
何の変哲も無いドアノブを回して扉を押すと、扉は軋む音を立てて開く。中は昼間からカーテンを締め切っているせいで、薄暗い空間が広がっていた。
「フィ…ル…？」
「……」
薄暗い空間の中、ベットの膨らみだけがその中でも映えるように見えた。その膨らみは少しではあるが、モゾモゾと動いている。
何となく、ココらで嫌な予感がする。動物的な勘だ。
「先生曰く、出発するってさ」
「……」
応答は相変わらず無しだ。さてさて…。この辺でクイックセーブでもしておかないと…。どんな死亡フラグが起こるか分かったもんじゃない。
俺は一旦大きく息を吸って、深呼吸を行う。気持ちを落ち着かせる為に。

「なぁフィ……」
フィルの名前を呼ぼうとした俺の口は、何の前触れもなく動かなくなる。空気に当てられたとかじゃない。全く持って、意志とは関係なく動かないのだ。
話は簡単。足元には狩りでよく見る『痺れ罠』。よく見るとかなりのコンパクトサイズ。何も知らずに踏んだ俺。
答えは明白な『死亡フラグ』。クイックセーブは気休め。意味は無し。
「っ……！！！！」
俺は体の自由を失い、床に勢いよく倒れた。体中が痺れて動かない。感覚すら麻痺している為か、打った患部に痛みは生じない。
「フィ……ル……？」
かろうじて口は動かせる。あくまでかろうじてだ。
床にうつ伏せで倒れこんでいる俺に、足音が近づいてくる。
「零次……」
「……」
かろうじて動かせていたはずの口は動きをなくし、少女の呼びかけに答える事もままならない。
ゆっくりとした足取りで、俺に近づいてくる少女。顔も上げられず、床しか視界に入っていない俺は、フィルの表情すら確認する事も出来ない。
「零次…。私の事…キライ？」
「……！？」
思いもかけぬ言葉に俺は驚く。フィルの声は冷たく、その足音は硬い。
俺の体中から冷たいものが噴出す。今回はガチだ…。
「ねぇ…どうなの？」
「ぐっ……！！」
フィルがおもむろに横腹に蹴りを入れたことで、俺の口から多少赤い物が出る。

考えたくは無いが、この子ヤンデレの気があるんじゃないかしら？
「零次？　クシャナがスキなの？」
「……？」
何故そんな事を言われているのか分からないが、今の俺は否定しようにも体が動かない。これは不味いのが必至だ。
「……っ！！」
フィルは唇を噛み締めると俺の襟首を掴んで、非力ながらにも持ち上げ投げ飛ばした。投げ飛ばすといっても、近くの壁に投げられたに過ぎない。
いや、十分だ。お陰と言っては何だが、俺は壁に凭(もた)れ掛かる形で座るような体勢を得た。
それは束の間の安堵。フィルは俺の胸座を掴んだ。
フィルは、目に涙を溜めている。
「零次！！　零次は私のオトモでしょ！？　じゃあ私の側に一緒に居てよ！！　狩りの時も！！　食事の時も！！　買い物の時も！！　暇な時も！！　休みの時も！！」
「フィ……」
呆気に取られた俺は、体の痺れが取れていた事に気が付くのが遅れていた。どうやら、投げ飛ばされた衝撃で抜けきったようだ。
フィルは泣きながら、尚も俺に向かって大声を張り上げる。
「いつもっ……ぅ。私の……。一番……っ。近くに居てよ……！！」
フィルは涙の零れ落ちる眼を擦りながら、精一杯の力を込めてそう言い放った。
俺はただただ、それを呆気に取られて見守る事以外出来なかった。
「もう…私の周りの人が居なくなるなんて…やだよぅ…」
「……」
最後にとばかりに、フィルは小さくそう言った。俺には、どういう意味か分からなかった。
「あっ……」
「ん？」

フィルが心の内を言い終えてから、数分の間があいた。俺はどう埋めていいかも分からずに、フィルと床とを交互に見るだけだった。
そんな中、フィルが突然口を開いたから少し驚いた。
「ゴメン…」
「……あぁ」
上手く言い返せなかった。フィルが本心で何を思っているのかも、いまいち曖昧で読み取れない。
何より気になるのが、『もう…私の周りの人が居なくなるなんて…やだよぅ…』というフィルの一言。大方１０年前の厄災関連だろうという目星はついているものの、それが本当かどうかの確信は持てない。
取り敢えず、俺は皆の所に向かおうとする。
「待って零次…」
「？」
立ち上がって出て行こうとした俺を、フィルは床にへたり込んだまま呼び止めた。しかし、俺とは目を合わせようとしない。
「もう少しここに居て…」
「……」
フィルは恥ずかしそうに胸の前に手を持っていき、目を逸らしながらそう言った。俺は悟られないような位、小さな溜息をつき、元の壁際に座り込む。
昼は、待ってくれそうにない。

ω

「もう少しここに居て…」
「……」
木製の薄い扉を一枚隔てた外で気配を消しつつ、ディアとクシャナ、アルトが一部始終を聞いていた。
勿論と言っては御幣があるかも知れないが、ディアの面白半分の

行為だ。それ以外に考えようがない。
（出るぞ…）
ディアが顎でそう合図を送った。二人はそれを察してか、音を立てないようにそそくさと太陽がまぶしい外に出る。
「まだ引きずってたか…」
外に出るや否や、ディアが小さくそう口にした。この内容について知っているのはディアだけらしく、クシャナもアルトも頭にクエスチョンマークが踊っている。
「何をですか？」
「１０年前のだよ」
「厄災ですか…」
アルトは『厄災』と聞いて悲しそうな顔をする。それを見たディアが、不思議そうに聞いた。
「あれ？　アルトは１０年前は西国側に付いたのか？」
「いえ…。私は草食モンスターの集合体ですから、記憶としては無数にあります。怒り、悲しみ、憎しみ。少なくとも負の感情が多数ですが…」
「あぁ…。悪い…」
「あっ！！　いやっ…！！　私個人としての感覚ではありませんから…」
ディアの申し訳無さそうな素振りに、アルトは慌てて顔の前で手を振って訂正する。クシャナは目を逸らす以外に出来る事が無い。
「……安心しろ」
「へっ？」
ディアはそんなクシャナに一言声をかける。
「お前は変わってくれた」
「っ！！」
クシャナは一瞬驚いたような表情を見せたが、直に嬉しそうな顔を見せ、『うん』と返事をする。ディアも心なしか嬉しそうだ。
「しっかし…どうすっかな？」

ディアは困ったような顔をして空を仰いだ。太陽は真上を過ぎ、いつの間にか沈む方向へと進路を変えている。
そろそろ出発しないと。日が暮れるのは覚悟だ。
「フィルの部屋の空気に耐えて、二人を連れ出せる者。挙手」
「……」
ディアの無謀な振りに、アルトもクシャナも苦笑い。決して手を上げようとはしない。勿論、ディアも手を上げてくれるだろうなんて思っては居なかったから、考えの範疇を超えてはいない。
「無理だよなぁ…」
「はい…」
「余程の勇者でないとな…」
ディアの無理発言に、クシャナもアルトも少しホッとした様子で会話に混じる。一向に先が見えない。打開策もない。
手詰まりとはよく言ったものだ。
「じゃあ…取り敢えず荷物の準備をしよう？　な？」
「そうですね」
「そうだな」
結局打開しない案で可決。この場は様子見と言ったところか。3人はフィルの家の前を後にした。

ω

「ねぇ…零次？」
「ん？」
あれからどの位時間が経ったろう？　室内には、喋らない重い空気だけが流れていた。フィルとの間にも、何かしらの距離が開いている。
そんな中、フィルは徐に一つの質問を俺にぶつけた。
「運命って信じる？」
「不思議な事聞くなぁ…」

フィルは、まだ微かに涙の残る不安そうな顔で俺を見る。何だか気持ちの中で、フィルをまともに見られない俺は『うーん』と少し唸る。
何故だか答えさえ出ない。
「難しい？」
「うん……。ちょっと」
フィルは『そっかー…』と俺に無理に笑って見せた。何だか悪い事しちゃったかな？
「あのね…。運命はいつ何時（なんどき）でも必然なの」
「……？　それじゃ運命って言わなくないか？」
俺の問いにフィルは首を振った。何か含んでいるようにも見える。
「運命は変えられる。その運命が変わる事さえもが必然」
「元の運命が変わる事が必然なら、元の運命の価値は…」
「人々は後で変わる筈の偽の運命を狙って、若しくはその通りにする他無くて偽の運命を辿る。あくまでも人が考える必然は変わらぬ偽の、架空の運命。」
「変わる本当の運命がある事を知らずに、その偽の運命を辿る。その変わるまでを辿らせる為に、偽の運命があると？」
「そう。でもそこは、変わるか変わらないかの2択。変わらないことも必然として組み込まれてる。」
何が言いたいのか分からない上に、俺の頭じゃ手におえない位の容量だ。処理落ちは覚悟しておこう…。
しかし、何でまたそんな不思議な事を言い出すのだろうか？
「全てが必然。まだこの世界の予想の範疇を、何一つ越えてない」
「この世界の……。予想の範疇……！？」
フィルがそう言ったのを聞いて、俺の脳裏に確信には程遠い一つの仮定が浮かび上がる。しかし、聞く勇気がもてない。
「零次…」
「おい…まさか…」
フィルは首を縦に振った。紛れも無い肯定のサイン。お互いの話

が通じているかは疑問なので、俺は勇気を出して聞いてみた。
「俺がここに入り込んだのも…」
「零次がやって来るのは、皆が知ってた必然…」
「皆！？」
「って言っても、ディアとマスターだけだけど…」
「クシャナやアルトが仲間になってくれるのは！？」
「少なくとも私は知ってた」
「じゃあこの後の未来や、変わる運命まで見えるのかよ！？」
俺は納得できないあまり、無意識にフィルの胸座を掴んで持ち上げていた。フィルの口から微かに『苦しい…』と声が漏れる。そこで俺は我に帰った。
「っ……！！」
「零次……」
憤りだけが全てを呑み込んだ。簡単な話、ＥＤを完全に知ってる奴とストーリーを進めていく訳だ。
面白さの欠片も無い。
「フィル…」
「何？」
「お前…何者なんだ？」
「……」
「何でそんな事が分かるんだ？」
「……分からない」
「分からないだぁ？」
「無意識のうちに、全ての選択肢が見えてきちゃうんだもん…」
「その運命を確信する材料は？」
「……全て、私の見た通りに進んでる」
「……」
「何もかも…か？」
「うん。何もかも…」
「変えられるのか？　その運命。お前の予想を上回るように」

「……」
フィルは答えない。彼女にはあらゆる分岐が見えているのだろう。それはもう、何千、何万と。無言の反応は、俺が変えられる範囲の分岐は網羅してあるという事か？
「このままのストーリーを進めていけばどうなる……？」
「……」
「答えてくれ」
「や……いで、……ぬ」
「何？」
「厄災で、皆死ぬ」
「……そっかぁ」
どうやら俺は、最初から大きな死亡フラグの上を歩いていたみたいだ。何も気づかず、何も知らず。
ただただ、フィルの手の上で踊っていただけ。
「フィル、この後俺が取る行動で、お前の中に網羅されてるのは何通りだ？」
「へっ？　……明確には分からないけど、数万通り位かな？」
「当てはまらない確率とか分かるか？」
「それも明確には分からないけど、１００００分の１％位？」
「低いな…」
「俗に言う『奇跡』がその部類だと思う」
「それって、全てにおいて有効な数字か？」
「大体は…」
「このストーリーも？」
「うん……多分」
フィルは少し目を細めて答えた。俺は少しばかり希望が見えた気がした。でも、今のこの状況がまだ受け入れられていない。
「零次？」
「あん？」
「この事は誰にも言わないで」

「何で？」
「皆知らないから…」
「でも、言っておいたほうが…？」
「私みたいな予言は、レイ様がやってくれるから…」
「……本当にそんな理由か？」
「疑問に思うんなら、レイ様に会えば分かるよ」
「そうか？」
フィルは悲しそうな顔でそう言った。もう少し隠せばいいのに…と思わなくも無い。そんなに器用な奴じゃないのは、百も承知だが…。
「……そっか」
「零次…？」
「全部分かっちゃってんのか…」
「……」
「残酷な事だよな…。皆の全てが克明に見えるんだろ？」
「……」
「安心しろ」
「へっ？」
「側に居る位はしてやれるから」
「零次…」
そう言って俺はフィルの手を引いて外に出た。そこには荷物の上に腰を下ろし、雑談に更けている3人が居た。
「おう？　来たか？」
「遅くなりました…？」
「とんでもなくな」
ディアは何故か嬉しそうにそう言うと『行くぞ』と言って、荷物を持ち上げ歩き出す。
何だか今日は、よく分からない事のオンパレードだ…。
「零次…」
「どうした？」

フィルが申し訳無さそうに近寄ってくる。そして、一言。
「本当に、ずっと側に居てくれる？」
「……？　勿論」
「そっか」
フィルはニコッと笑って俺から荷物を数個引っ手繰ると、先頭を歩くディアの方まで行って、いつものテンションでとんでもない事を言い出した。
「よーし先生！！　遅れた分取り戻そーよ！！」
「おっ！！　気合入ってるね！！」
「もっちろーん！！」
そう言うと、フィルは一目散に駆けていく。それを追って、俺たちも思い思いもスピードで走る。
そんな中、ディアが俺に速さを合わせて横に付いて喋りかけてきた。
「悪かったな。お前が来る事は知ってたってのは事実だ」
「あー……聞いてました？」
「始終な」
やっぱりと言っても過言ではない。文字通り、やはり聞いていたか…。
俺は一番肝心であろう事について触れる。
「じゃあ、フィルの…」
「全部聞いた」
「あぁ…」
聞いていたみたいだ。内緒の予定だったのに…。
俺の気持ちを察してか、ディアは呟くように言った。
「知らない振りをしておくさ」
日ごろの行いから考えると、何とも頼り無い…。日ごろの行いって大事よね。
だからこその、最終確認。
「出来ます？」

「馬鹿にすんなよ零次。これでも口は堅い」
「えーっ…」
「お前なぁ…」
出来るらしい。あくまでも確信は無いが、ここは信じるほか無いだろう。
取り敢えず俺は、他にも聞いていたであろう内容についても触れる。
「それはそうと…。厄災の終焉は…」
「死なせないさ」
「へっ？」
俺が言い終わる前に、ディアは力強くそう言った。思いもよらぬ言葉に、俺はポカンとしてしまう。
そんな俺を知ってか知らずか、ディアは何事も無く続ける。
「誰一人仲間は死なせない」
「と言うと？」
ディアの口からは、自信に満ち溢れたような声が出てくる。何処からくる自信かは分からないが、頼りになる気がした。
でも、言う事の中身は曖昧だ。
「少ない確率の『奇跡』に賭けるしかないだろ？」
「やっぱりですか？」
俺はおどけたように笑って見せた。ディアはそれを見てクスッと笑い、曇りの無い瞳で前を見据えて言い放った。
「奇跡は起こすから価値があるんだっ」
そう言うと、とんでもない速さで駆けていくディア。何だか波乱の予感がするが、きっと気のせいだと思いねぇ…。
「あぁ…。着いたら夜だよなぁ…。」
明るい空を拝めるのは今だけだと思い、俺は暫く空を仰ぎながらシャンドを目指して走る。

誰も予想しない結末を作るために…。

第8話　対立と少女と厄災と・真相編？　～必然と言う名の運命～（後書き）

着きませんねぇ…シャンド。

どうも2乗です。

次回はいよいよ物語の真相に迫っていきます。

あっと驚く展開はご用意させて頂きますので、ご期待下さいw

何だろ…。

自分自身に文才が無いのが良く分かる次話ですので、

あまり過度な期待はせずに…。

第９話　対立と少女と厄災と・真相編？　～『ＭＨ計画』・『解放』・動き出す

超ハイスピードで執筆しました

１ヶ月以上空けると、流石に読者様に悪いです

反省してますｏｒｚ

今回からココに次回の更新日を書きます。

更新予定日ですが、早くなることはあっても遅くはなりません。

次回更新予定日は４月１８日です

第9話　対立と少女と厄災と・真相編？　～『ＭＨ計画』・『解放』・動き出す

立派な城を構え、その傘下に広大な土地を広げる西国一の都市『シャンド』。町中が活気に溢れ、無数の人が行き交い、何とも気分の良い所だ。

そんな賑わいを見せる町の中で、俺は一人立ち尽くしていた。

迷子だ。この年になって大きく迷子だ。

「何だ…？　来て早々、この理解不能なシチュエーションは…？」

行き交う人々が皆敵に見える…。まぁ、初めての場所だとそんな感情もあるんじゃないかな？

『初めてのお〇かい』は、きっとこんな心情だと思う！！　とか何とか…。

「フィル…。この今の俺の状況は予想の範疇なんじゃないのか…？」

下手に動く事も出来ない状況下で、俺は徐にそう呟いた。こんな形で『奇跡』に起こってもらっても困る…。

こんなの、確率変動とかザラじゃん？

「人ばっかりだなぁ…」

見渡す限りの人の海の中、俺は路地に当たるような道で棒立ち。通りで棒立ちすると、邪魔になると分かっての行動である事を理解してもらいたい。

決して閉鎖的空間がスキとかじゃなくてっ！！

「それにしても…」

俺はそんな路地から、ひょいっと顔を出してみる。当たり前だが来た事も無い場所なので、知り合いを探そうにもそうはいかない。

昨日の内にシャンドには着いていたが、寝て起きただけ。知ってるのはホテルの受付さん位？　いや…それもあやふやだ。

「仕方ない…。助けを待つか…」

結論は超簡単。しかし、何を待つのかもいまいち不透明。

快晴のシャンドの日差しの下で、俺は日陰に身を隠しながら立ち

尽くす。

ω

「『前の人に付いて行くことすら、ままならない程度の能力』ってか？」
「全くです…。一体どんな神経してるんですかね？」
町並みに溶け込んだように、店を構えるお洒落なカフェで、ディアとアルトは目の前に置かれたコーヒーに目を落としながら呟くように言った。
何故かそこには二人しかいない。しかし、答えは一片の曇りも無く、明白そのものだ。
「迷子は何年生までかって決めとくべきだな。法的処置を踏まえた上で」
「そうですね。今回ばかりは、賛同に回ってもいい気がします」
二人の額に明らかに浮かぶ血管。二人の周りだけが、異様な殺気に包まれている。そして、その周りの席に座る人はいない。勿論、意図的に座らない。
当たり前だが、そんな殺伐とした中で一服したい奴はいないだろう？
しかし、そんな二人の空気も直に冷めだす。
ディアは組んでいた腕を徐に解くと、ぐったりとしてテーブルに突っ伏した。なんとも諦めムードだ。
「むぅ…。しかしながら、今更何言っても仕方が無いのは事実だがな…」
「迷子は最早『体質』とそんな変わりませんからね…。『方向音痴』なんて具体的な逃げ道まで、設けられてるほどですし…」
二人の溜息は、内輪の中で虚空へと消え去る。その二人以外の、誰にも聞こえる事無く。
単純明快に言うと『万事休す』。

「参ったなぁ…」
「ホントに参りましたね…」
二人が目をやる大通りは、朝市の開始と共に俄(にわか)に活気が出てきた。これでは探すも何も、こっちまで捜索という名目でもって『迷子』の冤罪をかけられかねない。
活気ある町並みは、それその物が答え。

A. 『自分たちまで迷いたくない』

だから決断は、何の考慮も無く決まる。
「待つか？　あいつ等が来たら声掛ける程度で」
「まぁ…。ですが、レイ様の所へは早急に向かうべきではなかったんですか？」
アルトのその問いに対して、ディアは「うー…」と唸って頭を掻いた。痛い所を突かれた事に間違いは無い。なんせ、第一目標はそれだ。
だがしかし、ディアは最早『遅刻』に対してはどうでも良いらしい。
「大丈夫だと思う！！」
「えー…」
その答えに少し不満そうなアルトを横目にしつつ、ディアは店員にコーヒーのおかわりを頼んだ。

ω

「久しいな、レイ」
城の一室。そこにあるのは、腕を組み、再開を喜ぶかのような笑みを零す眼帯の少女と、背丈に合わない椅子に深くまで腰を掛け、その眼帯の少女の来訪に嬉しそうに答える少女の姿。
「やっぱり来てくれたんだ？　鋼龍さん…じゃなくて、クシャナ…

でいいのかな？」
突然のクシャナの来訪に、レイは別段驚く訳でもなく、ただただその瞳を嘲笑とも取れる微笑で見つめ返す。
クシャナはそのレイの態度に対し、笑って見せた。あくまでも上辺だけ。
「やっぱり気に食わないね。その全てを見透かしたような物言い」
「あぁ…。ゴメン…」
レイはクシャナの隠れた威圧に圧されてか、縮こまるようにして、か細い声でそう言った。クシャナはレイのその態度に少し不満を残しつつも、用意された席に腰を掛けた。
「フィルさん？　貴女も座って？」
「ふぇ！？」
部屋の隅で二人を見守るようにたっていたフィルは、突然のレイからの言葉についつい素っ頓狂な声を上げる。
レイは「くすっ」と小さく笑うと、そのままの笑顔で近くの椅子を指して柔らかく喋りかける。
「ほーら。こーこ」
「あっ…はい」
そんなレイの無邪気な笑顔に安心してか、フィルは小走りにやって来て指定された位置に座った。
それを見計らってかマスターが入ってくる。一つのテーブルを囲むように配置された椅子は、その４人で埋まった。
「さぁ…始めるとするか」
クシャナはレイに向かって、不敵に笑いかけた。
こうして『ＭＨ計画』と題打たれた事前の会議が行われる。

ω

「おーい兄ちゃん？　金出しなよ。か・ね。」
「兄ちゃんよー？　アニキ怒るとこえーぞ？　おいゴルァ？」

何故でしょう？　御崎零次は、裏路地をぐいぐいと進んでいくと優しそうなお兄さん達に、若者口調で呼び止められてしまいました。ｖ（＾ω＾）ｖ

「聞こえてんのか！？　おい！！」

「出すもんだせや？　な？」

盛大にピンチです！！　何故かよく分からないけど、ハゲとモヒカンに絡まれています！！

なっ！！　なるほど…！！　今ならのび〇君の気持ち！！　よく分かるよ！！

そんな緊急事態の中、俺は上ずる声を引き連れて、必至に応戦する。

「今ちょっと忙しいんで！！」

しかし、大男と思われるハゲと、ヒョロそうなモヒカンは引いてくれない。まぁ、引いてくれるなんて思ってなかったけど…。

「心配すんなや。出せばええんやから。な？」

「そーや。出せばお前もアニキも幸せやぞ？」

お二方とも、幸せの概念を教えてくれるかなぁ！？　何か俺が凄い損してる気がするんだけどさ！！

とか何とか思いつつ、口には何を間違えようと出せない俺がいる。取り敢えず、こんな状況滅多に関われるもんじゃないから、どうやって切り抜けたら良いかも分からない…。

しかし、そんな俺に名案が降ってきた！！

「あっ！！　そういえば今日は5時から、テ〇東で新しいアニメがあったんだ！！　帰らなくちゃ！！」

俺は早口でそう言うと、凄い速さで身を翻し、細い路地を駆け抜けていく。後ろで「待ちやがれ！！」とか、「テメェ！！」とか聞こえるけど、俺耳悪いからスルーの方向で。

いやぁ…アニメって偉大。無茶苦茶な俺も偉大…。

しかし、事態は深刻さを増す事になっていた。縦横無尽に駆け回っていたのが仇となったか？　走るスピードを緩め、俺は辺りを見

回す。
「あれ……？」
そして足を止め、取り敢えず立ち止まる。ここ…さっきも見たような…？
「……」
そんな事は無い！！　断じて無い！！　きっと長屋造りで、同じような家が並んでるから、見た目に変わりが無いだけ！！
そう思いたい…。しかし、現実は甘くない。
「あっ！！　居やがったぞ！！」
「！？」
前方に『アニキ』こと、ハゲが登場！！　俺のコマンドは、既に『逃げる』以外にカーソルの行き場を失っている。
あくまでも『戦う』のコマンドは存在しません。
「一体どうなってんだっ…！！」

A．迷っています

俺は後ろも振り返らず、変わり映えの少ない路地を疾走する。不思議な事に、人間追われてると凄い速く走れる。
今はその上、命の保証があまりされていないのも一因に入れておかねば…。
「待ちやがれ！！」
「デジャヴ！！」
そんな事を言ってる暇は無い。しかし、言わないと気が済まない…。そう言えば、人は考え事をしていると歩行速度が落ちるらしい。
疾走中に適応されるかは不明。
「……ん？」
そんな中、俺の数十メートル先。小さな女の子が立っているのが見えた。この場合、答えは二択。……この場合って、滅多に無いシチュエーションだけどね。

1.　面倒な子
2.　スゲェ面倒な子

断言しよう！！　それ以外が答えである筈がない！！　しかし、一本道の路地。その子の横を突っ切る以外に逃げ道は無い。
だって！！　後ろから死亡フラグ走ってきてるし！！　ここまでしつこいと、既に狙いは金じゃないような気もしてきたし！！
「どけぇぇぇぇぇ！！」
俺は精一杯の声を出して、その子に向かって叫んだ。しかし…。伝わっていなかった…。
その子は俺が駆け抜ける瞬間に、腹部に拳を減り込ませた。そして、そのまま前のめりにスライディング！！　地面を顔面で蹂躙した俺に向かって、少女は呟くように一言。
「零次…。少し待ってて…」
「っ～～～～～～！！！！！」
見ず知らずのその子は、何故か俺の名前を出す。しかし顔の痛みで、何も思考回路が回らない俺。そんな俺の脳裏に、不意に3番目の選択肢が浮かんだ。

3.　絶対に関わってはいけない子

間違いない。間違いなく、関わってはいけない子だ…。触らぬなんとやらに祟りなし…。簡単に言うと『歩く死亡フラグ』。
俺は、痛む顔を押さえて徐に立ち上がり壁にもたれかかった。でもこの場から逃げはしない。逃げたら死ぬ。
しかし、ここに居ても命があるとは…限らない。
「どけ小娘ぇぇぇ！！」
ハゲは走って来た勢いのまま、まだあどけなさの残る少女の顔を目掛けて、拳を振り下ろした。食らったら、間違いなく頬骨砕ける

…。でも、怖くて止めに行けない俺がいる。
だって痛いもん！！　ヤだもん！！　死にたくないもん！！
「力任せ…。よくない…」
少女は表情も変えずにそう言うと、片手でハゲの拳を受け流す。どうやら俺の心配なんて、全くの無意味だったみたい。ハゲは大男であるにも関わらず、走ってきたそのままの勢いで盛大に地面とご挨拶。
『スザザザザ…』と顔面で地面を掃除。あまりの痛さに、ジタバタとのた打ち回ってる…。うん…。分かるよ…。その気持ち…。
「今のうち…」
「へっ！？」
ハゲに気を取られていた俺は、いまいち何を言われたのか分からずにいた。しかし、そんな事はお構い無しと、少女は俺の手を引いて、精一杯の速さで路地を駆けていく。
そんなに速くも無く。

ω

「コーヒー…。飽きたな…」
「もう十数杯飲んでますよ？　飽きがきて当然です」
ディアはしんどそうに机に突っ伏したまま、それ以上何もいうことは無い。アルトも「ふぅ…」と溜息を漏らした。
彼是2時間くらい、このカフェに鎮座している。そろそろ店の人も痺れを切らす頃だ。
「先生？」
「あん？　コーヒーのおかわりなら要らんぞ？」
「違います！！」
突っ伏したまま棒読みで返答するディアに、アルトは少し声を荒げた。それに対しディアは「ハァ…」と溜息を漏らし、ムクっとこれまたダルそうに体を伸ばした。

そのままディアが続ける。
「んで？　何さ？」
「もう城に向かいましょう？　皆さん行ってるかも知れませんし」
「城…？　おぉ！！　その発想は無かったわ！！」
「シャンドに、何しに来たつもりだったんですか！？」
「コーヒー飲みに？」
「行きますよ！！」
コーヒーカップを手に取り冗談のつもりでディアが言った言葉は、どうやらアルトには虫の居所を悪くするのにもってこいだったようだ。
スタスタと進んでいくアルトを他所に、ディアは青い空を見上げる。澄んだ青い空。数個の浮かぶ雲。編隊を組み飛ぶ鳥。
ディアは呟く。
「ふーん…。これも全部、決められた『運命』かい？」
そう言ってディアは、積み上げられたスティックシュガーのゴミ山を、指で弾いて席を立った。

ω

「以上」
レイはそう言うと、『ＭＨ計画』と題打たれたコピー用紙の束を閉じ、徐に机に置いた。
一通りの説明が済み、その場に居た一同は、それぞれ思い思いにリラックスした体勢になる。何かとシリアスになる会議後。今回はそうでもないみたいだ。
「アンタにしては、中々の攻撃的な計画じゃないか？」
クシャナは、伸びをするレイに向かって意地悪そうに言う。いわれたレイも同じような言い回しで反論する。
「クシャナみたいに好戦的な奴も、西国には少なくないからね」
二人とも笑ってはいるが、内心どうだか分からない。まぁ、２人

の過去や関係については追々番外編でも…。
そんな中、空気を一新しようとマスターが割って入る。
「しかしレイ様？　他の方には、今回の件をお伝えにならなくて宜しいんですか？」
「うん？　何のこと？」
マスターの問いに、レイは含んだような笑みで答える。クシャナはその顔をみて、「成る程な…」としみじみ。
当のマスターは首をかしげる始末だが、二人が扉の方を指差したのと同時に、「あぁ…。そういう事ですか…」と頭に手をやる。
しかし、尚もフィルは分かっていない。
「ディア先生。アルト。入って来て下さい」
そのマスターの言葉に呼応するかのように、重そうなその扉は音を立てて開く。扉の奥には、案の定呼ばれた二人が苦笑いで立っていた。
室内に居る者は、失笑を余儀なくされている。
「盗み聞きは良くないよ？」
「おっと？　バレてましたかレイ様？」
レイの呆れたような物言いを、ディアはおどけたような態度でかわす。アルトはその後ろで、申し訳無さそうに頭を下げた。
「聞こえたか？　ちゃんと」
ディアがペコペコしているのを面白がってか、クシャナは少し上から物を言う。しかし、それは間違いなく地雷だった。
『ガキンッ！！』
「いったぁぁぁぁぁぁ！！」
ディアは何も言わずにそれこそ無表情で、近くにあったガラス製灰皿を手にとり、クシャナの側頭部を強打。灰皿の恐怖再臨！！
瞬間的に、クシャナの頭が視覚的にブレて見えた気がしたのは、錯覚というか気のせいだろうか？
頭を押さえて悶えているクシャナを他所に、ディアは腕を組んで一言。

「零次はどうした？」
部屋に居た全員が、（その前にクシャナだと思うんだけどなぁ…）と思ったかは定かではないが、そんな空気になる。
しかし、ディアはクシャナを見ようともしない。別に空気が読めないんじゃない。ＡＫＹ。あえて空気読まない。
それを悟ってか、フィルが徐に口をあける。
「あれ？　ディア先生と一緒じゃ…？」
「……へ？」
あくまでも『自分』を突き通していたディアが、その状況の不味さを悟ってフッと我に帰る。誰も零次の行方が分からない。
レイはそれを聞いて、「えー…」と苦笑いで不満を漏らした。…まぁ、そりゃ不満の一つも吐きたくなる。零次は今回の計画の要。消えたら計画がパーだ。
そんな中、気が動転したディアが口を滑らす。
「ちょ！！　フィル！！　見えるんだろ！？　読め！！　探せ！！未来予知！！」
「！？」
「あっ…」
ディアは思わず口に手を当てる。しかし、時既に遅し。それを聞いた者が、バッと一斉にフィルの方を向く。
唯一、レイは表情一つ変えず「知ってたけどねー」と、小声で呟いた。
「先生！？　何で知ってるの！？」
「えっ！？　いやっ…！？　そのー…。何でかなぁ？」
「先生！！」
無理やり目を逸らそうとするディアに、フィルは半泣きで詰め寄る。それを見たレイはニタッと笑って、一部の者に激しく損になる一言を漏らす。
「クシャナもアルトも同罪だよね？　盗み聞きの」
「なっ！！」

「ちょ！！」
蚊帳の外で安堵の表情を浮かべていた二人は、その一言に体をビクッと跳ねさせる。勿論、その一言がフィルの耳に届かない筈も無く、今ここに修羅誕生。
「３人ともー！！」

【お見苦しい場面が挟まれます。暫くお待ちください】

２乗ＴＶ

「賑やかだねぇ…」
「賑やか過ぎるんじゃないですか…？」
目の前を走り回る４人を見ながら、レイは紅茶を啜ってしみじみとそう言った。しかしマスターは眉をひそめている。
本題から大きく外れた事を、今ここで頭に残しているものは少ない。特に走り回ってる者達は、そんな事脳裏にすら留めていないだろう。
レイは何の前触れもなく、徐に口を開いた。
「んでさ、マスター」
「はい？」
「零次君、こっちに向かってるみたい」
ニコッと笑ってそう言うレイに、マスターは不思議そうに口を挟む。
「おや？　彼はココに来る事を知らない筈ですが？」
それを聞いたレイは、小声で「容量悪っ…」と愚痴を零す。マスターも「全くです…」と、逃げ回るディアを横目で見る。
レイはそんな事は置いといて…と言わんばかりに話を続けた。
「アミューが見つけたから、連れて来るってさ」
「ほぉ…。アミュー殿が…？」
マスターは苦笑いで対応。レイも「多分大丈夫だよ？」と、半ば心配そうに半笑いで答えた。

「……あのー？」
「……迷ってない」
「えー…」
何故だろうか？　路地を少女に手を引かれて駆けて来たかと思えば、凄い密林の中に居ます。迷ったよね？　これ絶対迷ったよね？
片目を隠した形の淡い紫色のショートヘアに、独特の霞龍の防具を纏った少女。彼女との対話は、さっきから「……あのー？」から始まって、「えー…」で終わる繰り返し。少女は、一向に迷った事を肯定しようとはしない。
第一、この子が何処に向かっているかも分からない…。
「君さぁ…」
「アミュー・ナザレチア…。」
「へ？」
「レイ様の命令…。零次…。護衛する…」
「…えっと？」
「……。君…。違う…」
口数が少ないせいで、いまいち本心が読みにくい…。取り敢えずは仲間らしい。そしてアミューってのが、多分この子の名前なんだろう。でも、迂闊に呼んでいいものか…。何か、馴れ馴れしいっていうか…。
俺みたいなキチンは、そういう所を要所要所で気にするからなぁ…。
しかし、ココは何とか切り抜けねば…。俺は勇気を出す。無駄に。
「……あっ。えっと…。アミューさん？」
「アミューでいい…」
アミューはボソッとそう言う。最初から呼び捨ては、不味いと思ったからの言動だったのだが、少しムッとされてしまった。

正直、心臓バックバクです…。
やっと打ち解けてきた所で、俺は再び無駄な勇気を振り絞る。
「アミュー？　一体何処に向かってるんだ？」
「お城…」
「城？」
「レイ様…。そこで待ってる…」
「俺をか？」
最後の俺の言葉に、アミューはコクリと頷くと草薮を掻き分け始める。どう考えても、お城に向かってるような気配が無い。
「なぁアミュ…」
「…！？」
その時、アミューの顔が不意に強張った。何かを見つけたのか？
俺も其方に目を向けようとした。
「シーッ…」
アミューを呼ぼうとした瞬間、彼女は口の前に手を持ってきて小声で「黙って…」と俺の言葉を遮った。そして、そのまましゃがむように急かされる。
何があるのかは分からなかったが、取り合えず従うしかない。よく死亡フラグを踏んできた経験上、これは何だか不味い気がする。
「隠れても無駄。でて来なよ？」
草薮の向こうから女性と思われる声がする。此方に言ってきている確信は持てないが、ほぼ間違い無いと言っていいだろう。アミューは顔を顰める。
「老山の右腕も、自分の気配を消すのが精一杯かしら？　アミュー？」
アミューは「しゃがんでて…」と俺に言い残すと、スッと立ち上がる。アミューは何も言葉を発する事は無いが、その目は一箇所をジッと睨んだまま動かない。
「いつまで死に掛けの老山の下で働くつもり？　もう厄災の準備は始まってるのよ？」

「黙れ…」
アミューは弾んだような女の声を、ドスの利いた声で一蹴する。その目に映るのは、敵以外に無い。
その次の瞬間には、アミューの腕を紫色のオーラが包み込んでいた。それと共に、密林の中に彼女を軸とした領域（テリトリー）が形成された気がした。
それは既に、人の域を越えている。
しかし、その領域（テリトリー）の中で尚、相手は余裕な様子で雄弁に話し出す。
「アミュー？　貴女の解放（リヴァレイション）じゃ相手にならないのは、分かってるんじゃない？」
「やってみないと…。分からない…」
そう言うとアミューはオーラを纏った右腕を、徐に振り上げる。振り上げられた腕からはオーラが消え、代わりにそこにあるのは、紫色が何とも幻想的なオオナズチの腕。大きさは、本人の腕にデフォルメされている。
俺は思わず驚いて立ち上がる。俺の行動にアミューが再びムッとしたが、驚きのあまりそれ所ではない。
「しゃがんでて…。言ったのに…」
「えっ！？　ちょ！？　うっ腕！！　腕がっ！！」
慌てふためく俺を、アミューは「説明…。終わってから…」と冷たくあしらう。既に彼女の目に映っているのは、頭の上で紅い髪をかんざし等で結い、赤と黒のコントラストが鮮やかな着物を纏った女性。
一言、ふつくしい…。
すると、その着物の女性が俺に向かって、少々顔を顰（しか）めながら口を開いた。
「御崎零次君…で間違いないな？」
「へ…？」
女性は俺を指差して、徐にそう言い放った。俺は戸惑いで声も出せず、ただただ小さく頷くだけ。

その俺の微妙な反応に、向こうから「そっか…。アンタがか…」と小さく声が聞こえた。そして、そのまま話が進む。
「アミュー。そっちに危害を加えるつもりは無い。ちょっと零次君と話がしたい」
「駄目…。帰って…」
女性は「分かってくれないみたいだねぇ…」と腕を組み、ハァと溜息を漏らした。すると、そのままの距離を保ちながら、聞こえる程度大きく声を張った。
「私は南国・ティタルの長、ハル・アスカ。以後宜しく！！」
「えっ…」
あまりの唐突さに、気の利いた言葉もでない俺。驚く事ずくめで、いまいち処理落ち気味な所があるのも事実。取り合えず、あの人が南国の長である事は、俺の残念な頭でも理解可能だ。
俺が黙り込んだのを見越してか、ハルは相手をアミューに移し変える。口調は一気に変わる。
「アミュー。もう一回だけ、お前に聞いておいてやんよ。零次(そいつ)をこっちに寄越す気は？」
「ない…」
「そうかい！！」
アミューの返答を聞くや否や、ハルはこっちにすっ飛んでくる。その速さと言ったら、常人のものではない。
そんな事を暢気(のんき)に考えているうちに、ハルはアミューの懐に一撃を入れる。間一髪、アミューの右腕がそれを防いだのが見えた。
「ハッ！！　それがいっぱいいっぱいか！？」
「……っ！！」
そのまま、右腕でハルを跳ね除けるアミュー。既に息が上がっている。そんなアミューに、ハルは溜息一つ。
「お前は元々隠密だろ？　接近戦は苦手なんだから、条件飲んだほうが得だよ？」
「主の命…。零次…。守る…」

「堅物はヤだねぇ…」
へたり込んでいる俺を他所に、二人はどんどん険悪なムードになっていく。ハルの両腕から、紅いオーラが出てくるのも見えた。それに伴って、密林が騒ぎ出す。
その状況の不味さを察してか、アミューは俺に聞こえる程度の小さな声で呟いた。
「（逃げて…）」
アミューは初めて眉をひそめ、不安そうな顔で俺を見る。それが何を意味するのかは分からないが、今目の前にいるハルが、相当ヤバイ奴だって事は理解した。
俺は頷いて無言の了承を送る。アミューは草陰に隠しつつも、小さく親指を立てた。
「逃がすのかい？」
「……」
ハルの口から低い、地鳴りのような殺気に満ちた声が聞こえた。
俺は何にも思考を傾けず、一目散に来た道を駆け戻る。
取り合えず、城に向かう事だけを考えて。

ω

「まぁ…いいさ。狙いは何も零次君だけじゃ無い。」
「……」
ハルは不敵に笑ってアミューを見つめる。それはロックオンの代わりといっても過言ではない。
アミューは一歩、また一歩と後ずさりする。そんなアミューを見かねてか、ハルが徐に切り出す。
「老山は動かないのかい？　一応は南国の長が不法侵入なんだけど？」
「……」
眉をひそめ、睨むような目でアミューを捕え、ハルは低い声でそう言った。アミューの頬を一筋の汗が流れる。彼女は黙ったまま、

その場を動く事も無い。
ハルは両腕にオーラを保ったまま、腕を組んでアミューを挑発する。
「取り合えず、条件を飲まなかった時点でアンタの負けだよ」
「それは分から…」
「分かるさ」
アミューの反論を、ハルは嘲笑うかのような声で遮った。そして組んでいた手を徐に払う。その瞬間、空気がドっと澱んだようになった。
密林の一帯が、邪気に包まれる。
「勘違いすんなよ？　一介の古龍風情が、誰に楯突いてんだい？」
「あ……っ！！」
その目で睨まれた途端、力が抜けたようにへたり込むアミュー。言うまでもない。力の差は歴然。いや、その言葉ですら表しきれないかも知れない。
ハルは、へたり込むアミューにゆっくりと近づく。アミューは涙を溜めた目を見開く。その瞳には映りしは…。
「ほら？　楽しませてよ？　１０年前の厄災の一角『一霞の幻影』さん？」
「……」
ダッと土を蹴る音と共に、アミューはハルとは逆方向に駆け出した。が、遅い。ハルはアミューの前に回りこみ、下っ腹に鉄拳。
アミューは少し血を吐いて、地面に体を蹂躙させる。
「色々と改めて、分かるように言ってあげる。一介の古龍風情が『紅蓮の極龍（ミラ・バルカン）』に勝てる訳が無いだろ？」
「いや…っ！！　こないで…っ！！」
アミューは腰が抜けてしまったようで、その場から動く事も出来ない。ハルはそんなアミューを恍惚の表情で見下ろしつつ、彼女の目の前まで言って一言。
「自らが売った喧嘩には、逃げる選択肢なんて残されて無いが？」

「ハル…ッ」
アミューが上ずる声でハルの名前を呼んだ瞬間、ハルは両腕のオーラを解き、恐々とした紅い腕を解放した。紅蓮の炎を宿したその腕は、見ただけでも息が詰まりそうになる。
ハルはその腕で、アミューの解放した右腕を掴んだ。
「裏切り者が…！！　気安く呼んでいい名前の分別も付かない？」
「うぐっ…！！　あぁ…っ！！」
アミューの右腕は凄まじい粉砕音を立て、有らぬ方向に曲がる。それと同時にアミューの解放が解け、細く白い腕があらわになる。
しかし、その腕は既に赤く染まっていて、元の色も形も留めてはいない。
「正直、裏切り者（アンタたち）は殺しても足りないよ？　鋼龍もね」
「っ……ぁぁあ！！」
アミューはぐちゃぐちゃに潰れた腕に手を当て、必死に痛みを堪えている。ハルの声が届いているかどうかさえ危ういい。
アミューの右腕は、上腕骨が完全に拉（ひしゃ）げ、折れた骨が身を突き破り、掴まれて潰された部分は最早見れたものではない。
しかし、抵抗できないアミューにハルは容赦しない。
「言ったでしょ？　私と戦うなんて無理だって。アンタみたいに部分的に解放（リヴァレイション）できる奴なら、多かれ少なかれいるさ」
「あぁぁっ！！！」
ハルはそう言うと、地面に蹲（うずくま）るアミューの太ももに腕を刺し込んだ。勿論、そこからはとんでもない量の血が噴出す。アミューがもがけばもがくほどだ。
「っるさいなぁ…。ちょっと黙ってろって…」
「うぁっ…！！　あっ…ぅ！！！」
ハルは太ももに刺し込んだ腕に力を込める。すると『ゴキンッ！！』と凄まじい音が響いた。それと共に、アミューの悲鳴が密林に木霊する。
ハルが手を引っこ抜くと、手には数個の白い破片と塊の赤い肉。

アミューの余りの叫びに、ハルは溜息を漏らし吐き捨てるように言った。
「大袈裟な…。動けないように大腿骨を砕いて、筋肉切っただけだって…」
「ハァ…ハァ…」
アミューは息も絶え絶え。既に意識が朦朧としている。それを確認した上で、ハルは歯を見せ笑い、一言叫ぶ。
「じゃあな！！　裏切り者！！」
風を切る音と共に振り下ろされる紅い腕。しかし、その腕はアミューの顔寸前で止められた。
ハルの手首を誰かが握っている。
「あん！？　テメェ何の用だ！？」
阻止した者は、ハルの睨みに屈する事も無く、ただただ「止めておけ」と一言だけ発した。
ハルは握られたままの右腕を振り払うと、噛み付くような目で睨む。しかし、やはりその者はこれと言った変化すら見せない。
「無益な殺生は、何も生まない」
「……公私混同すんなってか？　あーヤだヤだ！！　お前も堅いねぇ！！」
その者は、「気が付かないか？」とハルの獲物を指差す。ハルはアミューの方に目を向ける。だが、これと言って何か変わっている訳でもない。
「何だよ？」
ハルは少し不満そうに来訪者に反発した。その者は「ハァ…」と、ため息一つ漏らす。
「お前は甘い」
「はぁ？」
ハルはその者の言葉が理解できていないようだ。第一、話が全く繋がっていない。
男は黙ってアミューに近づく。ハルはそれを不思議そうに見守る。

「お前は、これの何処が霞龍（オオナズチ）に見えるんだ？」
そう言って徐にアミューの髪を掴み、ぐいっと持ち上げる。ハルは首をかしげるだけ。目に映るのは、アミュー以外の何物でもない。
「テメェ目ぇ悪いんじゃねーの？」
「悪いのはお前の頭だ…」
からかうように言うハルに、来訪者はアミューを持っていく。そしてハルの前まで行くと、ハルの頬を一発、勢いよく張った。
密林に『パァン』という、高い打撃音が響く。
「ってぇな！！　って……！！」
「ようやく、奴の術が解けたか…」
ハルは目を疑った。さっきまで奴が掴んでいたのは、確かにアミューだった。
が、今奴が掴んでいるのは、只のドスランポス。
「まさか…『幻影』？」
「詰めが甘いな。奴の能力はお前が一番知ってる筈だろう？」
そう言われて、ハルは拳を強く握る。そして、小さく「屑が…っ」と呟いた。
しかし、ハルはニィっと笑う。
「いいや…。まだ軽症でよかったさ…。本物の『幻影』はこんなモンじゃない」
「そうか…。しかし奴の本来の力といっても、元の3分の1程度」
「まぁ、解放（リヴァレイション）の話だけじゃないさ」
ハルは不敵に笑ってそう言った。そこで一端話が途切れる。
呼吸を整え、来訪者は再び話し出す。
「しかし、無闇に解放（リヴァレイション）するのは頂けないな…。特にお前のは限界解放（オーバーステップリヴァレイション）なんだから…」
「ったよ！！　もういい！！　分かったから説教すんな！！」
ハルは反発しながらも解放を解く。どうやら、やっぱりアミューの一件は頭にきているらしい。
そんな事はお構いなく、それを見届けた上で、止めに来た者は身

を翻した。そして、そのまま何も言わずにハルを手招きする。
薄暗い密林。しかし、彼の周りだけがその薄暗さを感じさせない明るさに包まれる。
「おい！！　このまま引き下がるのかよ！！」
「もうバレバレだ。お前の失態でな。行くぞ」
「あぁ！！　おい！！　待てよ！！」
西国の密林の中。
知る者の少ない因縁の対決は、不毛な幕切れで終焉の調べを奏でる。
因縁等は、また【過去編】で…。

ω

「まぁ！！　流石は『一霞の幻影』って所かな？　ナイス幻覚！！」
「お褒め…。光栄です…」
俺は皆が集まった応接間で、落胆しながら煎餅を齧(かじ)っている。何故かって？　全てが仕組まれた、『シナリオ』の上に成り立っていた事だったから。
「いやぁ…。まさかハルが来るなんてねぇ…。知ってたけど」
レイ…と名乗った少女はしみじみとお茶を啜りながら、笑い飛ばすようにそう言った。
今回のレイ自慢の『シナリオ』はこういう事。

1. シャンド到着後に皆を3グループに分割。
2. 仕組みを経て、零次以外を城内へ誘導。
3. 零次以外に『HM計画』を説明。
4. 同刻、チンピラ風の城内関係者を使い、零時とアミューを会わせる。
5. 零次とアミューを餌に、来る運命にあったハルを誘(おび)き出す。
6. アミューの能力により『幻影』という幻覚（分身）で戦闘を続行。

7.　『ハルの正体を暴く』という目的を『幻影』に達成させる。
8.　終了

という訳だ。つまりは良いように利用されたんだ。西国の長に。
「まぁまぁ…。そんな怖い顔しないでさ？　ね？　彼女が『ミラ・バルカン』だっていう証拠が欲しかったんだよ」
「とは言っても…。これが西国の長の、客に対する持成し方だと知りました…」
レイの軽い言い方に、少し噛みついたように反論する。西国はいい所だと聞いていたが、まさかココまで『死亡フラグのフルコース』で手厚く持成してくれるとは…。
そんな事を考えいた時、大事な事を思い出した。もう、ホントさっきまで考えていた事が馬鹿みたい…。
「そういえば、解放（リヴァレイション）って…？」
「あぁ～。やっぱり知らなかった？」
レイはそう笑って見せた。

次話へ続く。

春ですねぇ…。

２乗ですｗ

真相に踏み込みきれませんでしたｏｒｚ

でも…いや。

踏み込みきれませんでしたｏｒｚ

次回はしっかりと物語の基盤を作りたいと思いますので、気長にお待ち下さいｗ

以上、お付き合いありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

第１０話　対立と少女と厄災と・真相編？　～何が為の厄災・知らぬも幸福也と

前回の投稿から随分経ってしまいました…

本当にスイマセン。

実は内容に関することで、今回は真相に迫る予定だったんですが、

布石が多すぎて、纏めることが難しかったんです。

だから遅れたと言うと、言い訳なんですけど＾＾；

近々改編版をうｐしますので、今回に関しては、矛盾等はお許し下さいｗ

ではでは、後書きでｗ

第１０話　対立と少女と厄災と・真相編？　～何が為の厄災・知らぬも幸福也と

少女はそれでも、己の欲の為に動く。

何も知らない者は、自分の信じられる物が、正義だと誤解する。

その結末が、己の死で迎えられようと…。

全てを握り、運命と共に歩く少女は、か細い声で呟く。

笑みの零れるのを抑え…。

皆……、今は、今だけは、私の手の平で踊っていて──

シャンドの城内。そこに一応全員が集まった。

誰かさんが迷子になるからなぁ…と、恨めしそうに愚痴っているディアがいるような居ないような…。こっちを見られてるような、そうでもないような…。

まぁ、それぞれが思い思いの内輪話に華を咲かせる中、レイは、俺を真っ直ぐに見て話し出す。何とも、統一感の無い空気で。

「じゃあ、始めようか？」

「んあ？　あぁ。お願いします」

今までその視線に気付かず、ポケーっと半ば上の空で周りの空気

に身を任せ、思考がトリップしてた俺は、生返事一つでレイに受け答えをする。
でも、レイはそんな事は一向に気にしていない様子。
「じゃあ、ちょっと複雑だから、理解できなかったら質問してね」
「えっと…。分かりまし…た？」
「あれ？　もう処理落ち？」
「いや、案外軽めに話すんですねー…っと思いまして」
「せめてもの空気作りかな。皆も黙って聞いてくれるだろうし」
「あぁ、お気遣いどうもです」
「いえいえ～。じゃあ、いい？」
「どうぞ」
今の会話が候をそうしたか、室内の空気が統一感を生み、多少和みの顔を見せる。シリアスムードになるのは何となく予想がつくが、願わくばこの空気のままがいいな…。
そんな俺を他所に、いよいよ真相が語られる。
「元々、この世界に『人間』なんていう種族は存在してなかったんだよ」
レイは半ば可笑しそうに、周りを見回して唐突にそう言った。その場に居た全員が、顔にその矛盾に対する苦い笑みを浮かべる。
この時点でアンポンタンな俺は、軽い頭痛に陥りそう…。
「えっと…。つまり…は？」
「アンポンタンだねぇ～」
レイは表情を一変させ、小さく歯を見せて、まるで何かに安堵したかのように笑う。そんな事お構いなく、その一言に俺は軽い反論をしようとしたが、レイは分かっていたかのように…いや、あくまで分かっていた事を見越して、俺を笑顔で見つめ、自分の腕を指差して「ほらっ」と言った。
「零次君の能力。『獣醒』だよ」
「じゅーせい？」
「ありゃー…。言語も不自由になっちゃったかぁ…」

「案外失礼ですよね？　レイ様って」
「そう？」と言って笑顔を絶やさないお姫様に、俺は怪訝そうに含み笑いを返す。相手は気にも留めていない様子。
レイは一呼吸置くと、少し真剣な顔になる。口元は微かに緩んで、半ば笑っているように見えたけど。
「んーとね。獣醒っていうのは、単純な話をすると『モンスターを人にする』能力かな」
「今度は端的に言い過ぎて、聞きたい事が山のようにあるんですけど？」
「あぅぅ…。んっとねー…」
何故か戸惑ったような、説明に困るような、そんな表情を見せるレイ。横からマスターが、「説明しましょうか？」と助け舟を出したが、レイは「いや、いいよ」と蹴ってしまった。
何処かの首相も、助け舟蹴って大変だったよね。普〇間基地の時。
「取り合えず、その『獣醒』ってのは具体的に、どういう状況下で発動するんですか？」
俺も精一杯の助け舟。その質問にレイは「あっ、それはねー」と嬉しそう。
……説明苦手なの？
「分かんない」
「……へ？」
「分かんないよ？」
「えっ…。いや…。分かんないって…」
返ってきた答えに困惑する俺。しかし、レイは寧ろうろたえる俺にキョトンとする。確かに聞こえた一言は「分からない」という意味だったような気がしなくも無いんだが…。
「えっ…と。レイ様？」
「ん？　どうしたの？」
「つかぬ事お伺いしますが、分からない…と？」
「うん。分かんない」

間違っていなかったようだ。やっぱり、分からないと仰ったよう。
……いやいやいや！！　分からないじゃないよっ！！　そんなの無責任すぎるよっ！！
「えっ！？　じゃあ俺は一体何をどうすれば！？　存在価値の程は！？」
「うーん。まぁ、落ち着いてよ。ゆっくり説明する」
レイは慌てる俺を見て、ゆっくり頷きながら目を細めて笑う。その笑顔に、俺は宥められる。これが、一国を治めるものの包容力と言った所か…。
見た目は明らかな、幼女の部類なのに…。ねー。
「さっき言った通り、零次君の能力はモンスターを人にする特別な物。この世界を変える為の、神技と言っても過言じゃないよ」
「この世界を…変える？」
「うんっ！！」
レイは具体的なことは何も言わず、ただただ満面の笑みで大きく頷いた。この世界を変える能力…。何だか凄い能力なんだろうけど、全く以って自覚が無い…。
難しい顔をしていた俺に、レイは付け加えるように言う。
「今は分からなくても仕方ないよ。後々自覚してもらえれば十分っ！！」
「なかなか、事態が把握できないかもしれませんけどね…」
そんな後ろ向きな態度の俺に対して、レイは意地悪そうに一言漏らす。
「頭が残念だから？」
「レイ様っ！？」
「冗談だよ～」
何とも緊張感の無い部屋。気を遣って貰っているなら、何となく申し訳ない気がした。
レイは「うー…ん」と大きく伸びをすると、少しずつではあるが本題に入っていく。

「１０年前、『厄災』の話は聞いてる？」
「えっと…。断片的には聞いてます」
「うーんと、どんな感じに聞いてるの？」
「古龍の反乱みたいな具合には、聞いてるんですけど…」
「うわぁ…。断片的というか何というか…」
「あれ？　間違ってます？」
「まぁ、あながち間違いじゃないけど、『厄災』は簡単に言えば『人』対『モンスター』かな？」
「随分と違う情報を、俺は貰ってたみたいですね」
「まぁ、マスターはそろそろボケが始まるから」
「レイ様っ！？　私は未だ現役…っ！！」
反論に入ったマスターだが、アミュ―に肩を鷲掴みにされて椅子に押し込まれる。そして、アミュ―の駄目押しの「お静かに…」。マスターはしゅん…として、そのまま黙ってしまった。
何となく可哀想だった気がしなくも無い…。
しかし、レイはそれを横目で見て小さく苦笑い。そして、何事も無かったかのように話し出す。
レイ様？　今の一部始終、アンタのせいなんですけどね？
「先ず第一に、この世界に人は存在していなかった事を頭に入れておいて」
「へっ？　あっ。唐突に話し出しますね」
「むぅ…。取り合えずは、私と1体1で話していると思って」
「分かりましたー」
じゃあ皆、外に出せばよくないかな…？　とか思ったりしたけど、お客様は神様の精神論。御持て成しの心だね！！
「１５年前。突然一人の人間が、この私達の世界に迷い込んできたんだ」
「１５年前ですか」
「うん。厄災の5年前。初めのうちは、ぶっ殺しちゃおうかな～とか、思ってたりしたんだけどさ」

「ぶっ…！！」
「あぁ。まぁ、ほら。生態系とか言う奴」
「人間如き、この世界じゃピラミッドの底辺ですよ！！」
「いや、ね？　人間とか初めて見たから、いまいち強そうに見えて…」
「精神的問題ですね…。で、どうしたんです？」
「取り合えず、拉致して私の所に連れて来た」
「アナタ拷問とか何とか、そんなレベルじゃ表せない位、鬼畜な事しやがったんですね！！」
「いや、ほら？　面と向かってサシで話すこと大事かなーって」
「明らかな誘導尋問体勢ですけどね！！　人対老山龍ってっ！！」
「ん？　違うよ？」
「何が違うんですか！？　どう考えても人対老…」
「あぁ！！　ゴメンゴメン！！　勘違いさせちゃったかな？　私人間じゃないし」
「……んぇ？」
「私くらいになると、人の姿になれると言うか…。皮を被ったような状況になれると言うか…」
「つまり…？」
「見た目は人間、中身は老山龍って所かな。つまりは、獣醒の力じゃなくて自らの力で人の形を保ってる感じ？　でも、人には変わりないよ？」
「えっと…」
「恐ろしくスペックの低い頭使ってるんだねぇ…」
「悪かったな！！」
「いや、誉めてるんだよ？」
「どこがですかっ！？」
「ハイスペックの時代の波に、思いっきり逆らってる辺り？」
「いやいや！！　メモリ積んだら速くなるとか、そんなの無いですから！！」

「経験積んだら？」
「上手い事言ったつもりか！？」
「勿論そのつもり～。まぁ、話を戻すね？」
「レイ様…。随分とキャラ変わりましたね…」
「誰かさんの都合かな？　若しくは、君の前だけかもよ？」
「……もういいです」
「ＯＫ　じゃあ、続けるね」
俺とレイは、グタグタと不毛な会話を重ねる。誰かさんの都合…。
２乗の野郎…。
「あっ？　因みに気付いてる？」
レイは突然、俺にそう振ってきた。……何がだろう？
「いや…何の事だか、皆目検討もつきませんけど…？」
「なら良いや」
レイはそう、怪しげに笑って言った。本当に良く分からない人だ。
ん？　……人？
まぁでも、こういう感じの持ち主でないと、この世界の１国の統治なんて出来ないかな。
「……あーっ！！」
「！！」
城内にレイの幼く、甲高い声が響いた。同時に凄い勢いでビビる俺。何か、護衛の兵士さんとか、余裕ですっ飛んできそうな感じがまた怖い…。
「さ・て・と」
レイは人が変わったように、口調を弾ませた。その次の瞬間、俺は今まで見えていた景色が一変した事に気がつく。
「……！？」
俺は驚きのあまり声も出ない。今までとは、驚きの訳が違う。
「気が付いたみたいだし、話し合い。始めようか？」
「っ……！？」
俺の口から微かに出た声は、あまりにも小さく、その場で虚空に

消え去った。
何でだ！？　何で誰も居ないんだ！？　さっきまでこの机を、囲むように座っていた皆が…居ない。
跡形も無く…というより、その形跡すら窺えない。
「あぁ？　やっぱり驚き？」
レイはそう言うと、からかうように俺を見つめた。その瞳は、その身なりに似合わない、黒く澱んだ眼。
「悪いね。ちょっと試してみたかったんだ。どの程度、その場の能力筋を見極められるか」
「……どういう事です？」
「簡単だよ。ここには元から、私と零次君、そしてアミュ一しか居なかったんだ」
レイは口元だけ緩めて、眼光鋭いままに言い放った。その瞳が、俺からぶれる事はない。
しかし、俺は冷静になって辺りを見回す。待て。……アミュ一が居ない。
レイは俺が何か悟ったのを見かねてか、少し早口に言葉を並べる。
「零次君が来る頃には、皆には違う部屋に移動していてもらってたんだ」
「…？　皆居ましたよ…？」
「君…。霞龍の近くで、一体何を見ていたんだい？」
レイはそう言うと、自分の座っていた場所からスッと立ち上がり、徐に俺の横に来て腰掛けた。そして、その場の空気が変わる。
何だろう…。言葉にするのも難しい。ただ…重い。そして、不味い。
「君が来るまでに、ここにはアミュ一に領域（テリトリー）を張ってもらっていたんだ。勿論、幻影のね」
「ここに来るまで…？　でも、アミュ一は俺と一緒に…」
「それ、本物のアミュ一？」
「！？」

レイは俺の強張った表情を見るなり、声を上げて笑った。何もかも、計画通りと言わんばかりに。
「ふふっ…。君が次にやる事、教えてあげようか？　まぁ、教えても君はそれを、選択肢から外すだろうけどね」
「アンタは一体…」
俺は反射的にソファから飛び退く。そこに居ては危ないと、体が先に反応しただけだが…。
しかし、既に遅かった。
「あれ？　君は一体、どっちに飛び退いているのかな？」
「なっ…！？」
レイの声が、間近に聞こえた。
どうなっているのか…。確かに飛び退いた筈…。飛び退いた筈なんだ…！！　なのに…。なのに…っ！！
「ソファの上で、暴れないようにね？」
レイは、俺の真横に座ったまま。何も変わっていない。
そう。俺はその場から、何一つ動いていない。いや、体は動いていた…！！　動いていた筈なんだ！！
「じゃあ、一つ聞いてみようかな？」
「……」
レイは悠長に、笑顔で俺に向かって話し出す。
「君の横に居る私、本物かな？　どうかな？」
次の瞬間、俺の右足は大きく円を描き、レイを捉える一歩前まで迫っていた。何も考えてはいない。ただただ、体が先に反応しただけ。
「つあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
（ガッシャアアアアアン！！）
目の前で、何かが砕け散った。何にも当たった感触が無いのに。
しかし、俺はそれに目を向ける事無く辺りを見回す。
何だ！？　何なんだ！？
「あーぁ…。その壷高いのになぁ…」

レイは未だソファに居た。どうやら壷を吹き飛ばしたらしい。壷…？　可笑しいな。位置が…合っていない。
壷は確か、部屋の隅に置いてあった。此処が部屋の隅だとすると、レイの今居る場所は何も置いていない場所。
その前に、何でソファの位置が…あれ？　空間ごと切り取ったのか…？　いや、アミュ―の能力は幻影。つまりは幻…。
いちいち変わるのか…。この領域（テリトリー）…。…否。矛盾が出来ているんだ。それは多分、術者から離れたから。
「……っ」
読めた事は読めた。きっと五感全てを狂わせてるんだろう。これが、アミュ―の力か…。そして、それは術者から離れるほど効力を失う。
此処までの強い効力なんだから、範囲も狭いのが関の山だろう。術者から離れたから、俺の五感が幻と現実の間にいるんだ。つまり、アミューは俺から一番遠いところにいる…。
しかし、俺は新しい戦略を考える間もなく、一点を目指して突き進む。自分から一番遠い、部屋の隅への、見舞うは飛び蹴り！！
「だぁぁぁぁっ！！」
「っ！！」
何かを捉えたが、俺の蹴りは呆気なくガードされる。しかし、重要なのは、何も一撃を見舞う事ではない。
捉えたのは、レイではなくアミュ―。これが目的だ。その次の瞬間には、全てが元に戻った。術者を叩けば、多分何とかなると言う安直な考えだったのは気にしない…。
しかし、俺は無我夢中で胸座を掴んでアミュ―を壁に押し当てた。もう、体は言う事を聞かない。生存本能による、敵の抹殺。
「うぐっ…！！　かはっ…」
アミュ―の口から苦しそうな声が漏れる。それは、俺には小さすぎて届かない。俺は右の拳を堅く握り、そのまま貫く勢いでアミュ―目掛けて…。

しかし、次の俺の思考回路が働く前に、俺は体をくの字に曲げながら吹っ飛び、逆側の壁に大きく減り込んでいた。痛いとか、そんなレベルじゃない。
「解放(リヴァレイション)５％　１式・天山拳」
レイは俺を睨みながら、そう小さくも重々しく呟いた。勿論、そんな勢いだ。俺の意識は朦朧。寧ろ、朦朧のままいられる事ですら表彰もんだ。
「うはぁ…。アミュ―の本気があっさり破られちゃうなんてね。びっくりだよ」
「申し訳…。ありません…」
「いやいや、アミュ―のそれは、術中周りがノーガードになるから仕方ないよ。その上叩かれて、集中が切れたら駄目になっちゃうもんね。零次君を甘く見てて、護衛に入らなかった私にも落ち度はあった」
レイは少し複雑な顔で、アミュ―のフォローに入る。差し詰め、思う所と違う結果が起こったんだろう。奇跡って奴だ。
でも二人で盛り上がってるところ悪いが、説明してくれるかな？
この理解不能な状況を…！！
「あっ？　大丈夫？」
「だと…思いま…す？」
「手加減したつもりだったんだけどね～」
「……」
レイは頭に手を当て、困ったような、何とも言葉にし難い顔をして笑みを浮かべた。……今、彼女を思いっきり殴っても、罪にならない気がする。
「まぁ、起きてる事が凄いよねー」
「っ……！！」
「あっ…。そんな怖い顔しないでよぅ…」
思わず出た舌打ちに、レイは軽く涙目になる。ころころ変わるレイの性格というか…。何と言うか…。取り合えず、ますますよく分

からない。アンタは一体何なんだ！！
「まぁ、ゆっくり話を聞いてくれる体にはなっただろうから、結果オーライ？」
「…本気で怒りますよ？」
俺の真面目な対応に、レイは「ごめんってばぁ…」と一言。そのまま俺の肩を担ぎ、ソファへと座らせる。
これが西国の話し合いのスタイルだと思うと、ぞっとするばかりだ。
「うん。合格だね！！」
「ですね…」
「？」
レイは今までに無い笑顔でアミュ一にそう言った。アミュ一も口元を少し緩め、同意するように小さく頷く。
さっぱりだ。さっぱり話が読めない。
「君なら、今回の計画を成功させてくれる！！」
「……ほ？」
話が読めない上に、また理解不能な計画だの何だのと…。そろそろ、フリーズで死ぬお？　処理落ちで死ぬお？
「ＭＨ計画だよっ」
レイは「じゃーん」と無駄な効果音を口で軽快に奏でながら、俺の目の前に一纏めにホッチキスで止められたコピー用紙を差し出した。
「ＨＭ…？」
「モンスターハンターだよ。君が言ってた、娯楽のげーむとかいうやつ？」
レイは目を輝かせてそう言った。
「……」
「ん？　どうしたの？」
黙った俺の顔をレイは覗き込んだ。……待て。アンタは大事な事を忘れてる。

「説明…。終わってないですよ？」
「あぁ～。じゃあ、簡単に説明するからよく聞いて」
「へ？」
レイの口から、思いもよらぬ言葉が出た気がしたその次の瞬間、もう既に説明は始まっていた。
凄い速さで…。
「15年前にやって来た人間が、君と同じ獣醒の能力を持ってたから、これは利用できるかな…とか思ってさ。取り合えず、その頃ぐちゃぐちゃだった世界を統一しようと思って、彼の力で人間を増やして平和な世界を目指そうとしたのね。そして、結果的に同志を集めて、西国を作った。でも、モンスターの威厳がどうのこうので反対した派閥が、これまた同志を募って蜂起しちゃったのよね。これ俗に言う【厄災】」
「えっ！？　えっ！？」
「それで、当時は未だモンスターの方が圧倒的に多かったから、頑張っても勝てないのは分かってたんだけどさ。ある日、人の姿になっても元のモンスター時の、個々の能力が使える事が分かったの。人によってその程度は疎らだったけど、それは新しい戦力になった。それも強大な。これが俗に言う【解放（リヴァレイション）】」
「ちょっ！！　まっ！！」
「能力の使用可能が分かった事で、モンスター派閥の残党が流れ込んできた。自分達も仲間に入れてくれって。皆、モンスターから完全に変わってしまう事が嫌だった訳ね。結果的に強くはならないけど、それほど弱くもならない。その上、人間には多くの可能性がある」
「おーい！！」
「新しく兵力の増えた私の統治下は、今までの敗戦が嘘のように優勢になった。もう少しで、敵の大将の首を討ち取れるくらいにね。でも…」
「おー……い？」

「彼らがモンスター側についた…」
「……」
「ミラボレアス。ミラバルカン。ミラルーツ」
「ミラ…」
「一瞬だった。彼らに刃を向けた同志達は、その体を引き裂かれた。形も残らないほどに。私だって例外じゃなかった。そりゃ、一国の軍を率いた言わば大将。見逃すはずも無い」
「……」
「皆の思いを無駄には出来ない。だから私は戦った。敵いっこ無いのに。勿論敗戦に敗戦を重ねて、遂に私はこの地にまで、「シャンド」のまで追いやられた。ここは、沢山の非戦闘員が暮らしている首都みたいな所。絶対に入れるわけにはいかない…」
「……」
レイは悠長に、まるで独り言でも呟くかのように喋り続け、そして止まる。彼女の頭に回る走馬灯は、今何を映しているのか。俺には分からない。
そんな無音の室内。レイは一言漏らした。
「そして、私は一回死んだ」
「……はい？」
レイは俺に背中を向け、大きな窓から眼下に広がるシャンドの町を見下ろして、確かにそう言った。何を言われているのか、というより最初から最後まで説明不十分だ。理解が追いつかない。
「あの日、私は死んだ。ミラルーツに、体を引き裂かれて。……守りきれなかった」
「死んだ…って、じゃあアンタは…」
俺の質問は地雷だったかも、禁忌だったのかも知れない。レイは俺の方をゆっくりと振り向く。そして、一歩、二歩と近づいてくる。
「私…？　誰かって…？」
レイは俺の前でスッと止まる。その顔には、不思議な躊躇いがあった。何というか…自分が何なのか、分からないような…。

でも此処で何かされたら、動けない俺には後が無い。万事休す。
「……」
レイは何も言わず、身に纏っていた服をスルスルと脱ぎだした。服からズボンから、何から何まで。正直、目のやり場に困ったが、それ以上に俺は驚いた。
「これが…私」
「……！？」
レイの胴と足は、沢山の肉を寄せ集めて固めたような物に見えた。それが一体何処の部位だったのかも分からない。ただ、骨に肉を盛ったような。そんな感じ。
「私は１０年前、バラバラにされて死んだ。四股は吹き飛び、腹は裂かれ、首を千切られ」
「……！！」
「彼らは私の死を伝え、人間の非戦闘員以外を抹殺した。そして西国を統治下に治めて、人間を管理した。お互いモンスターだったのに。でも、非戦闘員は戦闘に介入しなかったから、一応生かす事にしたんだ。情けってやつかな」
「……」
「そして彼。人間界とか言う所からやって来たという彼。奴等は途中から姿が見えなくなっていたから、死んだと思っていたんだろうね。でも、彼は死んでいなかった。西国の秘境と呼ばれる所で身を隠していた」
「秘境…」
「チャチャブーの集落だよ。そこで彼は再生術を教わったらしい。キングチャチャブーにね」
「再生術…ってまさかっ！！」
「そう。私は彼の再生術で蘇った。再生術って行っても、飛び散ったものをくっ付けるだけの、横着なものだったけどね。でも、彼の術はまだ完成形では無かったから、私の体を全て再生させる事は出来なかった。……腕だけをね」

「腕…だけ？」
「うん。腕だけがどうしても再生できなかった。腕その物があれば、話は早かったんだけど、腕はそもそもミラルーツに食いちぎられちゃってたからね」
　レイはそう言うと包帯で巻き上げられた腕を、少し悲しそうに見つめた。
「だから、彼は腕をくれた」
「！？」
「自分じゃもう一度、この世界に平和をもたらす事が出来ない。君にこそ相応しいんだ…って。だから彼の腕を貰った」
「……」
「でも、罰が当たったのかな…？　腕は年月を追う毎に、私から離れて千切れようとする。だからこうやって呪具の針金で留めてるけど、本物の人間の腕は、どうやら合わないみたい…。私は、人であって人じゃない事を証明されたようなもの」
「レイ様…」
　寄せ集めの肉で出来たような体と足。肩から千切れないように留める為、何本もの針金が貫く腕。首の付け根から上だけが、人の皮膚の色をしている。
　彼女は…一体何なんだろう？　人形？　モンスター？　人間？
本当に分からなくなってきた。
「でも、零次君が来たってことは、もう一度私の計画を進める日が来たという事…」
「厄災…をですか？」
「……うん。もう一度、私が平和を作ってみせる」
「でもそれって、誰の為の厄災なんです？」
「……」
「何でレイ様は、人間にこだわるんです？」
「……」
「一体何があったんです？」

レイは少し考えているのか、顔を顰めて何も言わない。……余談だが、服も着ない。
「レイ様…？」
「……」
レイは何も言わずに俺に抱きついた。俺は不思議と驚かない。そういう耐性でも付いたのかな？
暫くレイは間を置いた。何を言うでもなく、そのままの状態。
「……」
「ねぇ零次君…」
「はい？」
「私を信じて…」
「…信じる？」
「うん。私を信じて欲しい。今は貴方に何も言えない。私の考えも、昔の事も…」
「……」
「何の内容も明かされてないから、信じろって言うほうが難しいとは思う」
「……」
「けど…」
「分かりました」
「ふぇ？」
「良いですよ？　別にそんなに懇願しなくても？」
「えぅ…。死んじゃうかもよ…？　私の考えが貴方に合わないかもよ？」
「どうしたいんです…？」
「信じて欲しい…けど」
「じゃあ信じます」
「ずるい…」
「なんか言いました？」
「何でもないっ」

「何でも…あります。レイ様…」
「うぉあい！！」
俺は思わず今まで出した事の無い声を出す。いつの間にか居なくなっていたアミューが、いつの間にか出てきている。
「あっ、アミュー」
「服を…着てください」
「わかったよぅ…」
レイは渋々アミューの言う事を聞く。
えっと…あれ？　可笑しいな…。俺の肩身が狭すぎるぞ？　ってか居場所が…。
「零次…」
「はいぃ！？」
アミューは目を光らせ、俺を睨んだ。
「ありがとう」
「へっ？」
仏頂面から放たれた言葉は、まさかの感謝。これには俺もどう対応して良いか分からない。
「感謝…する」
「ん…。そっか」
アミューが何を思っているのか分からない。レイも、一体何を思っているのか分からない。
でも、何となく彼女たちが悪い事を考えているような気はしない…。
「じゃあ零次君。頑張ろうね！！」
「はいっ」
レイは嬉しそうにそう言った。俺も思わず返事をした。

しかし、俺は後で絶対的な後悔をする。

何故気が付かなかったのか。

全て仕組まれていたと…。

第１０話　対立と少女と厄災と・真相編？　～何が為の厄災・知らぬも幸福也と

あー。

何も聞こえない聞こえない。

すっごい詰まりました。

煮詰まりすぎて死ぬかと思いました。

簡単な説明にしてしまいました。

真相に迫ってません。

でも何となく…わかったかなぁ？

いや・・・分かんないな。

レイはただ信じて…だし。

少しずつ、開いていこうかな？

次話は、多分早くに投稿できるかとw

次話は、零次が西国の秘境に、昔探しに行きます

番外編・話数2桁達成記念　～遅すぎた登場キャラ紹介～（前書き）

１１月１日、１４話まで更新！！

何処かで絶対にやろうと思っていた事。

ずっと先延ばしにしていたせいで、こうなりましたｏｒｚ

良ければどうぞ。

番外編・話数2桁達成記念　～遅すぎた登場キャラ紹介～

※注意

・（　）の中は年齢　ただし、零次以外は人間換算。

・【　】の中は人になる前の名前。　※まだ本文で触れていない

7月現在

・男女区別は「男性」「女性」「少年」「少女」「幼女」。異論は認めない！！

・解放（リヴァレイション）の限界点については、未だ触れていない。

●御崎零次　（16）　少年　高校生

―一般事項―

・身長　170cm

・体重　55kg

・種別　一般的な人間

・解放（リヴァレイション）　人間のため皆無

―身なり―

・少し茶色み掛かった髪

・あまりかけないけど、偶にかける横長四角い眼鏡

・主人公によく有り気な、良いとも悪いとも言えない顔（ディア談）

・最近忘れられ続けている脇差

・Tシャツにジーパンという、ラフスタイル。偶にコートか何か。

―備考―

・現実世界から、突然モンハンまがいの世界に飛ばされた不運な少年

・１０年前の救世主と酷似した『獣醒』の力を持つ
・案外、人に好かれる…？

●フィル【エリシア・フィルフォード】（１３）少女　新米ハンター
―一般事項―
・身長　１４５ｃｍ
・体重　３５ｋｇ
・種別　不明
・解放（リヴァレイション）　不明
―身なり―
・銀髪ハネ気味のショートヘア
・左眼の上辺りの前髪にカットイン
・幼さの残る顔。人はそれを美少女と…（殴
・凹凸のない体。一部で需要が…（射殺
・ケースバイケースで、ディアのパンドラの箱から武器を持ち出す
―備考―
・メインヒロインだと思われる
・零次の事を慕っている
・過去に訳あり。現在進行形でも訳あり

●ディア【ディア・ローライト】（２２）女性　女医
―一般事項―
・身長　１６０ｃｍ
・体重　４５ｋｇ
・種別　迅龍　ナルガクルガ

・解放（リヴァレイション）　６５％限界点
　―身なり―
・セミロングの金髪を頭の後ろ、下の方で纏めたポニーテール
・伊達眼鏡
・指摘されないと気が付かない程度、若干の吊り目
・世の中で言う『美人』からは、ブレていない顔立ち
・ボン・キュ・ボン…アーッ（撲殺
・普段から医療系の服装（白衣等）
　―備考―
・このお話のムードメーカーであり、ムードブレイカー
・ＤＳでデレない。でも、優しいんです！！（フィル談）
・何かしら、話の鍵を握っているのではないかと…

●マスター　【不明】　（５０前後）　男性　ハンター兼マスター
　―一般事項―
・身長　１８０ｃｍ
・体重　７０ｋｇ
・種別　金獅子　ラージャン
・解放（リヴァレイション）　８５％限界点
　―身なり―
・白髪混じりの角刈り、揉み上げと繋がった髭
・筋肉質で、ゴツめ
・よく工場とかに居る、職人さんをイメージすれば…（零次談）
・いつも優しそうな顔。滅多に怒らないよっ（レイ談）
・なんだろうな…あの林銑十郎みたいな髭は（ディア談）
　―備考―
・レイと何かしらの接点のある人
・実は相当強いとか、そうじゃないとか…

・実は黒幕なんじゃない？（レイ談

●アルト【エカゼル・シルヴァーナ】（１８）少女？　オトモ兼メイド

―一般事項―

・身長　１６２ｃｍ

・体重　４５ｋｇ

・種別　現時点ではモンスター集合体と位置付け　しかし…

・解放（リヴァレイション）　実は……

―身なり―

・ちょっとボリュームのある茶髪のツインテール

・ディアが何処からとも無く持ってきたメイド服

・優しい顔と、慈愛に満ちた笑顔とかステキ（レイ談

・体については、平均的と言うしか…（零次談

・清楚とおしとやかの代名詞。

―備考―

・物語の後半で…（ネタバレ自重

・戦闘は苦手と言っているが、実は凄い強かったり

・案外、裏の人格は黒い

●クシャナ【アルシャナ・ファーディナント】（１９）少女？　雪山の一角

―一般事項―

・身長　１７０？

・体重　４８ｋｇ

・種別　鋼龍　クシャルダオラ

・解放（リヴァレイション）　７０％限界点
　―身なり―
・茶色と黒が混じったような羽気味の長い髪
・左眼は大きな眼帯で覆っている
・ちょっと吊り目気味で大人びた感じ
・最近砕けた話し方になってきた（作者の手違い含めて
―備考―
・フラグの立て師であり、よく噛ませ犬の役目を負う
・ホントはこんなキャラにする気は無かった（作者談
・突っ込んでいって、やられてくるキャラだと思いねぇ…

●シルフィー・レイ【ラオルディ・アルガテッサ】　（不明）
幼女？　西国の長
―一般事項―
・身長　１２０？
・体重　ヒ・ミ・ツ
・種別　老山龍　ラオシャンロン
・解放（リヴァレイション）　オーバーステップにつき、上限無し
　―身なり―
・オレンジ掛かった、肩位までのショートカットの髪
・両腕を包帯で縛り上げている
・幼い顔立ち
・黒い昇り龍のマントを羽織っている
―備考―
・西国の長であり、限界解放できる内の１人
・幾つもの顔を駆使する為、本性は不明
・実は…（エンディングに関わっちゃうぜ…！！）
・一応、一国を治められるほどの実力者

●アミュー【アミュー・ナザレチア】（15）少女　一霞の幻影

―一般事項―

・身長　140？

・体重　33kg

・種別　霞龍　オオナズチ

・解放（リヴァレイション）　30％限界点

―身なり―

・原作に忠実な、霞龍の防具。でも色は黒

・片目を隠すような前髪

・淡い紫色のショートヘア（ここまで来て、多いなショートヘア…

・眼は少し冷めたような感じ。半眼というか…何と言うか。

―備考―

・幻影の使い手で、相当な実力者

・肉弾戦は苦手、嗜む程度

・基本はサポート、幻影の能力使用中は注意力が鈍る

・無口で何処か冷めているが、命令には忠実

●クレス【クレス・レクシアス】（18）少女　単眼の狂龍

―一般事項―

・身長　160？

・体重　40kg

・種別　轟龍　ティガレックス

・解放（リヴァレイション）　７０％限界点
　ー身なりー
・左眼に刀傷
・一見、科学者のような服装
・明るいオレンジ色の髪をツーサイドアップで結っている
・外見中学生
ー備考ー
・実は１話で目をやられたディガレックスとか何とか…
・アスカの保母のような存在、でもお世話役
・怒ると凄い怖い

●ハル・アスカ【ハルク・バルティエ】（２２）女性（幼女）紅蓮の極龍
ー一般事項ー
・身長　１７０？
・体重　４５ｋｇ
・種別　紅龍　ミラ・バルカン
・解放（リヴァレイション）　１００％限界解放
　ー身なりー
・着物。赤い髪を簪等で纏めている。
・幼女状態と、女性状態がある。
・目つきは鋭い
ー備考ー
・南国の長であり、ディアやクレスを従えている
・大人の状態は気性が荒い
・子供の状態は純粋無垢
・レイの計画を阻止しようとするうちの一人

●　ルミーナ【ルミーナ・フェリシア】（１６）　少女　破滅の奇術師

―一般事項―

・身長　１３０？

・体重　３０？

・種別　黒龍　ミラ・ボレアス

・解放（リヴァレイション）　無限

―身なり―

・紅い髪をサイドポニーで纏めている

・黒い燕尾服にマント、シルクハットの奇術師装備

・単眼の眼鏡

・見た目は小学生

―備考―

・北国の長に新任した、核を操る黒龍の少女

・本当は良い子

・零次には、個人的に友好的

話数が増えていく毎に、随時更新！！

番外編・話数2桁達成記念　～遅すぎた登場キャラ紹介～（後書き）

これは随時更新しますゆえ、

「誰だ…？」

とか、思ったら話数にしたがって読み返していただければと（殴

ではでは、気長に次話をお待ち下さい…

第１１話　厄災の欠片　～嘘とマモルベキモノ～（前書き）

秘境行きませんでした＞＜

フヒヒサーセンｗｗｗ

第１１話　厄災の欠片　～嘘とマモルベキモノ～

先程まで不思議な空気が…いや、俺にとって居心地の悪い空気が流れていた室内は、やっと本当に全員が揃い、賑やかな談話に包まれる。

俺はどういう顔をして良いか分からない。笑えば良いのか、俯けば良いのか、それとも…。

「おい零次？　何、浮かない顔をしてるんだ？」

「へっ？」

久々のディアの声。普段なら気の利いた言葉の一つや二つ、出そうな場面ではあるが、今の俺は気の抜けた返事一つが精一杯。

そんな俺の反応を、ディアはそれとなく「ふーん…」と一言漏らし受け取った。何かあったのを悟ってくれたのかと思うと、非常にありがたい…。

ディアは、そのまま視線をレイに移す。

「レイ様」

「ん？　どうしたのディアちゃん」

「ちゃんって…。それより、零次に解放（リヴァレイション）の事は説明したんですか？」

ディアの質問にレイは「うーん…」と唸って、挙句の果てに一言。

「やっといて」

「……はぁ」

ディアもこの一言には、疑問と肯定の入り混じったような返答しか出ない。ディアの顔が、確実に何かを確信したような顔つきになる。

「なぁ零次」

「はい？」

「何かあったか？」

ディアは何かを確信した顔のまま、その本質を聞き出そうとして

か、真面目な顔でド直球な質問をぶつけてきた。
俺はさっきあった事を、そのまま話す気には流石になれず、適当にはぐらかすのが精一杯。と言うより、それ以外無い。
「何がです？」
「レイ様と、だよ」
やっぱり。悪い顔になってらっしゃる…。俺は仕方なく、ある程度本当の事を話す。
「あー。取り合えず厄災の説明を受けて、解放（リヴァレイション）についてちらほらと教えてもらった位ですかね？」
「ほぅ。じゃあ、大体オッケーか？」
「まぁ…不安はありますけど」
今の明らかに挙動不審からの説明で、本人は納得したんだろうか…？　凄い疑問は残るが、それ以上追求されないのならそれに越した事は無い。
ディアは適当に話し出した。
「解放（リヴァレイション）については、粗方聞いたのか？　解放の上限とか、限界解放（オーバーステップリヴァレイション）とか」
「いや、そんな事までは…。取り合えず、人の姿になっても元のモンスター時の、個々の能力が使える事っていう概要くらいですかね？」
「あー。上辺だけな」
「上辺って…」
ディアは「どーすっかなぁ…」と、腕を組んで何やら考え出してしまった。やっぱり色々複雑なんだろう。良く分かん無いけど。
ある程度黙り込んだ後、ディアは考えるのを明らかに放り投げたような顔をして、俺に向き直った。無茶しやがって…。
「何か言ったか？」
「いいえ！！　とんでも御座いませんです！！」
相変わらずの読心術…。ホントに怖い…。
「んじゃまぁ、説明するよ。解放（リヴァレイション）ってのは、お前が言った通り、人

の姿のままで、ある程度モンスターであった時の能力が使えるっていう、それなりに優れた能力だ」
「何だか余計にアバウトになってません？」
言い方の問題だろうか？　何だか余計に解放（リヴァレイション）の真髄に、陰りが見えてきた気がしなくも無い。
とか何とか考えてたら、またスペックが悪いだの何だのと馬鹿にされかねない。自重しよう…。
俺の一人談義は、どうやらディアには気が付かれていないらしく、何事も無かったかのように話は進む。
「まぁ、気にするな。どうせ私の口調が適当なんだろうよ」
「ごめんなさい」
ディアは「どうせ…」と小さく言うと、ぶつぶつと何か言い始めてしまった。
怖い…！！　怖すぎるお…！！
しかし、そこはディア。直に立ち直って、唐突に話をまき戻す。だから、いつも通り何事も無かったかのように、俺も会話再開。
「解放（リヴァレイション）には、個人個人で限界ができてるんだわ」
「限界ですか？」
「そう。これ以上の解放は人としての身が持ちませんってやつ」
「と…言いますと？」
よく分からなかった俺は、取り合えず聞く。だってほら、聞くは一時の恥。聞かぬは一生の恥でしょ？
……しかし、甘かった。
「……バーカ」
吐き捨てるように飛び出した言葉は、明らかな誹謗中傷！！　それもオブラートにも包まれていない、ガチの一言。これには俺も吼える。
「酷いっ！！　素で聞いてるのにっ！！」
「ったく…低スペックな頭使いやがって…。」
おまけにこれだ。もう何回聞いたか分からない。「アタイ馬鹿じ

ゃないもん！！」とか言うのにも、軽い限界が見える。
　ある種の業界の人は、こういう言葉を「ご褒美」というらしい。
……世界が広いと思う瞬間は、幾らでもあるもんだと痛感させられる…。
　俺の頭で繰り広げられている地の分を他所に、ディアは溜息混じりに話を進める。何故、初耳の俺がここまで言われるのか分からないのはご愛嬌。
「馬鹿にも分かりやすく言うとだな、その上限を超えると、解放終了後に身体崩壊。何とも恨めしい末路を辿る」
「馬鹿…っ！！　ってか、さっきのアバウトな説明で、そこまで読み取れる頭は誰も持ってないと思いますが！？」
「……やれやれ。流石馬鹿。最早ここまで来ると、生きる上で重大な問題だな。」
「ちょっ！！　何！？　その全てを知っているような物言いは！？」
　ディアは「ハァ…」と深く溜息を吐く。……今なら彼女を殺しても、罪にならない気がしないでもない…。
……？　そもそもこの世界に法律あるのか？
「法律無かったら、治安がとんでもなくなるだろ…。これだから、そんなことも分からないｗｉｎ９８は…」
「９８なめんな！！　まだまだ現役！！」
「黙らないと完全犯罪の実験にするぞ」
「……」
　黙る。黙る。黙る。そりゃ黙る。ってか、クエスト中に殺されて埋められでもしたら、その時点で完全犯罪になりそうで怖い…。
　ディアは満足そうに、俺を見る。……酷くウゼェ。
「まぁ、ある程度加減して使わないといけない能力って事だ。俗に言う「諸刃の剣」ってやつ」
「むぅ…。なかなか不便ですね」
　と、いった具合に一瞬で普通の話に戻る。なんだか、慣れてきてる辺りが辛い…。

「まぁ、人になった分、制限はつくだろうしな」
「確かに物理的に…いや、人間的に無理が生じる事が幾つか…」
「そういうこった。当たり前だが、限界値が高いほどハイレベルな事ができる」
「成る程。例えば？」
「例えば…ってか？　うーんと…。そうだなぁ…」
個々で違う能力なのに、今の質問は少し難しかったかな…と、少し反省する俺。何たって、目の前にいるのはディ…。
「言いたい事は、口に出して言おうか？」
「滅相も無いです。本当にありがとうございました」
……心を無にする程度の、否、無意識を操る力が欲しい…。あれか？　グリコしてたら勝ちか？　試しにグリコとかすればいいのか？
そろそろ壊れてきた俺を、ディアは触れるのも嫌そうな顔で見つめる。俺も俺とて正気に戻り、取り合えず土下座だけしておく。
「お前、そろそろ私の守備範囲外だぞ？」
「それは不味すぎますね…。ってか、心で思う分にはノータッチでもいいんじゃ…？」
「お前の独り言を黙って読む読者が、酷く居た堪れない…」
「……何も言う事は無いです」
成る程…。……？　読者？
しかし、ディアは俺の疑問に触れずに、サクサクと話を進めていく。あれだ。大人の事情ってやつだ。
「あぁ、そういやさっきの質問だったな」
「限界値の話ですか？」
うっかり忘れていた。そう言えばそんな事聞いたっけかな？　最近、物忘れが多い気がしなくもない。　そろそろ、若年性ナントカってのが猛威を奮う年齢なんだろうか…？
……随分と若年性だな、おい。
「いいか？　始めて？」
「あっ、お構いなく」

態々地の文を待ってくれるだなんて…なんて優し
「あぁ。あれは、限界解放（オーバーステップリヴァレイション）と絡ませると分かりやすいと思ってな」
「待たないの！？」
「うおぁ！！　ビックリした！！　何がだよ！？」
待てくれると思った地の文を置いて、まさかの見切り発車。それにも気が付かないほど、頭の中は説明でいっぱいと言う事だろうか？
嬉しいやら悲しいやら…。
俺は複雑な気持ちのまま、ディアの話を促す
「良いですよ、説明してもらって」
「殴っていいか？　煉瓦とかで」
「何で！？」
「己の空気の読めなさに、聴いてみるといいと思うんだ」
「すいませんでしたっ！！」
何だか選択を誤ったみたい。最近フラグの方向性が見えないんだよね。お城の中にしか居ないせいかも知れないけど。
「んじゃ、始めるぞ…」
「お願いしm」
「先ず、限界解放（オーバーステップリヴァレイション）についてだが…」
「そういう事か」
「まぁ、簡単に言うと解放（リヴァレイション）に限界値が無いんだ。つまり、それは人である状況において、常にモンスターである事」
「激しい矛盾と会話のキャッチボールの成り立たなさに、頭がついて行きません」
最早会話文でさえ見切り発車。独壇場もいいところだ。…そりゃ、落ち度は俺にあるわけだけども。
ディアは「ハァ…」と、溜息を吐くと嫌そうに話し出した。本当に嫌そうに。
「お前なんかと会話する気は更々無いが、……これぱかりは難しいかもな。んっとなー…。人の形をしているけど、中身は完全なモンスターってところかな？」

「見た目は人間、中身はモンスター！！　その名は…って感じですね」
「説明を止めて、真面目に殺していいか？」
「真面目に本気で謝ります。御免なさい許してください」
取り合えず、地面に減り込むくらい頭を床につけて謝る俺。周りがざわつき出したような気がするのは俺だけだろうか？
いや…何か視線を感じなくもない。
ディアは「ちょっとそのままで話し聞いてろ」と、俺の頭を足で踏みつけた。「むぎゅ！！」とかいう効果音を、初めて聞いた気がする。しかし、ディアは何の違和感も無いような形で話し出す。
可笑しいよ？　可笑しいよ先生！？　踏んでるよ？　踏んでるよ先生！？
「まぁ、身近な話をすると、レイ様はこの世界で5人しか居ないと言われている限界解放（オーバーステップリヴァレイション）の使い手だったりするしな」
「へー…。って、そうなんですか！？」
「あれ？　初耳？」
「初耳ですよ！！　だから西国の長やってるんですね…」
俺は今更ながらに関心。成る程。まぁさっき食らった正拳突きから考えても、弱いとは到底思えないけど…。
アレは真面目に骨が折れた気がした…。今は踏まれてる事で心が折れてるけど…。
依然としてディアは、俺を踏みつけたままソファに悠然と座り喋り続ける。すると、突如としてヒールから後頭部に凄い圧力っ…！！　ちょ…！！　おまっ！！　わざとだろっ…！！
「まぁ、ナリは小学生だけどな」
「目の前で…よく言え…ます…ね！！」
「皆それぞれ内輪話に夢中だし、構わないさ」
「そんな…もんで・…す・…かぁ！？」
圧力で生じる尋常じゃない痛みのせいで、俺の声は途切れ途切れに、そして力の篭ったものになる。

痛い！！　痛いって！！　ちょ！！　馬路で痛いから！！　おいっ！！
「あっ。悪い。そういや踏んでた」
「お前ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」
俺は理不尽すぎる医師に反抗を試みて、勢い良く首の力で起き上がる。ディアは「ほら、座れよ」と冷めた一言。
あー。鈍器が欲しい。ホント鈍器が欲しい。
「んで、何だっけ？　限界値が高いほど、どうのこうのって質問だったか？」
「あぁ、そういえばそんなん有りましたね。って、デジャヴですか？」
「お前の見事なムードブレイクで…」
「何でもないです。続けてください」
俺はディアの言葉を途中で遮り、早口な上に棒読みでそう続ける。そして気付く。そうか、これが良くないのかー。
案の定、俺の頭は降ってきた踵（かかと）によって、床に吸い込まれるようにＩＮ。またまた床と密着状態で話が進む。
「まぁ、簡単に言うと限界値が高いほど、人の原型を留めなくなるんだわ」
「モンスター…に、近づく…訳です…かぁ？」
「そういう事。限界解放（オーバーステップリヴァレイション）は、完全にモンスター化するから別もんだと考えていい」
「と言う事は、…普通…の…解放（リヴァレイション）はまだ…人としての…形が…残って…る…訳です…ね…！！」
「人ではないかもしれないけどな。あと、もうちょっとハキハキ喋れない？」
「精一杯…です…！！」
「気がきかねぇなぁ…おい」
「足上げろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
再び首の筋肉で勢い良く起き上がる俺。しかし、ディアはガン無

視。
「まぁ、そんな所だろう。厄災の詳しい話は、適当にマスターにでも聞いてくれ」
「……」
「何だよ？」
「何でもないです」
構って貰えないと、何だか最近凄い寂しい。いや、待て！！　ドM言うな！！　アレは勝手なキャラ付けだって！！
そんな中、息を整えて俺は我に帰る。何だかいつもと違う自分がいた気がする。気のせいだと非常に嬉しい…。
「あれ？　そういえば、ミラ系が戦闘員を殲滅したのに、何で先生は生きてるんです？」
「ん？　ガッツリ厄災の話も聞いてるんだな」
ディアはキョトンとした様子。久しぶりに可愛いディア…。
「マスター。鬼棍棒」
「本当に申し訳ありませんでした！！」
全くもって扱い方が分からない…。えっ？　可愛いって、誉め言葉に入らなかったっけ？　あぁー。元がモンスターだから、「かっけーね！！」とかそっち系？
「もういいよ…。もういいから、私が悪かったから…。お前喋らないでよ…」
「……」
ディアが泣きそうなので、この辺で色々終了。いつも、どっちかと言うと俺は突っ込むほうに回る事が多いから、今回はこっち側に回ってみるという、凄いコンセプトが揺らぐディアとの秘密企画だったけど、どうやら企画倒れ。
改めて、俺はこっちに向いてない事が分かった…。ぐすん。
「……厄災の事は、粗方聞いてるんだよな？」
「まぁ、結構聞きましたね」
「そんなら別にマスターに聞かなくて良いかな？　あんまり深く聞

くと、宜しくない事も多いから」
「と言いますと？」
「心の傷って奴だと思っとけば良いさ」
「成る程。肝に銘じておきます」
やっぱり色々複雑らしい。言ってしまえば一つの戦争。勝てば官軍、負ければ土下座と言う訳だ。
……あれ？　俺今日2回くらい、強制土下座のフラグ立ってなかった？
「まぁ、お前の質問くらいなら答えてやるよ」
「んえ？　いいんですか？」
ディアは俺の質問に対して、何も引っかかる事が無い様子。気にせず、どんどんと喋りだす。
「その質問はこれと言って、引っかかる事でもないしな。」
「じゃあ、何で生きてるんですかって質問を…」
俺は一応遠慮がちな声で、さっきの質問を繰り返した。ディアは「うーん…」と唸って精一杯思い出してる感じ。……あれ？　印象薄いの？　厄災って？
「んーと、あぁ。当時私は未だ12歳位だったのかな？」
「ロリっ子全盛期ですね」
「黙ってもらっていいか？」
「はい…」
ついつい口が滑る。と言うより、こういう突っ込み方に慣れてしまっている自分がいるのがまた…。
こっちに来て、大分変わった俺。良い意味かなんて、聞くもんじゃない。
ディアは俺が大人しくなったのを見ると、何だか気にいらなそうにムッと顔を顰める。……一体何を求められていたんだろう？　聞かないことにする。
「まぁ、確かに厄災の後始末でミラの襲撃はあったが、別に戦闘員を全員殺した訳じゃないよ」

「えっ？　そうなんですか？」
「そんな新手の残虐刑は、理不尽にも程があるだろ」
「先生は『理不尽』って言ったら駄目だと思います」
「ほぅ…」
「続けてください」
あれぇ…？　間違ったこと言ったつもりは無かったのにな…？
あっ。成る程。本当の事が、一番当人を傷つけるってやつか。
今度から、黙っといてあげよう。
「……端的に分かりやすく言うと、その襲撃は軍事裁判みたいなもんさ。戦争犯罪人、まぁ戦犯者を殺っちゃおうっていうノリ？」
「軽い！！　ノリが軽すぎる！！」
ディアは今までと打って変わって、いつもの悪そうな顔で笑いながらそう言い放った。軽い！！　軽すぎるぞ！！　大事な事なので2回言いました。
「でも、そんな感じさ。ミラが出てきた時点で勝ち目はないからね」
「負け戦ですか」
「自国を最後まで手放さなかったって、言って欲しいもんだね」
「レイ様ですか」
俺は少し表情を曇らせたまま、レイに目をやる。今は、フィルとアルトと楽しく談話中だ。……そういや最近、フィルと喋ってないな。
俺がレイに視線を向けたのを見て、ディアは「まぁ、もう一人」と指を一本立てて見せた。
「あと、良く分からん勇者様」
「『獣醒』の…」
何故か誰も名前を口にしようとしない。名無しの勇者様。でも、迂闊に聞こうにも聞けない俺がいる。だって、多分地雷。
ディアは宙に視線を漂わせ、ポツリ一言。
「まぁ、かっこいい人ではあったよ。お前と違って」
「悪かったですね！！」

「全くだ。だが、頼らざるおえないのが悲しい…」
「帰りますよ？」
「土に？」
「現世に！！」
酷い言われ様だ。一方ではこの世界を救うだのなんだの、一方ではまるで襤褸雑巾。まぁ、ディアが本気で言ってるなんて思ってないけど…。
あっ、今ニヤってしませんでした？　先生？
「まぁまぁ、そういきり立つなって」
「誰のせいだと思ってるんですか」
「そういう風に生んだ、お前のご両親」
「もう絶対帰る！！」
「土にか？」
「そのノリは、もういいわぁぁぁぁぁぁ！！！！」
デジャヴ。そりゃもう激しいデジャヴ。ってか、どんだけ土に帰って欲しいんだろう？　何？　そんなに、地面から沸き立つ腐敗臭がお好み？
分かっていて突っ込まないのか、それとも素で突っ込まないのか、ディアは自分の話を進める。
「怒るなって。な？」
「だから誰のせい…」
「質問の続きでもしようじゃないか」
「……はぁ」
丸めこまれた。綺麗に丸め込まれた。……いいけどね？　別に。
「まぁ、戦犯者も糞も、当時私は未だランクの低い新米ハンターだったんだ」
「あれ？　そうだったんですか？　てっきりチート的な存在かと」
「お前の目に、私はどういう風に写ってるんだ？」
ディアは眉を潜める。別に怒ってはいないんだろうけど、何だろ？　困ってるような…あぁ。関わりたくないけど、関わらないのも

面倒だから…って、説明すると虚しくなる…。
だから、仕方なくいつものノリ。
「ゾー〇」
「最近、ゾ〇マはあんまり強くないぞ？」
「あれでもＳＳなんですけどね」
「格差社会の賜物だな」
「ドラ〇エで見る格差社会ですか…」
「やだな…」
「やですね…」
不毛。その言葉はこの会話の為にあったんだろう。有難う。不毛。
……あーあ。
「まぁ、何でもいいや。各言うも当時の私は弱すぎて、村の非戦闘員の誘導が精一杯。だからこれと言った殺しもしていないし、戦闘の参加も少ない。だから無罪って感じで、今生きてるようなもんかな？」
「へー。マスターは？」
「アレはラッキーだわ。多分」
「ラッキー？」
ディアはマスターの方に目をやって、不敵に笑った。何か知っているような、含んでいるような、そんな笑い。
「あれでもレイ様の元側近なんだよ、マスターは」
「ありゃ…。最も殺される必要のある人じゃないですか」
「だな。でも、何か知らんが生きてるし。当のレイ様も」
「レイ様は一度…」
そこまで言いかけて、俺は慌てて口を閉ざす。俺の明らかな挙動不審は、誰から見ても確定的に明らか。今更拭えるような代物ではない。
ディアが、本質を悟るかどうか…。
「ん？　一度…何だ？」
「いや、何でもないです」

俺は澄ました風にディアに切り返す。しかし、念押しはキツイ。
「……。ホントに何でもないんだな？」
体に冷たい物が走る。ディアの目が一瞬、紅く光った気がした。
その瞬間、何故か皆の会話が止まる。
間違いない、今一瞬の間だけ開放（リヴァレイション）しやがった…！！　威圧にしては、上出来過ぎる。ちびりそうになった…。
でも、口が裂けても言えない事。俺は下手ではあるが嘘を吐く。
「……えぇ。ちょっと現世と記憶が入り混じっただけです」
「ふーん…そう」
「えぇ。そうです」
ディアの声のトーンが重い…。何だか宜しくない気がしてきた…。
「まぁ…。この世界の大まかな概要は掴めたろ？」
「……え？　あっはい…」
声が耳に届きにくくなった気がする。フィルターが掛かったような…。
「なぁ零次」
「…はい？」
ディアは突然、超絶な重みのある声で俺を呼び、見下ろした。体中に鳥肌が立つ。
「どうだ？　私の領域（テリトリー）は？」
「っ！？　領域（テリトリー）！？」
どうりで声が霞むと言うか、ぶれると言うか、聞き取りにくい訳だ。これがこの領域（テリトリー）が持っている能力なら話が纏まる。
でも、まだどんな能力か分からない。
「そうか。分からんか？」
「えっ…」
「じゃあ、教えてやろうか？」
ディアはそう言うとニタァっと歯を見せて笑った。周りの皆は異変に気が付いているようだが、一向に動こうとしない。いや、動いていない？

ディアは笑ったまま一言、言い放った。
「隠し……無…だ。私…、お……」
「……？」
何を言ってるのか、全く分からない。少しづつ掻き消えて…。……。

何も聞こえない…。

「……、……？」
「？」
ディアが何か言った気がした。聴力が消えた？　いや、微かに聞こえる…。半端無い聞こえ難さに襲われてるだけ…。
いや…？　違うぞ。音は来る。音は聞こえる。でも自分の中の全ての感覚器官が、遅れてる感じ。遅れてるから…かみ合わない…。
「（聞こえるか？）」
「（……！？）」
不意に頭の中に言葉が飛んでくる。紛れもないディアの声だ。テレパシーってやつだろうか？
「（テレパシー？　まぁ好きに呼べば良いさ。どうだい？　私の手の平の上で踊る気分は？）」
「（あんまり、良くはないですね）」
ディアは小さく笑う。成る程、心を完全に読むのか…。
「（大体当てちまうから、お前は怖いよ）」
「（やっぱり、感覚が…？）」
「（もう、お前の感じる事の速さ。その全ては、私の１０分の１にも満たない）」
そう言うと、ディアは俺の視界から一瞬で消え去った。本当に一瞬。瞬きした次の瞬間にはいなかった。
「（後ろだ後ろ）」
「（！？）」

「（別に振り向かなくて良いよ。遅いから）」
ディアの声が後ろからしたその次の瞬間、もう目の前にいる。速くなったのか…！？
「（馬鹿…。逆逆。お前が遅くなったんだよ）」
「（遅く…！？）」
「（私の領域（テリトリー）では、１分で当人の感覚速度を極端に遅くする事が出来る。まぁ、１分掛かっちまうけどな。この領域（テリトリー）の中で、私より強い奴なんていないのさ。分かる？）」
「（でも、領域（テリトリー）って、ココは…？）」
周りを見渡すと真っ暗闇。何故かディアだけが明るく見える。
「（此処か？　領域（テリトリー）内は私の独断で、全て私好みに変えられる。物理を無視した空間も例外じゃない。しかも此処では私が最強。至れり尽せりだろ？）」
ディアはニィっと笑った。空間を変える？　物理的にあの室内じゃムリじゃないかな…？　ってか、さっきこんな感じのにあったばかり…。
「（さっき？　……アミューか）」
「（！？）」
「（図星か。成る程な。通りで…。やっぱり、お前を…）」
「（それより早く解いてくださいよ！！）」
「（まぁ待てよ。何の為に、態々張ったと思ってんだ？）」
「（……）」
「（まぁ、用件は有るけど、先ずは適当にこの空間に慣れてもらおうか）」
「（慣れると思います？）」
「（お前次第だな）」
「（お前次第って…。と言うよりこんなに大きな空間、どうやってあの部屋で作ってるんです？）」
「（簡単だよ。アミューと同じ、精神系の領域（テリトリー）能力さ）」
「（幻覚ですか…？）」

「（そう思っとけばいいよ。本質に触れると、面白くないのは私だからな）」
「（まぁ、一理ありますね。でも、じゃあこの領域（テリトリー）自体はいつ作ったんです？）」
「（お前が私の目を見たとき）」
「（あー。あの時…）」
「（この領域（テリトリー）は相手自身にかける物だからな）」
「（相手…自身…？）」
「（あぁ。相手自身。普通、幻覚は術者が幻覚という術の核を持っているから、術者を倒せば術は解けるけど、私の領域（テリトリー）は私を倒しても解けない。何故なら、術者以外の自分から見た相手が領域（テリトリー）の核を持ってるから）」
「（つまり…）」
「（つまり、お前が死ねば領域（テリトリー）は消える。私が死ねば、お前は永遠にこの領域（テリトリー）の中で過ごすって訳。まぁ、死のうが生きようが、私の領域（テリトリー）の中では同じって事）
「（能力も性格に似て歪んでますね……）」
「（気に障るけど、一回で理解できて良かったよ…。まぁ、ドギツイ能力も分かった所で、これで喋る気になった？）」
「（な…。何をです…？）」
「（厄災の当時、レイ様は何で死ななかったのか）」
「（……何でそんな事が知りたいんです？）」
「（ちょっと、疑問を確信に変える最後のピースなんだわ）」
「（……）」
「（この状況で『黙る』選択肢はお前にあるか？）」
「（……じゃあ一つ、いいですか？）」
「（不愉快だが、聞いてやらん事もない）」
「（……その最後のピース。……疑問って何です？）」

「ディアちゃん！？」
レイのディアを呼ぶ声が部屋に響く。その声は驚きと、……何かを勘付かれたような渋い感情が込められている気がした。
しかし、最早自分の世界に入ったディアに、その言葉は届かない。
その場にいた全員が、その僅かな解放（リヴァレイション）を悟ったらしい。一気に空気が凍りつく。
「ちょ！！　先生！？　何で！？」
フィルが慌てて駆け寄ろうとする。しかし、レイはそれを全力で止めた。
「待って！！　フィルちゃん！！」
「何で止めるんです！？　零次が！！　零次がっ！！」
慌てふためいた様子を全面に出し、場の状況把握能力に極端に欠けているフィル。そんなフィルの目の前に、レイは机の上にあった紙切れを摘み翳（かざ）す。
「なっ…！！　何ですか…！？」
「まぁ、ちょっと見てて」
意表を突かれ、少し冷静になったフィルにレイは言葉少なく、吐き捨てるように一言。そのまま、持った紙切れを適当に丸めるとディア目掛けて投げる。
『バチッ！！』
「えっ…」
投げられた紙の球はディアに届く事無く、1メートル手前辺りで見えない壁に弾かれる。しかもその球は、触れた面が黒く焦げている。
「フィルちゃんは知らないんだよね？　ディアちゃんの領域（テリトリー）の能力は…」
「えっ…はい」
レイはその焦げた紙を拾い上げると、グシャっと捻り潰した。そして、何事も無かったように話し出す。

「彼女の領域(テリトリー)は少し特殊でね、自分が認めたもの以外の介入を一切許さないんだよ。あの壁はその具現化。結界ってやつかな。その上、あの中で自身より強く在れる者なんて居ない」
「介入を…許さない？　自身より強く在れる存在がない…？」
フィルは確かめるように、レイの言った言葉を繰り返した。しかしその顔からは、いまいち理解の表情が窺えない。
レイは補足するように、ディアを薄っすら睨みながら言った。
「つまり、外界の領域(テリトリー)への進入を拒み許さず、内部では自身が何よりも上。あの中は言わば、ディアが頂点に君臨する一つの世界」
「……如何にも先生らしい」
フィルは口をへの字に曲げて、ただただディアの背中を見据える。
フィルとディアの距離は僅かに数メートル。しかし、その背中はあまりにも遠い…。
「何とかしないと…」
「どきなレイ」
レイがディアに向かって数歩、ゆっくりと歩き出したその時、クシャナが「よっ」とソファから立ち上がり一言そう言った。
「クシャナ…。何のつもり…？」
「何のつもり…って？　言わなくても読めるんでしょ？　見えるんでしょ？」
クシャナはレイを軽くあしらうと、少し強めに押しのける。よろけたレイはマスターに支えられ、端に寄ったが何だか不満そうだ。
「ようはディアに認めてもらえば良いんだろ？」
「そう簡単にいくかな？」
クシャナの安易な考えに、レイはボソッと反抗した。しかし、クシャナは不敵に笑う。
「見えてんだろ？」
「……」
レイが黙り込んだのを見て、クシャナの目は確信を得て光る。上手くいく。そう信じて疑わない目だ。

そのやり取りを見たフィルが、クシャナに駆け寄る。
「私もやる」
「はい？」
フィルはそう言って、クシャナの横に仁王立ち。これにはクシャナ……いや、部屋中のディアと零次を除いた全員が、大なり小なり顔を引きつらせる。
「危ないから、お子ちゃまは下がってな」
「クシャナより役に立つもん」
「フィル様…。本当に何があるか分かりませんし…」
「アルトは黙ってて」
フィルは二人と目を合わさず、ただ一点。先程から微動だにしないディアと零次を見つめている。
その目には、一体何が映っているのか…。
「今回ばかりは、お前には危なすぎ…」
「そんな事ないもん！！」
クシャナはフィルを説得しようと、その肩に手を置いた。しかし、フィルはクシャナの手を振り払い、近くの甲冑から槍をもぎ取り結界へと突貫を図る。
不意を突かれてクシャナもアルトも、無論端に居たマスターもレイも、その無謀すぎる突貫を制止できない。
「だあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
壮絶な金属音と共に、槍の先が火花をあげて無くなっていく。でも、一向に結界が破れる兆しが無い。
数秒遅れでアルトとクシャナがフィルを引き離そうと、その体を掴もうとしたその時。
『ブォン…』
「えっ…？」
結界は鈍い音を上げ、1人が通れる位の風穴を開けた。そこにフィルは吸い込まれる。そして、フィルを吸い込むと同時に、風穴は消えて元の結界に戻ってしまった。

アルトとクシャナはタッチの差で、フィルには届かなかった。
「よかったね」
「！？」
部屋の端で小さな笑い声がした。クシャナとアルトは半ば驚いた様子で其方に目を向ける。
そんな2人に、レイはもう一度笑みを浮かべて……いや、嘲笑うように言った。
「良かったね。行かなくって」
「レイ…？　何が言いたい…？」
クシャナは目を細め、完全な臨戦態勢。アルトも心なしか眉間にしわを寄せている。
しかし、当のレイはそれでもニッコリと笑って言ってみせた。
「だって、行ったら半分死んじゃってたよ？」

ω

「痛たた…」
「おや？　フィルじゃないか？　どうしたんだ？」
如何にも何も無いかのように、ディアはフィルを迎え入れた。ディアの口調はおどけたような感じに聞こえるが、その目は全く笑っていない。
「様子が変だから、見に来たのか？」
「っ！？」
ディアの顔を見たフィルは、その場で凍りつく。
今…光った気がした。
「どうした？　フィル？」
ディアは薄っすらと笑みを浮かべ、一歩一歩近づいてくる。新手のホラー映画よりも十分に…否、十二分に怖い。
フィルはディアに気を配りながらも、辺りを見回す。……零次が居ない。

「先生…？」
「ん？　何だよ？」
恐る恐る顔色を窺うような、間を空けたフィルの声に、ディアは何食わぬ顔で、尚且ついつも通りの切り口で言葉を返す。
しかしフィルは警戒心を解かず、ディアが寄る度に間を取る。
「零次…。零次は…？」
「うん？　零次？　知ら…」
「嘘だよ」
ディアが全て言い終わるよりも前。フィルはディアの嘘を制止させた。黒く、お互い以外に何も見えない空間で、その声は小さく反響した。
「何を言ってるんだ？　此処には私とお前…」
「嘘だよ！！」
再び。ディアの苦笑いを交えた嘘は、フィルの叫びで虚空に消えた。フィルの目は、ディアを捕らえ、睨みつけたまま離さない。
「あーぁ…」
「……？」
ディアは暫く黙ったかと思うと、手を大きく横に広げ、そのまま大きく伸びをし溜息にも似た小さな呟きを漏らした。
その目は紅く、光は無い。
「まぁ…いっか？」
「へっ…？」
そう、確かにそう言った。その次の瞬間、ディアの右拳はフィルの腹をしっかりと捉え、何かが砕ける音と共にフィルを吹き飛ばした。
フィルはそのまま、空間の地面とも言える黒い床を蹂躙。あまりの勢いの強さに、その口からは血が吐き出される。
しかしフィルは、スッと起き上がった。
「あれ…？」
痛みが無い。それどころか、触れられた感触もさえもだ。まして

や地面を転げまわった感触も無い。血も、何の味も無い。
立ってる感触も薄い…。
「フィル」
「ふぇ…？」
驚く事のあまりの多さに、フィルは立ち尽くしていたが、ディアの声で我に帰る。しかし、そこに立っているのはきっとディアじゃない…。
「な……？　のん…に……次を連れ……に来た……？」
「えっ…？　先生…？」
声が…聞こえにくい。音は聞こえるけど、掴めない。それが言葉だと認識できていないような…。
「（ニィ…）」
「……？」
不意にディアが小さく笑った。そして、そのまま背を向けて立ち去っていく。
今だ…。先生を何とかして、このテリトリーを解かなきゃ…。
「っ…あぁぁ！？　あぅ…！！　えぅ…っ！！」
「（バーカ）」
立ち上がってディアを追おうとしたその時、体中を壮絶な痛みが走り、フィルはその場に蹲（うずくま）ってしまった。
おかしい。何も無いのに。何もやられて無いのに。腹部に尋常じゃない痛み。
「（レイに聞かなかったのか？　私の領域（テリトリー）の能力）」
「うぐぅっ…！！　あぁ…んぅ……！！」
感じる事に鈍感になる…能力。フィルは痛みの中で薄っすらと思い出す。でも、体中を駆ける痛みでそれ所ではない。
「（さぁ零次？　話す気になった？）」
ディアはもがき苦しむフィルを他所に、徐に暗闇に目をやった。

「（汚いぞ！！）」
「（おや？　汚い？　向こうが勝手に、のこのこ来たんだろ？）」
ディアは俺の叫びを一蹴。嘲笑うようにおどけて見せた。
どうやら俺はフィルに見えていないらしい。ディアの傘下にある以上、全ての権限はディアにある。当たり前と言えば当たり前か。
「（まぁ、言わないって言うなら、もう少し荒めに見せしめようか？）」
「（っ！！　アンタって人は…！！）」
「（こっちだって命かかってんだ）」
「（命…？）」
「（少なくとも私だけじゃない。この国全てのな）」
ディアは真面目な顔でそう言った。この国全ての命？　それを救うためにレイの情報がいる？　それは絶対…。
「（……嘘ですね）」
「（……嘘…だぁ？）」
その次の瞬間、俺の体から血の気が引いた。そこにいたのは、明らかな迅龍。
「（解放（リヴァレイション）５０％）」
「（ちょ！！　先生！？）」
「（言わないって言うなら、これ以上はぐらかすなら、フィルを殺す！！）」
「（何言ってるんです！？）」
「（何も知らない奴が！！　何が「嘘」だ！？　何を思っての言動だ！？　このままじゃ最悪の結末さえ免れないって言うのに！！）」
「（最悪の結末…！？）」
「（あぁ！！　お前が聞いてた私の疑問はな！！　レイ様が全ての黒幕だって事だ！！）」
「（なっ！！　何を言ってるんです！？）」
「（それが本当なら、私達を含めた全ての物が殺される！！　一刻

も早く厄災を止める為には、お前の情報がいるんだ！！）」
ディアは…いや、迅龍は猛々しく、そう言い放った。
しかし、俺には信じられない…。レイが黒幕？　そんな馬鹿な…！？　だってさっき、あんなに笑顔で俺に力を貸してくれって…。
「（お前も、騙されて殺される！！）」
「（何でそんな事が分かるんです！？）」
ディアは俺の反論を、精一杯否定した。そして、大事な事を告げる。
「（厄災の本当の意味は、人対モンスターなんかじゃ無いからだよ！！）」
「（っ…？　どういうことです？）」
「（厄災の本当の狙いは、その混乱に乗じて覇龍（アカムトルム）を復活させる事だからさ！！）」
「（覇龍（アカムトルム）を！？）」
「（覇龍（アカムトルム）は古い言葉で『災厄』の意味。いつの間にか反対になって厄災なんて言われ方をしてるだけだ！！）」
「（えっ…！！　でも、何で覇龍（アカムトルム）の復活が、そんなに大変なんです！？）」
「（別に覇龍（アカムトルム）が大変なんじゃない。その覇龍（アカムトルム）から作る古代兵器の書が、この西国にはあるんだ）」
「（その武器って…）」
「（覇導砲エティル・カムトルム）」
「（何ですか…それ…？）」
「（古代ビーム兵器。一発で四方国を滅ぼせる威力らしい）」
「（！？）」
「（レイはそれの復活を狙ってる…）」
「（そんな…まさか）」
「（嘘じゃない！！　あのＭＨ計画は只の目晦ましだ！！　あの間に覇龍（アカムトルム）を探す手筈になってる！！）」
「（手筈…。じゃあ、覇龍（アカムトルム）は見つかってないんですか！？）」

「（今は…な…）」
「（じゃあ…！？　厄災の仕掛け人って…！？）」
「（レイだろう…）」
「（……レイ様。それ…信じますよ？）」
「（あぁ。そうしてくれ）」
「（それで、聞きたい事って…？）」
「（実はな…）」
「（あっ、ちょっとお願いがあります）」
「（……何だ？）」
「（フィルの手当てを先に…）」
「（あぁ。心配すんな）」
「（へ？）」
「（私の領域（テリトリー）は難点があって、痛みを覚えるのも外傷を負うのも、この世界だけなんだわ）」
「（どういう事です？）」
「（つまり、この世界で死ぬと確かに死ぬけど、この世界で死ぬ以外の何らかのダメージを受けた場合は、領域（テリトリー）から抜ければ大丈夫って事）」
「（都合いいですね）」
「（私の領域（テリトリー）だからな）」
そこまで話すと、ディアはフィルを小さな穴から外界へ落とす。
やっぱり、此処は別次元と考えるのが良さそうだ。
「んー！！　よし。大体聞こえるようになったか？」
「あっ、聞こえます」
「お前の中の空間以外を元に戻したんだ」
「どうせなら空間も…」
「レイに聞こえちまう」
「……」
「じゃあ、私からの質問だ」
「……はい」

どれが嘘なんだろう？

いや、何が嘘なんだろう？

俺はどれが正解の道だと、選べるだろうか？

レイか、ディアか…。

どちらにも「信じる」と言ってしまった…。

マモルベキモノ…。

誰も、傷つけたくなかったのに…。

第１１話　厄災の欠片　～嘘とマモルベキモノ～（後書き）

予定は未定。

そして予定は予定。

どうも、２乗です。

推敲時間０秒。

書いたものを書いたままの投稿＞＜

可笑しな点は指摘して下さい。

分からないんでｗ

考えた結果、秘境は最後の方に回します。

レイは黒幕だと、大方の人が分かっていたようで残念ｗ

でも、未だ分かりませんよｗ

この後の展開は、俺も考えてないですけどｗ

ではでは次話か、新作でｗ

第１２話　老山と覇龍　～運命に傾く世界～（前書き）

お久しぶりでした。
やっと迷いあぐねた解説終わり。
次話で新キャラ疑惑…ｗ

第１２話　老山と覇龍　～運命に傾く世界～

さっきまでの張り詰めていた空間内の空気は、糸が切れたかのように一転した。……いや、そうでもないか。
「じゃあ、質問させてもらうぞ？」
「あっ…。はい」
本当にレイは黒幕なんだろうか？　覇龍と古代兵器…。それの存在も明らかじゃない。でも、ディアが嘘を言っているとは考えにくい。
寧ろ、そんな事考えたくない…。
「レイは一回死んだのか？」
「えぇ。本人がそう言ってました」
これも裏付けは取れないけど、あの体を見れば何となく信用はできる気がする。流石にアレは、隠し様というか誤魔化し様がないだろう。
「じゃあ、何で生きてるんだ？」
「１０年前に厄災を救った勇者様が、再生術か何かで生き返らせたとか…」
「……ふぅん。…？」
ディアは少し表情を強張らせた。思う事があったんだろうか？
っていうか、勇者って一体何者なんだろう？　『獣醒』っぽい能力持ってるとしか、聞いていないんだが…。
「その蘇生で、レイ様は完全に生き返ったのか？」
「えっと…。確か腕だけ治せなかったから、勇者様がくれたとか…」
「っ！？」
俺が、そう自信無さ気に言い終えた瞬間、ディアは目を見開いて

固まった。その表情は、怒りと驚きが混じったように見えなくもない。確実に、何かに行き当たったんだろう。
「おい！！　それホントか！？」
「えっ…！！　本人が言ってましたんで…」
ディアは凄い勢いで、俺を捲くし立てた。俺は完全にその威圧感に押し潰され、言葉が詰まりそうになる。
詰まったら殴られるだろうけど…。
「……最悪だ」
「へっ？」
ディアは本当に参ったような顔をして、頭を抱えて座り込んでしまった。初めての行動に俺も戸惑う。
取り敢えず、スゲェやべぇ状況なんだろう…。
「予想はしていたけど…、作戦の第一段階は終わってたか…」
「第一段階…？」
ディアの言葉に俺はすぐさま疑問を返した。するとディアはスッと立ち上がって、小さく溜息を漏らす。そのまま、俺への返答が返る事は無い。
そして、その溜息は、小さくも深く、そして重い。
「お前、何かレイ様にその時の事聞いたか？」
「勇者様との件ですか？」
「あぁ。もう騙されてるかもしれない」
「……」
「何か聞いてないか？」
「……まぁ。少し」
俺の口数が少なくなったのを見て、ディアは俺から目線を外し大きく息を吐いた。
何らかの気使いだろうか？　それとも……。
「お前がレイ様を信じたい気持ちは分かるが、少し私の話に付き合ってくれ」
「……分かりました」

ディアは申し訳無さそうにそう言った。何だろう…。もうよく分からない。何を信じればいいのか…。
「んで？　何を聞いてるんだ」
「厄災で自分は、ミラに引き裂かれて死んだって…。でも勇者様がチャチャブーに教わった再生術で生き返って、足りない腕を貰ったって…。」
「奇面族の再生術…だと？」
「そう言ってましたけど…」
ディアは少し黙り込む。そして一言口にした。
「嘘だな」
「へっ？」
突然の小さな一言に、俺は完全に戸惑い一色に染められる。どれの事を指して嘘だって言ってるのか、いや…。それが分かってはいるけど、もう既に嘘に嘘を重ねたようなこの世界に、自らがついていけていない。
「奇面族に再生術は無い」
「どっ…。どうして分かるんです！？」
ついつい俺の声もトーンの高いものになっていく。俗にいうパニック状態って奴だ。
しかし、ディアは溜息一つ。俺に切り返す。
「そもそも、物理的に考えて再生術なんて存在しない。まぁ、神でもない限りな」
「何だか、一瞬で話が現実味を帯びちゃいましたけど…」
まぁ、そりゃ確かに、そんな神掛かった事出来る訳が無い…と思う。少なくとも確信が持てないのは、レイの体を見ているからだろう。
説明がつかない。
「……」
「レイの体との矛盾で納得がいかないか？」
「……まぁ」

ディアは俺の返事を聞いて、少し困ったような顔つきになる。それは、何かを躊躇うような顔つき。
何か隠してるのか…？
「隠し事は無しって約束ですよ？」
「ん…。あぁ…」
俺の一言で、ディアは余計に何かを考えるような、躊躇うような顔つきになる。都合が悪い事なんだろうか…？
何だか最近回りが皆、敵に見える気がするよ…。
「……なぁ零次」
「はい？」
「それ、本当に見たのか？」
「どういう事です？」
突然の切り出し方に、俺は少し戸惑い気味に受け答えをした。今更そんな事を聞いて、一体如何しろと？　寧ろ混乱するだけじゃないのか？
「アミューが居なかったか？」
「居ましたけど…ってまさか…？」
ディアはそのまま、小さく頷いた。だが、その表情にはいつもの自信は見えない。
俺は確認を取るように、思う所を口にする。
「……幻影？」
「確信を持って言える事じゃないが、多分そうだと思う。第一、そんな中途半端な再生術を信じるお前もどうかしてるぜ…」
「……むぅ」
ディアはそこまで言い終えると、大きく伸びをする。相変わらず、こんな所で自分主導なマイペースを貫き通している辺りは、尊敬物だな…。
「まぁ、大方の情報はそんなもんか？」
「えっと…多分」
「まぁ…いい。でも、不味いな」

「何がです？」
「多分勘付かれてるだろう。この後レイにどう殺られるか…」
「えっ！？　何でですか！？」
「何でも何も、もう私はレイからしたら、只の厄介者だからな。葬られて当然だろう？」
「どうするんです！？」
「如何するも何も、暫くお前達とは別行動を取るよ」
「最初から、ここまでの流れが目的だったんですか？」
「まぁ、そんな所だろうな。悪いな。利用して」
「……」
「じゃあ、私はこ領域（テリトリー）から離脱して直に逃げるから、後の事は頼んだ。レイに、何とか言っておいてくれ」
「っ…。無責任な…」
「いつもの話だろ？」
そう言うとディアは音も立てずに、闇に紛れていった。まぁ、流石は迅龍とでも言った所だろうか？
次の瞬間、バッと闇が解け光が入る。しかし、何故か俺の視界はそこで真っ暗になる。
何があったかは分からない。

ω

「アミュー」
「はい…、レイ様」
「どう思う？」
「ディア…の事ですか…？」
「うん」
「目障りですね…」
「そうじゃなくて」
「……？」

「絡んでると思う？」
「……」
「……まぁ、いーや」
緊迫した空気の流れていた応接間は、既にその空気とは違う空気が張り詰めている。
床には数人が、気を失っているのか、はたまた死んでいるのか、倒れたまま動かない。
「余計な事、喋ってくれたみたいだね」
「…ディア……ですか？」
「うん」
レイは床に倒れ込んでいる零次に目を向け、小さく微笑む。そこに見えるのは，明らかにも不敵な笑み。
「アミュー」
「はい…？」
「記憶消しといちゃって」
「……いいんですか？」
「ディアの部分だけすっぽりとね」
「……」
「何？　不服？」
「いえ…。何でもありません…」
レイは冷たくアミューをあしらうと、彼女の横を通り過ぎ、カツカツと靴を鳴らしながら窓際へと歩き出す。
その背中に見えるのは、混沌とした禍禍しいオーラ。
アミューは黙って、その作業へと取り掛かる。
「ねぇアミュー？」
「はい…？」
「貴女は私の玩具(おもちゃ)よね？」
「……はい」
「ふふふっ……」
小さく楽しげな笑いは、会議室に溶け込むように消えていく。

真相すらも…。

ω

「れ…じ…！！　れい……！！」

何処からか声がするが、俺は相当疲れているのか、反応するのも面倒だ…。

全く…。突込みにはあってはならない事態…。

「「れーいーじー！！」」

「っ！？」

耳を劈くような声が、室内に木霊する。俺がビックリして飛び起きると、そこには拡声器片手にフィルが鎮座。何だかご機嫌斜めの様子。

あれぇ…？　何かしたっけかなぁ…？

「えっと…？」

「「朝ご飯だよ！！」」

「拡声器使うな！！」

朝から激しい耳レイプ…。お陰で耳の奥で、何だか不協和音が奏でられている…。

うわぁ…。奥の方で、ビョンビョンいってる…。

「もう！！　いくら呼んでも起きないんだもん！！」

「あぁー。悪い…。何か分からないけど、スゲェ疲れてて…」

フィルは「同感…」と、さっきまでの表情とは裏腹に、大きく溜息をついた。

どうやらシャンドに着いて、あの南国の一件が終わってからレイの一件があり、それから今まで疲れて寝ていたみたいだ。

……多分。

「取り敢えず、朝ご飯出してくれたから食べに行こう？」

「あー。食欲無いけど…行くかな？」

フィルに手を引かれ、俺は何だか落ち着かない応接間を後にする。

あれ？　何で俺、応接間で寝てんだろ？
「なぁ、フィル」
「うん？」
「俺、いつから寝てた？」
「……うーん」
フィルは小さく唸ると、「分かんない」と漏らす。本人も納得がいかないような顔で、首を傾げた。
「私は、いつからここに居たのか分からないし…」
「……歳か？」
「失礼なっ！！」
俺の冗談をフィルはあしらう事も無く、堅く握った拳で返す。……最近のガキは…、冗談の一つも通じないのかっ！！
「本当に何が何だか分からないんだよね…」
「ふーん…」
殴った事についてはスルー。殴られ損とか、最早そんなレベルじゃない。
だが、何だか何もかも納得がいかないような、そんな気持ちに駆られる。
「ふぅ…」
俺は小さく溜息をつくと、奥が霞むほど長い廊下をゆっくり歩いていく。

ω

「あー！！　無駄に癪だな！！」
ディアは向かいに座らせた、頼り無さそうな橙色の髪をした少女に徐にそう言い放つ。少女の片目は、刀傷で塞がれ開く事は無い。
そんな少女は、「まぁまぁ…」とそれを苦笑いで宥める。
人の気配も無い殺風景な庭園。そこに無造作に置かれた椅子とテーブルで、ディアは少女と談話に入っていた。

「せっかく人が親切で教えたって言うのに…！！　記憶操作じゃ骨折り損だよ！！」
「まぁまぁ、ディアさん。命あっての物種ですって。ばれないように、世界に細工する身にもなって下さいよ…。老山の未来予知を掻い潜るのは、ホントに骨の折れる作業なんですから…」
「座って呪文を唱えてるだけでか？」
「だけって…。精神力の問題です！！」
視点を宙に泳がせながら溜息混じりに受け答えするディアに、少女は少し悔しそうに大声を張る。しかし尚、ディアは「ふぅ…」と何か物足りない様子。
「なぁ」
「はい？」
「アスカは？」
ディアは空から、視線を大きな屋敷風の家へと移す。朱塗りの門を構えた、立派な日本家屋だ。
「アスカ様ならここ最近、イライラしながらお部屋に閉じ籠りっきりです…」
「あー？　西国での一件からか？」
ふと脳裏に零次やフィルが浮かんだが、ディアは何も言わないで置いた。
「だと思います…。相当してやられちゃったみたいで…」
ディアは「へー」と、聞いておいた身であるのにも関わらず、他人事のようにあしらう。
何だか会話に足りない要素がある気がしてならない…。しかし、それが何かは分かっていても強要せず、言い出すことも無い。
「で？　世話役のお前が、ここでのんびりと暗部とお茶か？　訳ねぇなぁ？」
「あんまりお節介にすると、私がアスカ様に殺されちゃいますよぉ…」
「性的に？」

「違います！！」
ディアはニィっと何かを懐かしむように作り笑いを見せる。
何とも天気がいい。癪な位天気がいい。
「どうします？」
「何がだよ？」
「アスカ様に会われます？」
ディアは「うーん」と小さく唸った。会いたくないと言えば、うん。スゲェ会いたくない。
でも…。
「会う選択肢しかないだろ？　一応スパイ的なノリで、ここまで情報集めたんだからな」
「ですよねー。じゃあ、行きましょうか？」

また一つ。歯車が回る。

ω

「あっ、二人とも！！　おっはよー！！」
「おはようございます…？」
フィルが不意に立ち止まる。俺もその場の、何か分からない違和感に当てられて立ち止まってしまう。
昨日の昼にレイに会った筈…。そこから今の今まで寝てたのか？
「二人とも良く寝てたねー。相当な時間熟睡だったよー…って成長期はそれが普通かな？」
レイは、屈託の無い笑顔を此方に向けてそう言った。フィルが合わせるように「そうなんですか！？」と言っていたが、俺は取り敢えず苦笑いで済ます。
やっぱり…オカシイ気がする。
「零次…」

「ん？」
隣に座っていたクシャナが、小声で俺を呼ぶ。
「何か違う気がしないか…？」
「……する」
違和感は無い。勿論、この場においてという意味で。
しかし、個人的な違和感なら湧き上がるほどある。
「何が違うのか、分かるか…？」
「朝のインパクト……」
「……ハァ？」
クシャナは眉を潜めて、俺を小さく睨んだ。睨まれても、足りない物はその…具体的には言えないけど、朝に対する…いや、俺に対する何かしらの朝の洗礼。
「零次君さぁー？」
「はい？」
レイは口にパンを一口含んで、そのままの勢いで話し出す。
お願い…。仮にも貴女は一国の統治者ですので、お口の中が空になってからお喋りして。ね？
「一応、この世界を何とかしてくれる『勇者』にあたるんだから、此処に拠点を移してくれないかな？　マスターにも話はしてあるし」
「あぁ、成る程。確かに此処なら便が良いですし、居心地も…いいですしね…？」
「うん？　どうかした？」
「いえ…。誰かの確認を、取らなきゃいけないような…？」
俺は齧りかけのパンを何故か凝視。何か思いつくような気がしてならなかった。
その場に居た全員は、一応答えは『ＹＥＳ』。何処の民主主義を採用しても満場一致の可決。でも、何か足りないような…。
「取り敢えずは、ＯＫだね？」
「えぇ。皆も賛成してますし、此処を拠点に今後を見据えていきましょう」

「うんうん！！　俄然頼もしくなってきたね！！」
嬉しそうに手でガッツポーズを作るレイ。皆もいつの間にか、和やかなムードで会食へと入っていく。
俺もすっかり全てを忘れて、食事に専念。腹が減っては何とやらだ。
「そう言えば、次はどう動けば良いんです？」
俺の口から不意に出た問いは、皆の周りを駆け巡りそのまま過ぎ去る。
誰一人として、その問いに答えようとしない。えっ苛め？　苛めですか？
「よーし！！　じゃあ、今から指揮は私が取るよ！！」
そう勢いよく立ち上がったのはレイ。その時にテーブルの上のスープが、勢いよく零れたのは、また別の話。
「あー。レイ様がとられますかー」
「むっ！！　フィルちゃん、信用してないな？」
「いやー。そんなこと無いですよ？」
フィルは視線を俺たちに向けながらそう言ったが、俺達全員がそのフィルの視線から視線を思いっきりそらす。
見たら負け。見たら負け。
「ふーん。いいもん。じゃあ、適当にダーツ投げて、刺さった所に行って貰うもん！！」
「所さん！？」
すかさず俺が宥めにかかる。そんなんで敵の本拠地に刺さったりしたら、馬路で行かされかねない…。
「よーく聞いてよ？　一回しか言わないからね？」
だが、尚もレイはご機嫌斜め。少しツンとした装いでそう言ってのける。成る程、ツンデレの破壊力を垣間見そうだわ。
「実は主を失った雪山が大分荒れ模様みたいで、雪獅子の被害が尋常じゃないくらい出てるんだよね。取り敢えず、静めてきてよ」
「軽く言ってのけますね…」

「雪獅子位、ちょいっと捻ってきてよ。楽勝でしょ？」
「どーでしょう？」
俺は苦笑いでレイをあしらうと、元雪山の主さんに目を向ける。
案の定、眉間にしわを寄せてイライラのボルテージが上がっているご様子。
「あのー？　クシャナさん？」
「何だよ……？」
凄い勢いで睨まれる。これは触らないほうが良さそう。
「じゃあ、任せられるよね？」
「まぁ、鋼の姫様があんな状態ですから…」
「あー。出来ればあまり血の気が多くない方向で」
「そりゃムリですわ」
俺は諦めにも近い笑顔を残し、ゆっくりと席を立つ。そしてこれまたゆっくりと背伸びを……。
『ガシッ！！』
俺は人生初めて聞くような音でクシャナに服の襟をつかまれ、そのまま凄い力で連行される。相当頭にキているらしい。
まぁ、ホームグラウンドを汚されたら癪だろうけど…。
「あのー、クシャｎ」
「黙ってな」
「……」
俺はこの薄着の状態で、雪山に挑むんだろうか…。あれ？　確か昔もこんな…って、クシャナの時俺は何してたんだっけ？
完全にすっ飛んでるなぁ…。
「えっと…」
「黙れこの○○○○○！！！！」
「ちょ！！　初の全隠し！？」
俺は後を追って走ってくるフィル達を見ながら、猛烈なスピードで引きずられている。
これ城の外のアスファルトに出たら終わるな…。主にケツが…。

「雪獅子如き分際で…我が聖域を汚そうとは…愚かなり…！！」
「クシャナさん！！　キャラ戻ってますよー！？」
再び極寒の雪山に、俺はジーパンにTシャツで挑むのだった…。

ω

「アスカー？　いるんだろ？　開けろよー」
開けろと言っても、目の前にある扉はオートロックとかそんな物どころか鍵すらついていない只のふすま。
だが一国の統治者の部屋となると、鍵の無い扉でも勝手に開けるのは良くない。
「開けるぞー？　いいのかー？」
まぁ、それがディアに関係あるかと言われると、非常に答え辛い。勿論どう答えればいいか言葉選びに迷う点で。一歩間違えれば、理不尽な制裁は免れない。
「あっ！！　ディアさん駄目ですよ！！　プライベートな空間に、土足で踏み入るのは人としてよくないです！！」
「固いねぇクレスは…。じゃあ、鍵かけろっつうんだよっと！！」
ディアはクレスという橙色の髪をした少女の意見を思いっきり無視。普通に開ければいいものを、ふすまを蹴破って中に入る荒行。
これにはクレスも驚きの上に半泣き。
「なっ！！　何してるんですかぁーっ！！」
「何って…？　扉の開閉（？）だろ」
「疑問符つける位なら、黙って戸をスライドさせて下さい！！」
しかし、クレスの声を無視しディアは室内にズカズカと踏み込んでいく。なんとまぁ、王様でもあろうかという所業。
「おい。アスカ、起きな」
「……んぅ？」
ディアは徐に布団に包まっている少女を蹴り起こす。
「アンタまた力使ったのか？　いい加減、自分の限界値憶えな」

「うるしゃいなぁ…。ほっといてよ…」
ディアに蹴り起こされて出てきたのは、小学校低学年程の少女。クレスも「ありゃー…」と苦笑い。
「また1ヶ月位力を蓄えなきゃいけないんだろ？　この間に襲われたらどうすんだっつーの！！」
「あー！！　南国の長に向かって、その言い方は何さー！！　私だって頑張って西国で情報集めてたもん！！」
「情報云々の前に、そのデタラメな能力何とかしろよ！！　何だよ！！　1ヶ月前後の間、力を溜めないと解放出来ないどころか、大人の姿も保てないって！？」
「わーん！！　クレスぅ！！　ディアが怒ったー！！」
「はいはいアスカ様。私はいつだって貴女の味方ですよ」
そう言うとクレスはアスカを抱き上げ、少し困ったような笑顔であやし始める。
その光景を横目にディアは畳に座り込み、あえてアスカに聞こえる位の声量で言い放つ。
「ケッ！！　折角人が、有力な情報手に入れてきたのによぉ！！」
「んぇ！？　レイの！？」
「知りたいか？」
「うん！！　知りたい！！」
アスカは泣いていたのが嘘のように、すぐさま目を輝かせ、クレスからスッと降りるとディアの横に座った。ちびっこの扱いという面では、きっとディアの横に出るものは居ないだろう。
勿論、話術の面だけではなく。
「よーく聞けよ？」
「もぉ！！　もったいぶんないでよ！！」
恍惚の表情で、ディアはアスカを焦らす。対するアスカは「ねぇ！！　早くぅ！！」と、待ちきれない様子。
まるで姉と妹。クレスは一体どの立ち位置なのだろうと、ふと思ったり…。

いや…お母さんとかいう年齢じゃねーし。
「えっとなぁ…」
「はーやーくぅ！！」
ディアは流石にうざったるくなってきたのか、溜息一つ。少し眉間に皺を寄せて話し出す。
「第一段階は終わってる」
「！？」
その一言でアスカとクレスは一気にその表情を変える。さっきまでの和やかな空気は、一瞬で消えていく。
「復活の鍵は手に入れちゃってるわけか…」
「あぁ。まだ覇龍は見つかってないみたいだが、一刻を争う事態なのは先ず間違いないな」
アスカは腕を組み、小さく頷いた。容姿と体格がこんなんなだけに、全く持って見合っていない。
そんな事はお構いなく、クレスは話を進める。
「ですが、零次さんにも早く真相を伝えないと…」
「あぁ。だがレイはある程度の未来は把握してる。今は無理だ」
「やっぱりあの時、城に一発いれておくべきだったかな…？」
「いや、そいつは全面戦争になりかねないからパスだ。お前、ジンに感謝しとけよ？」
「はん！！　あんな邪魔野郎にくれてやる言葉は無いよーだ！！」
アスカはそう言うと、徐に部屋から飛び出す。ディアはそれを溜息一つ、めんどそうに見送った。
「南国の戦力不足には泣かされるね…」
「いえいえ、ディアさんで１００万馬力です！！」
「それ答えになってないから…」
外で小さな蝶を追いかけるアスカを見ながら、ディアはもう一つ溜息をついた。

「零次？　武者震い？」
「寒いんじゃボケ！！」
雪山の中腹。洞窟の中で俺はクシャナに向かって大声で叫んだ。
こんな高速の武者震いがあるわけがない。
万歩計とか、手に持ってるだけで絶対１００００歩超えられる自信がある。
「あー、零次叫んじゃ駄目だ。雪崩れるから」
「じゃあ防寒着寄越せっ…！！　ってか雪崩れるっていう動詞があることに、非常に不快感を感じるなぁ…。これ一発変換で出てきちゃうし…」
「ピチュると同じだって」
「ぜってー違う」
物凄い勢いで走り続けて…否、引き摺られ続けて来たせいでズボンの臀部が薄破れ。しかし、この距離を引き摺られて臀部の薄破れだけで済んだのは、奇跡と言っても過言じゃないと思う。
流石ユ〇クロ。
「まぁ、休憩しようか？　零次以外、皆だらしなくへばってるし」
「クシャナが…ゼェ、速すぎ…るん……だってばぁ…ゼェ」
最早反論するのも辛そうなフィルを他所に、俺は走ってない分涼しい顔。いや……涼しいなんて言葉は合わないな。凍死寸前。
「アルト…？　何か服持ってない？」
「衣類は持ってきてませんね…。良ければ暖かい物、飲みます？」
「あるの！？」
するとアルトは徐に服に手を入れ、そのまま乳を……出さずに、缶コーヒーを一本取り出して、俺に手渡した。
いや、乳は出さないだろ…。ってか出ないだろ…多分。
「助かるわぁ…」
「実はカイロ代わりに持ってたんですけどね。少し温（ぬる）いかもしれませんけど…」

「……」
人肌…だと…！！　取り敢えず、俺はアルトの優しさに感謝しつつ、外気でその温ささえ失いそうな缶コーヒーをありがたく頂いた。
逆効果なのは言うまでもない。
「寒い…」
「コーヒーで腹冷えたんだろ？　第一、そんな薄着で来るから…」
「誰が引っ張ってきたんだ、誰が！？」
「私だが？　服を着なかったのは、零次の責任だろ？」
「おけ、理解。話が通じる相手じゃない。」
俺は頭の血管が幾つか「プチン」と音を立てるのを堪えつつ、体力の消耗を感じその場にへたり込む。
ニュースの一面を、俺は何度『雪山で少年凍死』の見出しで飾りそうになれば良いんだろう…。
「……零次」
その時、聞き慣れない声が俺の耳に届いた。天国からお迎えだろうか？
返事をするにも、呂律が回らなくなってきているからか、返事をするのも面倒。
何も言わず、俺はスッと顔を上げる。
「着て…」
「えっ…！？」
顔を上げた目の前に突き出される、分厚い毛皮の防寒着。その奥には、ぺったんこな胸にブラ一枚のアミュー。
どっちにも驚く俺。
「えっ！？　なんでココに！？」
取り敢えず、差し出された防寒着を一旦手に取り、俺はアミューに幾つか質問をぶつける。
アミューは、一瞬声の大きさにビクッとしながらも、いつも通り淡々と答えた。
「レイ様…。護衛に…って…」

護衛って…随分過酷な護衛任務ですこと…。
しかし、最早そんな事どうでもいい。
「寒くないか！？」
「……うん。……へいき」
アミューは少し我慢しているようにも見えたが、目を少し細めて微笑んだ。何となく、お迎えが来たような気がした。
「零次…。着ないの……？」
「ん？　いや…えっと…」
皆の視線が痛い。着たいのは山々だけど、これは非常に人道を踏み外している気がする…。
この中に人間が何人いるのかってのは、酷く疑問だけど。
「……？」
「いや、これはアミューが着るといいよ。ってか、着るべきだ。うん」
俺は我に帰り、手に持っていた服をアミューに返す。アミューはそれをパッと取ると、イソイソと慌てるように着る。
ホントは寒かったんじゃなかろうか…。
「よし！！　じゃあ行くか！！」
クシャナはそう言って力強く立ち上がる。他の皆も、それぞれ武器を取り出し、雪獅子との戦闘に備える。
「へー。いつに無く張り切ってるじゃん、クシャナ」
「まぁ、久々の戦闘ってのもあるけど、ちょっとイラッときてるからね」
「あー。同感！！」
そして俺の方を見て、ニッコリ笑う。次の瞬間には、フィルもクシャナも何事も無いように洞窟の出口、山の頂上に向かって歩き出す。
怖い…。馬路怖い…。
「鈍感ですねぇ…」
「へっ？」

そう言って、大きなハンマーを片手に俺の横を通り過ぎるアルト。
毎度毎度思うけど、俺の何が鈍感？
「ハァ…」
「！？」
アルトはチラッとこっちを振り返り、ジトーッとこっちを見て溜息。
最早何が何だか…。
「零次…。気付かない…。間抜け…」
「……」
泣きたくなってきた。何この超アウェー。
何に気が付けば俺の勝ちなのか、具体的に教えて欲しい…。
「れーじー」
「…？」
突如呼ばれる名前。その声は、洞窟内に反響する。
俺から大分離れた所で、クシャナは後ろも振り返らず、歩みも止めず、俺の名前を宙に放り投げるように呼んだ

そして、立ち止まって振り返り、一言。

「……」
「…？」
何て言っているか分からない。横のフィルが驚いてるのは分かるが…。
そのまま走っていくクシャナ。
後を追うフィル。
アミューは顔を伏せ、アルトは苦笑いで後に続く。
さて、急ぎますか。

季節感のない雪山で、命をかけた猿退治が始まる。

ω

「どう？　気分は？」
「……」
「話すのも嫌？」
「嫌…」
「あっそ。良いよ。別に」
シャンドの位置する真下。地下数百メートルに位置する牢獄。
「私はいつだって、貴女を…」
「じゃあ、何故…！！」
「……。何故？」
「何故さっさと私を殺さない…！！」
「人間って面白いじゃん。ちっぽけなのに、いつも何か変えられると思ってる」
「だから！！　何が…ぁうっ！！」
「あっ、あんまり動かない方が良いよ？　それ動くと壮絶な電流走るから」
「っハァ…ハァ…！！」
「まぁ、そうだねぇ…。ある種の人間観察だよ。飽きたらＧＡＭＥＯＶＥＲの…」
「貴様…ァァ…！！」
「まだ誰も、貴女に気付いてない。時間はたっぷりあるからね。精々死なないでよ」
「レイ…！！　誰も望まない事をやって…っぁぁぁ！！」

「ふふふ…。ばーか…」

そういって老山龍は、一歩ずつ地上への階段を上る。

「私の世界だもん…。運命は、何一つ変わらないよ…」

レイは小さく笑った。

第１２話　老山と覇龍　～運命に傾く世界～（後書き）

では次話は１１月中で…。
守らない確立…８０％

第13話　深山幽谷・雪山の出会い　～北の国から…～（前書き）

ふへへ…w

バトルに入ると、俄然やる気が出ますw

第１３話　深山幽谷・雪山の出会い　～北の国から…～

「頂上とうちゃーく！！」
「ふぅ…、疲れたぁ…」

相変わらずのハイテンションを味方につけたクシャナとフィルを横目に、俺は壁に寄りかかってへたり込む。
もう直頂上…その言葉を初めに聞いた2時間前。まさかもう直という言葉に、2時間が含まれるとは思ってなかった…。
明らかな疲労感。

「むっ！！　だらしないぞ零次！！」
「あーっ！！　一人だけ座って！！　ずるーい！！」
「何でそんなに二人はハイテンションなんだ…」

クシャナもフィルも妙なテンション。俺を取り囲み、貧弱、運動不足、ニート予備軍などと好き勝手言う始末。
ニート予備軍はヤダ。それ以外は大きく的を外してはいないが…。

「何であんなに元気なんですかねぇ…」
「……ハァ…ハァ…分かん…ない…」

アルトも少し疲れた様子で、いつもならにこやかな笑顔が、今は何だか苦笑いと愛想笑いをミックスしたような、何ともいえない表情。
アミューに至っては、膝に手をついて肩で息をしている。
そのまま二人は座り込んでしまった。余程疲れたようだ。二人と

も目が空ろ。

「待て待て、第一そんなに急ぐ用事じゃないだろ？」

俺は取り敢えず、周りが鬱陶しいので徐に立ち上がり、そう言った。

しかし、俺の言葉を聞くや否や、フィルは人差し指を立て「ちっちっち…」とイラッとするフレーズを引っさげ反論する。

「甘いなぁ…。そんな暢気にしてるから、いつまで経っても経験値が入らないんだよ」

「あっ…その制度続いてたのか？」

俺は随分前の事のように感じられるオトモのレベルの件を、ふと思い出す。

そういや、そんな馬鹿馬鹿しい制度もあったなぁ…。

「でも、もう何だかんだでレイ様が武器用意してくれたし、最近のマスターは最早存在が空気だろ？」

「むぅ…。その件については否定も肯定もしないけど…」

最近のマスターは城で何やら引き篭もりの真っ最中。レイ曰く、大事な作業に取り組んでいるとの事なので、一応大人の対応としてほっといてる訳だが…。

「そういや…」

「ん？　どうしたの？」

目をぱちくりさせるフィルを他所に、俺はポツリと思い出した事を呟いてみた。

「俺オトモだったな」

地雷だった

『ゴッ！！』

背部に、えげつない衝撃が走る。不意に横目に見えたのは、間違いなく鬼棍棒…。

「ちょ！！　何やってるのフィル！？」

「離してクシャナ！！　コイツは私が狩る！！」

半死半生、生死の淵を彷徨っている俺の横で、２撃目を…いや、トドメをさそうとしているフィルを全力でクシャナは止めに掛かる。

「待って待って！！　狩ったら間違いなく全て終わるって！！」

「終わらせてやるぅぅぅ！！」

まさかの明日の朝刊の一面は、「トゲ付きバットで少年を撲殺！！」とかいう残念記事に確定だ。

…ん？　待てよ？　このまま雪に埋められたら、完全犯罪の完成じゃないか？

「やらせはせん！！　やらせはせんぞぉぉぉぉぉぉ！！」

「ひゃぁう！！」

『ガッ！！』

飛び起きた俺の、脳細胞を幾分か死滅させるような一撃が頭部側

面に見舞われた。フィルかと思いきや、フィルはそれを見てワナワナしている。
あれ？　誰？　俺を殺ったの？
「あっ…。やべっ…」
「ヤバイとか、最早そんな状況じゃないよクシャナ！？　何か出ちゃってるよ！？」
「うわぁ…」
「うわぁじゃなくてっ！！」
何か出てるらしい…。やだなぁ…。
どうやら俺を殴ったのはクシャナ。俺の声にビビって、棍棒を引ったくり撲殺。過剰防衛もいい所だ。
しかし。
「まぁ、心配ないよ。零次だし」
「……そだね」
納得されてしまった…。俺は、それに思いっきり突っ込む余裕もない。
勿論、なんか出ちゃってるから。
意識飛びそうだから。
ってか死ぬから。
上記、豪華3本立てだ。
「唾付けとけば治るって」
「吐き付ければいいの？」
「よくねぇよ…」

痛みの走る頭を何とかあげて、俺は徐に立ち上がる。そして「あっ、起きた」とか何とか、人事のように言うクシャナの腹部に制裁一撃。
そのまま、俺は服の雪を払って溜息一つ。

「あぁ…。クラクラする…」
「まぁ、頭がロボトミー手術の失敗みたいになってるからね」

蹲るクシャナに手を差し伸べつつ、フィルが苦笑いを向ける。
ロボトミー手術。脳の前頭葉白質の一部を破壊して、神経回路を切断する手術。
全く分かんないけど、取り敢えず頭が残念な状態にあるのは理解。

「まぁ、進行上良くある手を使うか」
「へっ？」

俺は何を言ってるのか自分でも良く分からないまま、口をベラベラと動かす。
地雷だけは、踏みませんように…。

「物凄い怪我してるのに、次のコマでは綺麗さっぱり怪我が消えているという、何とも都合の良い漫画的な？」
「あー。あるねぇ、そういうの」

という訳で、グダグダの雪山登りは、これにて一件落着するわけです。

完。

「そんな訳ないでしょ！！　ほらフィル様！！　患部を冷やして！！」
「ふぇ！？　治ったんじゃ？」
勿論、そんな都合の良い話があるわけも無く。俺の頭は血の噴水。大惨事です（笑
「そんな訳ないでしょ！！　漫画じゃないんです！！」
「そうだよね！！　危うく騙される所だったよ！！」
半分意識を失って、放心状態の俺の目の前でアルトとフィルは忙しく動き回る。
「雪詰めてください！！　何でも良いんで！！」
「分かったよアルト！！　えいっ！！」
俺の無くなった頭の一部に、思いっきり固めた雪を、まるで雪だるまでも作るかのように乗っけるフィル。
待て待て待て待て！！　そいつは明らかに新手のトドメだ！！
「やったよアルト！！　頭の形になった！！」
「流石ですフィル様！！」
おいおいおいおい！！　間違ってるよ！？　明らかに藪医者の…いや、藪医者でもやらないえげつない手術始まってるよ！？

「あっ！！　アルト！！　何か調子に乗って雪盛ってたら、体より明らかに大きくなっちゃった！！」
「大丈夫ですフィル様！！　ステキです！！　凄いステキです！！」
首が雪の重量をを支えられなくなる！！　整形して！！　いや、成形して！！
「よし！！　私頑張る！！　このまま雪だるまにするよ！！」
「その意気ですフィル様！！　何かもう、何が何だか分からなくなってきました！！」

俺も何でも良くなってきたよ…。
だが、いつの間にか奴は迫っていたみたいです。

「時にアルト」
「はい？　何ですか？」
「あそこにドドブランコが見えるよ？」
「あらぁ…？　奴まで３０メートルくらいありますねぇ？」
「あれ！？　武器洞窟の出口に置いてきちゃった！！」
「取りに戻りましょうか？」
「うん！！」

あれ？　おかしいぞ？
あれ？　おかしいぞ？
大事な事なので２回言ったが、あれ？　絶対におかしいぞ？
「クシャナ。いつまでも蹲ってないで、洞窟に戻るよ？」
「うぅ…。そうだな…、腹痛いし…」

あれ？　フィルさん？　俺は？

「アミューさん？　こんな所で寝てたら風邪引きますよ？」

「ん…。うん…」

あれ？　アルトさん？　俺は？

雪だるまになった俺は？　あれ？　ちょ！？　助けないの！？

ねぇ！！　おい！！　ちょっと！！　待ってよ！？　何で行っちゃうの！？　いや、見えては無いけど！！　足音がドンドン遠ざかって…。

『ドス…。ドス…』

……。

『ドス…。ドス…』

……。おかしい。

『ドス…。ドス…』

……。おかしいぞ？　明らかに人ではない物の足音が…。

『ドス…。ドス…』

ピタっと止まる足音。真横に気配がする。ヤバイ…。

絶対にヤバイ！！

『グルルルルル……』

雪獅子が俺を見つけて、連れ去るまでそう時間は掛からなかった。

ω

「うひゃあ…流石雪山。こんなに豪雪地帯だとは…」

耐雪ゼロと言っても過言ではない燕尾服を靡かせ、少女は見渡す限りの銀世界を彷徨っていた。

探し物もなかなか見つからず、少女の顔にも疲れの色が見える。

「もう帰ろうかなぁ…？」

そう思った時、前方に見える影。

ドドブランコだ。

何か咥えているのが見える。

「おやぁ？　あれは噂の…」

思いのほか、少女の探し物は呆気なく見つかったようだ。

少女は新雪を踏み分けながら、こっそりその後を付いて行く。

ω

「取り敢えず、反省会しようか？」

「そんな事をしている暇は無いと思いますけど…」

薄暗い洞窟の中、持って来た昼食を広げ、加害者４人は反省会へと入っていた。勿論、反省すべき点は一つ。

「何で零次を助けなかったか」

フィルが徐にそう言う。しかし、誰もが何も言わなくなる。それぞれ落ち度があるわけだ。

「いやぁ…。雪だるま、マジ楽しくて…」
「何だか悪乗りしてしまいまして…」
「思いのほか一撃が重くてだな…」
「……寝てた。…あぅぅ」

それぞれが一言ずつ口にする。完全に誰もが悪い反省会だ。ってか、突込みどころ満載だ。

「まぁ…。大丈夫でしょ？」
「だな。あっアルト、お茶取ってくれ」
「はい、クシャナさん…って、それでいいんですか？」
「問題ない…」
「アミューさんまで…」

反省会は何処へやら？　完全にピクニックモード突入。皆で楽しくランチタイムだ。

「でも、取り敢えずターゲットがいる事は分かったね」
「人質が無駄に増えましたけどね」
「まぁまぁ、基本進行上は死なない人質でしょ？」
「そういう事言わないで下さい。一気に現実味が薄れます」
「そもそも現世がこんな日常だったら、真面目に嫌だ」

フィルはサンドイッチをパクッと一口で頬張ると、許容範囲を超えた口を引っさげて、スクッと立ち上がる。

「……！！」

「喋れないなら無理すんな」

何やらアットホームな空気。今日も平和です。

ω

「う…ん？」

ここは何処だろうか？　取り敢えず非常に暖か味の無い地面に、寝かされている事だけは分かる…。

あれ？　もしかして俺死んだ？

「三途の川でも…」

「おや？　起きたのかい？」

「へっ？」

三途の川でも拝みに行こうとした俺を、ふと止める人の声。

しかし、俺は振り向けない。

「……」

「ん？　どうかしたかい？　あー。頭逝っちゃったかな？」

「失礼な！！」

つい、反射的に突っ込んでしまった。その拍子に振り向いてしまう。何というか、この性は直さないとな…。

「あー、悪いね。でも元気そうで良かったよ」
「……どーも」

振り向いた先にいたのは、まるで奇術師のような少女。紅い髪をサイドポニーに結わえ、単眼の眼鏡を掛けている。
服装は黒の燕尾服にマント、その上シルクハットという、雪山には絶対に合わない格好。

「おやぁ？　驚いたかい？　差し詰め『どうしてこんな所に人間がいるんだ？』といったところかな？」
「……分かってるじゃないか」

俺は一歩後ずさりして、周りを見回す。何処を見ても、沢山のドドブランコ。ブランコではなく、あくまでもドド。住処じゃなかろうか？
少女はそれでもにこやかに話す。

「でもさ、大変だったんだよ？　食べられそうな君を、態々助けたんだからさぁ？　感謝してよぉー？」
「へぇ…」

しかしこの状況、助かっているんだろうか？　明らかに目を血走らせた雪獅子さん達が、獲物に狙いを定めているような…。

「あー、まぁ確かに助かったとは言いがたいかな？」
「そう思うんだが…」

奇術師の少女は、腰から一本のステッキを取り出すと、それを高々と天井に向かって突き上げて一言。

「まぁ、零次君。ここはアタシに任せてよ」
「任せるって…あれ？　何で俺の名前を…」
「うん？　知りたい？」

そう言うと少女は小走りに駆け寄ってくる。そして耳元で一言。

「初めまして、反逆者の犬っころの御崎零次君。この度、北国ヴェルドの長になりました。ミラ・ボレアスのルミーナ・フェリシアです」
「なっ…！！」

しかし、驚いてる暇も突っ込んでる暇も無かった。
次の瞬間、俺目掛けて飛びかかってくる無数のドドブランコ。どうやらルミーナの小走りが、奴らを刺激したらしい。
俺は行きしにポケットに徐に詰めた、気休めの閃光球を取り出す。

「言ったでしょ？　任せなよ」

それを見て俺を遮り、閃光球を握り締めた俺の手をルミーナは払った。そして振り向き様に、ルミーナは楽しそうに歯を見せて笑った。

「力の差を見せてあげるよ！！　白いお猿さん達！！」

飛び掛ってくる数は四方八方、十数匹。目の前の敵だけに対応出来たとしても、確実に致命傷は免れないだろう…。
しかし、俺は『長』の本当の意味を知った。
「解放（リヴァレイション）３０％　Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　…」

「えっ…！？」

『キィィィィィィィィ……ン』

耳を劈(つんざ)くような音が、一気に駆け抜ける。それと共に発せられる、猛烈な光と熱。そして爆風。及び放射能。

熱は一瞬で周りの永久凍土を溶かし尽くし、爆風は木や岩、洞窟の天井までをも吹き飛ばす。

「悪いね…。骨位は、残せばよかったかな？」

「……何なんだ」

ルミーナを中心とした核爆発は、器用にも俺を巻き込まず、雪獅子の存在を一蹴した。

跡形も無くなった雪獅子。それどころか、今まで洞窟だった筈の場所は天井に大穴が空き、曇天さえ蹴散らして太陽が顔を出している。

「ねっ？　任せてよかったでしょ？」

「あ…、あぁ…」

正直、力の差を垣間見たせいで言葉が出ない。これが『長』の力なのか？　これで３０％の解放(リヴァレイション)だってのか？

「うーん、刺激的過ぎたかい？」

「目にはとんでもない刺激だった…」

「おやぁ？　一応何の影響も無いように、君には領域(テリトリー)をかけたんだけどね？」

「えっ…」

何も感じない…。かけられたのが寝込んでた時だったとしても、この違和感の無さは異常だ…。
あれ？　ってか俺、頭の傷は？
「頭は心配ないよ。今更気がつくのも、どうかと思うけどね」
「あぁ…そりゃどーも…」
俺は何とも無い頭を、確認するように触る。縫合の跡どころか、傷口がどれかさえ分からない回復だ…。
一体何をしたのか…。
「零次君」
「ん？」
何となくさっきから敬語を省いていたが、相手は良く考えたら北国の長、その辺どうなんだろうか？
取り敢えず、今更感も否めないのでそのままにする事にする。
「君ここで死んどく？」
「……へっ？」
思いがけない言葉に、俺の全ての思考回路が停止。『死』の一文字にその照準が向けられる。
「まぁ、薄々気がついてると嬉しいんだけど、君はこの世界では悪者なんだよ？」
「…どういう事です？」
「ありゃ、知らないのか…」
ルミーナは小さく溜息を吐くと、その場にちょこんと座り込む。

「まぁ、座りなよ」
「はぁ…」

太陽が肌寒い気候に、丁度いい日差しをくれる下で、俺は北国の長と1体1で討論会だ。
いまいち状況の掴めない俺に、ルミーナは率直に切り出した。

「君の慕っている西国の長、ラオルディ・アルガテッサは世界の敵だ」
「ラオ…？」
「あぁ、解名は知らないのか。レイの事だよ」
「レイ様のことか…って！！　今なんて！？」

俺はやっぱり状況も言われている事も飲み込めず、ルミーナに詰め寄った。
ルミーナは驚いた様子で、「落ち着いて！！」と俺を押し戻す。

「率直過ぎたかな？　でもそれが一番良い言い方だよ」
「レイ様が…世界の敵？　ん…？」

俺の脳裏を何かがよぎった。あれ…？　この話、前にも何処かで聞いたような…。

「どうかしたのかい？」
「いや…、前にも何処かでそんな話をしたような…」

その俺の言葉を聞いて、ルミーナは目を細める。そしてフラっと立ち上がると、「成る程…」と小さく呟き、俺の頭に徐に手を乗せた。

「ちょ…！！　何をっ…！？」
「騒がないで…。別に殺しはしないから」
振り切ろうとした俺を、ルミーナは優しく諭した。俺はその言葉に、何故か従ってしまう。
「ふぅん…。アミューか…」
「へっ？」
ルミーナはアミューの名前を挙げると、そのまま手を離した。そして、俺に背を向け2・3歩離れて腰を下ろす。
「記憶が操作されてるね」
「記憶が…？」
「実は違和感、感じてるでしょ？」
「……まぁ」
ルミーナは腰に差してあるステッキをスッと取り出すと、俺の顔の前に突き出した。
そして一言。
「アタシとしては、今ここで覇龍の鍵になる零次君を消すのが、一番の選択なんだけど、どう？」
「どうって…」
俺もルミーナも思いの外、冷静に会話を交わす。何となく、一言でも騒げばステッキの先端からの何かしらで、頭が吹っ飛ぶような気がしてならない。

でも。

「俺は、俺の信じる俺を信じる。もし、アンタが敵ならここで戦うよ」

そう言った。逃げられないと分かってたから。

しかし、反応は予想外だった。

「ぷっ…！！　いやぁ…、笑わせてくれるねぇ！！　流石『勇者様』ってところかい？」

「なっ…！！　本気だぞ！？」

俺の威勢も撥ね退け、ルミーナは一人笑っている。

何ていうか…、俺の威勢がスゲェ恥ずかしいじゃないか！！

「んじゃ、やろうか？」

「へっ？」

「殺し合いさ」

そう言うとルミーナは俺との距離を３０メートルくらいに離す。

まさか…、マジで戦うのか…？

俺は小さく後ずさりをする。これだけ離れれば、逃げられるんじゃないのか…？

しかし、甘かった。

「おいおい、今更逃げるのは男気に欠けるよ？」

「明らかにフェアな戦いじゃないでしょ…」

「いつだってフェアな戦いばかりだとは限らないよ」

そういってクルクルと手に持ったステッキを回すルミーナ。

俺は尚、逃げの姿勢を崩さない。

だがその次の瞬間、その場の空気は一気に変わる…。

「人間…。手前が売った喧嘩だろう？　逃げるのは許さないよ？」

「っ…！！　何でそんなに本気なんだよ…！！」

俺は弱音にも似た言葉を口にする。さっきは少し格好をつけようとした所があったが、これは不味い。

絶対に殺される。

「何故かって？」

集中力の欠けている俺に、ルミーナは口元だけを緩めながら、衝撃の一言を発した。

「君が『厄災』だからだよ」

「！？」

驚きで声の出ない俺を他所に、ルミーナは話を進める。

「覇龍によるレイの世界統治。それが厄災の本当の目的。君はその復活を担う、大事な鍵なんだよ」

「……嘘だ」

「嘘じゃないさ」

ルミーナは口角を吊り上げ、悪魔のような顔で尚も続ける。

「レイは１０年周期に、現界からこの世界に『勇者』という形で、覇龍への鍵を召還する。そりゃ当人から見れば、目的を達成するた

めの『勇者』だろうけど、傍から見れば只の『厄災』。それを止めようとする私達3国の防衛戦線を、貴方達は『厄災』と呼んでるだけの事…。」
「じゃあ俺は…」
「最高にして、最悪の人間(モンスター)だよ。私たちが狩るべき…ね」

ルミーナは言い終えると、大きく伸びをして見せた。勝利を確信している。それは誰から見ても明らかだ。

「時に零次君」
「……」
「戦う覚悟…いや、死ぬ覚悟は出来た？」

ステッキを零次に向け、露骨な挑発をするルミーナ。雪の無い、岩肌剥き出しの空間に、ルミーナの声が木霊する。
しかし、俺は揺らがない。

「取り敢えず、目の前のアンタを何とかしてから、ゆっくり考えるよ」
「減らず口だねぇ…。可愛くないよ？」
「お互い様だろ！！」

俺は唯一の武器である、己の拳を硬く握り締めて、ルミーナ目掛けて突っ込んだ。
当たり前だが、勝つ自信は毛頭無かった。

ω

『ドォォォォォ……ン』

雪山を揺るがすような重低音が、遠くで聞こえた。同時に何だか凄くいやな予感がする…。

「ねぇアルト」
「どうしました？　フィル様？」
「出来る事なら行きたくない…」
「私も出来れば、関わりたく無いです」

遠めに見える煙。岩やら何やら、色々な物が吹き飛んでいるのが見える。

「……おかしい」
「ん…？　どうしたのクシャナ？」
「何か来る…」
「へ？　何も見えな……」

煙の上がった一点を見つめ、声を漏らすクシャナに、フィルが苦笑いのまま返答する。
次の瞬間。

「皆！！　伏せろ！！」

クシャナの声は一歩及ばず、猛烈な爆風が４人を襲った。
舞い上がる雪が、体を飲み込んでいく。

「ちょ…！！　何…これ…！！」

数秒の間、駆け抜けていった爆風は大きく雪を舞い上げ、まるで吹雪の中のような視界を作り上げる。
見渡す限り…というか、お先真っ白だ。

「煙…。見えない…」
「私はそもそもアミューが見えない…」
視界不良の中、零次捜索隊は尚も捜索を続けている。

第１３話　深山幽谷・雪山の出会い　～北の国から…～（後書き）

バトルはいらないｗｗｗ

さぁて、２乗ですｗ

今回、仲間が増えるとか増えないとか言う

そんな布石がありました。

間違ってもルミーナは仲間になりませんので、悪しからず。

では次話で会いましょう！！

第１４話　核熱融解メルトダウン　～何が正しい事なのか…～（前書き）

ハイペース更新。

戦闘中だからｗ

第１４話　核熱融解メルトダウン　～何が正しい事なのか…～

「どうしたのかな？　殴らないのかな？」
「……どういうつもりだ？」

決死の覚悟で突っ込んだ俺に対し、ルミーナは後ろ手にステッキを持ったまま、何食わぬ顔で立ち尽くす。
そんなルミーナの顔前ギリギリで、俺の拳は行き場を失い止まったままだ。

「どうもしないさ。殴りなよ？」
「……」

ヘラっと答えるルミーナを見て、若干殺意は増したが、仮にも女の子を理由も無いのにグーで殴るのは気が引ける。
俺はスッと拳を下ろすと、下の位置まで歩いて戻った。

「さて…と」

俺は元の位置まで戻った上で、尚もルミーナに背を向け大きく伸びをする。
どうやら、ルミーナは気に食わないらしい。

「……零次君こそ、どういうつもり？　力の差が歴然としてる相手が、態々隙を見せたんだよ？　一発ＫＯしたら、難なく逃げられたのに」
「ハンデなんかいらねぇよ。負けた時の、言い訳にされても困るからな」

せめてもの捨て台詞を吐いておく俺。勿論足は震えてるし、心拍数も異常な位上がってる。
でも、この位の威勢じゃないと、正直俺自身を保てるか不安だ。

「誰に物言ってるか分かってるかい？」
「憎たらしい女の子にだけど？」

次の瞬間、俺の横を何かが壮絶なスピードで駆け抜け、後ろの壁を抉った。
数十メートル先に立つルミーナは、ステッキの先を俺に向けている。
だからこそ、あえて後ろは振り向かない。飛んできたのは多分『核爆弾』とか言っても過言じゃない物。
振り向いたら、間違いなく目の前のルミーナに殺られる…。

「生意気も程々にしておきなよ？　今ので１％の解放（リヴァレイション）なんだ。分かるでしょ？　アタシは限界解放（オーバーステップリヴァレイション）の使い手なんだよ？」
「へぇ…。凄いな」

しかし俺は強気の姿勢を崩さない。先に自分を失ったほうが、間違いなく呑まれる。ルミーナがどうかは分からないけど。

「零次君、まさか本当に勝つ気でいるのかい？」
「あぁ。そもそも、負ける気がしないからなぁ…」

俺の散々の発言に、ルミーナの怒りもどんどん増している様子。
そのまま自分を見失う事を、俺は少しばかり狙っている。

「主人公気取り？　漫画の読み過ぎじゃない？」

「お前の台詞も、随分な負け台詞に聞こえるぜ？」

『ブチン』。そう聞こえた気がした。その音は、俺にとって期待した音であると同時に、死の狂想曲。

ルミーナは体から黒いオーラを放ちだす。いよいよ人間終了のお知らせだ。

「いいよ…！！　そこまで言ってくれるんなら…！！　何から何まで木っ端微塵に吹き飛んじまいなァァァァ！！」

そう言うとルミーナはステッキの先を俺に向け、そこから銃のように『核爆弾』を飛ばしてくる。

どうやらあのステッキが、力の放出源のよう。まるで銃。

ってか、これで１％だって…！？　真面目にありえねぇよ…。

「逃げるだけかい！？　さっきまでの威勢は、何処へやったのかな！？」

「ちっ…！！」

マシンガンのように乱射するルミーナの弾を、俺は一方的に避けるほか無い。って言うか、当たったら絶対に死ぬ。

「あー。言い忘れてたよ」

「…？」

そう言ってルミーナは突然、凶悪な銃の発砲を止め、銃口を天に向ける。そして、付け加えるは無駄な一言。

「放射能、及び熱線にご注意を。小さくても、核は核だよ？」

「なっ！！」

その通りだ。ルミーナの撃ってるのが、本当に核だとしたら、間違いなく少しずつ体は蝕まれていっている。
あれ？　でも何とも無い気が…。熱線も熱くないし…。
「解放（リヴァレイション）　５％　核散弾！！」
「いっ…！！」

無数…いや、視界の殆ど全てを埋め尽くす発光体。あまりの眩しさに、俺は立ち止まってしまう。
そこに容赦なく降り注ぐ小さな核弾頭。

それは間違いなく、俺に命中した。

「お一人様、地獄にごあんなーい…ってね」

ルミーナは高らかにそう言ってのけると、くるくるっとステッキを回し腰に納めた。
してやったり…とでも言わんばかりの笑顔だ。

「いやぁ…、残念だったねぇ」
「……」

返事は無い。壁の崩れる音だけが木霊する。

崩れる岩盤。
立ち込める煙。
誰が思う、生きてはいないだろうと。

「バイバイ勇者様。恨むんなら、君を悪者に仕立てた西国のお姫様

でも恨みなよ」

ルミーナは不敵に笑い、打ち込んだ核散弾のせいで立ち込める煙に背を向け、手を左右に振って見せた。

しかし、その行為は俺の目にしっかりと映っている。

「……誰がバイバイだって？」

「えっ…！？」

『ガッ……！！！！』

その煙の中から、人間の限界を超えたスピードで飛び出した俺は、隙だらけのルミーナの背後をしっかり捉る。

そして、崩れる岩盤の降り注ぐ中、近くに落ちた鋭利な岩を手に殴りかかった。

その一撃は、ピンポイントで頭に見舞うはずだったが、咄嗟に避けられ肩に当たる。

「うあっ…、つぅ……」

しかし、それがある意味良い結果となった。ルミーナの肩に岩は食い込み、完全に左腕の動きを止めた。

しかし、俺は止まらない。

「隙だらけだぜ？」

「！？」

『ガツッ…！！』

肩を抑え、両手の塞がったルミーナに、俺は追撃として回し蹴りを見舞う。
今度は一寸の狂いも無く、右側頭部に蹴り込んだ。全身全霊を込めたその一撃は、いとも簡単に小柄なルミーナを弾き飛ばし、地面に叩きつけた。

そして思う。やり過ぎたと…。

「あっ…大丈夫か？」

咄嗟にかけた言葉は、何とも逃げ腰。でも、やり過ぎはやり過ぎないと気が付かないしねぇ…。
しかし、流石『長』。フラフラとではあるが立ち上がる。大方、脳震盪でも起こしてるんじゃなかろうか？

「やれば…出来るじゃんか…」
「……そりゃどーも」

立ち上がったルミーナは、そのままこっちに向かって数歩、歩いたかと思うとペタンと座り込んでしまった。
目が半開きなところを見ると、焦点が合ってないのか？　そんなに頭強く蹴ったかなぁ？

しかし、心配は無用だった。

「ふふふ…」
「何だよ…」

座り込んだまま、ルミーナは小刻みに体を揺らし笑い出す。

「ふふふ…。殺す…」
「っ…」
「殺す殺す殺すコロスココスコロスゥゥゥアァァァァァ！！！！」
次の瞬間、ルミーナから放たれる壮絶な熱風。気温は一気に猛暑日さえ越える。
体中から噴出す汗。しかし、俺はルミーナから目を離さない。
「『殺す』だなんて、随分過激…」
『ゴリュッ…！！』
俺は言葉を言い終える事無く、数メートル吹き飛ばされる。そして肩に感じる尋常じゃない痛み。
「フェアな死合がしたいんだよネ…」
「つぅ…！！」
左肩に食い込む拳大（こぶしだい）の岩。その状況はまるで、さっき俺がルミーナにした事と一緒。
となると…まさか！？
「隙ありィィィ♪」
「や…っぱりかっ！！」
俺は右からきた回し蹴りを、間一髪の所でガードする。しかし、腕がその蹴りの重さに耐えられず、大きく粉砕音を奏でた。
「ありゃ？　失敗失敗…。でも、もういっぱぁぁぁぁぁつ！！」

一発を受け止め、腕の痛みと蹴りの威力によろめいた俺に、ルミーナは容赦なく2発目を見舞った。

『ガツッ！！』

「やったぁ！！　命中ぅぅぅ！！」

そのまま体を捻り、逆足を使ったルミーナの後ろ回し蹴りが、俺の後頭部にクリーンヒットする。

俺はそのまま、顔から地面に大激突。だが反射的に、動く右手は受身を取った。

「立たないのかい？　あれだけ言っておいて、これだけな訳ないでしょ？」

「……」

俺は動かない左手をぶらつかせながら、足元の覚束無い中、右手一本に力を入れ何とか立ち上がる。

凸から落ちたお陰で、何とか鼻は大丈夫だったが、脳が揺れたせいか一時的に視力が落ちている…。

「アタシのフェアプレイ精神に感謝しなよ？　君の大好きな対等の立場で、戦えるんだからさぁ！！」

そう、如何にも楽しそうに言うルミーナに、俺は小さく嘲笑の笑みを零す。

「そいつはお礼をしなきゃな…」

「お礼ぃ？　そいつは楽し…」

俺はルミーナの言葉を聞き終わる前に、彼女目掛けて思いっきり突っ込む。
しかし、ルミーナは口角を挙げて笑うのみ。一切動揺の色は見せない。
「装備(ハダカ)無しで突っ込んできた事だけは誉めてあげるよ、勇者さんよお！！」
そう言ってステッキを抜き、俺に銃口を向ける。
そうだ…！！　それで良い！！
「うおぉぉぉぉ！！」
「威勢だけは一人前だねぇ！！　でも、残念でした！！」
そして放たれる『核爆弾』。しかし、それは俺に当たる事は無い。
そして、銃口から飛び出す事もない。
『ズドォォォ

り、声をかけた。
するとルミーナはゆっくり顔を上げる。
「一体…何を…」
「ステッキの口に、石ころ詰めといただけだぜ」
さっきの蹴りの一撃目に、咄嗟に取った行動。ル〇ン3世に同じようなシーンがあったから、真似しただけだけど…。
まぁ、行き場を失った力が破裂。只それだけの事。
「んじゃ死合だし、ココで死んでおく？　ステッキも無くなったし、もう勝ち目は無いでしょ？」
「……ふふ」
俺は自信たっぷりに、そう言ってのけた。
しかし、ルミーナは小さく笑い、力任せに立ち上がる。さっきの爆発で、右手も使い物にならないってのに…。
「ステッキが無いから戦えない？　馬鹿な事言うね、零次君」
「序に両腕も使え無いってか？」
さっきの爆発でか、ルミーナは殆ど裸に近い状態。破れかぶれな上にボタンの飛んだブラウス、次いで縞パンというナイスチョイス。
何て、言ってられないけど…。
「あのステッキは只、力を効率的に向けられるように、アタシが作った言わば媒体。あれが無くても、アタシは戦える」
「へぇ…それで？」
最早勝った気でいる俺。何だか良い展開に、負ける気がしない。

しかし、まだ俺は５％までしか、相手の本来の力を見ていないことを忘れていたわけだ。

「限界解放（オーバーステップリヴァアレイション）ってご存知？」

「この世界で最強の能力だろ？」

「違うよ」

俺の自信たっぷりの答えを、ルミーナは鼻で笑って一蹴した。ルミーナは力なく壁に寄りかかり、雄弁に話し出す。

「確かに『１００％までしか』解放（リヴァレイション）出来ない奴は、それが限界点だろうね？」

「……どういう事だよ」

俺は背中に冷たい物が走った気がした。ルミーナは不敵に笑う。

「アタシが解放（リヴァレイション）した時、何か変わった？」

「いや。ってか数％で変わるのかよ」

「当たり前だよ。それも解放（リヴァレイション）だしね」

俺はそれを聞いても尚、「いや、別段変わったところは分からなかった」と答えるに止まった。

ルミーナは俺の返答に「へぇ…」と小さく頷く。

「そう。何も変わってなかったのさ」

「……？」

矛盾の発生だ。変わるのが当たり前だと言われた数秒後に、変わらないと言われる。

俺、軽いパニック。

「私は解放(リヴァレイション)しても変わらない上に、解放(リヴァレイション)に応じた力のみを、抜き出して使えるっていう特殊な性質の持ち主でね。これの意味が分かるかい？」

「……何が言いたいんだよ」

ルミーナはクスクスと笑い出す。俺はルミーナのサイドポニーを鷲掴みにして引き上げた。

今思えば、少し横暴だったんじゃないかと思うけど、相手は俺を殺そうとしてるから、別に構わないよな。

「答えろ。何が言いたい」

「あぅ…！！　痛っ…痛い…！！」

両手が使えないので抵抗する事も出来ないルミーナ、このままじゃ話にならないので、俺はそのまま手を払った。

ルミーナは床に音を立てて倒れる。

「んで？　それがどうした」

「痛たたた…。まだ分かんないのかい…？　１００％になっても、私は人型なんだよ？」

「だったらどうした？」

俺は俄然、強気に問い質す。相手が何も出来ないと思うと、人間幾らでも強気に出れるから怖い。

これを理不尽と呼ぶか、人間の性と呼ぶかは疑問。

「限界が無いんだよ」

「……？」

ルミーナの言葉に、俺は首をかしげる。どうあっても、１００％は限界値だろう？

「眼界解放（オーバーステップリヴァレイション）をして、完全なモンスターに戻れる奴は、１００％までだよ。でも私の解放（リヴァレイション）は１００％でも力のみを使えるんだ」

「……まさか！！」

「そうさ…！！　私は１００％どころか、１０００％だろうと１０００％だろうと、その『力』のみを抜き出して使える！！　パーセンテージを吊り上げるだけで、私は無限の力を扱える！！」

「でも、それは自分の身に合わない力だ！！　お前の身が持たないぞ！！」

「それでもいい！！」

ルミーナがそう言い終えた瞬間、壮絶な地響きが起こった。立つのも辛い地響きに、俺はバランスを失う。

「じゃあね…、零次君」

「お前…！！」

ルミーナは起き上がろうともせず、寝そべったまま顔をこちらに向けてそう言った。

こいつ…このまま死ぬ気か！？

「解放（リヴァレイション）２００％　核熱融解メルトダウン！！」

「なっ！！　２００％！？」

更なる地震が襲う。大きく穴を開けた洞窟の天井から、大量の雪が降り注ぐ。

地面から噴出すマグマ。それは見る見るうちに、地面を、壁を解

かそうとしていく。
逃げ道は、もう無いといっても過言じゃない。
「お前！！　死ぬぞ！！」
「良いんだよ…。零次君を殺せれば…。どうせアタシは捨て駒。この世界には幾らでも強いのがいる。アタシは勝手に零次君を暗殺に来たけど、北国もアタシが死んだと分かれば新しい長を…」
「じゃあ何で！！　じゃあ何で俺を助けた！！」
俺の剣幕にルミーナは言葉を詰まらせる。それが剣幕なのか、質問の内容なのかは定かじゃない。
だが、ルミーナは小さく、でも心から笑ったように見えた。
どんどんマグマが全てを飲み込んでいく。
ルミーナはそんな中、「一つ聞いていいかい？」と逆に質問をぶつけてきた。
俺はこんな状況だが…いや、こんな状況だからこそ、首を縦に振った。
「どうして『核散弾』を受けた時…、零次君は死ななかったんだい？」
ルミーナは意識が朦朧としているのか、空ろな目でそう言った。
こんな時にそんな話か…と、思いつつも俺は憎らしそうに笑って言ってやった。
「アンタ、言ったよな。俺に領域（テリトリー）かけた…って。熱も光も、ましてや放射能も問題無いって」
「あっ…。……なーんだ」

ルミーナは恨めしそうに俺を見ると、「そっか…」と半ば安心したように言った。

２００％の力のお陰でもう洞窟内は殆どマグマの海、俺達が煤になるのも、形を失うのも時間の問題だろう。

温度も臨界点を裕に突破。俺だって意識が飛びそうだ。

「じゃあ、俺の質問。何で俺を助けたんだ？」

その質問の答えを、ルミーナは消えそうな声で呟いた。出血多量な上にこんな壮絶な力を使ったんだ。もう意識を保つのも難しいんだろう。

「本当はね……零次君と…お喋り…したかったんだ…」

「っ……俺と？」

ルミーナの口からは意外な言葉が飛び出した。

壮絶な暑さの中で、俺の手は小刻みに震えている。

「うん…。だって違う世界から……来たんでしょ…？　向こうの面白い話の…１つや２つ…聞きたくって…。今回は…アタシの独断で来たから……殺すつもりなんて無かったし…」

「お前…！！　じゃあ何で！？」

俺は一気に背筋が凍りついた。自分が完全な悪者になった気がした。

ルミーナは、いつの間にか泣いている。

「零次君が起きた途端……『厄災』の…元凶だと思うと怖くなって

……。アタシ…どうすれば良いか……」
「……」
ルミーナはボロボロと涙を零す。
俺は何も言えず、ただただルミーナの側にへたり込んでいた。
「もっと……零次君と……ステキな……会い方が…」
「……」
四方八方を迫るマグマに囲まれ、ルミーナはゆっくりと目を閉じる。
「何だよ…！！　何だよォォォォ！！！！」
俺は動かないルミーナを抱きかかえる。彼女の体温は、極限状態の中でとてつもない熱さになっていた。
俺も限界だ……。意識が……。
「解放（リヴァレイション）　６０％　絶対零度！！」
「っ！！　寒い！！　寒いィィ！！」
突然の事で何が何だか分からなかったが、溶岩が一瞬で冷えて固まってしまった。俺は荒い息の中、声のした天井を見上げる。
「大丈夫か、零次！！」
「……凍え死にそうだ」

声の主はクシャナ。フィルにアルト、アミューも顔を覗かせている。

「今助けに行く！！」

その一言に、俺は体が震えて声が返せない。

しかし、そんな一転して極寒の中、俺はある種の希望の光が見えた。

「まだ体温がある…」

俺の手に抱かれているルミーナの体に、まだ暖かさが残っている。脈も僅かながら捉えられる…！！

「助けに来た…って！！　零次！！　誰だそいつ！！」

「えっ！？　あぁ…。北国の長だよ」

解放（リヴァレイション）して、両腕、両足、その上翼が元の状態に戻ったクシャナが、俺を睨みつける。

確かに殆ど裸に近い女の子を抱いてたら、そんな感じで見られても仕方が無いか…。

しかし、反応は以外だった。

「……そうか」

「……うん」

クシャナはそれ以上言及する事は無かった。まぁ、周りの状況が状況だ。

きっとそれなりの事を、状況判断で読み取ってくれたんだろう。

「上、戻るから、しっかり手に掴まってくれ」
「おぅ。悪いな」
こうして俺は、いつの間にか北国の長を、負かしてしまった訳だが…。

ω

「どうしたの零次！！　酷い傷…」
「あぁー。ちょっとすっ転んで…。フィルこそ雪だるまは、上手く作れたか？」
「あ…。御免なさい…」
俺は傷の心配をするフィルを、笑顔で皮肉った。先ず第一に、ルミーナの事を聞かなかったのは良しとしよう。
そう。俺はルミーナも、一緒にクシャナに引き上げて貰った。
「この方が、北国の長なんですか？」
「うーん。そうみたいなんだけど」
アルトは鞄いっぱいに詰めた医療セットを駆使して、ルミーナの回復にあたっている。
一体何処で仕入れた知識だろうか…。こんな所で軽い手術まで行っている。
「ねぇ零次！！　本当に大丈夫！？」
「あぁ…！！　この通りピンピンしてるぜ！！」
動かない左手を庇いながら、俺はフィルに強がって見せた。しか

し、横から来たクシャナに、左腕を掴まれる。
「っあ！！」
「お前…！！　やっぱり折れてるじゃねーか！！」
俺はクシャナの手を振り払い、「大丈夫だから…」と歯を見せて笑った。
本当の事を言うと、全く大丈夫じゃない。冷や汗が止まらない。
「零次！！　アルトに直してもらってよ！！　そんな奴より、自分の身が大事だよ！！」
「いや…。それは違う」
「何が違うの！！」
「それは…！！」
このままだと、完全にレイが悪者である事を全面的に押し出して話を進める事になってしまう。
そんな事で皆を混乱させたくないという思いが、俺の口を閉じさせた。
「……とにかく、良いんだ…！！」
「うぅ…、分からずやぁ！！」
フィルはその場にへたり込み、「心配してるのにぃ…」と泣き出してしまう始末。これはこれで良心が痛むが、勘弁して欲しい。
「零次…」
「ん？」
そんな中、アミューがトコトコと小走りに駆け寄ってきた。しか

し、あまり心配やいたわりの目ではない。

「零次…」
「分かってる」
「……」
「でも、どっちも信じられねぇ…」
「……」
「お前は、一体何なんだ？」
「えっ…」
「ディア先生の事も、消したんだろ？」
「どうして…それを…！？」
「全部思い出したよ。ルミーナと戦っててな」
「……」

アミューは俺から目を反らすと、小刻みに震えている。
俺は思い切って、こう切り出した。

「アミュー」
「……」
「何も答えなくて良い。これは俺の独り言だ」
「……」
「正直、レイ様が信じられない」
「そんな…」
「でも、ディア先生やルミーナの言う事も鵜呑みにはしない」
「……」
「俺は西国に就けば他国の敵で、厄災の鍵だ。でも他国に就けば、きっと殺される」
「……」
「帰れねぇのか…？」
「……やめて」

「……」

アミューは俺に一つ、頭を下げるとアルトの方に向かっていった。
それを見ていたクシャナが、「何かあったのか？」と不思議そうに言う。

「まぁ、大人の会話って奴だ」
「何だそりゃ？」

クシャナは首を傾げて、「まぁ、何でもいいか…」と、俺に背を向け行ってしまった。
最近、クシャナが大分配慮してくれるからありがたい。

「さて…、ルミーナの容態はと…」

俺は洞窟に向かって歩き出そうとした。
まさにその時だった。

『カッシャーン！！』

俺の今、まさに立っていた所に何かが落ちた。
その部分の雪は解け、地面が顕（あらわ）になっている。

「なっ！！」

俺は慌てて辺りを見渡す。しかし、誰の気配も無い。
だが、俺の頭上には黒い雲が不自然に浮かんでいる。

「コイツは…まさか！！」
「おや。気ぃ付いたんか？　中々勘のえぇ、兄ちゃんやんけ」

えっ…。何弁？
そんな事を考える間もなく、俺は背後に気配を感じ、反射的に飛び退く。
「まぁ、うちの長(アネゴ)が雪山に出掛けたって聞いたから、来てみたら何や？　随分世話になっとるみたいやんけ？」
「キャラ可笑しいですよ？　キリンさん？」
「キリン？　ワレ何処に目ぇ付けとんじゃ？」
真っ白な肌に、キャバ嬢を思わせるほど盛られた真っ白な髪。キリンお得意の露出の激しい衣装を身に纏い、此方も雪山に相応しくない格好でキリンさん登場。
「してキリンさん？　姉御ってのは…？」
「キリンや無い。ヴァイス・ティェルシャ。そういう名前があるんや」
ヴァイスはそう言って俺を睨む。
俺は疲れた体に鞭打って、この関西弁っ娘と話す。
「えーっと…、ヴァイス？」
「気安く呼ぶな！！」
「えーっ！！」
これには俺もビックリ。まさかの返しに俺はどうしていいか分からなくなる。
ヴァイスは「ハァ…」と、何故か俺に向かって溜息を吐いている様子。
寧ろ、その反応は俺がすべきだよね？

「まぁ…何でもええわ。とっととルミーナ様、返してんか？」
「……それは出来ない」
「は？」

ヴァイスは思わぬ返答に、つい間の抜けた返事をする。だが俺は敢えて、もう一度キッパリと言ってやった。

「返す気は無い！！」
「へぇ…。威勢の良い兄ちゃんやのぉ…」

ヴァイスはニィッと不敵に笑うと、一瞬で俺の前まで間合いを詰めた。
遠かったからあまり分からなかったが、デカイ…。
身長じゃなく、乳が。

「何や？　人質のつもりか？　西国は汚いのぅ…」
「そうじゃねぇよ…っと！！」

俺は右の拳を握り締め、ヴァイスの右頬を狙って裏拳をかます。
しかし、ヴァイスはそれを軽く避け、スッと間合いを取る。

「攻撃的やん？」
「そりゃ、まだ面白い話の一つも、聞かせてあげられてないからな」
「何やそれ？」

ヴァイスは首を傾げる。しかし、俺は「そういう事だ」とそれ以上何も言わない。

「零次！！　誰それ！？」

「おぅフィル！！　俺を狙う敵だ！！」
「なっ！！　零次が怪我してる時に…！！　卑怯者！！」
「何やその子…？　けったいやなぁ…」

ヴァイスは「戦うんか…」と、嫌そうに俺達を見回す。騒ぎに気が付き、クシャナとアミューが飛び出してくる。

「零次…、今度は誰だい？」
「ちょっと口の悪いチンピラに絡まれてね…」
「お前…、女を選ぶ目が無いなぁ…」
「そこの眼帯！！　どういうことや！！」

クシャナの一言にヴァイスが噛み付く。クシャナは「やれやれ…」と、臨戦体制に入った。
そんな中、俺はアミューに一言、言伝を渡す。

「アミュー！！　お前はアルトの護衛にあたってくれ！！」
「……でも」
「護衛任務！！　頼んだぜ！！」

俺は格闘戦の苦手なアミューに、アルトの護衛を頼む事にした。
アミューは「分かった…」と、急いでアルトの側で待機する。

「姉御はあそこやな…？」
「おいおい。先ずは目の前の敵を何とかしていけよ？」

俺は今回身につけた、強気な姿勢でヴァイスを挑発する。ヴァイスは、二カっと笑ったかと思うと、最高の笑顔を向けてこう言った。

「心配せんでも、おのれらなんて物の数秒でし止めたる」

俺はこの時、まだ知らなかった。長の側近の、本当の実力を。

第１４話　核熱融解メルトダウン　～何が正しい事なのか…～（後書き）

ルミーナマジ良い子…。

このままルミーナを仲間にしてあげたい…。

では、次話で会いませう！！

あっ、因みにキャラ紹介更新しましたｗ

Ｐ．Ｓ

いつの間にか１００ｐｔ越え有難うございますｗ

まだまだですが、頑張っていきますｗ

ストーリーと文章力に、定評は無いままですけどｗｗｗ（爆笑

第１５話　黒き雷・白き霊獣？　～本当の力～（前書き）

書くのに一時間かかってないっていう…ｗ

短文にして更新頻度を上げてみます。

第15話　黒き雷・白き霊獣？　～本当の力～

「物の数秒？　コイツは私も舐（クシャルダオラ）められたものだ」

クシャナはそう言うと、余裕の表情を見せるヴァイスを睨んだ。しかし、一方のヴァイスは尚も挑発を止めない。

「何や？　人間にやられて、悪に寝返った鋼龍様は不服そうやなぁ？」

「何だと…？」

思わず飛び出しそうになるクシャナを、俺は制止させる。どうしてこう、北国の連中ってのは挑発から入るんだろうか…。

何…？　そういう習し？

「やっぱりなぁ…。人間の命令に忠実。よう飼いならされとるやんけ。鋼龍さんよぉ？」

「……っ！！　零次！！」

「落ち着けクシャナ！！　相手の思う壺だ！！」

ヘラヘラと笑うヴァイスに対し、クシャナが何処まで冷静でいられるか…。取り敢えず…、戦うしかないのか？

「そこの露出魔！！」

「あん？」

「おいフィル！！」

クシャナの制止に神経を擦り減らしてる俺の隣で、今度はフィルが挑発を始める。
どうしてこの子は、こうも空気を読めないのか…！！
「物の数秒？　笑わせるね！！　もう数秒なんて、とっくに経っちゃったよ！！」
「フィル！！」
その勝ち誇ったようなフィルの一言に、ヴァイスは表情を変える。
俺も、そしてクシャナも「これは不味い…」と嫌な予感が止まらない…。
「ほぉ…。何や、笑えん冗談やのぉ…。そこの嬢ちゃん」
「冗談？　はん！！　事実に決まって……」
次の瞬間、それこそ『一瞬』のスピードで、ヴァイスはフィルとの距離を数十ｃｍにまで詰める。
余裕をかまして油断していたフィルは、勿論その速さについていける筈も無く、驚いた拍子に足を雪に取られ後ろ向けにバランスを崩した。
しかし、フィルは雪に尻餅を付く事も無く、首をヴァイスに掴まれる。
「笑えん冗談は嫌いやねん。嬢ちゃん…」
「くっ…。あっ…」
「フィル！！」
「おーっと？　勇者さんと鋼龍は動かんときや？」
首を掴んだまま、フィルを軽々持ち上げるヴァイス。救援に入ろ

うとした俺とクシャナを、彼女はそのまま止める。

「分かるやろ？　私がこのまま解放(リヴァレイション)して、この子に高圧電流でも流したら…、どうや？」

「備長炭だな…」

「おもんない」

何となく思いついた一言は、ヴァイスの前で一蹴されてしまった。そして、これを機とでも思ったか、ヴァイスは交換条件を提示してくる。

「そんな面白ない勇者さんに提案や。耳の穴かっぽじって、よう聞きや」

「……人質の交換ってか？」

「分かっとるやんけ」

その上でヴァイスは、「無駄に血ぃ流さんで済むぞ？」と戦わない意志を表明する。確かに、戦わない事は最善策ではあるが、ここは一人でお帰り願いたい…。

……もう。フィル……。お前なぁ…。

「どうしたんや？　仲間を見捨ててまで返さへんのか？」

「……ぁぅ…！！」

ヴァイスは冷酷な表情を変えず、更に強くフィルの首を握る。流石にこうなると、条件を呑まない訳にはいかない。

そりゃ仲間の方が大事だ。

「分かった。条件を呑…」

「解放(リヴァレイション)　８０％　氷槍(ひょうそう)・降一点(こういってん)！！」

俺の声を掻き消すように、後ろから聞こえた叫び声にも似た、クシャナの解放宣言(リヴァレイション)。
その声に応じるように、何処からともなく鋭い氷製の槍がヴァイス目掛けて飛んでいく。
「おやぁ…？　ご主人の命令無視かいな？　あんま賢(かしこ)ないペットやのぉ！！」
ヴァイスは空いている手を天に向かって翳(かざ)す。すると、天から降り注ぐ無数の雷。その雷は、一瞬にして全ての氷槍を砕き割ってしまった。
「そっ…、そんなっ…！！」
「ヌルイ槍や…。殺意が篭ってへん」
ヴァイスはニヤリと笑って、再び手を天に翳す。そこには怪しい真っ黒な雲が、不自然に現れ始める。
クシャナは何故か崩れ落ち、一歩も動けずにいる。
「おい！！　クシャナ！！」
「悪い…、零次。仕留めてフィルを助け出そうとしたが…」
そう途中までクシャナが言いかけた所で、俺の耳には違う質の声が届いた。
「戦闘中に、お喋りは禁物や」
危険を感じ、俺は慌てて身を翻し、ヴァイスに神経を集中させた。
しかし、そんな事は関係なかった。

『ガッシャァァァ……ン！！』

今度は俺の後ろで、けたたましい音が鳴る。間違いなく、落ちた。
何が落ちたかは問題じゃない。
何処に落ちたかが、一番の問題だった。

「……」
「立派なのは、威勢だけみたいやな」

ヴァイスは口角だけ吊り上げて笑って見せた。

『ドサッ…』

俺の後ろで何かが…いや、誰かが倒れる音がした。
俺は恐る恐る振り返ろうと…。

「いいんか？　勇者さんも死ぬぞ？」

徐に聞こえる危険な言葉。お陰で僅かにしか、振り返ることは出来なかった。一瞬見えたのは、小さく煙の上がったクシャナ。
クシャナが一撃…？　いや、寧ろ何で避けられなかったんだ？

「おやぁ？　なんや、不満そうやのぉ？」
「クシャナに何をした…！！」

俺はヴァイスに飛び掛らんばかりの気迫を込めて、そう言い放つ。
ヴァイスは、「雷落としただけや」とヘラっと答えた。
俺の知りたいのはそこじゃない。

「その前だ…！！」
「前？　なんのこっちゃ？」
「クシャナが崩れ落ちたじゃないか！！」
「ハァ？」

ヴァイスは理解出来ないような顔で俺を睨んだ。その威圧感に押されつつも、俺は尚も引かない。

「解放（リヴァレイション）の後だ…！！」
「……何や？　勇者さん、知らんのけ？」
「何がだよ…」

ヴァイスは「やれやれ…」と溜息混じりに言うと、フィルを地面に叩きつけるようにうつ伏せに下ろし、背中を踏みつけた。
その時点で俺は右足に力を込め、飛び込みそうになるが、ヴァイスは「手が疲れただけや…」と俺を制止させる。

「質問に答えたるから、その場に立ってろや」
「人質の扱い方を考えて欲しいね…。こっちは回復までしてるってのに…」
「それは利害の問題や。こんな子どうでもいい私に対して、自分等はルミーナ様が必要何やろ？　少し考えたら分かるこっちゃ」

ヴァイスはそう言うと、踏む足に力を込める。フィルの腰が、小さく音を立てるのが聞こえた。

「うぁっ…ぅ」
「あっ、強く踏みすぎたか？」

ヴァイスはわざとらしくそう言うと、俺に視線を向ける。……平

常心。……平常心。
俺はそう言い聞かせた。
「分かったから…、説明してくれ」
「何やアホらしいけど、説明したるわ…って、何でこんな事してるんやろ？」
「……」
「まぁ、ええわ。崩れ落ちたんは、単純に己の限界を超えただけやろ？」
「限界？」

ヴァイスは「何も知らんのやな…」と、何だか落胆したようにも見えた。
しかし、溜息一つ。話を戻す。
「解放（リヴァレイション）には普通は限界値がある。特殊な場合を除いてな」
「限界解放（オーバーステップリヴァレイション）か…」
「まぁな。限界値はあるけど、別にそれは超えられるんや。あの鋼龍は概ね７０％が限界かいな？　８０％の解放（リヴァレイション）やから、少しきばったんやの」
「ん？　限界値を超えたら危ないんじゃ…？」
「超えた力の分だけ、生命エネルギーを使うだけや。まぁ、寿命を対価に業使うとでも思っとき」

ふと、ディアの言葉を思い出す。何か一発で死ぬとか何とか…。
「……ディアめ。嘘言いやがったな…」
「何か言うたか？」
「いや…、何でも」
「まぁ、簡単に言うと疲れてる所に、雷見舞った。それだけや。心

配せんでも死んでへん」

ヴァイスはそう言うと、手を天に翳す。今度は2本。両腕だ。

「これやと、死ぬんちゃう？」

「っ…！！」

俺はヴァイスに背を向け、息も絶え絶えのクシャナの前に立ちはだかる。

こんな時に聞こえるフィルの声。

「零次…！！　クシャナを連れて…！！　早く逃げて…！！」

「お前は何処までも、空気と人の気持ちの読めない奴だなぁ、おい！！」

俺は逃げもせず、取り敢えず手を横に広げてみた。立ちはだかり方としては、多分間違ってない。

「仲間を思う…。美しい友情やのぉ…。でも…」

言い終わる前に、ヴァイスは両手を振り下ろした。

真っ黒の雲から、顔を覗かせたのは、真っ黒な雷。

「解放（リヴァレイション）　５０％　神雷（みかずち）・雷黒砲（らいこくほう）！！」

何があったか…。

そこから、俺に記憶はない。

第１５話　黒き雷・白き霊獣？　～本当の力～（後書き）

これ…何回に分かれるんだろうｗｗｗ

では、次話でｗ

第１６話　黒き雷・白き霊獣？　～厄災の爪痕・合成獣～（前書き）

超ハイペース更新。

最近一日のユニークが５００を越えました＞＜

皆さん有難う！！

第１６話　黒き雷・白き霊獣？　～厄災の爪痕・合成獣～

「零次っ……！！！！」

凄まじい音を上げながら落ちた黒い雷は、黒煙と焦げ臭い匂いを漂わせ、２人の姿を晦ませた。

しかし、徐々に晴れる煙の中には、しっかりと２つのシルエットが浮かぶ。

「おやぁ…？　消し飛ばしたと思ったんやけどなぁ…？」

「っ……！！」

ヴァイスは不満そうに言うと、フィルを踏みつける足に一層力を込めた。

晴れる黒煙。零次は雪の中に倒れているが、クシャナは深い息をしながらボロボロの状態で立っている。

どうやら、庇う立場は変わっていたようだ。

「そうまでして守るもんか？　えらいけったいな友情ごっこやんけ？」

「ハァ……、ハァ……、ハァ……」

クシャナは、殺気に満ちた視線をヴァイスに向ける。今までに無い、本気で殺しに掛かろうかという目だ。

しかし、ヴァイスはひるむ事も無い。

「なんや？　文句でもあんのか？」
「ハァ……、ハァ……」
息も絶え絶え。喋る事も、ましてや動く事すら出来ないクシャナ。
それでも視線は一切外さない。
ヴァイスはどうも、それが気に入らないらしい。
「弱い奴が、調子乗るもんとちゃうで？」
「……」
何も言わず、ただただ睨みつけるクシャナに、ヴァイスは右手を振り上げ、上空の雲が一瞬光ったかと思うと、腕を振り下げた。
雲から走る一筋の稲妻は、クシャナを捕らえ火花と共に雪に沈めた。
「っ……！！」
「ガタガタと騒ぎよって…。弱いもんは黙って従ってればいいんや…」
ヴァイスは小さく、吐き捨てるようにそう言った。
気付いているのか、はたまたいないのか。クシャナと零次には、微かに息がある。
「さて…」
「うぁっ……！！」
足元に視線を落とし、力を込めるヴァイス。
「次はアンタや、嬢ちゃん」

「ど……！！」
「あん？」
「どけ…！！」

フィルは腰に走る痛みを堪えながら、紡ぎ出すように言葉を発した。しかし、折角言えたその言葉は、ただヴァイスの怒りを増させただけに過ぎない。

「諦めや」
「ふざ…けないで…！！　アンタなんか…やっつけ…」
「ちっ…！！」

ヴァイスはフィルが言葉を言い終える前に、腰を踏みつけていた足をどけ、思いっきり喉を蹴飛ばした。
フィルは勢い良く地面をバウンドしながら、挙句は冷たく固い山の岩盤に叩きつけられる。

「かはっ……っ！！」

こみ上げる大量の血。耐え切れず口から吐き出した。雪は見る見るうちに赤く染まる。
いつの間にか、その辺一体が赤い斑点模様に変わっていた。美しい一面の銀世界は、もう無い。

「つまらん」

ふと、耳元でヴァイスの声が聞こえた。驚いた事は驚いたが、体が言う事を聞いてくれる筈も無く、フィルは再び首を掴まれ持ち上げられる。

「……っ」
「もう声も出んのか？　まぁ、声帯は死んでるかもしれんけど？」
ヴァイスは嬉しそうな顔で、フィルの顔面に左手をあてた。その腕からは『ジジジジジジ…』という異常な音が鳴っている。
「二度と喋れへんどころか、誰か分からへん位の顔に変えたるわ」
「……」
フィルは抵抗する事も出来ず、悔しくて唇を噛んだ。
私のせいで、零次が…、クシャナが…。
また足手纏い…、また何も出来ないの…？
そんなの…！！
「嫌だっ……！！」
「バイバイ！！　嬢ちゃん！！」
雪山に解放（リヴァレイション）の宣言が木霊し、何かの爆ぜる音がした。
真っ白な雪の上には、幾つかの肉片と大量の血飛沫。紅い絨毯のように見えるほど、色濃く染められている。
しかし、驚いているのは、何よりヴァイスだった。
「っ……！！　貴様…！！　実験動物の分際で…！！」
さっきまでフィルを掴んでいた左手は、その原型を留めず、無惨にも吹き飛んでいた。
一方のフィルは「……余計な事を」と、苦笑いでそいつを見つめ

る。

「失敗作の回収かい？　ご苦労だねヴァイス」

「ルミーナ…！！　テメェ…！！」

ヴァイスの腕を吹き飛ばしたのは、紛れも無いルミーナ。彼女は指で拳銃の形を作ると、待った無しで『核爆弾』をヴァイスに打ち込む。

「失敗作にやられる気分はどうだい？　つまらないかい！？」

「ちっ…！！」

その光景に、治療に当たっていたアルトと、護衛に当たっていたアミューは呆然としてしまう。

そりゃ、無理も無いだろう。

しかし、フィルだけが、まるでそれが当然であるかのように振舞う。

「解放（リヴァレイション）　３０％　鎧龍熱線（グラビーム）！！」

ルミーナの指から放たれる、鎧龍（グラビモス）お馴染みの熱線。その熱線は大地を、山肌を抉りながらヴァイスに一直線に突き進む。

「……一旦引くか」

ヴァイスは小さく呟くと、一瞬で消えてしまった。そこを貫く熱線。山肌を余裕で融解し、大穴を空ける。

「あっ…！！　逃がしたかー…」

「悪いね。手間掛けさせて…」
「……いいのかい？　喋って」
「いいよ、零次とクシャナは寝てるし、アルトとアミューは口が堅いし」
「本当？」
「多分…」

まるで友人同士のように話すルミーナとフィル。その光景に、アルトもアミューもますます訳が分からなくなってしまう。

「調子はどうよ？　合成獣（キメラ）１２号？」
「そんな呼び方、とうに忘れたよ」

ルミーナはその返しに、「まぁ、自由の身だしなぁ」と笑って見せた。

「えっと…」

そんな和やか…いや、あたり一面血の海で全く和やかではないが、そんな状況の中でアルトは徐に口を挟んだ。
フィルがそれに気付き、「あぁ…。これはねぇ…」と言葉を濁している。

「一体どういう、ご関係ですかフィル様…？」
「それは、アタシが説明するよ」

アルトの不信感たっぷりの質問に、ルミーナが割り込む形で入った。

「機密だから、口外しないでね？」

「内容によります」
「じゃあ、無しだ」
「……分かりました」

アルトは渋々承諾する。するとルミーナはフィルの顔色を窺いつつ、少しトーンを落として話し出した。

「私たちは数年来…いや、生まれたときから知り合いでね」
「話が読めません」
「まぁ、黙って聞いてよ」

ルミーナはアルトを苦笑いで一蹴する。

「私もフィルも、１０年前の厄災の為に作られた合成(キメラ)獣なのよね」
「合成(キメラ)獣？」
「まぁ、人造のモンスターって言うのが分かりやすいかな？」

ルミーナは何次元で進めているか分からない、まるで映画のような話をし出す。

「１０年前、厄災の最前線を担う生物兵器として北国で作られたのが私達、合成(キメラ)獣。作り方はいたってシンプル。人間とモンスターを特殊な方法で掛け合わせて、早くも完成！！」
「『ねる○る○るね』ですか…？」
「まぁ、原理は同じ？」

フィルが「違うよ…」と突っ込むが、ルミーナはお構い無しにＳＦ超大作のような話を続行。

「合成(キメラ)獣は通常の『獣醒』による人化には無い、卓越した能力が持

たせられるからね。只合わせるだけの、コストの安い兵器として随分役に立ってる訳よ」
「能力ですか…」
「例えば私は、体その物が解放(リヴァレイション)の影響を受けないから、幾らでも力が使える。フィルは…」
「言っちゃ駄目！！」

ルミーナが話題を振ろうとした瞬間、フィルは大急ぎでその口を塞いだ。

「あー…。ごめん」
「……」

いよいよ分からなくなってきたという顔をするアルト。つまりはどういう事なのだろうか？

「あなたは敵ですか？」

アルトは単刀直入にルミーナに質問する。しかし、ルミーナは「さぁね…」と小さく誤魔化しを図った。

「アタシにも分からないよ。きっとアンタ達は敵なんだろうけど、長として敵対意識があるかと聞かれれば、正直あんまり無い。」
「じゃあ、何故零次様に手を加えたんです？」
「……」

ルミーナは黙ってしまう。アルトは腰に装備していたハンマーに、手をかける。

「待って！！」

「っ！！　フィル様！？」

ルミーナの前に立ちはだかるフィル、そしてアルトの手を引っ張って、ハンマーにかけさせた手を振りほどく。

「……」

「どういうおつもりです…？」

雪山の頂上で、ゆっくりと仲間割れが始まる…。

第１６話　黒き雷・白き霊獣？　～厄災の爪痕・合成獣～（後書き）

思う事。

合成獣はルミーナだけで良かったような…。

ってかこの後どうしよう…。

次話で２乗がどう崩壊するかお楽しみにｗ

第17話　過去？　～そして紡がれる世界～（前書き）

さぁて…17話です

皆さんのアクセスに、今一度感謝します＞＜

第17話　過去？　～そして紡がれる世界～

ルミーナの前に立ちはだかったフィルは、ハンマーを構えるアルトの前で、ただ唇を噛み、言葉に出来ぬ葛藤を頭に巡らせる事しか出来ない。
何も言わない主に、アルトは痺れを切らし、悔しそうに言った。

「貴女も…、結局は北国の回し者でしたか…！！」
「ちがっ…！！　そんなんじゃ…！！」
「何が違うんです！！」

主の裏切りへの怒りか、それとも悲しみか。アルトは目に涙を溜めていた。精一杯、涙を零(こぼ)さまいとして、歯を食いしばる。
それを見てフィルも慌てた様子で、身振り手振りで弁解に入る。

「私は北国とはもう、何の関係も無くて…」
「何処がですか！？　長とも面識があって、その上能力持ちの合成(キメ)獣(ラ)だなんて…！！　第一、北国は『厄災』を目論む3国の内の1つじゃないですか！！」
「アルトお願い！！　話を聞いて！！」

アルトの手を握り、そう訴えたフィル。しかし、アルトはその手を、力いっぱいに振り切った。

「助けて頂いて…！！　貴女なら…！！　貴女なら信じる事が出来ると…！！　そう思っていたのに…！！」
「アルト！！　違うんだって…！！」
「スパイ行為は楽しかったですか！？　私だけでなく、零次様やアミューさん、レイ様までも騙して！！」

フィルの必死の弁解も、何一つアルトには届かない。何より主の裏切りが堪えたようだ。
しかし、そうまで言われてフィルも黙ってはいない。
「っ…！！　騙してなんか無いよ！！」
「では何故！！　全て話さずに黙っていたんです！？」
「そ…、それは…」
「こんな時でさえ…言ってくれないんですか…！！」
アルトはそう言うと、腰のハンマーに手をかけた。それを見て、黙っていなかったのはルミーナ。
「メイドさん。ちょっと話を聞いてやってはくれないかな？」
「貴女…！！　この状況でよく言えますね…！！」
ルミーナは「アンタこそ、何も知らないじゃないか」と、アルトをきつく睨みつけた。
「それは、そっちが何も言ってくれなかったからでしょう！？」
「アンタこそ、何も知ろうとしなかったんだろう！？　フィルのことを！！」
「……！！」
その一言でアルトも黙ってしまう。ルミーナは、そのまま手を銃の形に組み、「何も知らないくせに…」とアルトに向ける。
「させない…」
すかさず、その手を横から掴むアミュー。ルミーナは不意を突か

れはしたものの、鋭い視線をアミューに突き立てた。
「霞龍…。何の真似かな…？」
「２人の問題…。部外者…。引っ込む…」
アミューは数語、単語を並べて相変わらずの無表情でそう言った。ルミーナは「……ちっ」と、舌打ち一つ。手を下げ、その場を立ち去っていく。
その後姿に、アルトは吼える。
「何処に行く気ですか！！」
「部外者だからね。散歩だよ」
ルミーナは振り向く事も無く、スタスタとその場を後にする。それを見届けてから、アミューもその場を後にした。
２人だけが残った現状。重い空気が流れる。
「アルト…」
「言い訳なら聞きませんよ…」
「……うん」
俯いたまま力無く言葉を発するフィルを、アルトは未だ許せず、冷たくあしらった。フィルは何から話そうかと、迷ったように視線をウロウロさせる。
「ゆっくりでいいかな…」
「……」
アルトは何も言わず、ペタンとその場に正座する。それを見るなり、フィルも糸が切れたように座り込んだ。

「内容によっては、私はあなたを許しません」
「……うん」
フィルは小さく、「それでもいいよ」と苦笑混じりに答えた。アルトはそんなフィルの顔を、ただただ見つめている。
「私がどうして西国にいるか…」
「……」
アルトはゆっくりと目を瞑る。ムッとしたその表情は崩していないが、何だか話してくれることに安心した様子にも見えた。
「いや…、それよりも前から話そうか…」
フィルはゆっくりと話し出した。

ω

「あれ…？」
2人の治療を行いに来たアミューは、その光景に驚きを隠せないでいた。さっきまで血まみれの火傷まみれだったクシャナは、完全に回復。傷一つ無く、岩壁に寄りかかって座っている。
「零次……？」
そして、零次が居ない。どこにも。辺りを見回しても、見えるのは紅い斑点模様位だ。

「そんな…」

『厄災』の鍵である零次が消えるのは、レイの側近であるアミューにとって最悪の事態。

その上、今回任されている護衛任務のことも考えると、事態の緊急さは何倍にも膨れ上がる。

レイに面目立たないどころではなく、最早命の危険だ。

第一、レイの未来予知の中に、ルミーナやヴァイスの出現、合成獣（キメラ）の話はあったが、零次が消えるなんて聞かされていない。

「探さなきゃ…！！」

アミューは「すーすー」と寝息を立てるクシャナを背負い、降り積もる雪で今にも消えそうな、零次の物だと思われる足跡を辿っていく。

ω

「おや？　奇遇だね？」

「よく言うぜ…。態々、2人分の傷を直していったくせに…」

雪山の山肌に空いた小さな穴を抜け、段差を登り、凹凸の激しい崖を登った本当の雪山の頂上。

そこにはルミーナの姿があった。

流石に服は着ていたが、上から厚手の防寒着を羽織っただけ。足元は寒そうだ。

「流石零次君。よく気がついたね」

「気がついたも何も、此処に来いって耳打ちしたのはお前だろ？」

ルミーナが傷を治している最中、「雪山の頂上で待ってる」と耳元で囁いた。まぁ、確信は持てなかったけど、どうやら間違ってなかったようだ。

「早速、本題に入っていいかな？」

「本当に早速だな…。まだ来て1分も経ってないぞ？」

俺は溜息混じりに、ルミーナの横に腰をかける。一方のルミーナは、「あんまり長く話せないからね」と苦笑を浮かべながら答えた。

そして、本題の内容はあまりに直球だった。

「手を組まないかい？」

「……お前とか？」

ルミーナは眼前に広がる雲海を眺めながら、呟くようにそう言った。相互利益の関係性に疑問を抱くその問いに対して、俺は意地悪そうに質問返しで対応。

「零次君の力が必要なんだ」

「それ、この世界に来て何回聞いたか分からねぇな」

ありきたりの一言を、俺は考える間もなく一蹴する。ルミーナは「だよね…」と肩を落とした。

良心に鞭打ち、俺は平常心を保つ。これ以上、色々な関係が出来るのは、正直良くない。

「零次君は、レイに味方するのかい？」

「……分からん」

不意にぶつけられた質問に、俺は一瞬言葉を紡げなかった。その部分については、俺も良く分からない。

「……」

「……」

暫く、沈黙が続いた。

「ねぇ…」

「……何だよ」

ルミーナは徐に、手を銃の形に変え、それを自分の頭に向けた。

「今ここで、私が死んだらどうするかな？」

「……さぁな」

ってか、手の銃で何とかなるなら、あのステッキ要らなかったじゃん…。

俺はルミーナの発言をさらっと受け流し、その手を下ろさせた。

「零次君、冷たいのか優しいのか分かんないや」

「……」

ルミーナは小さく笑って見せた。しかし、目尻には薄っすら涙が滲んでいる。それを隠そうとしているのか、一層陽気にルミーナは話し出す。

「アタシはこんな世界、要らないと思ってる」

「猟奇的発言だな…」

俺はせめてもの作り笑いを返した。しかしルミーナは俺に背中を向け、立ち上がってしまう。

「皆、戦う事と自分を守る事しか考えてない。命だって平気で奪う」

「何だか、大きい事言うなぁ…お前」

ルミーナは俺に背を向けたまま、尚も声のトーンを上げて喋る。いや、寧ろ捲くし立てるといったほうがいいか…？

「だからアタシは変えたい！！　この世界を、出来れば平和に！！」

「……」

俺はルミーナの後姿から視線を外し、眼前に広がる雲海を眺める。雲よりも高い位置にあるこの頂。今は下が見下ろせない分、平和に見えて仕方が無い。

「零次君の世界はどう？　平和？」

「へっ…？　俺の世界？」

ルミーナの声は、いつの間にか小さくなっていた。

俺は、思った事を言ってみる。

「平和かどうかは分からねぇよ。俺の居た世界だって、人は人を殺すし、傷つける。」

「戦争は？　対立は？　合成獣（キメラ）は？」

「……よく分かんねぇけど、無いと思う」

ルミーナは、「そっか…、良いなぁ…」と体を震わせながら言っ

た。声も、先刻のトーンは完全に薄れ、所々震えている。

「アタシも…！！　アタシも普通の女の子に生まれて…！！　普通の生活をして…！！　何もかもが『普通』に溢れた…そんな生き方がしたかった…！！」

「ルミーナ…」

俺に背を向けたまま、ルミーナは叫ぶように、訴えるように、肩を震わせてそう言った。

この世界に、沢山の形で、俺の能力が欲しい奴が居る事を知った。そんな瞬間だった。

「零次君…」

「……」

「君の能力は、人にしたときに解放（リヴァレイション）を加えちゃうんだよね…」

「……そうだな」

「私の解放（リヴァレイション）の力、消せない？」

「……」

「それで…、零次君の世界に行きたい…」

「……」

俺は何も言う事が出来なかった。出来ないといったら分からないが、現状じゃ出来る気がしない。

『厄災』を避けられないと思う者は、解放（リヴァレイション）の能力を欲し、避けて通りたい者は、解放（リヴァレイション）の能力を拒絶する。

もう、分からない。

「おや？　何だい？　先客がいるじゃないか？」

完全に意気消沈する空気を、突貫して入ってきたのは招かれざる客だった。

第17話　過去？　～そして紡がれる世界～（後書き）

どう転ぶのか…。

零次はどこに行き着くのか…。

一周年経って、随分当初のストーリーから外れていますがご愛嬌ｗ

では、次話で再び、奇怪な2乗ワールドをお楽しみ下さいｗ

第１８話　過去？　～解放と封印・そして動き出す悪魔～（前書き）

一週間後とか何とか言いつつ、早々と投稿する！！

それが２乗クオリティー！！

第１８話　過去？　～解放と封印・そして動き出す悪魔～

「随分と久しぶりだな零次」
「なっ…！！　先生！？」

雪山に現れたのは、紛れも無い薙刀装備のディア。俺は彼女の登場に、言葉を失う。

「おや？　北の長も一緒か…？」
「知ってて来たんでしょ？　貴女の事だから」
「へぇ…、分かってるじゃないか」

ルミーナは涙を拭うと、ディアを嘲笑うかのように言い捨てた。その反応に、ディアは含んだような笑みを返す。
どうやら、ディアとルミーナは知り合いらしい。

「まぁ、そう睨むな。今日は朗報を引っさげてきてやったんだからな」
「朗報…？」

ディアはルミーナの頭を2・3回、「ぽんぽん」と叩きながらそう言った。ルミーナは「止めろっ！！」と、何だか鬱陶しそう。

「これは零次にも、朗報だ」
「何か嫌な予感がしますね…」

ディアの朗報…。今まできちんとした朗報があっただろうか？
俺は完全に疑いの眼差しをディアに向けた。
俺の視線に、ディアは半笑いで対応。
「そんな疑り深いお前を、殴ってやりたい所だが、霞龍がお前を探して追ってきてるからな。長くは話せない」
「殴っ……って、アミューが…？」
ディアは、「なるべく戦闘は避けたいからな」と溜息をつきながら言う。確かに、こんな所で戦闘にでもなって、崖下に落ちた日には…。
俺は黙って話を進める事にした。
「して、朗報って何です？」
「厄災を止められるかもしれない」
まさかの一言だ。
「本当ですか！？」
俺は声を上げてディアに寄った。案の定、顔面に右ストレート。
俺は危うく崖下に吸い込まれそうになる。
「っ……！！　あっ……！！」
「寄るな馬鹿。気持ち悪い」
「それで？　どういう事なの？」
ルミーナは崖下へと落下しそうな俺には関心も持たず、最高の朗報に飛びついた。
どうせなら助けて欲しいという、俺の願いは星屑の如し…。

「封印（シール）の能力だよ」
「封印（シール）？」

ディアは聞きなれない単語を口にした。俺は取り敢えずのた打ち回るのを止め、冷静に起き上がる。
ちょっとオーバーに演じていた自分が、何だか凄い惨め…。

「裏の情報屋から仕入れた情報だから、信用には欠けるかも知れないが、解放（リヴァレイション）の能力を目覚めさせるのが『獣性』。それの逆で、完全に解放（リヴァレイション）を消してしまう能力を、封印（シール）と言うらしい」
「解放（リヴァレイション）を…、消す？」
「つまり、只の人になる訳だ」

ディアはニィっと笑って、俺とルミーナを交互に見た。それは、完全に『人』を作り上げる能力と言っても、きっと過言じゃない。
封印（シール）……。

俺はルミーナの事を多少考慮し、一つ質問する。

「それって、既に解放（リヴァレイション）の能力を持った人間は、効果があるんですか？」
「分からん。そう言う能力があるということしか…」

ディアは「悪いが、存在も定かじゃない…」ともう一言付け加えた。一気に伝説上の話になってしまった気がする。

しかし、ルミーナは諦めていない様子だった。

「零次君……」

「そんな顔されてもなぁ……」

懇願するように、俺を上目遣いに見つめるルミーナ。ディアは「完全に無いなんて一言も言ってないからな」と、何故か胸を張る。

全部俺に皺寄せが来るって、アンタ知ってる？

「何で、そんなに解放（リヴァレイション）を嫌うんだ？　カッコいいのに…」

俺は涙目のルミーナに、余計な一言をかける。

ディアが「っ……」と、何故か不味そうな顔をしたのが、横目に見えた。

「カッコいい……？」

「あ……？　うん。カッコいい」

俺は涙を溜めて睨むルミーナに、良かれと思って何気なくそう言った。

しかし、返答は思いもよらぬ物だった。

「全然カッコよくない！！」

ルミーナはそう叫ぶと、俺を突き飛ばした。俺は押された反動でよろけ、そのまま崖の側まで飛ばされる。危うく落下と木っ端微塵のコンボだ。

俺はその反応に、腹を立てた。

「何だよ！！　何か悪い事言っ……」

「零次…」

俺が最後まで言い終えるのを、ディアは手で遮った。目の前のル

ミーナの目からは、大粒の涙が零れている。
「泣けば…！！　泣けばいいとかそんなの…」
「零次！！」

勢いで物を言おうとした俺を、ディアは怒鳴る。
そしてそのまま、ディアは俺の胸座を掴むと、そのまま雪の中に頭を捻じ込んだ。頂上の雪は勿論新雪などではなく、硬く固まった粗目質の雪だ。
痛くないわけが無い。
「っ…！！　いっ・……たぁ…！！」
「テメェ親にどんな教育受けたんだ！？　女の子泣かすのが、お前の正義か！？　あ゛！？」

ディアは雪山にもかかわらず、大声で怒鳴り散らす。まぁ、頂上だから雪崩の心配は無いだろうけど、アミューには見つかるんじゃなかろうか？
「俺だって！！　訳の分からない事に巻き込まれて…！！」
「お前の事情なんて知ったこっちゃねぇんだよ！！　少しは相手の…」
「もう良いよディア！！」

俺とディアが、お互い本気で切れ出したところで、ルミーナが仲裁に入った。ルミーナは涙を流しながらも、無理やりの笑顔で「もういいよ…？　零次君も迷惑だろうし…」とディアを諭した。
「でも…、事情さえ分かれば零次も…！！」
「いいよディア…。ありがと…」

ルミーナはそう言い残して、走ってその場を立ち去っていった。追いかける事も出来ず、ディアは棒立ち、俺は倒れたまま、何も喋らずに立ち尽くしている。

しかし、ディアが黙っているはずも無い。

「何で分かってやらないんだよ！！」

「何が…！！」

ディアは俺の胸座を再度掴み、今度は山肌に押し当てる。その力といったら、尋常じゃない。俺も声を出すのがやっとだ。

「ルミーナにとって、封印（シール）の存在と、お前の存在がどれだけ支えになるのか分かってんのか！？」

「支え…だぁ…！？」

俺は今にも殺しに掛かりそうなディアのその目を、力いっぱい睨み返した。そろそろ、俺もこの理不尽に耐え切る事が出来なくなってきたわけだ。

「ルミーナが解放（リヴァレイション）を己から消したい本当の理由を、お前は知っててあんな態度を取ったのか…！！」

「本当の理由…！？　戦いたくないからじゃ…！？」

「何言ってんだよ！！」

次の瞬間、俺は崖目掛けて背負い投げを食らわされる。しっかりと受身を取ったのが良かったのか、俺は運良く足だけを崖の下に投げ出した形で、何とか止まった。

ディアはそんな俺の横に仁王立ちで構える。

勿論、俺もそんな死ぬ寸前の態勢で居続ける訳もなく、態勢を立て直しディアに向き直った。

「北国の長ってのは…！！」

ディアは怒鳴り散らすように北国の『長』について話し出した。

ディアのその一連の説明を聞いて、俺は慌てて走り出したんだ。

勿論、ルミーナを追って。

ω

「……」

「……」

涙を零しながら、あても無く走りつづけていたルミーナは、頂上からそう遠くない所で、ばったりとアミューに出くわしてしまった。

お互いに警戒しあっているのか、一言も口に出さない。

「……」

「……」

いつの間にか雪がちらつき始め、気温もぐんと下がっていく。

幾ら防寒着とは言え、下着の上に羽織っているだけのルミーナにはちょっとキツイ。

「北の……」

「何？」

アミューの一言に、ルミーナは一気に喧嘩腰になる。しかし、そ

の熱も直に冷めた。
別に寒いからではない。零次が、協力してくれそうに無いから。
「零次は…、渡さない…！！」
「……」
ルミーナはアミューをきつく睨んだ。今は、その名前は一番聞きたくない。
自分の思い通りにいかないのが悔しいんじゃない。
何が悔しいのか…、何故逃げてきたのか…、分からないのが余計に悔しい。
「零次…、返して…」
「覇龍の為かい…？」
その言葉に、アミューは少し動揺したものの「関係ない」と一蹴。担いでいたクシャナを脇に置き、戦闘態勢に入る。
「戦うのかい？」
「……殺す」
ルミーナが冗談交じりに言った言葉。アミューはどう見ても本気だった。
「殺す？」
ルミーナは小さく笑った。それをアミューは、不服そうに顔を顰める。

「何が…、可笑しい…？」
「そんなに大事かい？」
「アナタには関係ない…」
アミューはそう言うと大きく領域（テリトリー）をかけた。全てが幻、そしてまやかしの世界。
ルミーナは「そんなに大事なら…」と小さく呟き、唇を噛んだ。
「解放（リヴァレイション）９５％　木端微塵（Atomically）！！」
次の瞬間、ルミーナを中心に大きく描かれるクレーター。迸る閃光。溢れる熱。吹き荒れる爆風。
それらはルミーナ以外を、何一つ残さず吹き飛ばしていく。
勿論、幻影の領域（テリトリー）ごと、アミューも吹き飛ばした。
「そんな柔な能力で、アタシを殺すだって？　笑わせるよね…」
ルミーナは、頭から血を流し倒れるアミューに近づき、そう吐き捨てるように言い放った。
そして、そのまま銃の形に手を組み、アミューの頭に突きつける。
「何もかも吹き飛ばせる能力者なら、アンタなんか雑魚同然なんだよ」
まだ小さく、か細く息をするアミューに、ルミーナは問答無用で核爆弾を打ち込んだ。血飛沫が返り血になって、ルミーナを紅く染める。
そして、動かなくなったアミューを崖下へと投げ捨てた。

「零次に付く虫が居なければ…、零次はアタシを見てくれるのかな…？」

落ちていくアミューがだんだん見えなくなる。ルミーナの目に、最早生気は感じられないような状態。

「皆…。皆、殺しちゃえばいいのかな？」

アミューはニタッと笑う。それと同時に、絶望による希望が見えた。

「先ず一人…」

ルミーナは後方に視線をずらした。

「そして二人目…」

そこにはスヤスヤと眠るクシャナ。傷は殆ど処置済みだが、戦いの疲れで眠ったままだ。

「いいよね…？　だって…」

ルミーナはそう呟くと、手をパーに開く。そこにだんだんと核エネルギーが集まっていく。

「私は目の前の敵を排除する為だけに生まれた、合成獣（キメラ）なんだから……」

物語の奴隷は、自分の存在意義に気が付いた。

第１８話　過去？　～解放と封印・そして動き出す悪魔～（後書き）

アミュー死んじゃった！？

続きは次話で！！

あっ、そういえば…。

この雪山の一件が終わった後の、次のストーリーですが…。

ご要望があれば、全力でお答えしますのでじゃんじゃん下さいｗ

決してネタ切れとか、そんなんじゃ（ｒｙ

第１９話　過去？　～生物兵器として…～（前書き）

皆人任せかｗｗｗ

いいもん！！

案出さないなら、皆を置いてけぼりにする位のストーリーに（殴

第19話　過去？　～生物兵器として…～

凶悪な威力を纏った熱線は、大地を抉りながらクシャナ目掛けて一直線。

しかし、その熱線は突如として現れた壁に当たり、行き場を失った。

「……っ！！」

「へぇ…。随分と悪運の持ち主だね」

濁った目で、ルミーナが見つめる先には、氷の壁で鎧龍熱線（グラビーム）を受け止めるクシャナ。

間一髪、直撃前に飛び起きた。

「やっぱり…！！　アンタは敵か…！！」

「敵？　モンスター同士、敵も見方も無いでしょう？　人間に酔ったんじゃない？」

ルミーナは睨むクシャナを嘲笑うかのように、不敵に笑ってそう言った。

そう。これが合成獣（アタシ）の生きる意味。

「酔った？　お前こそ自分に酔ってるんじゃないか？　北国の長って立場に」
「北国の長？　そんな肩書き要らないよ…」

ルミーナはそう呟くように言うと、銃型に組んだ手からマシンガンのように核爆弾を連射する。
それは当てる為とは到底思えない。まるでからかっているような…、遊んでいるような…。

「下手な鉄砲、数撃ちゃ当たるってか？」
「これは未だ１％だよ…」

軽やかに全てを避けるクシャナに、ルミーナは苦笑いでそう言った。徐々にクレーターが、その形を無くしていく。

「なら…」
「ん？」

クシャナが得意げに笑ったのを見て、ルミーナはつい撃つ手を止めてしまう。クシャナは「甘いんだよ！！」と吼えると、雪山に響く大声で宣言した。
「解放（リヴァレイション）　３０％　幽閉（ゆうへい）・雪達磨（ゆきだるま）！！」
「えっ！？」

ルミーナの口から漏れた声は、誰にも届く事無く雪の中に埋もれる。四方八方から押し寄せた雪が、まるでルミーナを潰すように雪達磨の中に閉じ込めた。
それでもクシャナは、攻撃の手を休めない。

「解放（リヴァレイション）　８０％　氷槍（ひょうそう）・降一点（こういってん）！！」

空中に突如として出来上がる氷の槍。その槍は空気を切る音を残し、雪達磨に鋭利な刃を突き立てる。

『ドスドスドス！！』と勢いよく突き刺さる音が、雪山に木霊した。

「ハァ…！！　ハァ…！！　ハァ…！！」

全ての槍が雪達磨を突き刺し、その真っ白な体を紅く滲ませる中、荒い息だけが静まり返った空間に音をもたらす。

クシャナは力尽きるように、その場にへたり込んだ。

「流石に…、一日2回も限界点を突破するのはキツイな…」

８０％はクシャナの限界を上回った数字。喩え１％の突破でも、体に掛かる負担は尋常じゃない。

ましてや１０％も上回るとなると、立っていられないのも当然だ。

「あんまりやると…死ぬなぁ…」

そう。生命エネルギーで突破分を埋めなければならない為、何度もやると命に関わりかねない。

「じゃあ…。死になよ」

「！？」

何処からとも無く聞こえた、低く邪気を帯びた声。それはまるで、脳に直接響くテレパシーのような物。

クシャナは重い頭を上げ、槍の突き立つ牢獄に目を向けた。

「そんな…！！　幽閉と氷槍の必殺の連撃が…、利かないだって…！？」

そこにあった筈の雪達磨は、氷槍は、どんどん蒸気となっていく。その中心には、ルミーナの姿があった。

彼女に刺さった槍は、左太ももへの僅かに一本。それ以外は当たる瞬間に、どうも溶かしたようだ。

「……ふふっ」

「お前…、一体…？」

雪達磨という名の牢獄から解き放たれたルミーナは、ゆっくりとその顔を上げる。

その目は、両目ともが真っ黒に変色している。

「利いたよ…？　その連撃…。痛かったなぁ…」

ルミーナは口角をグイッと上げて、不気味に笑う。

その瞬間にクシャナは悟った。

自分の前に居るモノが、人間でもモンスターでもないと。

「ほら？　遊ぼうよ？　鋼龍さん」

雪山は今年一の気温を記録する。

ω

「何だ…？」

遠くに見える大きな穴。その中心には見覚えある真っ赤な髪に、こげ茶色の防寒着を着た少女。

直にルミーナだと俺は気が付いたが、様子が可笑しい。

「一人で何やってんだ…？　アイツ…」

ルミーナは一人で飛んだり跳ねたり…。挙句の果てに解放（リヴァレイション）を宣言。当たり一面を破壊していく。

正気の沙汰とは思えなかった。

でも、今の俺に考えてる暇は無い。何としても、アイツとの話に決着をつけたい。

「ルミ…」

俺は少し遠くに居るルミーナの名前を、大声で呼ぼうとした。しかし、その声が届く事は無い。

「駄目…」

「っ…？」

俺の口に手を当て一言。制止の言葉を小声で俺にかける少女。

「アミュー…？　どうした…？」

「向こう…。避難…」

アミューは幾つか単語を羅列し、俺をその場からゆっくりと離れ

させようとする。
しかし、俺はそんなアミューを止めた。
「何だよアミュー…！！　俺はアイツに…！！」
「駄目…！！　殺される…！！」
普段あまり感情を表に出さないアミューが、怯えたような表情で俺にそう訴えた。俺はしっかりと話して、ルミーナに一刻も早く謝りたかったが、アミューに従う形で岩の陰に身を潜め、そこに座り込んだ。
そこにはクシャナも寝かされていた。
「アミュー…？　どういう事だ…？」
「アイツ…。合成獣（キメラ）…」
アミューは震えながら、一言ポツリと答えた。歯がカタカタと音を立てて震えている。
何かあったんだろうか…？
俺はそんなアミューの答えに対して、サラッと言葉を返した。
「知ってる」
「知ってる…？」
アミューは俺の顔を不思議そうに見つめた。震えは相変わらず止まってないが…。
「北国が作った、生物兵器だろ？　目の前の敵を倒す事が目的の」

俺は震えるアミューの肩に手を置き、目を見てそう言った。安心するかと思ったが、アミューはポロポロと涙を零し始める。
あれ…？　そんなに嫌…？

「……」
「……」

暫くの沈黙。アミューはずっと震えている。

少しの間を置いた後、アミューはスッと顔を上げると、ジッと俺の目を見て、ポツリと呟いた。

「私…。殺される…」
「えっ…」

アミューはそう言うと急に顔を強張らせ、頭を抱えて蹲ってしまう。
いつもは絶対に見せないアミューの行動に、俺は多少なりとも慌てた。

「おいアミュー！！　大丈夫か！？　どういう事だ！？」
「嫌…！！　ヤダ…っ！！　やめてっ…！！」

俺の問いかけにも一切応答せず、アミューはただただパニックに陥っていた。久々に、俺の危険を感知するセンサーが働く。
只事じゃない…いや、これは不味い。

「どう考えても可笑しいな…」

いつの間にかジワリと汗が滲んでいる。雪山だというのに、辺り

は雪の姿さえない。最早防寒着なんて必要ない陽気だ。

俺は細心の注意を払ってルミーナの方を覗いた。

「……」

そこに広がっていたのは、言葉どころか感情さえも無くすような、奇妙な光景だった。

噴出す溶岩。立ち込める熱気。穴だらけの地面。燃え盛る炎。

そして何より、無気味に笑う生き物。

俺の背中を、冷たい物が駆け抜けていった。あれが…、ルミーナなのか…？　待て待て待て待て…！！　只の…、化け物じゃないか…。

「零次…」

「あっ…！！　あぁ…。落ち着いたか、アミュー？」

「……」

その問いに、答えは返ってこなかった。アミューは俯いたままだ。

俺は、取り敢えず自分の責任を考える。何も理解していなかったあの場所で、俺は取り返しのつかないことを言ってしまった。

でも、それでも伝えたい事が俺にはあった。

「アミュー。取り敢えず、何があったんだ？」

「……突然。アイツ…。解放（リヴァレイション）して…」

アミューは涙声混じりに経緯を説明してくれた。
ルミーナの解放(リヴァレイション)の直前にかけた領域(テリトリー)のお陰で、命からがら逃げられた事。
ルミーナは依然として幻影と戦っている事。
一度殺された事。
どうやら幻影内部の情報は、全てアミューに送られるらしい。便利な領域(テリトリー)だ。
「成る程な…。領域を解けば、確実に見つかって殺されると…」
「私じゃ…、太刀打ち…、出来ない…」
アミューは眉を潜めて再び泣きそうになる。いつもは無愛想なアミューも、死ぬことはやっぱり怖いのかな…。
向こうで死を恐れない子が、力を奮ってるのは置いておいて…。
「確かに…。俺もあれは無理かもな…」
「あうぅ…」
つい弱気なことを口にする俺。どうしても強気に出られない。勝算が全くと言っていいほど見当たらない…。
「零次…」
「ん？」
「御免…。あと数分が…、領域(テリトリー)の…、限界…」
「なっ…！！」

アミューは申し訳無さそうに言う。よく考えれば、雪山の半分をも包み込むようなこの領域（テリトリー）。当然、相当な力を使う筈だ。

「切れたら…、フィルとアルトも…、危ない…」

「っ…」

グングンと上がる気温。雪山の一面がいつの間にか活火山状態だ。フィルもアルトも、きっと異変には気が付いているだろう…。

こっちに来ない事を切に願うばかりだ。

「畜生…！！　どうすればいいんだ…！！」

火山へと変貌を遂げる雪山で、俺は2度目の決戦を視野に入れる。今度は本気のルミーナと対峙しなければならないと思うと、流石に俺も…。

「弱気になってんじゃねぇ！！」

「えっ…！！」

俺が言葉を発したと同時に、顔面を裏拳が襲った。あまりの勢いに、俺は近くの壁に叩きつけられる。

そんな俺に更に浴びせられる罵声。

「手前の責任でルミーナは傷ついたんだぞ！！　男ならしっかり伝えるもんを伝えて来い！！」

「いったぁ…！！」

あまりの痛みに一瞬意識が飛びそうになったが、その聞き覚えの

ある声は俺を奮い立たせた。

「相変わらず…カッコいいところだけ持っていきますよね…」

「何の事だ？」

目の前に仁王立ちで立ちふさがるディアに、俺は苦笑いを浮かべる。アミューはディアの登場に顔を顰めた。

「霞の」

「何…」

「あと何分もつ？」

「3分弱…」

ディアはそれだけ聞くと、俺の手を引っ張り一言耳打ちした。その内容は、あまりにも馬鹿げた一言だった。

俺は勿論反発する。

「アンタこの大変な時に、何言ってんだ！？」

「意識を反らせる一番言い方法だ。お前がやるから意味がある！！」

その場でたった作戦は、1分でルミーナを倒すという現実味の無いものだった。ディアは「大丈夫だ」と胸を張るが、俺は遺書の準備に余念がない。

「霞の」

「……」

ディアは俺から目を話すと、アミューを睨んだ。

「下手な真似したら、殺すぞ？」
「……」
アミューは何も言わなかった。ディアは不満そうだったが、この作戦には1分間、幻影の力で此方の存在をルミーナに知られない事が前提だ。
ディアもぶん殴りたい所を、我慢したんだろう。
「さて、時間もない。ルミーナを止めるぞ」
「はい…」
「元気ないねぇ…。アンタのためだよ？」
「分かってますよ…」
俺は渋々立ち上がる。
失敗も知らずに。

第１９話　過去？　～生物兵器として…～（後書き）

俺の小説でそう簡単に、女の子が死ぬもんですか！！（爆

いやしかし…、フィルとアルトが置いてけぼりｗ

次話はフィルＳｉｄｅの過去話になると思いますｗ

次話をお楽しみに！！

２日～３日後に投稿するよ！！

第２０話　過去？　～もう一つの合成獣～（前書き）

これは少し前のお話…。

始まった厄災の中、少女たちは何を選んだのか…。

零次は知る由も無い…。

一応、アルトとフィルの件からの続きだと思って下さい。

第２０話　過去？　～もう一つの合成獣～

―ここは何処…？

「博士…、これは駄目ですね…」

―私は誰…？

「実験Ｎｏ．１２は欠陥品です」

―Ｎｏ．１２…？　それが私…？

「その上、人間として生きるにも欠落した部分が多いですね…」

―人間……？

「そうか…。じゃあ…」

「処分だな」

「……」

沢山の電子機器やガラクタ。そんなものが積まれた場所で、私は昔の事を思い出している。

欠陥品の箔を捺された私は、何も持たされず着させられず。腹に穴をあけられ、捨てられた。

合成獣（キメラ）を作る研究所。それが私の生まれた所。

合成獣（キメラ）は人間や獣醒で人間になった奴と違って、歳を取らない。だから、私もルミーナも生まれてからずっとこの姿のままだ。

「エリシア？　どうしたの？」

「あっ…！！　ルミーナ様…！！」

無造作に捨てられて、死ぬ直前だった私を助けてくれたのがルミーナだった。それも、偶然に見つけられただけ。

私と違ってルミーナは、開発局が認める有数の逸材。皆の期待を一身に背負って、次期『北国の長候補』とさえ言われていた。

「様なんて止めてよぉ…。私の方が後輩なのに…」

「ですが…」

合成獣（キメラ）は、体に製造番号を呪印のような形で刻まれる。国外に逃げないようにする為。聞いた話によると、逃げようとすれば、その呪印が体を崩壊させるらしい。

あくまでも自国の為に戦う兵器。それが合成獣（キメラ）。

でも私はＮｏ．１２ではあるけど、番号を貰う事は無かった。ゴミに与える番号なんて用意されてないんだ。

実験Ｎｏ．４０のルミーナは実質は私より後に作られたけど、私は使い物にならない合成獣（キメラ）だったから、エリート同然の彼女には敬語だった。

「ねぇ！！　今日もステキなお話聞かせて！！」

「私の話でいいのであれば…、お聞かせしますよ」

ルミーナは私の他愛もない作り話が好きで、態々研究所を抜け出し、序に食料や衣類を持って、態々聞きに来てくれていた。

誰からも見向きをされなかった私には、ルミーナは色んな面から見て救いだった。

「それでですね…」

「えっ！！　そーなの！？」

喜んでもらえるのが嬉しくて、私は幾らでも作り話を話した。ルミーナは文句も言わず疑問も持たず、ずっと…ただただ目を輝かせて聞いてくれた。

そんなある日。

「エリシア！！　昨日してくれた話、今日本当にあったよ！！」

ルミーナは私の所に来るなり、驚きと喜びが混じったような様子でそう言った。その時私は、別段気に留めなかった。

「ふぇっ？　そうなんですか！？　珍しい事もあるんですねぇ…」

その程度返しておいたような気がする。ルミーナは「エリシアは凄いね！！」と、幼い顔で満面の笑みを作ってくれた。

私はそれだけで幸せだった。

ルミーナはその日も、私の話を2つ3つ聞いて帰っていった。

そして翌日。

「エリシア！！　今日もそのままの事が起こったよ！！」

「えっ…？　本当ですか？」

ルミーナは嬉しそうに、今日あった事を事細かに話してくれた。確かにそれは、私が昨日話した作り話と相違無い物だった。

「エリシア！！　今日は何を話してくれるの！？」

「えぅ…。そうですねぇ…」

ここまで期待されると、私も何だか外れた時がルミーナに悪い気がしてならなかった。だから、その日は謝って帰ってもらおうと思った。

「すいません…、今日は…」

そう言ってルミーナに触った時だった。

ガクンと何かが、圧(の)し掛かるような重さが頭に響く。そしてくっきりと浮かぶ沢山の光景。

どこか見覚えの無い土地。

転がる死体と、ぶつかり合う力。

そこにはルミーナも居る…。

「…？　どうしたのエリシア？」

「あっ…。いえ…」

私はパッとルミーナに触れていた手を離した。するとその光景はフッと消え去り、何も見えなくなった。

「それで？　今日はどんなお話？」

「えっとですね…」

私は何だか怖くなり、その日は即興で作った何でもない話を聞かせた。日常よくあるような、そんな内容だったと思う。

ルミーナは私の話を聞くや否や、「明日はそれが起こるんだね！！」と嬉しそうに去っていった。

「……何？　さっきの…？」

ルミーナに触れたときに、不意に頭を巡った沢山の光景。それが一体何だったのか、私には全く分からない。

「……」

私は恐怖を押さえ込み、ガラクタを積み重ねただけの隙間に潜って寝た。

翌日、ルミーナは来なかった。

何でも『厄災』っていうのが始まって、悪い奴を倒すために前線に出たらしい。

私はそれを聞いて愕然とした。まさか…。あの光景がそうだったんじゃないのかと…。そう思った。

「ルミーナ様…！！」

私は生まれてこの方出た事の無かった掃き溜めのような地を、焦りと不安でいっぱいの気持ちで飛び出した。

昨日、しっかりと見えたルミーナの姿は…。

「間に合え…！！」

私は大地を蹴る足に、大きく力を込めた。

ω

「お嬢ちゃん…。その力…。……一体、何者だ？」

「アンタこそ…、本当に人間？」

草木がまるでジャングルのように生い茂る旧密林の中、ルミーナは1人の男と対峙していた。

いや、その光景は圧倒的なものといっても過言ではない。

男はルミーナの両手首を合わせて、双剣の1本で地面に串刺しにし、仰向けで身動きの取れない彼女の喉に、もう1本の双剣を突き立てている。

「質問に答えてくれ。嬢ちゃんは何者だ？」

「私はルミーナ。ただの兵士だよ」

彼らの周りには北国の者だろうか？　ルミーナと一緒に行動していたと思われる、同じ部隊の合成獣（キメラ）の少女達が転がっている。

どれもこれも切り傷だらけでボロボロ。血塗（ちまみ）れとはよく言ったものだ。

密林も、最早その場所は凸凹の焼け野原というのが妥当。ルミーナの解放（リヴァレイション）のせいだろう。

「ただの兵士？　嘘は良くないぞ？」

「嘘じゃないよ。私は一介の兵士だもん」

男は、まるで汚い物でも見るようにルミーナを睨み、言う。しかし、対するルミーナは真実を言おうとはしない。

ルミーナが喋るごとに、手首からは相当の血が滲み出ている。男は何かを隠すようなルミーナの返答に小さく溜息を漏らすと、もう片方の手で徐にルミーナの服を引き裂いた。

未だ幼いルミーナの体が顕(あらわ)になる。
「ひゃぅ…！！　なっ…！！　何…！？」
「この番号は何だ？」
小さく悲鳴を漏らすルミーナ。上半身が裸だが、隠そうにも両手が打ちつけられている為に不可能。
しかし、男は淡々と事を進める。ルミーナへの興味など微塵も無い様子。
「あぅ…。それは…」
「Ｎｏ．４０　これは何の数字だ？」
ルミーナの左胸に刻まれている数字を指差して、男はそう言った。ルミーナは顔を真っ赤にして言葉を失ってしまう。
「源…、ちょっとやりすぎじゃない…？」
男の後ろに立ち、その一部始終を見ていた少女は、スッと手を翳(かざ)して止めに入った。
未だ幼さの残る金髪でショートの少女だ。
しかし、源と呼ばれた男は少女を衝撃の名前で呼び、キツイ一言をかける。
「ディア、敵に情けはかけるな」
「でも…」

源に忠告され、オドオドとする少女。１０年前。未だ１２歳のディアだ。

「そんな甘い気持ちじゃ、この厄災を生き抜けないぞ」

「でも！！　……でも相手はモンスターじゃなくて、人なんだよ…！？」

ディアは半泣きで源に向かって言い張った。その言葉を聞くや否や、源はディアを睨みつけた。

「モンスターは殺せても、人は無理だって言いたいのか？　甘ったれるなっ！！」

「ひぅ…！！　でも…！！　でも…！！」

源に怒鳴られ、ディアはボロボロと涙を零す。そんなディアを見て、源は持っていた双剣の片方をほり投げるように手渡した。

突然のことに驚いたディアは、投げられた双剣を落としてしまう。それを慌てて拾い上げるディア。

すると、源はディアを手招きした。ディアは小走りに近寄る。

「コイツを殺せ」

「へっ…」

そう言ってルミーナを指差す。

源の口から出た言葉は、あまりにも残酷な言葉だった。その一言に、ディアを始め当事者のルミーナも驚く。

「そっ…！！　そんなっ…！！」

「俺はレイ様とマスターの援護に向かう。そいつはお前が片付けろ。もう解放(リヴァレイション)する力も残ってないだろうから、一突きで終いだ」

源は震えるディアにそう言い残すと、森の奥に走って消えていった。

残されたディアとルミーナ。

「アンタ」

「ひぅ…！！」

ルミーナは立ち尽くすディアを呼んだ。一方のディアは突然の呼びかけに、恐怖と驚きで涙が止まらない。

「ちょっと、この剣抜いてよ」

「えっ…」

ルミーナは、目線を手首を貫き地面に留める双剣の片割れに向けた。あまりに強く留められている為、自分の力ではどうしようも無いのだ。

しかし、ディアはその言葉に素直に応じられず、オロオロとしている。

「誰も殺したくないんでしょ？」

「でも…」

ディアは不安そうな顔でルミーナを見つめた。

「でも何？」

「この剣を抜いたら、貴女は私を殺すでしょ？」

ディアは恐る恐るそう言った。ルミーナは目をぱちくりさせ、少し唸って考えたあと、淡々と一言。

「うん」

「えっ…、じゃあ抜かない…」

ルミーナは「敵に背中を見せたら、私が殺される」と付け加えた。合成獣（キメラ）は量産型の生物兵器。代わりは幾らでもいるわけだから、一度戦地に赴けば『帰還』の文字は無い。

ディアは剣を握る手に力を込める。

「アンタ、人を殺した事ないの？」

「あっ…！！　当たり前でしょ！！」

ディアは震える声でそう叫んだ。ルミーナは「当たり前…」と、ディアの言葉を復唱し「そう…」と笑った。

「殺しなよ」

「！？」

ルミーナの呟くような一言に、ディアは体をビクっと跳ねさせた。

ルミーナ自信も、もう意識を保つのが精一杯。血を流しすぎた。

「ほら。勇者さん言ってたじゃないか。一突きだって」

「そんな…」

ディアは剣の刃を見つめた。その光沢のある刀身に、自分の顔が映る。

「ほら、早く」

「っ！！」

ディアは刃を食いしばって剣の持ち手を握った。そしてその手に力を込める。

「……アンタ、甘すぎる」

ルミーナの声が、旧密林に静かに響いた。

第２０話　過去？　～もう一つの合成獣～（後書き）

フィルとルミーナとディアの出会い。

そして１０年前の厄災の時、獣醒を持つ勇者として戦った源。

壮絶な過去編が、こうして始まるのです…。

あっ！！　何か後書きっぽい！！（台無し

第２１話　過去？　～交錯する思い～（前書き）

それぞれが、主にキチンと従ってるわけではない。

主を利用して、己の欲を通そうとする。

だからこそ、『信頼』という言葉は儚く脆く、そして薄っぺらい。

第２１話　過去？　～交錯する思い～

ディアの手には、血みどろの双剣が握られていた。
しかし、ルミーナは死んでいない。

「何のつもりかな？」
「……」

ルミーナは使い物にならない両手を庇いながら立ち上がる。
そう。ディアはルミーナを地面に留めていた双剣を引き抜いたのだ。

「アンタ死ぬよ？」
「……私には…出来ないよ…」

ディアは双剣をギュっと握って、何ともいえない気持ちをぶつける。自分との葛藤の末、これが選んだ運命。

「フン…甘い」
「……うぅ」

ルミーナはそんなディアを鼻で笑った。

「アンタ一部始終見てたでしょ？　私の能力も強さも。それなのに、何で殺せる時に殺さないの？」
「そんなの…。分かんないよ…！！」

意地悪そうに言うルミーナ。ディア俯き、搾り出すように彼女に返した。

ルミーナの強さは今も昔も変わらない。北国の長の座さえも射止める、そんな強さを備えている。

只一つ違う事は、経験の差。まだ、自分の能力の有効な使い方が分かっていない事だろうか？

「で？　私を自由にして、アンタはどうするのかな？」

「どうするって…」

ルミーナはうろたえるディアにズイっと近寄ると、その気持ちの収拾がつかないような、気弱な顔を睨みつけた。

ディアは気迫に圧され、一歩後ずさりする。

答えが出ない。

「アンタ、本当にハンター？」

「ハンター…、だけど…？」

ルミーナは一歩、また一歩と後ずさりをするディアを追い詰める。ディアは逃げ腰を崩せず、言葉も次第に弱弱しくなっていく。

「目の前にモンスターがいたらどうするのかな？」

「それは…、戦う…けど…」

後ずさりし続けたディアは、『トンッ』と軽い音を立て、巨木に背中を取られる。ルミーナは、逃げ道を失ったディアの腹に、肘撃ちを食らわせた。

『ドスッ！！』

綺麗に決まった一撃。ディアは口から少し血を吐くと、腹を押さえてその場にへたり込んでしまう。

ルミーナは、追撃としてディアを蹴り倒すと仰向けの状態の膝に、思いっきり踵落しを入れる。

本来、曲がらない方向に曲がる膝。ディアの悲鳴が森に木霊した。

「あっ…ぁぁ！！　あっ…ぅ！！」

「残念。あそこで私を助けずに、殺せば痛い思いしなかったのに…」

ルミーナは笑わず、哀れそうに小声でそう言った。

膝を押さえて蹲るディアを、ただただ無表情で見つめる。

どうしてか、殺す気になれない…。

そんな時、藪から何かが来る音がした。ルミーナはディアから視線を外し、其方に身構える。

源だったら…。

しかし、出てきたのは意外な人物だった。

「ルミーナ様！？」

「エリシア！？　何でこんな所に！？」

ひょこっと顔を覗かせたのはエリシアこと、１０年前のフィル。

勿論、見た目は今と何も変わらない。

ルミーナはエリシアの登場に驚いたが、直に我に帰り、大声で叫んだ。

もう一人、気配がする。

「来ちゃ駄目だ！！　エリシア！！」

「えっ？」

そのルミーナの声と同時に、エリシアの顔の真横を風を切って通過した一筋の弾道。

間一髪、擦れ擦れを飛んでいった弾はエリシアの頬に血筋を作り、髪を数本宙に舞わせた。

「えっ…！？　えっ…！？」

エリシアは腰が抜けてしまったのか、驚いてペタンと座り込んでしまった。

戦闘経験どころか、作られ捨てられたエリシアは訓練さえも受けていない。

「おや、外れてしまいましたか」

「誰…？」

ルミーナはエリシアの盾になるように、その前を陣取ると、弾の方向を睨みつけた。

その藪の中から出てきたのは、中年のゴツイおじさん。火縄銃のようなボウガンを構えている。

「マス…ター」

「ディア殿。大丈夫ですか？」

マスターと呼ばれたおじさんは、倒れているディアをそっと抱え上げると、巨木に凭(もた)れ掛からせた。

そして、細い目を一層細めて、2人を睨んだ。

「ルミーナ・フェリシアだね？」

「……っ」

ルミーナは下唇を噛んだ。

何でさっき、ディアを殺すのを一瞬躊躇ったのか…。早く終わらせて逃げていたら…。

チェックメイト。何となく分かった。

「エリシア…。逃げて…」

「そんなっ…！！　ルミーナ様は…！？」

「どうやら、君がルミーナで間違いないようだね」

マスターはエリシアがルミーナを呼んだのを聞いて確信したのか、小さく笑った。

ルミーナは「早く行って…！！」と、周りに聞こえないようにエリシアに催促する。

「でも…！！　私も…！！」

「実戦経験無しじゃ無理だ！！」

ルミーナは背中越しにエリシアを必死で逃がそうとする。でもエ

リシアは、どうしてもこの間の一件が気に掛かり、この場を離れられない。

あの沢山の光景の中、ルミーナがこの人に殺されるのが見えた。

「戦地で相手も考えず、お喋りですか？」

「っ……！！　よりにもよって、何でアンタが老山に手を貸すんだ…！！」

ルミーナは自分に照準を合わせたボウガンを構えるマスターを、まるで知っているかのような口ぶりで言う。

マスターは「何の事ですか？」とにこやかな表情を見せた。

「惚(とぼ)けるな…！！」

ルミーナはその表情さえも、自分の前で一蹴した。しかし、強気に出ても体は正直。

冷や汗も、震えも止まらない。

しかし、そんな中でルミーナは核心を突く一言を発する。

「東国の長、ライガ・ミサカイ…！！」

エリシアはそれを聞いて、慌ててマスターに視線を向ける。そこにいるのは、どう考えても白髪混じりの中年のおじさん。

あれが…長？

「昔の話ですよ」

懐かしむように、マスターは鼻で笑った。

「何で長の座を蹴ってまで、老山の下に就くような真似を――」

『タァァァ……ン』

密林に銃声が響いた。ルミーナの後ろに座っていたエリシアに、上から落ちてくる生暖かい鮮血。

ルミーナは最後まで言葉を発する事無く、ただただその場に立ち尽くしている。

「ルミーナ…様…？」

ルミーナの左胸にポッカリと空いた穴。ボウガンから飛んだ弾は、彼女の胸を抉り、風穴を開けた。

「お喋りは、禁物ですよ？」

「……」

ルミーナはそのままエリシアの方向に、ゆっくりと倒れていく。噴き出し流れ出る血と共に、エリシアはその体を支えた。

薄っすらと眼を開けたまま、ルミーナは死んでいた。

「ルミーナ…様？　ルミーナ…？　ルミーナってば…！！」

エリシアは動かないルミーナを起こそうと、必死に体を揺すった。しかし、もう元に戻る事は無い。

あの脳裏を過ぎった光景が、今現状と一致した。

『カチャ…』

嫌な音がした。

その残酷な現状に気を取られていたエリシアは、マスターが近づいていた事に気がつかなかった。

装填音と共に、エリシアの前頭部に突きつけられるボウガン。脾肉にも、手甲榴弾が装填されていた。

「……。殺すの…？」

「……あぁ」

少しでも動けば、きっと撃たれる。でも、動かなくてもいずれ撃たれる。その上、手甲榴弾ときた。木端微塵になるのも必然だ。

「おじさん…。私たちが合成獣（キメラ）だって…、知ってる…？」

「……あぁ」

マスターの小さくも重い一言が、エリシアの耳に届いた。

あと何回、質問に答えてもらえるだろう…？　途中でお喋りだと言われ、撃ち殺されないだろうか…。

「ライガ…様…」

「……」

勇気を振り絞って長の名前を呼んだ。殺されるのも、撃たれるのも覚悟の上だった。
でも、銃声はならなかった。
「私…、死にたくないよぉ…」
「……」
マスターは何も言わなかった。でも、ボウガンを下ろしてくれる訳でもなかった。
命乞いだと思って、ただ聞いてくれていてんだろうか…？
「お願い…助けて…」
「……」
私はルミーナがこんな姿になってるのに、何を言ってるんだろう…？
自分だけ…、助かろうとしてる…。
「…ライ――」
『タァァァァ……ン』
それぞれの思惑は、醜く交錯する。

己の欲望を通そうとする者。

守るべきモノの為に戦おうとする者。

何も出来ずに、運命から逃げ惑う者。

そして…。

「何故…！！　何故だ…！！　何故だぁぁぁぁぁ！！！！！」

運命が受け入れられず、何が正しいのか分からない者と…。

第２１話　過去？　～交錯する思い～（後書き）

予告無く過去編を始めてしまったので、ココでお詫びを。

ごめんねー。

零次とルミーナの２次戦争は、過去編が終わってアルトとフィルの件が終わったら、始まるのでそのおつもりでｗ

では次話で会いましょう！！

第２２話　過去？　～厄災と転生～（前書き）

この世界に正しさなんて無い…。

それぞれが思い描く、欲望の未来へ…。

正しい事を…。

本当に正しい事を見出そうとする貴方は…。

本当に愚かだ…。

自分がやった事が、一番正しいと…。

そう思っておけばいいじゃない…。

第２２話　過去？　～厄災と転生～

「……」

目の前に横たわる２つの死体の前で、マスターは糸が切れたように崩れ落ちた。

ボウガンの弾のセッティングを間違えたのか、そこには通常弾が装填されていたようだった。

その上、エリシアに撃った時に照準がずれ、肩を大きく抉ってしまった。お陰で左肩を含めて、左腕は存在を失った。

「……」

２つの死体を前にして、マスターは何を思ったか涙を零し始めた。それもオイオイと泣き始めてしまう。

「辛かったろう…。怖かったろう…」

マスターはそう言うとルミーナとエリシアの頭を優しく撫でた。涙でマスターの顔はぐしゃぐしゃになっている。

「マスター…」

巨木に寄りかかり、休んでいたディアが目を覚まし、片足を引き摺りながらマスターに近寄った。

ディアは崩れるマスターに、それ以上かける言葉が見つからない。

「ディア殿…！！」
「……」
マスターは顔を地面に押し付けたまま、搾り出すように枯れた声でディアを呼んだ。
「この厄災は、どうすれば誰も死なずに止められる…！！」
「……」
マスターの問いに、ディアは悲しそうな顔をして黙り込んでしまう。
そんな方法、無いと言えばそれまでだ。
「ディア殿…！！」
「……そんなの。……私にも分かんないよ」
口調を強めたマスターに、答えを見つけられないディアは曖昧な返事をした。
西国に、北・南・東の軍勢が攻め入り、いよいよ『厄災』が本格的に始まったのだ。
「こんな子供達が…、次々に作り出されて、戦いに駆り出されねばいけない世界なのか…！！」
憤りを隠せないマスターは、何度も何度も地面に拳を打ちつけた。
どうにもならない事だなんて、とうの昔から知っていた筈なのに…。

「ねぇマスター…」

そんなマスターの大きくも小さい背中に、ディアは声をかけた。

マスターは返事を返さない。

「いつまでレイの下に就くの…？」

ディアの口から衝撃の一言が飛び出す。

「ディア殿…。迂闊にそういう事を言ってはならん」

マスターは涙を堪えスッと立ち上がると、2人の前で手を合わせた。せめてもの償い。その感情の表れだった。

マスターは振り返ると、ディアに険しい顔で言い放った。

「あくまで我々は西国の兵士として戦う身。その機が来るまでは、本来の目的は忘れるんだ」

「でも…。私はアスカ様に…、会いたい…」

ディアは拳をギュっと握り締めた。元々ディアは、南国の長であるアスカが、マスターと共謀してレイを殺すために差し向けた隠密班の一人。

差し向けられたのは今から4年前。未だ8歳の時だ。

「だって、もう4年だよ…？　厄災だって…始まっちゃったよ？」

「ディア殿…」

マスターは、目の前の小さな暗殺者をジッと見つめた。

確かに止められなかった厄災の開闢(かいびゃく)。この４年間、全ての者の思いを、目的を、欲望を。それらを知れば知るほど、何も出来なかった。

「行きましょう、ディア殿。きっとアスカ殿も、精鋭部隊を集めて西国に攻め入ってくる筈です」

「……そうだね。これで平和になるんだよね…？」

少女の願いは届かなかった。

ω

「っ……！　まだ…痛むのかぁ…」

すっかり暗くなった旧密林。月の灯りだけが、凸凹の焼け野原を綺麗に照らしていた。

「頭が…飛ばなかったのは幸いだけど…」

ボウガンを頭に突きつけられた時、絶対に死んだと思った。幾ら何でも、頭が無ければ生命維持に支障が出る。

「ルミーナ…」

エリシアは残った右腕で、半分だけ開かれているルミーナの目を閉じさせた。月光に照らされたルミーナの顔は、死んでるとは思えないほどに綺麗で、幼い。

「……ごめんね」

誰もいない。誰にも聞こえない。そんな密林に一言、囁くように聞こえた言葉は優しく、悲しげだった。

「私…死なないんだ…」

ルミーナの顔を見つめて、エリシアはそう零した。

「私は解放(リヴァレイション)領域(テリトリー)も使えないよ…。でもね…」

冷たくなってしまったルミーナを抱きかかえたまま、エリシアは届かない言葉を、尚も紡ぎつづけた。

「ごめんね…ルミーナ…。私の能力は…」

「『反魂(はんこん)の環(わ)』……？」

「えっ…！？」

女性の小さな声と共に、暗闇の中に人の影が見えた。しかし、そこにあるのは『影』だけ。

「誰…！？」

エリシアの言葉に返事は返らない。尚も、暗がりに浮かぶ影だけが、こっちに向かってゆっくりと近づいてくる。

エリシアは体を震わせながらも、その一点から目を離さない。

「いやっ…！！　…来ないで！！」

エリシアが声を張って叫ぶと、影はピタッと2m位手前でその動きを止めた。月明かりが明るく照らす下で、そこにはやはり影しかない。

叫んだせいか、左半身に激痛が走る。

「何…！？　誰なの…！？」

エリシアは荒く息をしながら、何も無い影の上の虚空を睨みつける。

すると、突然何も無い空間から現れ出てきたのは、魔法使いのような防具を身に纏った女性。

「こんばんは…」

「なっ…。貴女誰…？」

妖艶な女性は目を細めて笑うと、その場にスッとしゃがみ込んだ。そして、エリシアとルミーナを交互に見つめる。

「見つけた…」

「えっ…？」

女性はそう呟くと、誰かに合図を送るように手を挙げる。すると、『ザッ！！』と砂を蹴る音を引っさげ、口を黒布で覆い隠した人間が3人。エリシアとルミーナを取り囲む。

「アミール様、これが例の…」

「間違いない…。連れて行け…」

「ハッ！！」

「えっ！！　ちょっと！！　痛っ…！！　何する…っ！！」

アミールと呼ばれた女性に命令された人間は、エリシアとルミーナを担ぎ上げると、密林の中に消えていった。

「これで…」

アミールはそれを見届けると、天上に輝く月を見上げ、少し安心したような顔を見せた。

ω

「ホントっ！？　見っけたの！？」

「はい…。間違いなく『反魂の環』の持ち主です…」

西国一の都市『シャンド』。聳え立つ城の一室で、遠くに見える戦場を眺めていたレイは、その朗報に飛びついた。

「流石アミール！！　『幻影の一霞』の二つ名は伊達じゃないね！！」

「恐れ入ります…」

アミール。それはアミューの転生（トランスミグレイション）前の名前。

「それで？　その能力者は？」

「今、分身に事を行わせています…。もう直、到着するかと…」

「わー！！　楽しみだなー！！」

レイは嬉しそうに室内を走り回った。

そう。シルフィー・レイも、転生前(トランスミグレイション)の名前。

「ねぇアミール！！　貴女も転生(トランスミグレイション)しようよ！！」

「私が…ですか…？」

「不満？」

そんな会話が室内を埋め尽くした。戦火が赤々と燃える地平線の向こうとは、この部屋は打って変わって賑やかで楽しげだ。

そんな部屋に、3人が帰ってくる。

「レイ。帰ったぞ」

「ありゃ？　源君？　最前線で指揮とってたんじゃ？」

扉を開けて入ってきたのは、獣醒の能力を持つ源。そして後に続いて、ディアとマスターが入ってくる。

「皆帰ってきたの？」

「いやぁ、レイ様が転生(トランスミグレイション)の準備に入ると聞いて、いても立ってもいられなくなりましてな～」

「源に話したら、「俺も行く」って聞かなくて…」

マスターとディアは交互にそう言った。

「そんなに私の新しい姿が見たいか～」

当のレイも全員集合に何だか嬉しそうだ。部屋の空気は一気に和む。

「ところで、転生(トランスミグレイション)って何なんだ？」
「あれ、源殿？　知らないんですか？」
「あぁ…って、マスターは知ってんのかよ？」

源の質問に、マスターは「勿論です」と胸を張って答えた。

「転生(トランスミグレイション)というのは、レイ様の領域(テリトリー)能力なんです」
「なんだ…。領域(テリトリー)のことか…。てっきり新しい能力かと思ったぜ…」

マスターの意気揚揚とした解説もそこそこに、源は肩を落としてしまう。そんな源に、マスターは「えっ…。ここからなんですが…」と困り顔。

しかし、そこにレイが口を挟んだ。

「源君、転生(トランスミグレイション)はその名の通り、転生術だよ」
「まぁ、そうだろうな」

ソファに腰をかけ、疲れたのかグッタリする源。レイはお構いなく続ける。

「能力は2つ。完全に赤子に戻るか、他人の体を盗るか」
「物騒だな」
「リアクション薄いねー…」

レイは驚いてもらえる自信があったのか、源のリアクションの薄さが多少気に食わない様子。

源はそれを察してか、少し興味有り気にレイに言葉をかける。

「んで、今日はどっちを使うんだ？」
「後者だよ」
レイはムッとしたまま、淡々と答えた。
その瞬間、マスターとディアの顔が、一瞬だけ強張った。２人は気付かれないよう、直に平常心を取り戻す。
「ではレイ様？　もしかして…」
「そう！！　マスターにも言ってた、『反魂の環』を持った人間が見つかったんだよ！！　これで心置きなく戦えるよ！！」
「それは良かったですね！！」
マスターは嬉しそうな顔をするレイに、精一杯の笑顔を返した。
正直、内心それ所ではない。
最悪だ…。
死ななくなってしまったら…。
「んで？　覇龍はどうなった？」
「今何とか、加工しようとしてる所だよ」
そんな中、源はテンションの戻ったレイに覇龍の事を聞く。どうやら、既に覇龍は見つけてしまっているようだ…。
「レイ様…。着きます…」
「よし！！　じゃあ準備しようか！！」
そう言って部屋に領域（テリトリー）を張るレイ。異様な空間が、辺りを包み込む。

ディアは誰にも見られないように、悔しそうに下唇を噛んだ。

『コンコン』

大きな扉をノックする音が、それぞれの思いが交錯する部屋に響いた。

それは、歓喜と沈黙。

「アミール様、例の者です」

「入りなさい…」

入ってくる黒服の人間。下ろされる2人の少女。マスターは目を疑った。

「っ…！！」

「あちゃー…。肩どうしようかな…？」

嘘だ…！！

「源君、復活術か何かない？」

「再生術なら、無い事も無いけど…」

「頼むよー」

そんな馬鹿な…！！

「（……）」

「（……）」

あれは…！！　私が…！！

最早周りの声すら、耳に入ってこない。あそこに横たわっているのは…！！

「合成獣（キメラ）の…」

運命は残酷だ。

望ましい方向には進まず、要らぬ方向にはその采を振る。

だが、一つでも希望となる事が起こったのなら…。

「ここ…どこ…？」

それを、『奇跡』と呼べばいい。

「初めまして」

それもまた、必然的な運命。

「私」

レイは目を覚ましたエリシアに、ニッコリと微笑みかけた。

第２２話　過去？　～厄災と転生～（後書き）

長くなります、過去編。

どんどん、過去の厄災と全員の正体が明らかになっていきます。

これを目の前で聞いているアルトは、一体どんな顔をしているのか…。

俺なら処理落ちＥＮＤ…。

では、早々に投稿してしまいましたが、何だか修学旅行ムードですので、

１８日以降、２３日まで投稿できません＞＜

ご了承下さい…。

では！！　次話で会いましょう！！

第２３話　過去？　～オリジナルとコピー～（前書き）

いつだって、絶対の力が絶対だとは限らない。

己の力を過信しすぎた者は、己の力ゆえに崩れ落ちる。

例えば…、それが身の丈に合わない力だったり…。

ねぇ？

アナタはどうして、そんなに向上を求めるの？

今の自分も…。

知らないくせに…。

第２３話　過去？　～オリジナルとコピー～

「いやぁ…。それにしても、凄いねぇ…。あんな傷で意識があったなんて」
「えっ…」

レイは起き上がったエリシアに声をかけた。

エリシアの左腕は、綺麗とは言えないが腕の形を取り戻し、動くまでに再生していた。

「流石は『反魂の環』ってところかな？」
「貴女は…？」

クスクスと子供のように笑うレイに、エリシアは首を傾げる。
そもそも、ここは何処なんだろうか？

「私は只の人間だよ」
「はぁ…」

不思議そうにするエリシアに、レイはそう答えた。源が小さな声で「おいおい…」と呟いたのは、どうやら誰の耳にも入っていないようだ。

エリシアは状況が飲み込めないまま、辺りをくるりと見回す。

「えっ…！？」

エリシアは目を疑う。そこには紛れも無い、自分を殺そうとした男の姿。

「ライガ…様…」

「ありゃ？　マスター、知り合い？」

レイは不思議そうにマスターを見つめた。マスターはただただ、「いえ、知りません」と淡々と答える。

「そんな！！　アンタが肩をふっ飛ばしたんでしょ！？」

「知らんな」

「この…！！」

エリシアがマスターに突っかかろうとした所を、アミールが間を割って止める。レイも、「まぁ…いいけど…」と引っかかりながらも、その話題を止めた。

「アミール、この子は？」

「おまけです…」

「おまけねぇ…」

レイはルミーナとアミールを交互に見て、小さく溜息をついた。

その一言にエリシアが噛み付く。

「ちょ！！　おまけって何！！　ってか、あなた達は一体何なの！？」

エリシアの怒号が部屋に木霊する。アミールとレイはクスッと笑い、マスターとディアは浮かない顔をする。
源はどっちつかずな顔。

「ふふ…っ」
「……何？」

レイは床に座っているエリシアに、視線を合わせるようにしゃがみ込むと、目を細めて小さく笑った。
エリシアには、それが不気味に映る。

「いや、簡単な事だよ」
「へっ…？」

そう言って差し出されるレイの手。エリシアは警戒してか、その手を取ろうとしない。

「私に、『反魂の環』をくれればいいんだよ」
「……！！」

エリシアはすぐさま、右足を軸にバックステップを踏み、レイの前から2歩、3歩と遠ざかっていく。

「ありゃ？　直球過ぎた？」
「貴女…、何考えてるの…？」

壁ギリギリまで遠ざかったエリシア。その目が尚、捉え続けるのは橙髪で小柄な女の子。

「体と能力を、貰おうかなー…って」

「冗談じゃない！！」

エリシアは直横にあった扉に、慌てて手をかける。しかし、幾ら引っ張ってもビクともしない…。

「無駄だよ。もう私の領域（テリトリー）内だし」

「そんな…！！」

レイは一歩ずつ、ゆっくりとエリシアに近づいていく。

「その能力、悪くは使わないよ」

「駄目…！！　これは生命の根源を揺るがす能力…」

「だからこそ欲しいんだよ。厄災の成功の為にね」

「えっ…！？」

エリシアはレイに顎をクイッと持ち上げられ、鋭い目つきで言い放たれた。その瞬間に、エリシアは目つきが変わる。

「まさか…」

エリシアの口から言葉が漏れた。レイは「ん…？」と、不意を突かれたような顔でエリシアを見つめる。

「貴女がレイ…？」

「ありゃ…。気付いちゃったよ…」

レイは眉を潜めて呟いた。源が「まぁ、その内バレるとは思ってたけどな」と嫌味ったらしく言う。

しかし、エリシアだけが気が気じゃない表情を浮かべていた。

「そう…か…」
「……よく分かんないけど、そういう事！！」
レイは気持ちの整理がついていない、エリシアの手を握ると小声で呪文めいた物を唱えた。次の瞬間、足元に現れる魔方陣。
「……！！」
「驚いて声も出ない！？　嬉しい反応だね！！」
陣から溢れ出る光の渦。その渦に、エリシアとレイは呑まれていく。
「くっ…！！」
「マスター…」
近くに立って、ただ順を追ってそれを見ているしか出来ないマスターは、歯痒そうに声を漏らした。
ディアはそんなマスターの気持ちが、痛いほどわかる。
どうして、もっと早くに止めなかったのか。
自分の命を擲(なげう)ってでも…。
「随分、煌びやかなんだな」
「普通……」
アミールは源の脾肉にも似た言葉を、サラリと受け流した。
尚も溢れつづける光。それは、まるでイルミネーション。

「これで…！！　これで不死の力が…！！」

部屋に歓喜に満ちたレイの声が響いた。

『反魂の環』。それは、永遠に死ぬ事の無い能力。上手く使えば、木端微塵になろうと、肉体さえも再構築できる。

「っ……！？」

そんな歓喜の声が轟いた直後、突然レイの声が詰まった。光に覆われているが故に、周りの者には中の様子を窺い知る事は出来ない。

しかし、様子は明らかにおかしい。

「貴女…！！　まさか……！？」

「見つけた…！！　私のオリジナル！！」

次の瞬間、放射状に解き放たれる光。あまりの眩しさに、眼を開けていられない。

その光は窓を超え、大きく外にも漏れ出した。

「つっ…」

「いたた……」

直後、2人を覆っていた光が消え、幼げな声が小さく聞こえた。

アミールやマスターが急いで駆け寄る。

「レ…！！　レイ様…！？」

その光景を見たアミールは、驚いたように声を上げた。そこにいたのは身長１００ｃｍにも満たない２人の女の子。

「レイ」と呼ばれた方の女の子は、きょとんとしてアミールを見つめる。

「……？」

自分が誰か分かっていないのでは無さそうだ。寧ろ、何故そう呼ばれているのか分からないと言った感じだろう。

「アミール…。私はこっち」

「はい…？」

そこにいたのは橙髪の女の子。アミールは無条件で、その子を睨む。

「何のつもりです…？」

「いや…。私がレイだから…」

レイを主張する女の子は、困ったような顔でアミールを見つめる。

しかし、アミールは鋭い視線を外さない。

「転生（トランスミグレイション）の後は、その肉体が入れ替わる…。貴女の嘘は醜い…」

「いや…、それが…」

橙髪の女の子は、もう片方の銀髪の女の子を指差して言った。

「あの子、私の合成獣（キメラ）みたいでさ…」

「……」

アミールは眉間に皺を寄せて、その銀髪の子に目をやった。……見た所で、何かが分かる訳でもないが…。

「つまり、あの子は私を元にして作られた合成獣（キメラ）みたいで、転生（トランスミグレイション）が使えるみたいで…」

「……はい？」

アミールは苦笑いで橙髪の女の子を見つめた。まだ完全に信用しきっていないようで、その顔には疑いの表情が見て取れる。

「私の転生（トランスミグレイション）に転生を掛けたみたいで…」

「……」

「転生効果（トランスミグレイションエフェクト）の若返だけが、表れちゃったみたい…」

「……何が言いたいんです？」

「つまり、廻り回って元に戻ったってことかな…？」

「……そんな」

アミールの顔が青ざめる。同時にマスターが驚きと共に、少し安堵の表情を見せた。

しかし、アミールはくるりとエリシアに向き直ると、その小さな体を目を細めて睨みつける。

諦めてなんか無い。

「その体…。よこせ…」

「……嫌に決まってるでしょ！！」

エリシアは若返(じゃくへん)によってブカブカになって、動きにくい服のまま、扉へと急いだ。今なら、領域(テリトリー)は解けている。

勿論、解けているからと言って、逃げられる訳が無い。

「させない…！！」

アミールは一瞬でエリシアの前に回り込み、蹴りの一撃。その軽い体を宙に舞わせ、壁に叩きつけた。

「荒いなぁ…」

「うるさい…」

源が一部始終を見て、苦笑いでアミールに向かってそう呟いた。しかし、アミールはそんな事どうでもいいみたい。

「貴女が体を寄越さないなら…。ここで殺す…」

「……やってみなよ…！！　私は死なないから…！！」

荒い息でアミールに言葉を返す小さなエリシア。壁に打った時に頭を切ったようで、頭からは血が出ている。

アミールが戦闘態勢に入ろうとしたその時、レイが後ろから意地悪そうに口を開いた。

「ねぇ」

「……？」

エリシアは突然の言葉に少し驚く。

「取り引きしない？」
「……取り引き？」
「そう。取り引き」

レイはそう言うと、スッとエリシアの後ろを指差した。そこには、横たわるルミーナの姿。

「あの子…。生き返らせてあげる…」
「っ…！！」

「大切な子なんでしょ？」
「何で…そんな事が分かるの…？」

「貴女が一番よく知ってるでしょ？」
「……？」

「私のコピーなら、見た事無い？　未来や過去…？」
「未来と…、過去……っ！？」

エリシアはあの光景を思い出す。あれも、合成獣（キメラ）として、レイから貰った能力なのか…？

「あの子を生き返らせてあげる。その代わり、その能力を頂戴よ」
「……」

「貴女の体と命は残しておいてあげる」
「本当に…、ルミーナが生き返るんだよね…？」

エリシアはレイを疑うようにそう聞いた。その揺らいだ想いに、レイはクスッと笑う。

「勿論」
「……」
エリシアはルミーナに近寄ると、冷たくなった顔に触れる。
生き返る…。
唯一、自分を認めてくれた…、ルミーナが生き返る…！！
「……分かった。でも…」
「ん？　どうかした？」
「さきにルミーナを生き返らせて…」
「……」
レイはエリシアをジッと見つめる。
「いいよ。先に生き返らせてあげる」
こうして、レイは無事『反魂の環』を手に入れた。
死ななくなったレイに、マスターとディアは己を不甲斐なさを恨んだ。
アミールは自分に転生をし直し、アミューに名前を変えた。

エリシア…。いや、フィルが知っている厄災中の、西国との関わりはここまで…。

こうして10年前の厄災は、これから戦の時代に突入し、ミラの進軍によりレイが倒され終結する。

引っかかるのは『反魂の環(はんこんわ)』を持ちながらも、何故レイは肉体の再生が行えなかったか…。

ディアが無いと偽る、『再生術』の行方…。

あと何人、厄災を知る者が要るだろう…。

「ほら、生き返ったよ。お友達」

エリシアとの転生(トランスミグレイション)が無事終わった。

能力だけを取り出すという、前代未聞のやり口ながらも、それは呆気なく成功してしまった。

そんな中、ルミーナは目を擦りながら、むくっと起き上がる。

「ルミーナ…」

エリシアはその存在の回帰に、喜びを隠せない。

しかし…。

「……」
「ルミーナ…？」

ルミーナは辺りを見回すと、ぎこちなく立ち上がり、レイの横に棒立ち。何も喋ろうとしない。……と言うより、まるで生きてるような感じではない…。

「あっ…！！　言い忘れてた！！」

うろたえるエリシアの横で、わざとらしくレイが零した。

「その子、私の忠実な僕（しもべ）だから」
「……えっ」

「悪いね～。生き返らせることが出来ても、その子は私の命令に忠実な僕（しもべ）でしかないんだ」
「騙したな…！！」

「騙してなんかないさ。生き返ったでしょ？」
「老山…！！」

レイは悔しがるエリシアにそう言い放つと、ルミーナに向かって命令を下した。

「ねぇ、あの子邪魔だから、ちょっとお外で遊んできてくれないかな？　ぐっちゃぐちゃになるまで、遊んできていいから」
「……」

ルミーナは小さく頷いた。

「そんな…」
「じゃあね…。抜け殻さん」
ルミーナはエリシアの首根っこを掴むと、窓を突き破って外へと飛び出した。
「あーぁ。窓が…」
「これで…、一件落着ね」
そういうと、レイは源の小言を跳ね除け、部屋を後にした。

仲間と戦う事は辛い。
でも、それが本当に相互に仲間だと思っている存在であるならばの話。
もし、その仲間が相手を憎く思っていたら…。

月明かりがその焼け野原に立つ２つの影を淡く照らした。
「ルミーナ…」
「命令…。お前殺す…」

エリシアを見つめるその瞳は、白く濁ったように変色していた。

今までの事を『表の厄災』とでも位置付けるなら、ここからは公にされなかった『裏の厄災』。

エリシアと…いや、フィルとルミーナとの知られざる戦い…。

2人を包む、漆黒の夜は…未だ長い。

第２３話　過去？　～オリジナルとコピー～（後書き）

……俺ワールド展開中。

今日一日学校にいって、明日の朝には修学旅行ですんで、

２３日まで更新は無しの方向で…。

流石に携帯からは…パケットの問題で…。

では！！　次話で会いましょう！！

第２４話　過去？　～既製の物語～（前書き）

踊れ。

踊れ踊れ…。

アンタがどう足掻こうが、物語は変わらない。

運命は残酷なの。

ほら、アンタが次に取る行動さえ、誰かに仕向けられた事。

全てを知った上でも、尚、踊り続けてね？

それがアンタの定められた人生なんだから。

第２４話　過去？　～既製の物語～

自分達を照らしてくれるのは、空に浮かぶ妖艶な月だけ。

そんな暗く、湿った旧密林で、２つの合成獣（キメラ）が互いに牽制しあっている。

「……」

「……」

風が草木を撫でる音だけが無気味に聞こえる中、２人は言葉も交わさずに、距離を取って相手の様子を窺っていた。

「ねぇ…」

「……」

そんな中、エリシアは闇にボゥっと浮かぶルミーナの影に、そっと声をかける。

風も止み、静まる密林に、その声は少し大きくも聞こえた。

「本当は操られてなんかないんでしょ…？」

「……っ」

エリシアの一言に、ルミーナは思わず声を漏らしそうになる。聞こえないようにと、ルミーナはそれを仕舞い込んだ。

「ねぇ…」
「……」

その問いかけに、ルミーナは言葉を返さない。寧ろ、……返せない。

「……どうして」
「どうして…？」

エリシアがそう呟いた瞬間、返ってきた言葉。それには、あまりにも重く、歪んだ想いが詰められていた。

そんな声にたじろぐエリシア。彼女にルミーナは言葉を重ねた。

「ふざけないでよ…！！　アンタみたいに自由に…、のうのうと生きている奴には、私の気持ちなんて分からない…！！」
「何の事…？」

ルミーナは今までに無い顔つきで、薄っすらと闇夜に浮かぶエリシアを睨みつけた。

エリシアは、ルミーナの変わりように戸惑いを隠せない。

「何の事…、って言った…？」
「えっ…」

誰にも見えない闇の中で、ルミーナは拳を握り締めた。

でも…。

「……いいよ」

ルミーナは肩を落とした。その一言に、どういう意味が込められていたのだろう。

絶望？　了承？　諦め？

答えなんて…。答えを出そうだなんて、端から思ってない。

「……ルミーナ？」

エリシアはガックリとうな垂れるルミーナに思わず声をかける。それが正解だったか…。

「アンタなんか…壊してあげる…」

若しくは間違いだったか…。

「ルミ…」

『ドォォォ……ン』

エリシアがその名を呼び終えることは無い。なぜなら…。

「もう…、私の名前を気安く呼ばないで」

それさえも、彼女は許さないのだから。

エリシアの頬を掠めて飛んでいったエネルギーの塊。それは球状ではなく、まるでナイフのような…、刃物のような鋭さを持った１％の力。

「えっ……」

あまりの出来事に、頬から流れる一筋の血筋も虚しく、エリシアはその場に立ち尽くす事しか出来ない。

ルミーナは本当に操られているかのように、躊躇無く照準をエリシアに合わせた。

「次は外さないよ…。その腕、もいであげる…」

「そんな…。どうして…」

エリシアはその威圧感に潰され、ペタンとその場に座り込んだ。血筋は涙と混ざり、不思議なグラデーションを生み出している。

ルミーナは依然として、照準だけは外さない。

「どうして…か。そんな純粋な心…、羨ましいよエリシア」

「…？」

哀れむような顔で、ルミーナはエリシアを見つめた。腰が抜けたように動けないエリシアは、理解できない状況下で困惑するのが精一杯。

ルミーナは徐に口を開く。それはまるで情け。

「アンタは戦闘訓練とか、受けなかったでしょ？」

「……うん」

「じゃあ、その内容も知らないんだ」

「内…容…？」

ルミーナはそう言うと、ゆっくりとした歩みでエリシアに近づいていく。

「こんな真っ暗な一室で、１体１で殺しあうんだよ。どちらかが死ぬまで」

「……」

「毎日毎日…。誰かも分からない相手を…」

「……」

「友達だろうと何だろうと関係ない」

「……」

「だって…」

「……っ」

ルミーナはエリシアの正面に立つと、額に銃型に構えた指を押し当てた。

「私はこの世界の…、この物語の操り人形なんだから」

次の瞬間、放たれる高密度のエネルギー弾。昼夜が逆転したかのように、その一帯は瞬間的に明るくなった。

飛び散る鮮血が、返り血となってルミーナを染める。

「エリシア…。この世界は厄災が為にある世界なんだって…」

何かの焼け焦げた匂いと、立ち込める煙。

「初めに決められた通りに事が進んで、人が生まれ、戦いが起き、勇者がやって来て、厄災は終わる…。全てはストーリー通り…」

その煙が晴れようとも、一面の闇の中で周りが見えることは無い。

「私も定まった自分のストーリーを、淡々と進んでる…。ここでアンタを殺して…」

ルミーナは言葉を詰まらせる。自分の存在意義は…。

「北国へ戻らなきゃね…」

風が草木を再度鳴らして見せた。その風は、いつも以上に冷たく、鋭く感じた。

ルミーナはくるりと体を返すと、ゆっくりとその場を去ろうとする。

しかし、それを止める、聞こえる筈の無い声が聞こえた。

「嘘だよ…」

「っ！？」

その声は間違いなく耳に届いた。微かに…。まるで独り言でも呟くように…。

ルミーナにとって、その小さな声は聞き間違いであって欲しかった。

「ルミーナ…、少し聞いて…」
「……っ！！」

声のする方に、ルミーナは核散弾を打ち込んだ。視界を覆い尽くすほどの弾。被弾は免れない。

だが…。

「無駄だよ…」

まるで亡霊のような、か細いその声は止まない。

「反魂…！？　その能力はレイに…、まさか…！！　この化け物め…！！」
「……」

ルミーナは闇と煙で見えない相手に、吐き捨てるようにそう言った。しかし、言葉は返ってこない。

「……」
「大丈夫だよルミーナ…」

ルミーナは、何処から聞こえているのか分からない声にたじろいだ。合成獣（キメラ）の中でも優秀な自分が、その位置すら把握できない…。

「エリシア！！　何処！！　何処にいるの！？」
「……」

ルミーナの呼び声は、虚しく闇夜に呑まれていく。

それでも、ルミーナは必死に見えない相手に呼びかける。

「エリシア…！！　どういうつもり…！！　これじゃ物語が狂う…！！」

その一言に、何処からか言葉が返る。

「どうして狂う事を恐れるの…？」

その言葉は、あまりにも意外。

「恐れる…？」

「うん…。ルミーナ…貴女はどうして自分で道を拓こうとしないの？」

ルミーナは拳に力を込めた。

恐れる…？　無限の強さを備えた私が恐れる…？

「これが私の生きる最善の道。それを切ってまで、別の道を進む必要が無い！！」

ルミーナは大声でそう言い張った。

「ルミーナ…」

「アンタが死なないと…！！　アンタが死なないと、私は…！！」

そこまで言って、ルミーナは思わず口を塞いだ。

相手はそれこそ憎い他無い者。今更口にしてはいけない言葉など無いはずなのに…。

「そう…」

「エリシ…」

その名前は、届かない。

「信じてたのに！！！！」

エリシアは大きく叫んだ。それはまるでバインドボイス。そんな超絶な声が耳だけでなく、体さえも駆け抜けた。

「ルミーナ…。ここで決着をつけよう…！！　この世界を…生き抜くのはどちらか…！！」

呆然と立ち尽くすルミーナは、その声で我に帰った。

そして、その言葉の意味を…。

「解放（リヴァレイシア）も領域（ソトリー）も使えないくせに…！！　大口叩いたかと思えば…！！」

宣戦布告と受け取る。

「死ぬのはアンタ！！　物語は捻じ曲がらない！！」

ルミーナはそう言うと、腰から徐にステッキを取り出した。そしてそれを、天高く突き上げる。

「領域（テリトリー）！！　日本晴（パーフェクトデイ）！！」

その言葉と共にステッキの先端から迸る太陽光。その光は束となり、見る見るうちに空を覆う。

「エリシア…！！　力の差を見せてあげるよ！！」

その言葉を裏付けるかのように、顔を見せる太陽と雲ひとつ無い青空。見事な日本晴れだ。

「そんなっ…！！　夜が…！！」

「……そんな所にいたのか」

ルミーナは岩陰に隠れるエリシアを見て、不敵に笑った。焦っていたから、あんなバレバレの気配でさえ気が付かなかったんだと、そう言い聞かせる。

「出てきなよエリシア」

「……っ！！」

岩を壁に、エリシアとルミーナは睨みあう。

そんな中、エリシアが切り出す。

「ルミーナ…」

「……命乞いなら聞かないよ」

「いや…。貴女、私に会って私をここで殺す事も知ってたの？」

「まぁね」

「あんなに楽しそうだったのも…」
「演技と言えば演技かな」
「そう……」
「エリシアは、自分の取るべき選択肢と、未来は見えないの？　自分の物語は、見えてるんでしょ？」
エリシアは俯いて一言。
「うん…」
「じゃあ…、勿論ここで死ぬよね？」
その言葉に、エリシアは首を横に振った。
ルミーナは眉を細める。
「嘘なら要らないよ。私には死ぬアンタが見える」
エリシアは「……でも」と繋げた。
「私には私の死が見えない」
明るくなった晴天の下、醜い戦いは始まる…。
時に、自分の人生は自分が作ってるのでは無いと思った事は無い

かい？

元から決められた事を、順序良くこなしている。

誰それが必然で当たり前。

何もかも、全ての思考も行動も、定められた己の物語であると。

人にはそれを否定する事は出来ない。

なぜなら、そうで無いだなんて言い切れないんだから。

しかし、逆もまた然り。

己の人生は己が紡ぎだしている事。

それを否定し、規制のレール上を走っているとも言えない。

でも、本当に自分が作っている人生だなんて言える？

こんなに都合良く、何でもかんでもスムーズに事が進む？

こんな複雑怪奇な物語。

一体誰が…、若しくは何が作り出しているんだろうね？

ふと周りを見てみるといいよ。

もしかすると、お前の人生も誰かの作り物かもしれないからね。

そして、そんなお前は、物語の操り人形…。

本当は気付いてるんでしょう…？

ふふふ…。

ねぇ？　踊りましょう？

それが、誰かの手の上でも…。

綺麗に、美しく…。

決まったリズムと動きだけを…音楽に合わせて踊る人形ノヨウニネ…！！

第２４話　過去？　～既製の物語～（後書き）

ね？

私たちは作り物。

自分で開く未来なんか無いのよ…？

第２５話　過去？　～改編者と託されしモノ～（前書き）

己の使命を達成できない者を、物語は笑うだろう。

そしてそれが楽しくて、物語はもう一度、使命を持たせ、人を呼ぶ。

今度来るのは、どんな奴だろうか。

血で血を洗う運命を、見せてくれるだろうか。

それとも…。

させないよ？

ハッピーエンドなんてね…。

第２５話　過去？　～改編者と託されしモノ～

「死が…見えない？」

ルミーナは眉を潜めて、その言葉を噛み締めるように復唱した。

そのルミーナの一言に、エリシアは岩陰を出て付け足すように言う。

「私には『反魂の環』がある。死なないのも当然でしょ？」

「本当に？」

ルミーナは一瞬で間合いを詰め、エリシアの足を掃い、その体を地面に押し倒した。

そして詰みと言わんばかりに、胸に指を突き立てる。

「いっ…！！」

「この胸に風穴空けても、アンタは死なないんだよね？」

ルミーナは見下すような目で、エリシアを視界に納める。そんなルミーナを見て、エリシアはフッと笑って見せた。

「やってみなよ…」

「…上等！！」

その言葉を言葉通りの意味と取り、ルミーナはエリシアの胸にゼ

ロ距離射撃で核爆弾[1%]を撃ち込んだ。
飛び散り、溢れ出る致死量の鮮血。
間違いない、今、眼前に映るはあくまでも生きていたモノ。
「ほら…！！　死んだじゃんか…！！」
動かないその肉の塊を恨めしそうに、ルミーナは見つめた。目が開いたまま、その死体はピクリともしない。
「結局…奇跡なんて無いんだよ。エリシア…」
真夏日どころか、猛暑日を記録しそうな気温と天候の中、ルミーナは暗い顔でエリシアに背を向ける。
しかし、死者は声を絶やさない。
「何が…？」
「！？」
ルミーナは驚きのあまり、体が言う事を聞かない。間違いなく、今、声が聞こえた。聞こえる筈の無い声が…。
「そんな…！！　今の一撃でアンタが死ぬのが運命の筈…！！」
「へぇ…。運命ねぇ…」
ルミーナは無理やり体の緊縛を解き、後ろを振り返る。そこには何事も無かったかのように、エリシアが立っている。
エリシアは溜息一つ。目の前の現状が把握できないルミーナに、

言葉を漏らした。

「知ってる、ルミーナ？　お話がお話どおりに進むのは、お話の中だけの話なんだよ？」

エリシアは不敵に笑う。しかし、ルミーナは平静を取り戻し、まるで弱腰な一言を呟いた。

「……この世界が、その話の中の世界なんだとしたら？」

「そのために、別世界の勇者がいる」

ルミーナの言葉に、エリシアは何の躊躇いもなく答える。

しかし、ルミーナはその言葉に首を傾げた。

「どういう事…？」

「勇者が物語の改編者だということ。言ってしまえば、彼の存在こそが奇跡」

エリシアはまるで別人のように、淡々と言葉を並べていく。

「でも！！　アイツはレイに就いてるじゃないか！！」

「それが改編者の選んだ物語。彼は、西国が正しいと…。そう判断した」

ルミーナは無表情なエリシアに多少なりともたじろぐ。目の前にいる奴は、一体何者なのか分からない…。

「エリシア…、アンタ何者…？」

「……」

エリシアはルミーナの質問に口を閉ざした。何者かと言われても、自分でも自分が何者なのか分からない。

「アンタ何でそんな事知ってるの？」

「……」

分からない。何を言っているのかも。何故知っているのかも。

「アンタ…」

ルミーナが何かを言いかけたその時、領域（テリトリー）内に何かが入ってきた。ルミーナは言葉を切り上げ、侵入方向に構える。

エリシアはルミーナの突然の行動に、現状が把握できない。

緊迫した空気の中で訪問してきた者は、意外な人物だった。

「話の途中で悪いが、邪魔するぞ」

「えっ！？」

草を掻き分けて入ってきたのは、物語の改編者。

「何で…？　アンタが…？」

「おっ、また会ったな」

源は先刻と打って変わって、ラフな挨拶を掛けるとスタスタと近づいてくる。

その行動に対して、ルミーナは反射的に指を構えた。

「おいおい…。行動が荒すぎるぞ…」
「一体何の用…？」

数メートル間隔を保ったまま、源はルミーナに向かって溜息をつく。対するルミーナは、「これ以上近寄ると殺す」といった雰囲気を漂わせたまま。

「別に戦いに来た訳じゃねぇよ。」

源は両手を上げ、歩を進めた。

しかし、黒龍は容赦しない。

「解放（リヴァレイション）　３０％　鎧龍熱線（グラビーム）！！」

ゆっくりと歩を進める源の横を、空間を引き裂くように貫いていく高熱の光学兵器。
しかし、源は動じる事も無く、歩みも止めない。

「来ないで…。次は当てる…！！」
「カリカリし過ぎだ…」

そんな言葉に聞く耳も持たず、源に向かって構えるルミーナ。しかし、構えたところに既に源は居ない。

「っ…！！」
「後ろががら空きだぞ？」

ルミーナの後頭部にポンと手を置く源。一瞬ルミーナが視線を外した隙に、背後にまで回り込んだのだ。

ルミーナは動く事が出来ない。

「おぅ。学習してるんだな」

「そりゃ、さっきはここで動いて地面に押さえ込まれたからね」

先刻、源と鉢合わせた時にも同じ状況になった。その時は動いた瞬間に、運動エネルギーを利用され、上手く丸め込まれてしまったのだ。

「甘いけどな」

「えっ…！！」

源は隙だらけのルミーナに少し力を加える。ルミーナはそのまま舞踊のように軽やかなステップで、地面に押し付けられる。

「なっ！！　どういうつもり！？」

「心配すんない。今日はお前に用は無いんでな」

源は「コキン」と漫画の効果音のような音で骨を鳴らし、ルミーナの足の関節を外した。勿論の事、痛い上にルミーナは動けない。

「エリシア…だっけか？」

「……」

源は悶えるルミーナを他所に、エリシアと向かい合う形で陣取った。

その言葉に、エリシアはただ「コクン」と頷いた。

「今日会うのは2回目だな」
「……」
源の出現に、エリシアは少し戸惑っている様子。それは突然現れたという事だけではない。
「ふん…。納得いかないって顔してるな」
「……分かる？」
「分かる。まぁ、納得いかないのも分かる気はするけどな」
「じゃあ、直球で聞くよ」
エリシアは瞬間的に、何故ここにコイツがやって来たのかを理解した。これが、改編された運命…。
「どうして、転生（トランスミグレイション）の時に何一つ入れ替えなかったの？」
その一言を待っていたかのように、源はニィッと歯を見せて笑った。その笑顔は邪心も覗かぬ、純粋で屈託のない笑顔。
「お前に託してみたくなったんだ」
「…は？」
軽軽しい、その上何の厚みもない薄っぺらな一言に、エリシアは拍子抜けする。
「どういう事…？」
そのままニコニコと少年のように笑う源を、恨めしそうに見つめる。源は「フゥ…」と溜息を漏らすと、ルミーナの領域（テリトリー）が薄れてい

るせいで、夜が混じり茜色になった空を見上げた。
「お前はこの厄災の終わりが見えるか？」
「……突然だね」
エリシアはそれでも、源への疑心を払えないでいた。
「いいだろ？　まぁ、どうなんだよ？」
それを分かっていてか、源は人が変わったように笑顔を絶やさない。
「……見えないよ」
そんな源に、エリシアがかける言葉は一言だ。
「そうか。良かった」
源もまた然り。
「どういうつもり？　何が言いたいの？」
「んー。じゃあ、俺の未来は見えるか？」
源はエリシアの質問を全てスルーして、話を進めていく。エリシアは完全に源のペースに乗せられてしまっているようだ。
もしかすると、これも改編者の下した『運命』なのかも知れない。
「……」
「見えるんだな」

源の質問に対して、エリシアは黙ってしまう。

「差し詰め、個人の未来は見えるといったところか。良かった、やっぱり俺の目に狂いはなかった」

「さっきから何の話をしてるの…？」

源はエリシアにスッと近寄る。身長が小学生並のフィルの前に源が立つと、まるで親子のよう。

うろたえるエリシアに、源は視線を合わせ言い聞かせるように言った。

「俺はこの厄災を、俺の死を以って止める事にした。だがレイは恐らく死なないだろう。俺が幾ら物語を改編しても、奴は気が付いてしまう」

「……」

エリシアはポカーンとして言葉も出ない。一体コイツは何を言っているのか、最早そこから処理が間に合っていない。

「えっ…！！　アンタは西国の味方で、覇龍とかいうのを…」

「まぁ、そうなってるだろうな。物語の進行上」

「物語…」

「この世界を正しい物語に。ハッピーエンドに終わらせるのが、改編者の使命だ。まぁ、こんな結果じゃ訳ないけどな」

「……」

「俺にはもう改編者として、物語を作り変える力は無い。だからお前に託したんだ」

「へっ…！？」

源はポンと、エリシアの頭に手を置き、挙動不審になる彼女を2・3回撫でた。

「他人の未来が見えるその力と、死ぬ事を許さない『反魂の環』。お前が次に現れる改編者を、どうか良い方向に導いてくれ」

「何で私が…」

エリシアは源に疑いの眼差しを向ける。今日初対面の自分に、全てを任せるなんて話が出来すぎて…。

話が出来すぎている？

「っ…！！」

そこまで考えて、エリシアはハッとして源の顔を見上げた。

「まさか…！！」

源はもう一度、にっこり笑って見せた。

「えっ…！！　何！？　あなたは何なの！？」

まるで別れの挨拶でも残すかのような源の態度に、エリシアはどうすればいいか分からない。

「俺はお前の…いや、お前らの創造者だ」

そう、エリシアとルミーナを見て言った。

この後、厄災が終結するまでそう長くはかからなかった。

厄災後、エリシアは転生し、フィルの名でマスターが引き取った。

転生時に、反魂の環は体の奥底に納めたのだという。レイにその存在がばれないように。

源の改編によって、レイは転生時に未来予知の能力を限定されたらしい。

あくまで噂だが。

ルミーナは真実を知った後、フィルと別れ暫く各国を放浪していたが、最近北国の長になる為に戻ったそうだ。

「……」

ω

「……」

ちらつく雪の中、己の過去を語った主。

全てを受け止められるかは分からないが、始終聞いた従者。

フィルが話し終えて尚、アルトは何一つ言葉を口にしようとしない。

「……アルト」

「……」

フィルは俯いてしまったアルトに、戸惑い気味に声を掛けた。単純に、何を言ってあげればいいのか…。

それが分からない。

「……」

分からないから、黙ってしまう。

「……フィル様」

そんな重苦しい空気の中、アルトは小さな声で、主の名を口にした。

「私は貴女が良く分かりません」

「……」

しかし、続けられた言葉は決して良い意味合いで取れる物ではない。

その言葉に、フィルも一瞬表情を強張らせたが、直に「しゅん…」

と肩を落としてしまう。

「ですが…」

「えっ…」

言葉はそこで途切れる。アルトは言うべき事もそこそこに、フィルを強く抱きしめた。

「アルト…！？」

「……私は何も知らずに…！！　あのような振る舞いを…！！」

フィルを抱きしめたまま、嗚咽を漏らし泣き出すアルト。そんなアルトに、フィルは優しく声を掛ける。

「いいよ…。言ってなかった私も悪かったんだ…。ごめんね…。アルト…」

「そんな…」

アルトの口から、それ以上言葉は紡がれなかった。フィルはアルトを抱きしめ返す。

気温の上がる雪山でも尚、そこは暖かかった。

……気温の上がる？

「ねぇ…？　アルト…？」

「はい…。何ですか…？」

必死に涙を堪えて、アルトはフィルを見つめた。お互いの距離は

１５ｃｍも無い。
「何だか暑くない…？」
「……言われてみれば」
くっ付いているからという訳でもないようだ。雪もドンドンと溶け出していっている。
おまけに晴天の空に、胸を張って居座るカンカン照りの太陽。
「ねぇ…アルぅひゃぁう！！」
「フィル様…お静かに…」
そんな異常気象お構いなく、アルトはそのままフィルを押し倒す。
「ぁっ…！！　アル…ぅぁ…。どこ触って…いゃぅ！！」
「このアルト、感動しました！！　身も心も、主に御仕えします！！」
「そういう事じゃないぅぅぁ……ぅ！！　らめぇっ…そこはっ…！！」
「私、フィル様のことが好きになりました♪」
「何言って…ぃたっ…！！　指…ぅあっ…！！　入れな…ひゃうっ！！」
「大丈夫ですよ！！　誰も見てないです♪」
「いぁ…！！　そういぅっ…あぁん！！　ちょ…ぇぁ…！！　アル…ひぅ！！　止めぇぅう！！」
「いやぁ…。暑いですねぇフィル様…」

【ボーナス】
・　過去編によって、アルトのフィルへの好感度が上がった！！
・　アルトは何かに目覚めてしまった！！

「ぜったぃ…ぁん…！！　2じょぅぁ…！！　ころしぃ…あぁん！！」
「フィル様？　あんまり感じると、この小説に規制がかかりますよ？」

雪山は暑い。そして熱い。

ω

「零次…」
「何です…？　先生…？」

作戦を練って、飛び出すまであと数秒といった所。そんな緊張感高まる中、ディアは苦虫でも噛み潰したかのような顔をする。

「スゲェ嫌な予感がする…」
「……この作戦にですか？」

俺はルミーナへの今回の作戦の考案者でもあるディアを、恨めしそうに見つめた。
しかし、返った来た答えは、よく分からない物だった。

「前言撤回。スゲェイヤラシイ予感がする…」
「この作戦に、俺はイヤラシイ予感がします」

訳の分からない事を言いながら、俺とディアは臨戦態勢に入った。

ルミーナを止めるために。

俺自身の為に。

第２５話　過去？　～改編者と託されしモノ～（後書き）

過去編。

無理やり終了ｗ

アルトが目覚めてしまったｗ

でも、描写無いから大丈夫よねｗ

では次話で会いましょう！！

第２６話　叩くな、揉めば治る。　～伝えたい事～（前書き）

心配すんな。

挑戦してみろ。

揉んだって掴まる位だ。

ｂｙディア

第２６話　叩くな、揉めば治る。　～伝えたい事～

「タイムリミットは2分弱だ。気合入れていけよ」
「あれだけ色々聞いたんです。まだ死ねません」
俺はディアの忠告に、精一杯の誠意を込めて言葉を返した。
「おや？　随分勇ましくなったじゃないか？」
「まぁ、この世界での自分の立場が分かったんです」
先刻の雪山の頂上で、俺は過去の話をディアから聞いた。
転生や合成獣の事。フィルとルミーナの事。レイと厄災の真相。
そして何より、１０年前の改編者の事。
「そうかい」
「えぇ」
ディアはそんな俺を見て、心の底から嬉しそうな顔をしたようにも見えた。
まぁ、気のせいだとでも思っておくけど。
「じゃあ零次。先ずは目の前の案件を終えるとしようか」
「望む所です」

俺はその言葉を待っていたかのように、アミューに目で合図を送る。内容は大した事じゃない。
『無理すんなよ』って、それだけだ。
アミューは理解したようで、コクンと首を立てに振った。
「さて、気を付けなよ…！！　相手は前の勇者が対レイ用に、密かに作った核兵器（バケモノ）だからね…！！」
「はい…」
俺とディアは飛び出す準備に入る。いつ飛び出すか、お互いに確認はしていない。
ディアの独断で、頃合を見て合図を…
「GO！！」
出すだけだ。

ω

「ハァ…！！　ハァ…！！」
「フィル様…。はしたない…」
「誰のせいかな…！！」
服を肌蹴させ、凹凸の少ない体を顕にさせたまま、フィルは雪の上に仰向けに倒れている。
いや。倒されている。
具体的に言うと、フィルの太腿（ふとももの）上に、アルトがマウントポジシ

ョン。

「主としての威厳ゼロですねぇ…」

「アルトは従者としての行動がなってなぅにゃぁ！！」

倒れたまま眉を潜めて反論するフィル。そんな彼女の内腿を、アルトは指でなぞってみせた。

勿論、幼さの残る声が雪山に響く。

「なっ…！！　何すんのよアルト！！」

「フィル様、よーく聞いて下さい」

そのままの態勢で、アルトはフィルを見下ろした。

物凄いジト目で。

「フィル様、最近では新種のモンスターが発見され、巷でもソフトの争奪にてんやわんやです」

「……何の話？」

アルトは３ｒｄがどうのこうのと話し出したが、フィルは一向に分かっていない様子。

しかし、アルトはそのまま突き進む。

「いいですか？　もし新種のモンスターに、触手のある奴がいたらどうするんです？」

「どうって…」

「フィル様なんか、絡めとられて、挿し込まれて、あっぱっぱーで終わりですよ！？」
「どうしちゃったのアルト！？　あっぱっぱーって何！？」
慌てるフィル。しかし、アルトはフィルの両手を押さえつけると、
「あっぱっぱーって言うのはですね…」と顔を近づける。
「ちょ…！！　アルト…！！　近い！！　近いよ！！」
「誓い！？　誓いですか！？　私まだ心の準備が…」
「何言ってるのアルト！？　可笑しいよ！！　思考回路逝っちゃってるよ！！」
「ナニイってる！？　イっちゃってるんですかフィル様！？　そんな…！！　私…！！」
「待ってアルト！！　ちょ！！　ちがぅぁん…！！　違うって…ばぁ…！！」
「大丈夫です！！　問題ない！！」
「大丈夫じゃない！！　問題あぅぁぁああ！！」
方や戦闘。方や…。

ω

「零次！！　作戦通り、ルミーナの後ろを取れよ！！」
「分かってます！！」
まだ幻影の中にいるルミーナを、俺とディアは間合いを取って囲んだ。ルミーナから発せられる、禍禍しい熱気のせいで思うように

近づけない。
思うようにいかない時点で、既に作戦は崩壊に向かってる訳だ…。
「零次！！　ボサッとすんな！！」
「はい！！」
ディアの怒号で、俺はふと現実に舞い戻る。目の前には真黒な眼を光らせ、狂ったように力を使う黒龍。
油断なんて、今の俺の辞書に組み込めるはずも無く…。
そんな中、その黒い眼と俺の視線がふと合致してしまう。
「っ…！！」
「どうした零次！？」
俺は改めて、何と対峙しているのか思い知らされる。視線が合っただけで、何かが体を突き抜けるような感覚に陥った。
脇腹が痛む…。
「気を強く持て！！　持っていかれるぞ！！」
「分かってます…！！」
ディアが視界に入ってる事が、唯一の支えと言っても過言ではないだろう。俺一人なら、ここで死んでた。
ルミーナの気に当てられて、ふら付く俺を見かねてか、ディアは早めに作戦へと取り掛かる。
「零次！！　サポートするからしっかりやれよ！！　ルミーナを正

気に戻せば、お前の勝ちだと言ってもいい！！」
「…分かりました！！」
俺は気持ちを落ち着かせ、ルミーナに向かって突っ込む。しっかりと背後を捉える事が重要。それが作戦の要だ。
勿論、失敗なんて許されない。
「先生！！　お願いします！！」
「あぁ！！　解放（リヴァレイション）　２０％　轟波音域（ハウンドボイス）！！」
俺の合図と共に、ディアは解放（リヴァレイション）を宣言。轟龍にも引き劣らない、衝撃波を纏った雄叫びがルミーナの熱気を吹き飛ばす。
「今だ！！」
「はいっ！！」
ルミーナを包んでいた熱気が吹き飛び、衝撃波でよろけたその体に、俺は後ろから飛びついた。
Q・1
ディアの言う、正気に戻る最も手っ取り早い方法を答えよ。
（5点）
『むにゅ…』
A・1
胸を揉めばいい。

「いやぁっ！！」

俺は背後から抱きつくように、ルミーナに突撃。勢いもそのままに、ふっくらとした部分を鷲掴み。

普段なら美味しい役だが、今回ばかりは命懸け。

本当よ？

「成功っ！？」

多分、これでＯＫ。ルミーナ越しに、ディアがガッツポーズをしている所を見ると、どうやら作戦は成功したようだ。

俺も一安心。

「はなせぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

「へっ？」

掴んだままだった事に、俺は気が付いていなかった。

俺を力いっぱい振りほどいたルミーナは、誰であるかも確認せず、雪山に轟く声で解放（リヴァレイション）宣言。

「解放（リヴァレイション）　３０％　Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！」

それは紛れも無い、日本語訳は…核爆発。

『ドオオオオオオオオオオオ……ン！！』

雪山はどんどんと、その形を変えていくのです。
俺もどんどんと、その形を…。

ω

「全く、紛らわしいですねぇ…」
「アルトが勝手に解釈したんでしょ！？」
裸にローブという、新手のジャンルを開拓しそうな服装で、フィルはアルトに噛み付くように言った。
最早何があったかは、言う所ではないだろう。
「近いだの、逝くだの…」
「私が悪いの！？　ねぇ！？　アルト！？」
溜息混じりに残念な視線を向けてくるアルトに、フィルは涙目で抗議。
しかし。
「フィル様が悪いです」
「どうしてそうなる！？」
アルトは聞く耳を持たない。フィルはローブ一枚でアルトに駆け寄ると、細く白い腕をアルトに差し出した。
「……？　まだ足りないんですか？」
「違うよ！！」

フィルはサッと手を仕舞うと、アルトを一喝する。本気で。
「服返せ！！」
「ん？　あー、これですか？」
アルトは大事そうに抱えている服やら何やらを見て言った。勿論、上から下まで一式、アルトの手の内だ。
「それだよ！！　何で畳んで持ってるの！？　早く返して！！」
「えー…。可愛いですよ？　その格好」
アルトはギリギリヒップまで届く長さのローブを見て、諭すようにフィルにそう言った。
生足の絶対領域はおろか、全て曝け出しているという有様。
ルミーナのせいで気温が上がっているとはいえ、絶対に寒い。
「可愛いとかそんなんじゃない！！　可笑しいでしょ！？　雪山にこの格好！！」
「ローブは防寒の基本ですよ？」
「そうそう…ってそこじゃない！！　裸なのが可笑しいんだって！！」
「じゃあ私にも脱げと言うんですか！？」
「違うよ！！　脱がないでよ！！　ってか脱ぐな！！　服を着れば済むでしょ！！」
「着てるじゃないですかローブ！！」

「何で逆切れ！？　ってかローブ1枚じゃ寒いし、足が明らか防寒されてないよね！？」
「雪でも纏ってみたらどうです？」
「何そのファッション！？　いや、もう雪無いし！！　って何で溶けてるの！？」
「えっ、取ってきましょうか？」
「早く服を返せぇぇぇぇ！！」
夫婦漫才は、暫く続いたという…。

ω

「零次！！」
高温の爆風と恐ろしく尖った瓦礫が襲ってくる中、俺は何とかルミーナの解放をやり過ごす事が出来た。
まぁ…もっとも…。
「殺す…」
俺の倒れている目の前にいる、ルミーナに殺されればアウトだが…。
「どうして…！！　私の作戦は完璧だった筈…！！」
「アンタ本当は馬鹿だろ！？」
俺は奥で悶絶するディアに、少なからず殺意を覚えた。まぁ、そ

れを信じた俺も大馬鹿者だったわけだが…。

「殺す…」

「殺す殺すって…！！　それしか言えねぇのか…？」

俺は依然として真っ黒な眼で睨むルミーナを、挑発するような声をかける。しかし、返ってきた言葉は…。

「絶対殺す…」

パワーアップしていた…。

そしてそのまま、ルミーナは手を銃の形に組む。……あれ？　もしかして俺だと分かってないんじゃ？

ってか、助けないんですか！？　先生！？

「解放（リヴァレイション）……」

「っ…！！」

悶絶して動かないディア。岩陰でへばってると思われるアミュー。ヴァイス戦から寝っぱなしのクシャナ。

俺は色々考えた結果。

「死んだな」

死を覚悟した。

第２６話　叩くな、揉めば治る。　～伝えたい事～（後書き）

久しぶりにテンポのいい掛け合いが書けた気がする…ｗ

では次話で会いましょう。

第２７話　護る為に失うモノ　～究極の選択死～（前書き）

選択肢は２つだ

頼れる仲間、どちらかは生き残してやろう。

ほら、選びなよ。

大切な仲間をネ…

第２７話　護る為に失うモノ　～究極の選択死～

「……」
「……？」

解放…。その言葉を呟いた後、ルミーナの口からはそれ以上の言葉は出てこなかった。
俺に向けていた手を、ルミーナは力が抜けたようにダランと下げる。

しかし、攻撃は思いもよらぬ所から見舞われた。

「……ばかっ！！」

そう叫んだルミーナは、倒れている俺の顎に蹴りを決め込んだ。
無論、避ける事など不可能な俺は、体を海老反りにして全ての威力を受け取った。

顎、部位破壊のお知らせ。

「痛ぅ…！！」
「何で…！！　どうして…！！　どうして分かってくれないの…！！」

お前が何故、顎を壊したのかだったら、絶対に分からん。

俺は痛むというか…もう、どうなってるか分からない顎を押さえつつ、ルミーナを見上げた。
ルミーナの眼の色は、元に戻っている。そしてその眼には、涙が浮かんでいる。

まぁ…、ディアのガッツポーズが、遠くで再び見えたのは、最早スルーの領域だろう。

「何がだよ…！！」

俺は顎の件と、此方の話を聞いてくれないルミーナに苛立ちを隠せず、口調も自ずと強くなる。
いや、主に顎！！

しかし、そんな俺の口調さえも、ルミーナは払拭する勢いで声を荒らげた。

「アタシやフィル…、ディアやライガ…！！　どれだけの人が、アンタの…いや、改編者の存在を待ち侘びていたか…！！　どれだけの人が、この世界から厄災を無くす為に命を捨ててきたか…！！
アンタは知らないだろ！！」
「っ…」

ルミーナは頬に沢山の涙を伝わせながら、そう叫んだ。さっきまで奥でふざけていたディアも、真剣な表情で此方の様子を窺っている。

しかし、俺はそれについてルミーナに謝りたかった訳だが…。こうなると、何となく言い出しにくい…。

「アタシはこの１０年間！！　次の改編者の為に、この世界の為に、その為だけに力を磨いて北国の長にまでなったんだ！！　ディアも！！　ライガも！！　フィルも！！　生きる希望は、次の改編者が現れる事！！　なのに…！！　アンタは…！！」

ルミーナは物凄い剣幕と、制御の利かない涙声で捲くし立てた。最後は言葉に詰まり、それ以上言えないような、そんな感じだった。

「レイなんかの肩持たないでよぅ…！！　このままじゃ、１０年前と同じになっちゃう…！！」

「……」

ルミーナは力尽きたように、その場に崩れ落ちた。彼女のすすり泣きが、静まり返った雪山に、少し大きく聞こえた。

でも俺は、なんて言葉をかければいいのか分からない。

「分かった」とか、「力になる」とか、そんなんじゃない気がする。

「えっと…」

場繋ぎの為に漏らす言葉も、無音の雪山ではどこか空しい。

だから取り合えず、俺の思ってる事をぶつけてみる。

精一杯に。

「ルミーナ…？」

「……ぅん？」

ルミーナの目には未だ、涙が残っていた。泣き過ぎで目は赤くなっている。

「あの…。……ごめん」

「えっ…」

ルミーナは少し驚いたような顔を見せる。

「その…、俺よく分かってなくてさ…。無責任な事ばっかり言って…」

「……」

ルミーナからは言葉は返ってこない。でも、何となく俺はその方が良かった。

「でも、やっぱり今も良く分かんなくてさ…」

「……」

「何か…何が本当で、何が嘘なのかとか…」

「……」

「あー…。俺も何が言いたいのか、分からなくなってきた…」

「……ぅん」

ルミーナは消えそうな声で、小さく頷いた。俺の言葉は、何も解決しない、不毛な言葉だったにもかかわらず…。

「それで…？」

「ん？」

そんな俺に、ルミーナは一言そう言った。やっぱり結論を求められているんだろう。
このまま西国に戻ってしまうのか、それとも新しい選択肢を差し出すのか。

「……そうだな」
「返答次第では、アタシはこの場で死ぬ」

ルミーナはそう言うと、俺の目の前で自分の額に手を当てた。

「お前…」
「アタシはもう戦いたくない…。来るかどうかも分からない人を、待ちたくない…。そして生き続ける事で、何も失いたくない…」

そのまま俺を見つめると、「零次の答えは…？」と急かすように呟いた。

「……」

しかし、俺は何を躊躇っているのか、言葉に詰まる。

「……良いよ。どんな答えでも、私は君を恨まない」

ルミーナは優しい笑顔を向けて言う。それはまるで、死に際にかける最後の言葉。

そして俺は気付く。何かを躊躇っているのではなく、何も選択肢を持っていないことに。

「俺は…」

だからこそ、全てを吹っ切る事が出切る！！

俺は徐に立ち上がると、大声で言ってのける。

「俺は西国には就かない！！」

『バスン……！！』

俺の言葉とほぼ同時に、まるで空気の抜けるような大きな音がした。何があったかは分からないが、どうしてか…。

「ルミーナ…？」

俺の足元には大量の鮮血が、まるでバケツをひっくり返したかのように広がっている。そして、ルミーナはそこに沈んでいた。

まさか…、間違った選択だったのか…！？

「零次！！　逃げろ！！」

そんな中、何処からかディアの声がした。それも本当に危うい事を伝えるような、危機感に満ちた声。

しかし、俺は目の前に倒れるルミーナの姿が信じられなくて、体が動かない。

「おやぁ…？　随分遅いなぁ…と思って見に来てみたら…。何、油を売ってるのかなぁ？」

「！？」

俺はその声に背筋が凍った。聞き覚えのある…、幼い声。

「迎えに来たよ？　零次君」

俺は恐る恐る後ろを振り返る。そこには紛れも無い、レイの姿があった。

「あー。やっぱり、北国の化け物じゃん。危ないから殺して正解だね」

「……」

俺の横に来るなり、レイは血の海に沈むルミーナを見てそう言った。

成る程…。選択は、この世界に来た時点で間違ってた訳か…。

「零次くん…ぁっ！！」

俺は何も考えず、咄嗟にレイの胸座を掴んだ。そして一発…。

『パシッ…』

見舞うつもりだった。

思い切り、何の躊躇いも無く力を込めて奮った筈の拳は、レイに片腕で止められてしまう。

俺は慌ててレイを離し、２・３歩…いや、５歩、６歩と距離を取る。

「随分、腕白になったねぇ？　どしたの？」
「レイ様こそ、随分お体の調子が良いんじゃないですか？」
冷静に切り替えしたが、俺の腸（はらわた）はメルトダウン状態だ。間違いない、さっきの一撃。
コイツのせいでルミーナが…！！
「元から体調は万全だよ？　それよりどうしたの？　拳なんか作っちゃって？」
「えぇ…。ちょっと気に食わない事がありましてね」
俺はあくまで冷静に対応する。間違いなく、真正面からぶつかったら死ぬ。
「あっ、若しかしてこの化け物？　いやぁ…中々姿を現さないから、駆除に困ってたんだよねぇ…。その点、今日は収穫だよ♪」
「っ…！！」
無意識に、俺の中の何かが外れたような、そんな気がした。
レイは俺にゆっくりと近寄ってくる。
「まぁ、ドドブランコも無事に狩ったみたいだし、今日は帰ろうか？」
俺の目の前まで来て、レイは顔を覗き込んで言った。黒幕とは到底思えない、あどけなさの残る少女の笑顔。

しかし、今の俺にはそんな事どうでも良かった。

「そうですね…。じゃあ、お一人でどうぞ…」

「うん？　零次君も一緒に…」

そう言って差し出された、包帯巻きの細い腕。しかし、それは俺に届く事無く宙を舞った。

「っあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

雪山…最早雪は無いが、そんな雪山にレイの悲鳴が轟く。

レイの腕は肘から上を残し、跡形も無く吹き飛んだ。レイ越しに見えるは…。

「サンキュー、ルミーナ」

「任せて！！　あんなに高らかに宣言されたら、未だ死ねないからね」

そこに佇むのは、紛れも無いルミーナ。傷一つ無い上に、格好もきちんと燕尾服にシルクハット。

レイはそれを見て、溢れ出る血を抑えながら笑う。

「ぁはっ…！！　成る程ねぇ！！　改編しちゃったのか…！！　化け物の死を…！！」

「どうしても、死なれちゃ困るんでね」

改編。物語を作り変える能力。俺に託された、最後の砦。

ディア曰く、この力は未来を変える力らしい。だから過去は変え

られない。今の改編は、『ルミーナは死んでなかった』という物語にしただけ。ルミーナを過去に戻って生き返らせたわけじゃない。逆転の発想って奴だ。

俺はレイを横を抜き、サッとルミーナの横に回る。そして、追撃をルミーナに要求する。

でも、それが甘かった。

「領域（テリトリー）　不死老山！！」

ルミーナの攻撃より早く、領域を展開されてしまった。

逃げればよかった…そう思った。

「腕の代償。高くつくよ？」

領域の詠唱で現れたのは、刺々しい切り立った山。足元に踏み場が見えないほど、針のような石が伸びる地面が顔を覗かせている。

唯一、そんな地形じゃないのは、レイと俺とルミーナの周り位。

「この領域はね、一種の無敵空間なんだよ」

「説明、ご苦労様」

ルミーナは悠長に喋り出すレイに向けて、解放し核爆弾（リヴァレイション）を撃ち込んだ。

間違いなく、手応えはあった。でも、何か可笑しい…。

「無敵空間だって言ってるじゃんか」
「なっ！？」
土煙が晴れ、見えてきた人影に、俺もルミーナも目を疑った。
完全に、怪我が回復している…！？
「分かりやすく説明してあげるからさ。ちょっと聞いてなよ？」
「……」
その言葉に、ルミーナは手を下ろす。
それを見て、「物分りが良いね」とレイは笑った。
「簡単に言うよ？　この空間では、私は攻撃を食らえば回復する。君たちは攻撃を食らえば死ぬ。理解できた？」
「回復…！？」
「繰り返すのは良い事だね。そう。回復するのだー♪」
「ふざけるな…！！」
満面の笑みを向けるレイに、ルミーナは鎧龍熱線（グラビーム）を見舞った。
「だ・か・ら…」
レイは向かってくる熱線を避けようともせず、溜息を漏らした。
「利かないっての！！」
熱線はレイの前で消えてなくなってしまった。そして、そのエネ

ルギーの塊は、レイへと還元されていく。

ルミーナは苦い顔を俺に向けた。

「不味いな…」

「零次…」

間違いなく、このままじゃ俺は連れ戻されて、ルミーナは殺される。

それなら、選択肢は一つだ。

「レイ様」

「うん？　どしたの零次君？」

俺は理不尽すぎる提案を向ける。

「俺は戻るんで、ルミーナだけは助けて下さい」

「ふん？　無理無理。それじゃ、メリット無いでしょ？」

レイはつまらなそうに顔を顰めた。そりゃそうだ。腕飛ばされて、散々楯突かれて、挙句助けてじゃ話にならない。

しかし、レイはその後少し考えて、何か閃いたように言った。

「じゃあ、フィル殺してよ」

「えっ…」

レイはニコニコして、そう言った。確かにそう言ったんだ。

「君の誠意が見たいからさ、ちょっと殺してきてよ？」
「誠意…？」
「西国に就くんだから、それ相応のけじめが欲しいって言ってるんだよ」

レイはそう言うと、領域を解いた。その瞬間に、ルミーナは反撃に打って出ようとしたが…。

しかし、それも敵わない。

「動くな…」

ルミーナの喉元に突きつけられる鋭利な太刀。岩陰から飛び出してきたアミューが、完全にルミーナの動きを封じた。

アミューはこうなる事を、知っていたんだろうか？

究極の選択。

「さぁ、フィルを殺して死体でも持ってきたら、化け物は助けたげる」
「……」
「いいの？　殺しちゃうよ？」
「……」

俺はトボトボと歩き出した。フィル達の方向へと。

第27話　護る為に失うモノ　～究極の選択死～（後書き）

どうも、最近テストで、小説内容の乱雑な2乗ですw

如何せん、感想が無いのが、読者がどう思ってるのか分からないので困るw

いいんですよ？

好きにやってもw

でも良ければ…（チラッ

第２８話　改編の罠　～幸福・ありふれた時間～（前書き）

ありふれた今、この時が一番幸せ？

それは本心？

いつも心のどこかで、非日常を願うアナタがいるでしょう？

普通じゃ物足りないアナタが。

でも、自分に危害が。

自分が損をする、非日常なら？

アナタは全力で回避しようとする。

どうして？

ソレガアナタノ望ンダ事ナノニ！！

第２８話　改編の罠　～幸福・ありふれた時間～

Q・アナタの前には、ギロチンに掛けられている者が２人います。そしてアナタは刃を支えるロープを、両腕共に一本ずつ握ってるわけです。　勿論、どちらともアナタの大切な人です。　片方を助ける為には、もう片方のギロチンのロープを離さなければなりません。　当然離せば、片方は死にます。　さて？　どちらを助けますか？

A・　……。

その答えは、まだ出ていない。

俺は身を切るような風の吹き荒む中を、ただただ何も考えずに歩いている。

多分、その答えはフィルに会っても出ないままだろう。

「……ハァ」

吐いた息が白くなって、何も無かったように消えていく。今の俺には、何となくそれが虚しく思えた。

（フッ……）

「えっ…！？」

しかし、感傷に浸っている暇は無いようだ。
突然の如く、足元から雪山の風景が、気温が消えていく。
「っ…！！　罠かっ！？」
そんな俺の声は、まだ雪山の空間に残っているだろうか？
あっという間に、そこは何も無い真っ暗な空間に変わってしまった。
「何だ…此処」
蔓延る空気も、湿っぽいというか…生暖かいと言うか…。
「もう大概の事じゃ、驚かないつもりだったんだが…」
流石に、雪山から考えてもここは異空間。いくら常識の通用しない世界でも、突然の空間移動はビビる。
「やぁ。零次君」
「……」
後ろから、俺を呼ぶ声がした。しかし、俺は直には振り向かなかった。
「おや？　どーして振り向かないの？」
「……」
何も可笑しな所の無い、普通の女の子の声。でも何処か、懐かしいその声。

「あっ、そうだね。突然じゃ駄目だよね。挨拶が必要かな」
「…いや。構わない」
淡々と一人で話を走らせる少女。
俺は後ろ手に聞こえるその声を、徐に遮った。
「久方ぶり…だろ？」
俺の声に、少女は「うん！！」と元気な返事を返す。
「今更、どういう了見だ？」
「了見だなんて、物騒だねぇ…。折角忠告しに来たのに…」
俺は「忠告？」と振り向き様に復唱する。そこに居るのは、レイと同い年位の少女。
ローブで顔を覆っているせいで、見えているのは口元だけ。
「そう。忠告」
少女はクスッと笑う。その笑みは、まるで何かを楽しんでいるよう。
「改編の能力。あんまり使う事は勧めないよ」
「……どういうことだ」
折角、この世界で見出した未来への希望。その唯一の鍵である『改編』を、少女は使うなと言う。

「その能力は、この世界を破滅させる為のモノ」
「面白い冗談だな」
「そう聞こえる？」
少女は会話を楽しんでいる。俺の気も知らずに。
「使っていくうちに、本当の怖さを知るだろうけど、それじゃ今までのプレーヤーと変わらないからね。忠告。聞いておくべきだよ？」
「……」
俺はどういう返答を返せば良いものかと迷ったが、少女は「素直で宜しい」と、勝手に解釈して進めてしまった。
ホント勝手な奴…。
「んで？　一体何なんだ？」
俺はその『勝手』に付き合う。
「代償だよ」
「代償？」
少女は「そう」と口元を小さく緩める。
「良い薬に副作用があるのと一緒。良い能力には副作用がある」
「副作用ねぇ…」
一定の距離を、俺たちは詰めずにいる。
「そう。それはとても軽くて、とても重い副作用」
「矛盾甚だしいな…」

少女は俺の言葉に、もう反応さえ示さない。
「アナタとの記憶。それが消える」
「俺との記憶？　どういう事だ？」

「簡単ナ事」と。
彼女の、その口から発せられたのは…そう。

まるで金属音。

「改編ヲ使ウ度、アナタノ仲間ガコノ世界デ培ッタ、アナタトノ記憶。ソレガ消エテ無クナル」
「……成る程な」

「ドウ？　ソレデモ、アナタハ、神ノヨウナ、ソノ能力ニ溺レル？」
「……一つ聞かせてくれ」

少女は不気味に、ニィっと歯を見せて笑う。

俺はそれを、了承の印と受け取った。

「俺が、この物語を『改編』でハッピーエンドに向かわせたら？」
「……ケケケケケケケケケケ」

少女は壊れた玩具のように、狂ったように笑う。

「コノ物語をハッピーエンド！？　ケケケッ、君にデキルのかィ！

？　ゲームオーバー寸前の君ガぁ！？」
「質問に答えろ」
フードの下からチラリと覗いた少女の目。瞳孔が完全に開ききった、モンスターの目。
「そンな大きナ改編、叶ゥと思ってるのカぃ？　出来たトしても、君ノ存在をこの物語自体ガ、忘れ去るダろぅネ！！」
「信用ならねぇな」
俺は少女を睨みつけた。正直、飛び道具があれば殺す気は満々だ。しかし、少女は怯まない。寧ろ酷くなる。口角を吊り上げ、三日月のようになった口で笑う。
「君の紡グ物語は、まるデ水月を拾ゥようナ話だねェ！！　夢物語さァ！！　掲げル理想ノ大きさガ、自らの首ヲ絞めル！！　人間はナンて愚カなんだ！！」
「……悲しいな」
不意に出た言葉。今まで笑っていた少女は、その俺の一言にピタッと笑いを止める。
「どうィゥ事…？」
「お前には、一生かかっても分かんねぇよ」
少女は下唇を噛む。人間に言葉を返されて、余程悔しいのか。
「下等生物め…！！」
「……」

俺はそれ以上の言葉を返さない。安い挑発に乗っているほど、時間があるわけでもない。

「……精々足掻くといい。私の創ったこの世界で！！」

「おう。楽しませてもらうぜ。フィル」

再び、目の前に現れたのは一面の銀世界。俺はもう迷わない。

「あっ！！　零次！！　見ちゃ駄目ーっ！！」

「へっ？」

次の瞬間、俺の視界は近年稀に見る『楽園』と化した。

白銀のステージ上で、顔を真っ赤にして、慌てて可愛らしいパンツを穿くフィル。

微笑ましそうに見るアルト。

「ご馳走様でしたーっ！！」

「ちょ！！　ばかっ！！　こっち来るな零次！！」

全速力でフィルに飛びつく。

つもりだったんです。

『ズドォォォオオオオオン！！』

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「零次様。許しませんよ？」

突如として振り下ろされたハンマーによって、俺の野望は脆くも打ち砕かれた。アルトがニッコリと、俺に微笑みかける。

危うく、背骨を打ち砕かれるところだった…。アブネェ…。

「しかし俺はパンツに見えたスジを見逃さなk」

「氏ね！！　誌ね！！　士ね！！　死ねぇぇぇぇぇ！！」

うつ伏せで倒れこみ、顔だけ上げていた俺。

その顔に、容赦なく打ち込まれるフィルの足蹴り。

「我々の業界では、ごふぉ！！」

「皆最近変だよ！！　その上何だか、最近私の扱い酷い！！」

願わくばいつまでも、こんな感じで楽しく居たかった。

第２８話　改編の罠　～幸福・ありふれた時間～（後書き）

お久しぶりでうはー。

２乗です。

忙しすぎて、話数分割もしてる暇がないです＞＜

気長に気長に…。

あっ、見捨てず待ってくれていた方！！

本当にありがとうございます！！

これからも宜しくです！！

第２９話　表層と深層　～２つの顔～（前書き）

いつだって運命は、アナタの願う方向と逆をゆこうとする。

それは必然的運命であり、この世界で当たり前の理。

最初から物語の行く末は決まっているの。

それをアナタがどう変えるか…。

ねぇ…？

私と遊ぼうヨ？

アナタが一つでも道を間違えて、悩み、悶え、絶望するその時まで…！！

私はアナタを離さない…。

第２９話　表層と深層　～２つの顔～

「どうして縞パンじゃないのか？」
「…零次、それ以上言うと本当に怒るよ」
取り合えず召す物を召したフィルは、俺の冗談さえも流せないほど気が立っている。
と言うのは、勿論の事アルトのせいである。断言する。
「フィル様を、至って自然に脱がす方法を考えなくては…」
「……」
アルトの呟きが、聞こえているのかどうなのか。フィルは少し難しい顔で下唇を噛む。
俺は未だ、話を切り出せずにいた。
「零次」
「ん？」
しかし、俺が話を切り出す必要は無くなるかも知れない。
「私、実は…」
「あー。知ってる」

深刻そうな顔で話を切り出したフィル。しかし、その用件を聞く前に俺は言葉を遮った。

「全部聞いた。ディア先生から」

その俺の言葉に、フィルは一瞬驚いた。そう、一瞬。

「そっか」

「あぁ」

それが分かると、フィルはくるりと俺に背を向ける。

「で？」

そして背を向けたまま、俺が聞くに聞き出せない事を、さらりと言ってのけた。

「私を殺しに来た？」

「っ……！？」

俺は見開かれた目は、その小さな背中を捕えて離さない。

「それともルミーナを見捨てて、私たちと一緒に逃げに来た？」

「……」

フィルは意地悪そうに、クスッと笑う。

成る程。全部分かってるって事か。

何もかも。

全部。

「一つ聞いていいか？」

「何？」

俺は隣でワナワナと震え、状況の飲み込めていないアルトを他所に、振り向かない悪魔に言葉をぶつける。

「パチン」

悪魔は俺が質問をぶつける前に、指を一つ鳴らした。

すると、アルトがまるで糸が切れたかのように、ペタンとへたり込む。どうやら気を失ったようだ。

「成る程な…。大体分かった」

「そう？」

それでも、俺は聞かずにいられない。

「お前は【２人】の内のどっちだ？」

「……」

その言葉の意味を知るのは、俺とフィルだけだ。

これは誰にも言えない、物語の根幹。

「……ケケッ。アンタの嫌ィな方かナ？」

「ふぅん…。もうこの世界への侵入まで出来るのか？」

俺は尚も、悪魔に話し掛ける。

「私が表に出テ来れルノは、物語ノ終わりガ近づく時ダヶ…」

「終わり？」

含んだような笑いを交え、悪魔はそう言った。『終わり』の言葉を聞いて、流石の俺も動揺する。

「簡単ダよ…。アンタの選択一つデ、この物語は幕を引く。まさにその瞬間」

「ＢＡＤ・ＥＮＤか」

「ＢＡＤ？」

悪魔は不敵に笑う。

「最高の幕引きだよ。誰もが血を流し！！　奪い合い！！　殺しあう！！」

「悪趣味だな」

俺が言葉を返したと同時に、悪魔は軽やかに廻り、その冷たい視線を俺へと向ける。

殺意に満ちた、猟奇的な目。

「……ケケ。アンタが私を殺せバ、物語は終わリダ」

「悪いがそのつもりはネェよ」

俺はゆっくりと目を伏せる。

悪魔は俺の見出した答えに驚いたが、直にそれを嘲笑へと変えた。
「ケケッ…！！　そレがアンタの答えカィ！？」
「……あぁ」
俺は噛み締めるように、己の選択を正当化するように、何も考えず、ゆっくりと視界を取り戻す。
悪魔は、一歩も動かずにいる。
「神にデもなッタつもりカィ？」
「……」
悪魔は最後に、かすれた声で言葉を残す。
「後悔シナょ…」
俺は何も言わずに、またゆっくりと目を閉じる。
そして今一度、己の出した答えを噛み締める。
「ルミーナ…。悪い…」
これから起こる事が、俺の出した答えであり、新しく物語として紡がれる改編された運命。
何もかもが、俺の考え一つで決まった事。
「フィル、起きろ」

「んぇ…？　あれ？　零次…」

俺は重たい気分を払拭できないまま、倒れているフィルを起こす。

今のフィルは表の存在。

「あー…。変な事しようとしたでしょ？」

「どうしてそうなる…」

起きしなからその言い草では、此方の身が持たない…。俺は尚下がるテンションに鞭を打つ。

少しでも気分を変えたい。

「絶対何かしようとしたでしょ！！」

「じゃあ、おっぱい揉ませて下さい」

俺はそう言ってスッと胸に手を伸ばす。

……あれ？　反応がない。

「フィルさーん？」

「零次なら…」

あるぇ？

「フィル…さん？」
「アルトも寝てるし…、零次がどうしてもって言うなら…」

あるぇ？

「えっ…と。何て言ったかご理解できて？」
「そりゃ…、私じゃ…、ちっちゃいかも知れないケド…」

あるぇ～？

「零次…。良かったら…」

俺は呆気に取られて、完全に上の空。心ここにあらず。

何故なら、こんな事改編した物語の中に、組み込んだ覚えが無いから…。ホントに！！

そんな中、フィルは徐にローブを脱ぎ、ズボンのホックを外す。

「私のココ……、零次専用に作り変えても……」
「……っ！！」

俺の目の前の光景は、ＫＥＮＺＥＮな高校生の理性を崩壊させるには、十分すぎるシチュエーション。

フィルはズボンを下ろし、インナーを脱ぎ捨て、薄水色の可愛い下着を顕にさせる。
不味い…！！　このままでは、俺の２４０ｍｍキャノン砲が唸る！！

そしてアウトの境界線が唸る！！　果たして何処までがセーフなのか！？　セウトはセーフにカウントします！！

「あぅ…零次。……嫌？」
「あっ…、その…」

駄目！！　駄目だぞ俺！！　パイルダーオンしたら、間違いなくサイトからお灸を据えられる！！

それもきっついのを！！

「零次…。何だか…、体が熱くなってきたよぉ…」
「……っ～～～～～！！」

俺の脳内で、天使と悪魔が戦争を起こしている。天使：悪魔が１：５位の割合で。

天使が叫ぶ。「ここでヤるべきではない！！」と。

悪魔が叫ぶ。「かかって来いやぁ！！　都条例の粕がぁ！！」と。

「れいじぃ…。変な気分になって来たぁ…。ジンジンするよぅ…」
「ぁ～～～～～～っ！！」

天子が叫ぶ。「止めておけ！！　作者の罠だ！！」と。

悪魔が叫ぶ。「俺のドリルが天を突く！！　ならばお前のムスコは何を突く！！」と。

「んぁ…！！　れい…じぃ…！！　ココ…、フィルのココ弄って…」

「ん～～～～～～～っ！！」

俺の頭の中の戦争は、いよいよ激しさを増す。

天使が叫ぶ。「それはアウフだ！！　８割アウトだ！！　止めろおぉぉ！！」と。

悪魔が叫ぶ。「これで物語りもハッピーエンドだ！！　さぁ！！気持ちよくしてやれ！！」と。

「あぁん…！！　えっちな気持ちで、頭おかしくなっちゃうよぉ…」

「イ～～～～～～～～ッッッ！！！！！」

戦争もいよいよ終盤、スイッチ一つで巨大化する俺のキャノン砲が疼く！！

圧倒的劣勢な天使が叫ぶ。「テメェ、孕んだりし…！！」

その瞬間、彼は言葉を言い終える事無く眠りについた。また一人の尊い犠牲が…戦争によってもたらされる。

圧倒的優勢な悪魔が叫ぶ。「何度も何度もブッ込め！！　うまくヤりゃ、双子になるかも知れねぇ！！」

娘が…２人！？　※娘と決まった訳ではありません。

「れぃじ…ぃ…。私とシよぅ……？」
「フィル…」
俺は己の理性との戦いに敗れ…。
「アウトじゃ！！　ボケがぁ！！」
『カッシャァァァ……ン！！！！』
降り注いだのは紛れもない雷。それは綺麗に俺の頭を吹き飛ばした。
フィルは色々なモノが治まらない中、涙目で声の方を見つめた。
「おどれらアホか！！　こんな事してるヒマあったら、厄災止める事に尽力せぇや！！」
「えっ…！！　アンタは…！！」
フィルは目を丸くする。
「よう嬢ちゃん。久方ぶり・・・って、エライ格好やのぅ…」
「ふあああ！！　ちがっ！！」
スタスタと早足に歩いてきたのは、『黒き雷』ことヴァイス。体は完全に回復しているようだ。
「って！！　そうじゃない！！　どうすんの零次！？」
「ん？　うわっ…酷っ！！」

「アンタが殺ったんでしょうが！！」

地面に転がるのは、こんがりと美味しそうに焼かれた焼死体。

ヴァイスは「叫ぶなや…」と鬱陶しそうに言うと、絶対に唱えてはいけない禁術を詠唱する。

「秘奥義！！　『何かぐっちゃぐちゃになったけど、次のコマでは何もかも治ってしまっている不思議！！』」

「最低だー！！」

俺はまるで巻き戻しのように再生する。尋常じゃない速さで。

「俺は何を…！！」

「ょぅロリコン」

起きしなに今度はロリコン扱い。これじゃ身がもたない…。

俺の無事なんかどうでも良いように、フィルはヴァイスに突っかかる。

「どうしてアンタがココにいるの！！」

「うわっ！！　何を突然、叫びようかと思うたら…」

ヴァイスは小さく溜息を漏らす。

「少し誤解を解きにな」

新たな仲間は、結構どうでもいい感じで増える。

第２９話　表層と深層　～２つの顔～（後書き）

あるぇ？

まぁ、セフセフ。

そもそも１話分作るときに、何も考えずガンガン作るから、全部アドリブ。

流石俺！！

では、皆さん！！

次話でお会いできることをｗ

第３０話　犠牲　～変わりゆく物語～

「誤解…？」
「そーや。アンタ等、どーせ私の事、敵や思うとるやろ？」
ヴァイスは困ったように顔を顰めて言った。当然ながら俺もフィルも、顔を見合わせて頷く。
そりゃ、あんな自然の脅威で頭を吹き飛ばされて、笑顔で仲間宣言は難しい…。
「ほれ見ぃ…。おもきし誤解しとるわ…」
「って言われてもねぇ…？」
フィルはヴァイスをまじまじと見つめて、溜息混じりに言葉を返す。
「何や何や…。つれんのぅ嬢ちゃんは…」
「もう台詞だけ見たら、おっさんだよね…。アンタ…」
フィルがそう言ったのを聞いて、俺は年齢について聊(いささ)か疑問を持つが、女性に年齢を聞くのは無粋だ。
例え皆が数千歳でも、聞かぬが仏。知らぬが仏。
「まぁ、何でもええわ」

「ええんかい…って、はうぅ…！！」

フィルは咄嗟に口を抑えた。

ヴァイスは「別に恥ずかしい事やないやろ…」と、少しムッとした表情になる。

俺は真っ赤になるフィルを慰めつつ、ヴァイスに事を尋ねた。

「それで？　今度は何用？」

「警戒心解けんやっちゃのう…」

ヴァイスは棘の消えない俺の言葉に、多少なりとも不満そうな顔を見せたが、「ええわい」と割り切ってしまった。

譲歩は良い事。

「零次、西国には就かんのやろ？」

「……随分、情報が早いな」

からかうような口調で話を切り出すヴァイスを、俺は怪訝そうな顔で見つめた。

依然として、警戒心は解けない。

「まぁ、合成獣（キメラ）は他のキメラの位置と行動、んで記憶を共用、把握出来るようにつくられとるからな。」

「えっ…」

俺は小さく言葉を漏らした。

「お前、合成獣(キメラ)なのか…！？」
「今更かいな」
俺の質問に、ヴァイスはそれ以上言わなかった。
只少し、表情が硬くなった気がした。
「ってことは…」
たしかフィルは合成獣(キメラ)……。まさか、あれもこれも筒抜けなのではないか…！？
不味い…。生きていけない位恥ずかしい。
俺はフィルをチラッと見る。
「まさか…」
「ん？　あぁ。私は大丈夫だよ。正式Ｎｏ(ナンバー)を貰ってないから」
俺が質問する前に、フィルはまるで息をするように、自然な感じでサラッと言葉を紡いだ。
しかし、俺は良く分かっていない。
「Ｎｏ(ナンバー)？」
俺は新たに出てきた業界用語にうんざりする。
異世界って、こういうの多いよね…。やだやだ…。
「そこを疑問系にされても…。私持ってないし…」

フィルは少し困ったような表情を見せる。俺はその返答に、思わず「えー…」と不満気な声を漏らした。

するとフィルは着たばかりの服に、徐に服に手をかける。

「ほら…！！」

「！？」

ガッと服を肌蹴させ、小さな胸を顕にするフィル。今日だけで、お前は何度露出すれば気が済むんですか？

しかし、驚く俺に聞く余地は無い。

まじまじと見る。

「本当ならココに、Ｎｏ（ナンバー）っていう刻印が施されるの。合成獣（キメラ）の製造番号みたいな…。それが他の合成獣（キメラ）と、互いに交信するツールみたいな働きをするの」

「へぇ……」

俺は取り敢えず、胸凝視。

『ガッ……！！』

しかし、俺の目から火花が飛ぶ位、重い鉄槌が後頭部を襲った。

「……一体！！　何をしてるんです…！！」

「おぅ。起きたんか、メイドの」

雪が殆ど溶け、土が露出した地面に俺の体が、頭が、歪み無い食

い込み方をみせる。
そこには、鬼のような形相のアルト。
仁王立ちがここまで似合うメイドを、俺はきっと彼女しか知らない。
「違…。違うんだアル…」
「まだ息がありましたか」
空かさず止めを刺そうとしたアルトを、ヴァイスとフィルは慌てて止めた。
最近俺の扱いが、酷過ぎる気がしてならない…。

ω

「なるほど…。そういう事でしたか」
「分かって貰えたようで、嬉しいよ…」
言葉とは裏腹に、尚も汚い物を見るような目で俺を見るアルト。
納得はしたようだが、一向に立ち位置が直らない不思議。
俺はボロボロの体に鞭打って、ヴァイスに話を振り戻した。
「で…？」
「『で…？』って…荒いフリやのぉ…」
荒いも何も、フィル、アルト、そして俺の間とヴァイスの間に、

少なからず刺々しい空気が流れているのは事実。
信用には程遠い。
しかし、そんな空気をも構わず、ヴァイスは直球だった。
「時間、無いんやろ？」
「……」
確信を突かれて、俺は言葉に詰まる。
しかし、運命通りだ。
「手伝ったるわ。老山の討伐」
「手伝う…？」
俺は首を傾げる。
「西国の肩持つようなら消さなあかんかったけど、こっち側なら老山討伐の同盟軍や。手ェ貸すっちゅうとんねん」
「へぇ…、信じるぞ？」
計画どおり…。これで今のところ、敵は老山だけだな…。
「ちょっと零次…」
「ん？」
俺がヴァイスと同盟関係を結ぶのを、傍で見ていたフィルが口を挟んだ。
「信用できるの？」

「……多分な」
「多分って…」
「まぁ、大丈夫だろうよ」

信用できるも糞も、何の問題も無い。もう、俺の【改編】は始まってる。

「ほな、決まりやな」
「おう」

俺は老山が差し迫った選択を持って、再びあの場へ戻る。
後悔はしない。していない。

世界を守るのに。
沢山の人を守るのに。

犠牲はつき物だ。

ω

「んあー。なっかなか戻ってこないね。零次君」
「……」
「捨てられちゃってたりして？」
「零次はそんな奴じゃない…！！」

首に刀を突きつけられた状態で、一体どれだけの時が経ったろうか？

「ホントに？　言い切れる？」
「うるさい…！！　黙れ…！！」

少しでも声を荒らげようとすると、霞龍の握る刀が首にピタッと接する。
そのまま刃を引けば、間違い無く首は胴から離れるだろう。

レイはその光景を見て、クスッと小さく笑った。

「北国で最強と呼ばれ、表情一つ変えず人を数多（あまた）殺し、その名を全土に知らしめるようなアナタが、人間一人でこうも熱くなる？」
「っ…！！」

不意に飛び掛ろうとしたルミーナを、アミューは押さえ込み地面に叩きつけた。そしてそのまま身動きが取れないよう、背中を捕え固める。
刀は今度、うなじに当てられた。

「ありゃー、怖い怖い」
「テメェ…！！」

レイはルミーナの顔の前にしゃがむと、よしよしと頭を撫でた。
手ごと丸め込まれたルミーナは反撃どころか、顔を上げることすらままならない。

「こんな事なら、やっぱりあの時殺しておくべきだったか？」
「…！？」

その場が、空気がまるで地響きのように揺れた。大山鳴動、鼠一匹どうこうでは済まない地鳴りだ。
それと同時に、レイから放たれる気迫と殺意。
そして全てが、運命どおり。

ω

「悪いなルミーナ」
俺は道中、小さく一声漏らした。
誰にも聞こえてはいないだろう。
「さよならだ」
俺は、彼女の夢を、

叶えられなかった―

第３０話　犠牲　～変わりゆく物語～（後書き）

長らくサーセンｗ

でも、このエピソード１は、次で終わりますｗ

次はエピソード２で会いましょう。

どうしてかも、次話でｗ

第３１話　決死　～残酷な運命・刻まれぬ終焉～

平和とは、こういう事だと。こういう事なんだと。悟った。

ω

「待たせたな」
「……ふーん。来たんだ」

再び舞い戻ったこの決戦の地。そこには小さな老山が、可愛らしい顔に似合わない眼光で此方を睨んでいた。

地が、空が、鳴いている。

「まぁ、逃げる選択肢は無かったぜ？」
「臆病者ではないけど、それは薄情者だな零次君」
「逃げたって薄情だろ？」
「それはそうだ」

まるで既成の台詞を並べるように、お互い淡々と話す。それはもう、劇のワンシーン。
付け加えるなら『悲劇』。
「それで？」

レイは不敵な笑みを浮かべる。
「選択肢は選んだの？」
「選んだから、ここにいるんだが？」
レイは、俺の答えを聞いて益々笑みを零す。
「ふふっ…そりゃ違いない！！　それで！？　どーすんのさ！？」
「まぁ、待ちな」
俺は一言、そう言って座り込んだ。
それを見て、レイは少しムッとした表情を見せる。
「何？　随分余裕だね」
「まぁ、差し詰め勝者の余裕かな」
俺はそう言って笑ってみせる。
レイは「あっそ」と背中を向けた。
「こっちには人質がいるの、分かってる？」
「分かってるさ、焦んなよ」
俺はあくまで余裕の構えを崩さない。
これは絶対に、外せない。
「何を企んでるの？」
「別に？」

レイは怪訝そうな顔で此方を見る。その距離は２０ｍちょい位か。
まだ、もう少し足りない。

「零次…？」
「ん？」
「一体どういうつもり？」
「まぁ、気にすんなって」

フィルが徐に近寄ってきて声をかけてきた。
これだけは、どうしても言えない。

「それより、皆を連れてもう少し離れてくれるか？」
「えっ…？」
「出来れば２~３０ｍくらい」
「う…うん。分かった…」

フィルは不安気だったが、余計な心配は掛けられない。
これが終焉への、最後の力だ。

「で？　答え。もうそろそろ聞かせてくれない？」
「おいおい、両人に聞こえる範囲の声では言いたくないな」

布石だ。

「気遣い？」
「女の子には、な」

レイは暫く考えていたが、スッと此方に歩み寄ってきた。
その距離は１ｍ無い。

「じゃあ、聞かせてもらえる？」

「いいのか？」

「勿論」

「成立だな」

「っ…！？　何！？　何なの！？」

俺とレイを取り囲むように、陣が敷かれる。それは【改編】における禁忌。

「悪いなレイ様」

「どういうこと…！？」

俺はスッと立ち上がる。そしてレイに手を差し伸べた。

「禁忌【刻呪（こくじゅ）】」

「刻呪（こくじゅ）…？」

レイは俺の手を横凪に叩いて返した。まぁ、どうあろうとこれで終わりだ。

「【改編】の能力は、過去を変えることが出来ません。未来に、現在に支障が出ますから。でもそれは出来ない事じゃないんですよ」
「…あー。なるほどね…」

レイは呟いて、うな垂れた。

「刻呪(こくじゅ)は過去を改編する唯一の力。でもその代償は…」
「自らの命…って？」
「そーいうこった」

『ハァ…』と小さく溜息を吐くレイ。

「私もまだまだ、人を信じていたわけか…」
「……」
「甘ちゃんだなぁ…。また、了承しちゃうなんて…」

禁忌である【刻呪(こくじゅ)】は、陣の中で此方の呼びかけに対し、相手の了承がないと発動できないのだ。

「レイ様」
「ん？」
「今度は、普通の女の子として、会いましょうね？」
「……バカ」

俺はレイの手をそっと取った。

「零次！？」
「ん？」

陣の外から、声がする。
聞き覚えのある声だ。
「どういう事！？　どういう事よ！？」
「どういう事？　こういうこった」
俺はフィルに向かって、手を振った。
そして、周りの声は届かなくなる。
「それでは、この世界に於けるレイ様の存在を抹消します。詰まる話、居なかった事に」
「どーぞ、御勝手に」
レイは半ば投げやりだった。
当然だ。
このやり取りを、何度しているか分からない。
「ねぇ、零次君」
「はい？」
レイは観念した様で、涙声で俺を呼んだ。

「次は…きっと…」
「はい。次はきっと、皆で笑って暮らせるよう…」

二人の前に、鉄の門が現れる。

陣を守る結界を、必死に壊そうとしているフィルやアルト、アミューやルミーナが横目に見えた。

「零次君…」
「はい？」
「私は、要らない子なのかな…？」
「大好きですよ」
「……」

急にレイが、ぎゅっと、ぎゅっと手を握った。

「どうしました？」
「どうせ……皆、でしょ？」

俺は笑って頷いた。

「えぇ」
「…ずるい」

レイは俺に手を引かれ、門へと歩みを進める。

「零次君…」
「何です？」

門の手前、その厚い鉄の扉に手をかけようとした瞬間、レイは歩みを止めた。

「次は…誰も死なない世界に……笑いの絶えない……楽しい世界に……」

「えぇ。きっと」

厚い鉄の扉を開けると、中は何も見えない。真っ暗だ。

「主人公を失った世界は、崩壊して回帰する」

「分かってます」

足場なんて無い筈の暗闇に、靴の『カツン』と冷たい音が響いた。

「またね、零次く……」

「はい…また…」

暗闇に呑まれ、二人は跡形も無く消えた。

主人公を無くした物語は、崩壊し全てを無へと返した。

そしてまた、新しい物語が紡がれる。

そう易々と、物語は良い方向に転ばない。

「また、遊ぼうね…」

誰かの声が響いた。

エピソード1・BAD

END

第３１話　決死　～残酷な運命・刻まれぬ終焉～（後書き）

えー、トンチンカンな終わらせ方をして申し訳ない。

理由と言う名の言い訳と、弁解の余地を下さい（迫真

1. 最初の方が高校初期に書き出したので、内容が残念。
2. 中盤は厨２全開。
3. 最早モンハンではない。
4. フラグと脱線が多すぎて、対応しきれない。
5. 忙しい。

以上を踏まえて、俺がモンハン入り　エピソード２　を開始します。

今までと内容設定は一緒。

でも、なるべくモンハンらしく、武器で戦いますハイ（重要

厄災の終焉目指して、また混沌の物語が幕を開ける！！ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5105i/

何故か俺がモンハン入り　～勘弁してくださいorz～

2011年6月5日21時47分発行